

2025年度
JICA 地球ひろば主催
(後援:日本国際理解教育学会)

国際理解教育/ 開発教育指導者研修
授業実践事例集



目次

事業概要

事業概要 / 参加者・アドバイザー・運営関係者 / 研修内容

2P

授業実践事例（学習指導案） 小学校

01	杉村 萌	音更町立木野東小学校	国語・総合的な学習の時間	3年	11P
02	羽山 修斗	幕別町立札内北小学校	家庭・特別活動・保健	6年	21P
03	安生 留衣	上越市立大町小学校	外国語	6年	30P
04	永島 悠一	糸魚川市立糸魚川小学校	総合的な学習の時間	6年	39P
05	早川 千恵子	長野市立浅川小学校	生活・道徳・特別活動	1年	46P
06	末永 祐利	やたなか小中一貫校 大阪市立矢田小学校	社会・総合的な学習の時間・ 特別活動	4年	55P
07	山岸 史弥	大阪市立新森小路小学校	国語・総合的な学習の時間	6年	63P

授業実践事例（学習指導案） 中学校

08	鈴木 達也	星の杜中学校・高等学校	社会	1年	70P
09	赤羽 晋治	松本市立明善中学校	道徳・総合的な学習の時間	1年	75P
10	小谷 勇人	春日部市立武里中学校	社会	1年	83P
11	告野 さつき	神戸市立福田中学校	保健体育	3年	91P
12	野瀬 晴佳	大阪市立今津中学校	総合的な学習の時間	2年	98P
13	森田 幸樹	西宮市立塩瀬中学校	総合的な学習の時間	1年	105P
14	池田 やよい	宇和島市立城南中学校	技術・家庭	3年	113P
15	夏井 ひとみ	諸塚村立諸塚中学校	外国語・道徳・特別活動	3年	119P

授業実践事例（学習指導案） 高等学校

16	高橋 謙介	山形県立小国高等学校	地理探究	3年	129P
17	堀 奏音	青森明の星中学・高等学校	地理総合	1年	135P
18	青木 和也	栃木県立小山南高等学校	英語コミュニケーションⅡ	2年	141P
19	根岸 彩夏	群馬県立大間々高等学校	英語コミュニケーションⅠ	1年	148P

授業実践事例（学習指導案） 特別支援学校

20	村古 多賀子	沖縄県立八重山特別支援学校	歴史総合	1～3年	156P
----	--------	---------------	------	------	------

付録

教育現場で活用できる JICA のツール / オンライン出前講座 / JICA 地球ひろば

165P

事業概要

事業概要

1. 背景

国際協力機構（JICA）は日本の政府開発援助（ODA）を一元的に行う実施機関であり、約150の国・地域で国際協力を展開している。日本国内においては、これら国際協力を通じて得た知見を生かし、「持続可能な社会の創り手」の育成を目指す新学習指導要領などの学校教育の動向を踏まえ、「教師海外研修」「国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」「地球ひろば施設訪問」「国際協力出前講座」「開発教育メールマガジン」「開発教育教材作成」など、国際理解教育/開発教育を支援する様々な事業を行っている。

本研修は、2014年度より「教師海外研修」に参加経験のある方を対象に、継続的な国際理解教育/開発教育の授業実践促進をねらいとして開始され、現在は「教師海外研修」への参加経験の有無に関わらず、国際理解教育/開発教育の授業実践に取り組み、各地域における国際理解教育/開発教育の推進者として活躍が期待される全国の学校教員の方々を対象に実施している。また、2018年度からは、専門的なアドバイスをいただくため、日本国際理解教育学会の協力を得て実施している。

2. 目的

本研修では、学習指導要領の「持続可能な社会の創り手」の育成を念頭に、国際理解教育/開発教育に関する知見や事例の共有を通じて、教員としての専門性を高め継続的かつ効果的な授業実践を行うことが期待されている。さらに、参加者は、本研修で培われた教員間のネットワークを生かし、研修後も授業実践紹介や知見の共有を実施し、各地域の学校および教育関係者への国際理解教育/開発教育の理解促進、多文化共生の促進に寄与することを目指しており、JICAが用意している教員向けの様々な教材を積極的に活用し、授業実践を行うことが期待されている。

21世紀を生きる児童生徒は、地球規模の課題解決に向けて、そして多様化する社会において、自ら考え行動する力、未来に向けて生きる力が必要である。また、学習指導要領には、「持続可能な社会の創り手」の育成の重要性が明記され、教科書にもSDGs（持続可能な開発目標）について掲載されている。このような状況をふまえ、2025年度は「教室から世界へ～未来を共に創るチカラを育む～」というテーマで、グローバルな視点や地球規模の課題意識を育み、身近なところからより良い世界の共創に向けて、主体的に考え行動する児童・生徒の育成を目指した授業作りと実践に取り組むことを目的とした。

3. 研修日程・会場

前半研修	2025年8月2日（土）および3日（日）	JICA本部（麹町）
後半研修	2026年1月31日（土）および2月1日（日）	JICA市ヶ谷ビル

4. 主な内容

前半研修

- 学習指導要領も踏まえた国際理解教育/開発教育の授業づくりのポイント（講義）
- 国際理解教育/開発教育の推進者として（講義）
- 国際理解教育/開発教育にJICAリソースを活用する（講義）
- 授業素材を選び、切り取る視点（講義）
- 「本時」の設定について（講義）
- 優れた授業をつくるために～指導案の書き方～（講義）
- 国際理解教育/開発教育の実践と推進について（過年度参加者より講義）

授業計画策定・実践

- 前半研修での学びと各自で作成した学習指導案のドラフトをもとに、日本国際理解教育学会のサポートの下、指導案のブラッシュアップ
- 作成した指導案を用いての授業実践、振り返りを行い、実践結果を報告書にまとめて提出

後半研修

- 授業実践報告と意見交換
- 公開セミナー（ゲストトーク、代表者による授業実践事例紹介）
- 学校内外の理解者・学びあう仲間を増やすために（講義&ワークショップ）
- 10年後のわたしへ-国際理解教育のスタンス-（講義）

5. 実施体制

- 主催 : 独立行政法人 国際協力機構（JICA）広報部 地球ひろば推進課
- 後援 : 日本国際理解教育学会
- 運営事務局 : 一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト（GiFT）
（JICA地球ひろば・教員向け研修運営事務局）

6. 参加資格

以下の参加資格要件を全て満たす方を対象に募集した。

- (1) 国際理解教育/開発教育の授業実践経験がある小・中・高校、特別支援学校に勤務する教員。
- (2) 本研修の趣旨・目的を十分理解し、上記の研修期間のプログラムに参加可能な方。
- (3) 研修テーマ「教室から世界へ～未来を共に創るチカラを育む～」に沿って、学習指導案の検討、作成、授業実践、実践報告に積極的に参画する意欲を持つ方。
- (4) 本研修を通じて得られた学び・成果を所属する学校内及び各地域の教育委員会、各種教員ネットワーク（研究会、勉強会等）の場において積極的に共有・紹介する意欲のある方。
- (5) JICA国内拠点や各県所在のJICAデスク（国際協力推進員）等と連携・協力しながら、授業実践の紹介やセミナー・研修にも携わるなど、開発教育/国際理解教育の普及促進に貢献する意欲がある方。

なお、参加者は、本研修参加後2年間、国際理解教育/開発教育推進のための自身の取り組みに関する報告書をJICAへ提出することが求められている。（年1回：形式自由）

参加者・アドバイザー・運営関係者

参加者

参加者	都道府県	所属	担当教科(科目)
杉村 萌	北海道	音更町立木野東小学校	全科:3年
粕山 修斗	北海道	幕別町立札内北小学校	家庭科:5・6年
高橋 謙介	山形県	山形県立小国高等学校	歴史総合:1年 地理総合、地理探究、公共、政治・経済:2・3年
堀 奏音	青森県	青森明の星中学・高等学校	地理総合:1年 地理探究:2年 政治・経済:3年
青木 和也	栃木県	栃木県立小山南高等学校	英語コミュニケーションⅡ:2・3年
鈴木 達也	栃木県	星の杜中学校・高等学校	社会科:中1 歴史総合:高1
赤羽 晋治	長野県	松本市立明善中学校	総合的な学習の時間:1年 数学:1・2・3年
安生 留衣	新潟県	上越市立大町小学校	外国語活動:3・4年 外国語:5・6年
小谷 勇人	埼玉県	春日部市立武里中学校	社会科:1年
永島 悠一	新潟県	糸魚川市立糸魚川小学校	外国語活動:4年 外国語:5・6年
根岸 彩夏	群馬県	群馬県立大間々高等学校	外国語(英語コミュニケーションⅠ):1年 外国語(論理・表現Ⅱ、実践英語リーディング):3年
早川 千恵子	長野県	長野市立浅川小学校	全科:1年
末永 祐利	大阪府	やたなか小中一貫校 大阪市立矢田小学校	国語、算数、社会、図工、体育、道徳、総合、 学級活動:4年
告野 さつき	兵庫県	神戸市立福田中学校	保健体育:3年
野瀬 晴佳	大阪府	大阪市立今津中学校	社会科:1・2年
森田 幸樹	兵庫県	西宮市立塩瀬中学校	数学、道徳、総合的な学習の時間:1年
山岸 史弥	大阪府	大阪市立新森小路小学校	全科:6年
池田 やよい	愛媛県	宇和島市立城南中学校	道徳、総合的な学習の時間:2年 技術・家庭:1・2・3年
夏井 ひとみ	宮崎県	諸塚村立諸塚中学校	英語:1・2・3年
村吉 多賀子	沖縄県	沖縄県立八重山特別支援学校	社会科:高1・2・3

アドバイザー

名前	職名
大津 和子	北海道教育大学 名誉教授 日本国際理解教育学会 元会長
藤原 孝章	同志社女子大学 名誉教授 日本国際理解教育学会 元会長
中山 京子	帝京大学教育学部 教授 日本国際理解教育学会 副会長
中澤 純一	東京未来大学モチベーション行動科学部 講師 日本国際理解教育学会 理事

主催 独立行政法人 国際協力機構 (JICA)

名前	職名
川淵 貴代	広報部 部長・JICA地球ひろば 所長
植田 茜	広報部 地球ひろば推進課 課長
安元 孝史	広報部 地球ひろば推進課 課長補佐

運営事務局 一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト (GiFT)

名前	職名
忍 頼子	ダイバーシティ・ファシリテーター/グローバル教育プロデューサー
佐藤 さとみ	グローバル教育プロデューサー

研修内容

前半研修

【Day 1】 2025年8月2日（土） 10:00-17:00

【開会】主催挨拶・研修プログラム説明

【アイスブレイク】【ファシリテーター】忍頼子 (GiFT)

【講義】国際協力とJICAの行う開発教育支援事業について

そもそも国際理解教育/開発教育—原点を探り、原点から振り返る—

【講師】藤原孝章先生（同志社女子大学名誉教授・日本国際理解教育学会元会長）

【講義/ワークショップ】国際理解教育/開発教育の推進者として

【講師】中山京子先生（帝京大学教育学部教授・日本国際理解教育学会副会長）

【講義】学習指導要領も踏まえた国際理解教育/開発教育の授業づくりのポイント

【講師】藤原孝章先生（同志社女子大学名誉教授・日本国際理解教育学会元会長）

【講義】ねらいを定めて、学習指導案の骨子を組み立てるために授業素材を選び、切り取る視点

【講師】中山京子先生（帝京大学教育学部教授・日本国際理解教育学会副会長）

【講義】「本時」の設定について

【講師】中山京子先生（帝京大学教育学部教授・日本国際理解教育学会副会長）

【グループワーク】学習指導案の骨子作成（導入）、共有・フィードバック

【Day 2】 2025年8月3日（日） 10:00-17:00

【開会】研修プログラムスケジュール説明

【グループ内発表】各自で組み立てた学習指導案の骨子を発表し、質疑応答・フィードバック

【講義】優れた授業授業をつくるために～指導案の書き方～

【事前課題の共有】既存の学習指導案から良い授業のポイントをつかむ

【講師】大津和子先生（北海道教育大学名誉教授・日本国際理解教育学会元会長）

【講義】国際理解教育/開発教育にJICAリソースを活用する

【講師】中澤純一先生（東京未来大学モチベーション行動科学部講師・日本国際理解教育学会理事）

【ワークショップ】学習指導案の骨子を書式に落とし込む

【講義】国際理解教育/開発教育の実践と推進について（過年度参加者による講義）

【講師】増田有貴さん（新潟県立阿賀野市立水原中学校教諭・2023年度参加者）

【全体共有】本日の学びの共有

【ファシリテーター】忍頼子 (GiFT)

【講評】アドバイザーからのコメント

後半研修

[Day 1] 2026年1月31日(土) 10:00-17:00

【開会】主催挨拶・研修プログラム説明

【アイスブレイク】

【ファシリテーター】忍頼子 (GiFT)

【講義】国際理解教育・開発教育の授業づくりの視点

【講師】藤原孝章先生(同志社女子大学名誉教授・日本国際理解教育学会元会長)

【授業実践報告セッション】

授業実践の共有、ディスカッションを通じ、新たな視点、学びを得るとともに、自身の授業案を改めて振り返る発表(15分)・質疑応答&アドバイザーコメント(10分)

【全体共有・振り返り】

- ・授業実践報告セッションを通して新たに得た視点や学びの共有
- ・あらためて他の参加者やアドバイザーから聞きたいこと

【ファシリテーター】忍頼子 (GiFT)

[Day 2] 2026年2月1日(日) 10:00-16:00

公開セミナー：教室から世界へ～未来を共に創るチカラを育む～

【開会】主催挨拶 JICA広報部 部長 川淵貴代

【ゲストトーク】

尾木直樹氏(教育評論家・法政大学名誉教授/臨床教育研究所「虹」所長)

「尾木ママ流 未来を共に創るチカラを育むヒント」

【授業実践事例紹介】

杉村萌(音更町立木野東小学校)

教科:国語/総合的な学習の時間(小学3年)

単元名:くらしと絵文字～世界の人につたわるように

森田幸樹(西宮市立塩瀬中学校)

教科:総合的な学習の時間(中学1年)

単元名:世界とつながる一歩

青木和也(栃木県立小山南高等学校)

教科:外国語(高校2年)

単元名:服の向こうにある世界ーファストファッションから考える

【講評】

藤原孝章先生(同志社女子大学名誉教授・日本国際理解教育学会元会長)

大津和子先生(北海道教育大学名誉教授・日本国際理解教育学会元会長)

研修

【講義・ワークショップ】学校内外の理解者・学びあう仲間を増やすために

【講師】中山京子先生(帝京大学教育学部教授・日本国際理解教育学会副会長)

【講義】10年後のわたしへー国際理解教育のスタンスー

【講師】中澤純一先生(東京未来大学モチベーション行動科学部講師・日本国際理解教育学会理事)

【研修全体の振り返り】

【ファシリテーター】忍頼子 (GiFT)

【総括】アドバイザーから研修参加者へのメッセージ

【閉会】研修修了書授与・主催挨拶

前半研修の様子



【アイスブレイク】
自己紹介



【講義】(中山先生)
国際理解教育/開発教育の
推進者として



【講義】(藤原先生)
学習指導要領も踏まえた国際理解教育/
開発教育の授業づくりのポイント



【講義】(大津先生)
優れた授業をつくるために
～指導案の書き方～



【講義】(中澤先生)
国際理解教育/開発教育に
JICAリソースを活用する



【学習指導案の骨子作成】
指導案の骨子作成についての
意見交換



【グループ内発表】
各自で組み立てた学習指導案の
骨子の共有



【集合写真】
たくさんのインプットと刺激を得て
授業づくりと実践に向けてスタート

後半研修の様子



【アイスブレイク】
授業実践を経ての感想や近況を共有



【授業実践報告セッション】
授業実践を通じて得た洞察や
気づきを共有



【授業実践報告セッション】
オリジナルで作成した教材を
紹介しながら実践報告



【公開セミナー】(尾木直樹氏)
尾木ママ流
未来を共に創るチカラを育むヒント



【公開セミナー】
研修参加者による授業実践事例紹介



【研修全体の振り返り】
この研修を通じて得た学びと
自身の変化を共有



【研修全体の振り返り】
この研修を通じて得た学びと
自身の変化を共有



【集合写真】
修了書を手に新たな目標とともに
次のステージへ

授業実践事例

小学校

国際理解教育/開発教育 学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	杉村 萌	学校名	音更町立木野東小学校(北海道)
教科(科目)・領域	国語科 総合的な学習の時間	対象学年(人数)	3年1組(35名) 3年2組(35名) 計70名
実践年月日もしくは期間(時数)	令和7年10月～12月(18時間)		

【実践概要】

1. 単元名(活動名): くらしと絵文字～世界の人につたわるように					
2. 実践する教科・領域 ・国語科(14 時間) ・総合的な学習の時間(4 時間)	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加		
4. 単元の目標(評価規準を意識して設定)					
・さまざまな場所で使われている絵文字(ピクトグラム)について、その役割や意図を理解するとともに、言葉の壁を越えて伝えられるというよさに気付くことができる。(国語科)【知識・技能】(1)ア ・災害が起きたときに、だれもが安全に避難できるよう、必要な情報を読み取り、伝えるための防災絵文字を作成することができる。(国語科)【思考・判断・表現】A(1)オ(話すこと・聞くこと) ・防災絵文字を作成する活動を通して、積極的に互いの考えを伝えようとしている。(国語科)【主体的に学習に取り組む態度】 ・防災絵文字を作成する活動を通して、外国人が住む地域の実態、在住外国人や在住外国人を支援する人々の思いについて理解し、地域の一員として異なる文化を越えた共生の在り方を考えるとともに、自らの生活や行動に生かすことができるようにする。(総合的な学習の時間)【国際理解】					
5. 単元の評価規準	①知識・技能	・言葉や絵文字には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付いている。(1)ア(国語科) ・考えとそれを支える理由や事例、全体と中心など情報との関係について理解している。(2)ア(国語科) ・在住外国人が抱える災害に対する困り感を知り、絵文字は、暮らしを便利にするだけでなく、災害時においても大きな役割を果たすことに気付く。(総合)			
	②思考・判断・表現	・文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもっている。(C 読むこと(1)オ)(国語科) ・目的や進め方を確認し、司会などの役割を果たしながら話し合い、互いの意見の共通点や相違点に着目して、考えをまとめている。(A 話すこと・聞くこと(1)オ)(国語科) ・単元を通して学んだ自らの思い、学びによる自己の変容を生かして防災絵文字を紹介している。(総合)			
	③主体的に学習に取り組む態度	・進んで絵文字(ピクトグラム)のよさについて考え、話し合い、防災絵文字について互いの考えを伝えようとしている。(国語科) ・防災絵文字を作成するために、互いの考えを認めながら、協力して課題を解決している。(総合)			
6. 単元設定の理由・単元の意義					
【単元設定の理由あるいは単元の意義】					
本単元は、児童が身近な絵文字(ピクトグラム)の学習を深め、それを多文化共生社会の構築という現代的な課題に結びつけることを目的としている。					

01

杉村 萌

音更町立木野東小学校・3年・国語・総合的な学習の時間

少子高齢化が進む日本において、外国人労働者および外国人住民の増加は全国的な傾向であり、地域住民としての多文化共生は急務である。(参考資料参照)本校が位置する十勝地方も例外ではなく、十勝全体で約4,000人、音更町だけでも21カ国227人(2025年4月時点)の外国人が暮らしている。このような社会変化に対し、未来の創り手である子どもたちは、受け身で対応するのではなく、多様な背景を持つ人々と主体的に関わり、協働しながらよりよい社会を創り出す力が求められている。

多文化共生社会の早急な課題の一つに、多言語に対応した「情報提供体制」の整備が挙げられる。特に「災害時の緊急情報」は、日本語が不十分な外国人にとって理解が難しく、命や安全に直結する重大な問題である。十勝地域在住の外国人からも、災害に対する不安や、国による防災意識の違いから生じる課題が明らかになっている。また本校は、指定緊急避難場所、緊急貯水槽の設置場所であり、災害時には在住外国人を含む多様な人々が避難する。こうした地域の実態と喫緊の課題を受け、本単元では「防災」の視点からゴールを「言葉がわからなくても、だれにでも伝わる防災絵文字を作ろう」とし、多文化共生について考えていく。本単元を通して、言葉の壁を越えて情報を伝える重要性や、相手の立場に立って考える想像力を育んでいきたい。また学習の成果を地域社会につなげることで、多様な背景を持つ人々が互いに助け合い、安心して暮らせるよりよい社会を築くための第一歩としたい。

【児童観】

本学級の児童は好奇心旺盛で、友達との関わりを通して、考えを伝える力、受け入れる力が伸びてきている。グループ活動にも意欲的で、協調性が育ってきている一方、自己表現の難しさや、周りの気持ちに気付かず行動してしまう場面もある。国際理解の視点では、外国語活動や、外国にルーツをもつ児童、ALTとの交流を通し、異文化への興味・関心が高まり、多様な価値観に触れる機会も増えている。一方で、言葉や文化の違いに戸惑いを示す児童もいる。これらの実態を踏まえ、本単元では「文化や言語の壁を越えて人とつながる喜び」や「相互理解・尊重」の大切さを実感させたい。そして、多様な背景を持つ人々との共生社会の実現に向けた、主体的な一歩を踏み出すきっかけとしたい。

【教材観】

本単元は、児童が身の回りにある絵文字(ピクトグラム)の役割を理解し、言葉の壁を越えて情報を伝えることの価値を学ぶ単元である。

多文化共生の視点から見ると、多様な背景をもつ人々が共に暮らす現代社会において、くらしのあり方を考える上で非常に重要である。本単元のまとめの段階では、防災絵文字の作成を行い、言葉が通じない相手にどうすればわかりやすく情報を伝えられるかを考えることは、他者の立場に立って考える想像力を育むと考える。また、防災絵文字の作成をグループ活動で行うことで、互いの考えを認め、協力して課題を解決する力を養いたい。本単元を通して、言葉による見方・考え方を働かせ、言葉や文化の違いを受け止め、助け合うことの大切さに気付かせたい。

【指導観】

本単元は、「防災」と「多文化共生」という二つの視点から、児童が住む音更町の課題を自分事として捉えることを目指している。導入では、国語科教材「世界の人につたわるよう」により、身近な絵文字やピクトグラムが世界共通の伝達手段であることを理解させる。また世界と日本の絵文字を比較することで、共通点と相違点に気付かせ、興味を高めていく。続く「くらしと絵文字」では、絵文字の特長を深く読み取り、現代社会における絵文字の役割について考察を深めていく。その後、学習を社会の現状へと広げ、在住外国人の増加という日本の状況と、彼らが災害時に抱える「困り感」に焦点を当てる。この問題の解決手段として絵文字(ピクトグラム)が果たす役割に気付かせ、多文化共生社会の構築に不可欠であることを、JICA教材や参加型学習を通して実感させていく。

さらに、地域で在住外国人支援を行う企業の方から直接話を聞く機会を設けることで、この課題が自分たちにとって身近な地域課題であることを認識させていく。この実践を通して、児童に他人事ではないという当事者意識をもたせたい。学習のまとめとして、児童はグループで「言葉がわからなくても、だれにでも伝わる防災絵文字」を作成する。この協働作業を通じて、課題解決力や相手の立場に立つ想像力を育んでいきたい。作成プロセスでは、在住外国人からのアドバイスをを受けたり、完成作品を音更町役場危機対策課に見ていただいたりといった、社会と直接つながる機会を設定する。これにより、自分たちの活動が実際に誰かの役に立ち、地域社会の一員であるという強い意識をもたせたい。本単元を通して、児童が多文化共生社会の実現に向け、地域で「できること」を見つけ、行動する第一歩となることを目指していく。

7. 単元計画(全18時間:国語科14時間・総合的な学習の時間4時間)

時間	ねらい	学習活動	資料など
1	ゴール①絵文字は暮らしの中でどのように使われているか知ろう。 国語「世界の人につたわるように」	・地域にある看板や道路標識など、絵文字が使われている場面や場所を思い出す。	・教科書 ・絵文字(ピクトグラム)の資料 ・ピクトグラムかるた

	○教材「世界の人につたわるように」を読み、学校や街中にどんな絵文字(ピクトグラム)があるのかを知る。	・教科書の写真や提示した資料から、どこに、どんな絵文字があるのか、またその絵文字の意味について話し合う。 ・「ピクトグラムかるた」に取り組み、絵文字はどんな困ったことを解決するのかを考える。	(日本規格協会) 
2	国語「世界の人につたわるように」 ○日本と外国の絵文字を見比べることを通して、絵文字は言葉の壁を超えて伝えたいことが伝えられるよさに気付く。	・教科書の写真や提示した資料から、日本と世界の絵文字の意味について話し合う。 ・日本と世界の絵文字を見比べて、共通点や相違点について話し合う。 (色、形などのピクトグラムのルール)	・教科書 ・ロイロノート ・教師海外研修(ザンビア、ドバイ)で撮影した絵文字・ピクトグラム ・大阪万博の絵文字・ピクトグラム ・他国の絵文字・ピクトグラム ・ピクトグラムのルール (日本規格協会)
・教師海外研修(ザンビア、ドバイ)、大阪万博での絵文字・ピクトグラム ①トイレ <ザンビアのケンタッキー> <ドバイ空港> <音更町役場> <万博>     ②交通標識 <ザンビア><日本> ③非常口<ドバイ空港> <日本>   			
		・生活の中にある絵文字について、調べる。 (ピクトグラムのルールを確かめる)	
3・4	ゴール②絵文字の役割について知ろう。 国語「くらしと絵文字」 ○教材名といざないの言葉を読み、絵文字に役割について考えるという学習の見通しをもつ。 ○本文の内容の大体を捉え、3つの大きなまとまりに分ける。		・教科書
5・6・7	国語「くらしと絵文字」 ○絵文字の特長を詳しく読み、要点を短くまとめる。 ○絵文字の特長をまとめ、段落相互のつながりを踏まえながら、読む。	・絵文字の第一・第二の特長について、中心となる文とそれを説明する文を見つけ、短くまとめる。 ・絵文字の第三の特長について、中心となる文とそれを説明する文を見つけ、短くまとめる。	・教科書 ・ワークシート ・大阪万博の絵文字・ピクトグラム ・大阪万博フードピクト ・東京オリンピックの開会式動画 ・動物園のマーク(金沢動物園) ・本校の避難場所
・大阪万博の絵文字・ピクトグラム ①ゴミ箱 ②案内表示 ③フードピクト   			
8 本時	総合「ともに生きる」 ○在住外国人が増えているという日本の現状から、在住外国人が	・在住外国人が日本や音更町にも増えていることを知る。 ・「多文化共生ケーススタディ」から在住外国	・「つながる世界と日本」JICA 教材 ・NHK 北海道 NEWS

	抱える災害に対する困り感を知り、絵文字は暮らしを便利にするだけでなく、災害時においても大きな役割を果たすことに気付く。	人が災害時困っていることについて考え、話し合う。 ・ゴール「防災絵文字を作る」につなげる。	WEB ・「多文化共生ってなんだろう？」(JICA 教材) ・ワークシート
9 出前 授業	総合「ともに生きる」 ○地元の在住外国人に対してサポートしている企業の方からのお話を聞き、防災絵文字作成にあたってのヒントを得る。	・多文化共生に向けての取組を知る。 ・在住外国人にどのような「防災」を伝えているのかを知る。 ・絵文字・ピクトグラムについて、活用の実際を知る。 ・やさしい日本語の役割について知る。	・講師 杉山絵理さん (にほんごさぼーと北海道)  
10	ゴール③防災絵文字を作ろう。 国語「わたしたちの絵文字」 ○「言葉がわからなくても、だれにでも伝わる防災絵文字を作る」という学習のねらいをつかみ、見通しをもつ。		・教科書 ・これまで活用した絵文字やピクトグラムの資料 ・十勝管内在住外国人のインタビュー動画
11	国語「わたしたちの絵文字」 ○絵文字の特長を理解して、絵文字にする必要のある場所・場面を選ぶ。	・これまでの学習を想起し、学習のねらいをつかむ。 ・十勝管内在住外国人のインタビュー動画から、災害時の困り感を知る。 ・学習計画を立てる。	・教科書 ・これまで活用した絵文字やピクトグラムの資料 ・十勝管内在住外国人のインタビュー動画 ・ワークシート
12	国語「わたしたちの絵文字」 ○教科書を読んで、話合いの進め方を確認し、役割や話合いの仕方について理解する。	・教科書から「役割」、「話合いの進め方」を読み、それぞれの役割について知る。 ・教科書から話合いの仕方を知り、話合いのイメージをもつ。 ・役割分担をする。 ・話合いの練習をする。	・教科書 ・ワークシート ・ロイロノート
13・14	国語「わたしたちの絵文字」 ○役割を意識して、「言葉がわからなくても、だれにでも伝わる防災絵文字を作る」というねらいにそった話合いをする。	・「どのような場所・場面か」、「絵文字のデザイン」、「色や背景について」の3つのポイントから話し合う。 ・話合いを振り返る。 ・話合いをもとに、絵文字を作成する。	・教科書 ・ワークシート ・ロイロノート
	作成した「防災絵文字」を在住外国人に見てもらい、アドバイスをもらう。		
15	国語「わたしたちの絵文字」 ○役割を意識して、「言葉がわからなくても、だれにでも伝わる防災絵文字を作る」というねらいにそった話合いをする。	・アドバイスをもとに、どの部分を修正するか話し合う。 ・話合いを振り返る。 ・話合いをもとに、絵文字の修正をする。	・教科書 ・在住外国人によるアドバイス(動画 or 手紙) ・ワークシート ・ロイロノート
16・17	総合「ともに生きる」 ○完成した「防災絵文字」の紹介動画を作成する。	・「どのような場所・場面か」「デザインの工夫」「色や背景について」を踏まえて作成した防災絵文字の紹介動画を撮影する。	・ロイロノート
	「防災絵文字紹介動画」を在住外国人、音更町役場危機対策課に見てもらい、感想や意見をもらう。		
18	国語「わたしたちの絵文字」 ○みんなで考えた絵文字を交流し、単元全体を振り返る。	・互いの完成した「防災絵文字」の紹介動画を見合う。 ・在住外国人、役場危機対策課のメッセージを見る。 ・学習全体を振り返り、できるようになったことや考えたことを確かめる。	・ロイロノート ・在住外国人や役場からのメッセージ(動画 or 手紙)

8. 本時の展開(概略) 8/18			
本時のねらい: 在住外国人が増えているという日本の現状から、在住外国人が抱える災害に対する困り感を知り、絵文字は、暮らしを便利にするだけでなく、災害時においても大きな役割を果たすことに気付く。			
過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	○前時までの確認 ○在住外国人が日本や道内、音更町でも増えていることを知る。 T「日本人が減っている一方で、外国人が増えています。北海道は特に、減っている日本人が最も多くて、外国人がすごく増えています。」 ○課題の提示 T「私たちが暮らす音更町には、日本語をあまり上手に話せない外国の人たちもいます。もし、大きな地震や台風が来たとき、言葉が通じない人たちに、大切な情報をどうやって伝えたらよいだろう?」 T「今日は、災害時の絵文字の役割について考えていきましょう。」	・振り返りのコメントをいくつか提示。 ・音更町は2024年1月214人 2025年4月227人(役場)	・「つながる世界と日本(ヒト編)」(JICA 教材) ・NHK 北海道 NEWS WEB (スライドにて提示)
課題: 絵文字は、災害が起きた時にどんな役わりをもつのだろう?			
展開 (30分)	○「多文化共生ケーススタディ」から在住外国人が災害時困っていることについて考え、話し合う。(グループ活動) T「今から日本で暮らす、ネパールから来たクリシュナさんのお話を読みます。皆さんはクリシュナさんがどんなことに困っているか考えながら聞きましょう。」 ○あらすじを簡単に確認する。 ○困ったと思う場面のイラストを選ぶ。 T「クリシュナさんが地震の時に困った場面はどこだと思いますか?」	・『ケース2災害時の避難所にてネパール出身・クリシュナさんの場合』 ・児童の実態を踏まえ、紙芝居形式にしたものを読み聞かせる。(chatGPT で作成) ・黒板に挿絵を掲示する。 ・困ったと思う場面のイラストを黒板に掲示する。	・「多文化共生ってなんだろう?」(JICA 教材) ・ワークシート ・スライド
			・グループで話し合わせる。 ・児童の発言を黒板に板書する。
	「⑤かな。『避難』『緊急』意味がわからなかったと言っているよ。」 「⑥。どこに行けばわからなくて困っているよ。」 「⑨。わからない張り紙もあったよ。」 「12. カレーライスを食べられないと言っているよ。」 ○困った理由を話し合う。 T「どうしてその場面が困ったと思いましたか? 理由を話し合ひましょう。」 ○ワークシートに書き込む。		・ワークシート (クラゲチャート)

○話し合ったことを発表し合う。 「⑤スマホを見ても、書いてある言葉の意味がわからなかったと思う。」 「⑥家にいるのは怖かったんじゃないかな。」 「⑥どこに行けばいいかわからなかった。町のこともあまりよく知らないんじゃないかな。」 「⑨張り紙に書いてあることがわからなかった。日本語が読めないんじゃないかな。」 「12 お腹が減っていても、食べられないから困っていると思う。」 T「クリシュナさんは、なぜ用意されたカレーライスを食べることができなかったと思いますか？」 「カレーが嫌いだったんじゃないかな。」 「アレルギーがあったのかも。」 「ヴィーガンなんじゃないかな。」 T「クリシュナさんはヒンドゥー教という宗教を大切にしています。宗教は、心のよりどころのようなものです。神様や、命の大切な考え方を教えてくれる、昔からある大切な教えです。」 T「クリシュナさんが大切にしているヒンドゥー教では、牛をとっても大切な生き物として考えています。そのため牛肉を食べないという約束を守って暮らしています。」 T「アレルギーで食べられない、だけでなく、宗教によって食べられない人もいます。」 ○これまでの学習を想起し、絵文字の特長から表せられそうな場面・場所を考える。 T「クリシュナさんの困った！を絵文字で解決できないかな。絵文字があるといい場面・場所はどこだろう？」 「⑤避難、緊急も絵文字にすると伝わるんじゃないかな。」 「⑥避難所を案内する絵文字があるといい。」 「⑨救急バグの絵文字があるといいな。」 「12 牛肉が入っていることを表す絵文字。」 ○話し合ったことを発表し合う。 ○本時のまとめ T「たくさんの考えがでましたね。今日の学びをまとめましょう。」	・クイズ形式で考えさせる。 ・ネパールはヒンドゥー教を信仰している人が多いこと、牛肉は食べられないことについて触れる。 ・宗教については、ここでは簡単に触れることにとどめる。 クイズ！！ ①カレーライスがきらい。 ②具合がわるかった。 ③アレルギーがある。 ④牛肉を食べないというやくそくがある。 ・グループで話し合わせる。 ・児童が「かわいそう」という気持ちをもって終わるのではなく、「じゃあ、どうすればクリシュナさんのような思いをする人がいなくなるか？」と共感から解決策へつなげられるようにする。 考えよう <絵文字の特長> ①だれにでも わかりやすい ②シンプルな絵や色 ③見たしゅんがんに意味がわかる	・ワークシート (クラゲチャート)
まとめ：絵文字は、わたしたちだけでなく、災害で困っている外国の人を助ける、大切な『命のメッセージ』になる。		

まとめ (10 分)	○振り返り T「今日の学習を通して感じたこと、考えたことについて振り返ろう。」 「絵文字は災害の場面でも役に立つことがわかった。」 「絵文字は外国の人にも伝えられることがわかった。」 「絵文字は命を守る。」 「次は、実際に絵文字を考えてみたい。」 ○最終ゴールである「防災絵文字を作る」につなげる。	・「わ・さ・び」の視点で振り返る。 <table><tr><td>わ</td><td> ★わかったこと ★できるようになったこと </td><td> ・～がわかった。 ・～ができるようになった。 ・～と思った。 ・～を工夫した。 </td></tr><tr><td>さ</td><td> ★さんこうになったこと ★自分の考えが深まったこと </td><td> ・〇〇さんが言っていた、～がいいと思いました。 ・〇〇さんくらべると、最初は～だったけれど・・・ ・～してみても、〇〇の大切さがわかった。 </td></tr><tr><td>び</td><td> ★ビジョン (見通し・未来ぞう) ★これからむけて </td><td> ・次は～してみたい。 ・～にも使える。 ・～をがんばりたい。 </td></tr></table>	わ	★わかったこと ★できるようになったこと	・～がわかった。 ・～ができるようになった。 ・～と思った。 ・～を工夫した。	さ	★さんこうになったこと ★自分の考えが深まったこと	・〇〇さんが言っていた、～がいいと思いました。 ・〇〇さんくらべると、最初は～だったけれど・・・ ・～してみても、〇〇の大切さがわかった。	び	★ビジョン (見通し・未来ぞう) ★これからむけて	・次は～してみたい。 ・～にも使える。 ・～をがんばりたい。	・ワークシート
わ	★わかったこと ★できるようになったこと	・～がわかった。 ・～ができるようになった。 ・～と思った。 ・～を工夫した。										
さ	★さんこうになったこと ★自分の考えが深まったこと	・〇〇さんが言っていた、～がいいと思いました。 ・〇〇さんくらべると、最初は～だったけれど・・・ ・～してみても、〇〇の大切さがわかった。										
び	★ビジョン (見通し・未来ぞう) ★これからむけて	・次は～してみたい。 ・～にも使える。 ・～をがんばりたい。										

9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法) ・在住外国人が抱える災害に対する困り感について、話し合う活動を通して他者への共感を示そうとしている。 ・在住外国人が抱える災害に対する困り感について、絵文字は災害時において役立つことに気付いている。 (行動観察、発言、ワークシート)
10. 学習方法および外部との連携 <学習方法> ・ピクトグラムかるた(日本規格協会グループ) ・フォトランゲージ ・グループワーク(話し合い活動)、シンキングツール(クラゲチャート)を活用し、出た意見を可視化。 ・単元のまとめとして、防災ピクトグラムの作成、紹介動画作成 <外部との連携> ・いほんごさぼーと北海道 代表:杉山絵理さん に出前授業でお話ししていただく。 ・十勝管内在住の外国人の方々インタビューをし、インタビューの様子を録画、また児童が作成した防災絵文字に対して助言・コメントをもらう。 ・音更町役場 危機対策課に児童が作成した絵文字を紹介する。
11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み ・校内の先生方に研修内容や資料の共有や授業公開をする。 ・学級通信や児童の成果物等で、学びの姿を保護者に発信する。 ・SDGsの視点を他教科に広げる。

【自己評価】

12. 苦労した点 ・単元計画において、国際理解/開発教育のねらいと教科目標のねらいの整合性を図ることである。汎用性という観点から教科の既存単元を取り上げたが、どのように関連付けるか、ゴールをどこにするか非常に悩んだ。 ・教材の選定や精査に悩んだ。45分間という限られた時間の中で何を取り上げるか決めるのに時間を要した。また、教材は児童の実態に合わせるため、chatGPTを活用して紙芝居を作成することにした。しかし、AIとのやりとりがなかなかうまくいかず、完成には時間がかかった。
13. 改善点 ・本時で使用したワークシートがグループ活動を進める上では小さかった。全員が話し合いに参加しやすくするためにワークシートを大きくする必要がある。 ・「絵文字があるといい場面・場所」を考える際に、文字ではなく絵で表す児童が多かったことから、一人一人が描き表せるよう、ワークシートを工夫する必要がある。また、児童が描いた絵文字を全体交流で取り上げることができなかった。実物投影機や写真を撮ってテレビに映すなど、共有を図る必要がある。 ・紙芝居形式としたが、留学生やJICAの研修生などに協力してもらい、本物を取り上げる工夫も必要。 ・1時間の中で盛りだくさんの内容であったので、取り上げる題材を絞る、または単元計画を見直して実施することも必要だと感じた。
14. 成果が出た点 ・18時間という長い単元計画ではあるが、系統立てて単元のねらいに丁寧に迫れていると感じている。 ・児童とゴールを共有することで、何を学ぶか児童が見通しをもって取り組めており、学びの連続性に繋がった。 ・本時では、教材を紙芝居形式で取り上げることで視覚的理解を促すことになり、その後のグループ活動では積極

的な交流が見られた。

- ・本時で絵文字を考える活動の際に、英語、ネパール語、日本語を添えようとする児童の姿が見られた。次時の出前授業で取り上げる「やさしい日本語」やその後の「防災絵文字作り」につながる反応が得られたことから、単元構成が児童の学びに沿って有効的に繋がっていると感じた。

15. 学びの軌跡(児童生徒の反応・感想文・作文・ノートなど)

<本時の板書>



<本時のワークシート(一部)> (困っている理由、どんな絵文字があればいいか)

⑤なんだこの言葉は?

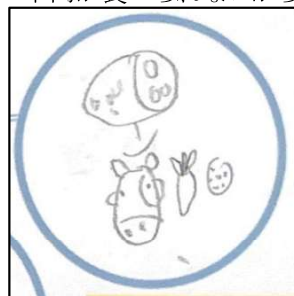
この漢字なんて読むの?
だれか教えて。

⑨なんだろうこの文字?

どこに行けばいいかわからない

12 アレルギースタンプ

宗教、ヴィーガン
牛肉が食べられないから



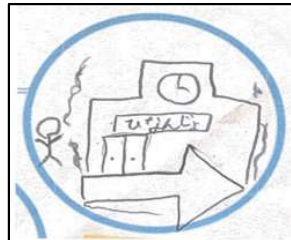
<本時の振り返り(一部)>

- ・絵文字は人が案内とかしなくても、ただでわかるということがわかった。
- ・絵文字は外国人にもわかりやすいからどこでも使える。
- ・絵文字が命を守ってくれることを初めて知った。
- ・日本語がわからない外国人の人でも、絵文字を使えば命も守ることができることがわかった。
- ・絵文字がすごく役に立つことがわかりました。
- ・絵文字があると耳が聞こえない人も、違う出身の人でも意味がわかる。絵文字があると、安心して暮らせる。
- ・ちゃんと外国人もわかるように、絵文字が増えていることがわかりました。
- ・やっぱり外国人や耳が聞こえない人、目が見えない人がいるからこそ、絵文字やスピーカーがあるといいと思う。
- ・考えてみれば、いっぱい絵文字を作れることがわかった。これからも、いろいろな絵文字を考えたいと思いました。

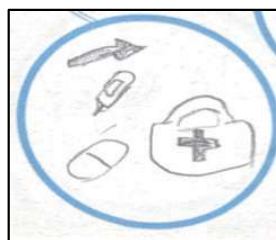
16. 授業者による自由記述

①本時の次時にあたる出前授業では、にほんごさぼーと北海道の杉山さんを講師に招き、音更町の在住外国人の実態や、多文化共生の意味、やさしい日本語についてお話していただいた。特にやさしい日本語では、①短く言う、②難しい言葉は使わない、③ゆっくり・はっきり話す(書く)の3つのポイントを教えていただき、本時で児童が作成した絵文字に添えるやさしい日本語を考える活動を行うなど、その後の防災絵文字作りにつながるヒントをたくさんいただくことができた。

<ワークシートより(一部) 本時で考えた絵文字にやさしい日本語を添えたもの>



- ・ここににげてください。
- ・こっちがひなんじょです。
- ・ここはあんぜんです。
- ・じぶんのいのちをまもれます。



- ・けがをした人はこちらへ。
- ・てあてできます。
- ・ここは小さなびょういん。
- ・けがをなおせます。

<出前授業振り返り(一部)>

- ・外国人には、やさしい日本語だと、外国人につたわるのがわかった。
- ・外国人にもわかるようなやさしい心づかいをしていることがわかった。
- ・日本語を教えるのは意外とたいへんということがわかった。これからは日本人と外国人を深めるために、次はわたしもがんばろうと思います。
- ・やさしい日本語はたくさんあることがわかったし、絵文字からいろいろな意味を見つけられることがわかった。これからも絵文字を大切にしたいし、次もがんばりたい。
- ・やさしい日本語は外国人だけでなく、しょうがいがある人や高齢者にも伝えることができることがわかった。
- ・これから外国人の友達ができたら、「やさしい日本語」を使って話してみたいです！
- ・絵文字の役割ってなんだろうと思っていました。でも勉強をしたとき、「絵文字は外国の人たちに伝わるように工夫しているんだな」と思いました。絵文字が耳が聞こえない人にもわかるんだと思いました。
- ・これから外国人に会ったらやさしい日本語を使って、あいさつをしたいと思いました。

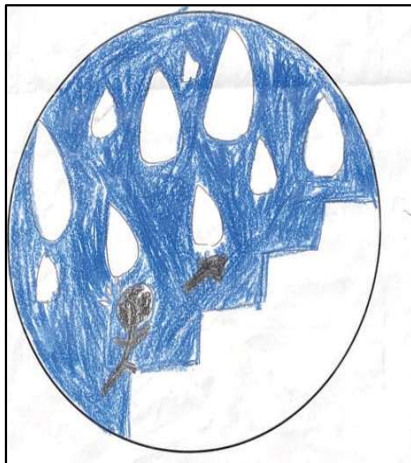
②続く単元「わたしたちの絵文字」では、グループごとに「言葉がわからなくても、だれにでも伝わる防災絵文字」を作成した。導入場面では、在住外国人3名(モンゴル、ミャンマー、ベトナム)に取材した動画を視聴した。主に、「自国の災害について」、「日本に来てからの災害経験(主に地震や台風)」、「防災絵文字作りに向けて子どもたちにアドバイス」をお話していただいた。取材では、「地震というものが最初はわからなかった」「テレビがないので、スマホからしか情報が得られない」「避難場所、水や食料の情報がほしい」といったお話を伺うことができた。また表記の仕方については「絵文字だけでなくひらがなや英語も必要」といった意見や、「漢字も一つの形として覚えているから漢字表記がよい」といった意見もあり、在住外国人の生の言葉は、子どもたちに防災絵文字作成に向けての意欲をより一層高めるものとなった。

その後の活動では、グループごとに「どのような場面・場所にするか」、「何を伝えるか」を話し合い、第1案を作成した。(下図参照)11月28日(金)現在、第1案を3名の在住外国人(モンゴル、ミャンマー、ベトナム)の方に見てもらい、感想やアドバイスをお願いしているところである。今後の予定では、アドバイスをもとに防災絵文字を修正し、完成を目指す。完成後は紹介動画を作成し、在住外国人や音更町役場の危機対策課に見てもらう予定である。

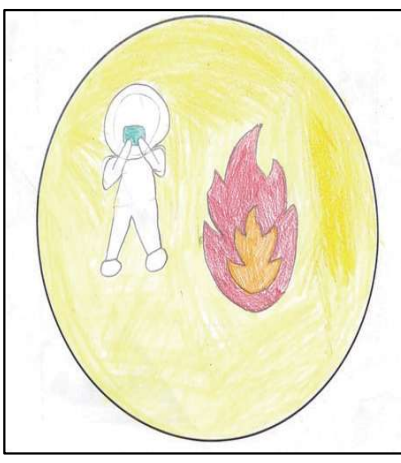
③まとめ

本単元の学習を通して、「絵文字」という切り口から、「多文化共生」「防災」「在住外国人の実態」について小学校3年生なりに迫れたことに手応えを感じている。子どもたちから「宗教」「ヴィーガン」といった言葉が出てきたり、絵文字や、やさしい日本語の役割について「障がい者や高齢者にも伝えることができる」という感想が出てきたりと、予想していたよりも多文化や多様性の話題が出たことに驚いた。子どもたちの興味関心をいっそう引き上げるとともに、言葉の壁を越えて情報を伝える重要性や、相手の立場に立って考えることの大切さを授業を通して伝えられたのではと感じている。「未来の担い手である子どもたちがいつか大人になったときに、多様な背景を持つ人々と互いに助け合い、やさしい心をもちながら安心してくらせる社会をつくってほしい。」そんな願いが本単元構成の原点である。子どもたちの心に本単元で学んだことが残ってくれたらと切に願う。今後も国際理解教育や開発教育について学び続け、実践を積み重ねていきたい。

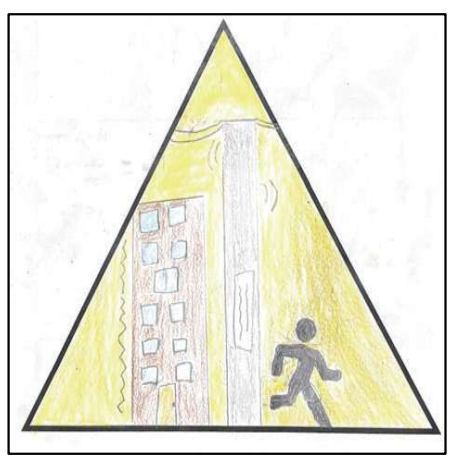
<防災絵文字第1案(一部)>①場所 ②場面 ③やさしい日本語



- ①高いところ
②大雨がきたとき
③高いところへにげてください



- ①教室
②火事が起きたとき
③ハンカチで口をおさえてください



- ①歩道
②地震が起きた時に最初にすること
③建物が倒れてあぶないので離れて

【参考資料】

<教師のための参考資料>

・「道内日本人初めて500万人下回る 外国人は20%増加」、北海道 NEWS WEB 2025.8.6

<https://www3.nhk.or.jp/sapporo-news/20250806/7000077740.html>

・「北海道内の人口4.9万人減 504万人 外国人の増加率全国最大」、北海道新聞記事 2025.8.7

<https://www.hokkaido->

[np.co.jp/article/1196031/?utm_source=doshin_digital&utm_medium=internal&utm_campaign=recommended_news](https://www.hokkaido-np.co.jp/article/1196031/?utm_source=doshin_digital&utm_medium=internal&utm_campaign=recommended_news)

(主な概要)

近年の日本社会において、少子高齢化や外国人労働者の増加が加速している。総務省の調査によると、2024年1月1日時点の全国の日本人は前年比90万8574人減(0.75%減)の1億2065万3227人と16年連続で減ったという。北海道内の日本人は27年連続で減り、5万9896人減(1.19%減)の497万9204人と減少数は13年連続で全国最多だった。一方、全国の外国人は前年比35万4089人増(10.65%増)の367万7463人で、調査を始めた2013年以降で最多であり、47都道府県全てで増加した。道内は1万738人増(19.57%増)の6万5621人で、増加率は全国で最大である。

これらの事実から、日本の深刻な少子高齢化と、外国人労働者が急速に増加していることがわかる。北海道においては日本人人口の減少数が全国最多、在住外国人の増加率は全国最大と人口動態が全国の中でも特に極端な変化を遂げており、将来的な労働力不足がさらに深刻化すること、外国人労働者への依存が高まっていること、多文化共生社会の構築が急務であることが大きな課題として浮き彫りとなった。

・小学校学習指導要領解説総編 文部科学省

・小学校学習指導要領解説国語編 文部科学省

・小学校学習指導要領解説総合編 文部科学省

・「すべての人にやさしいピクトグラム」、人権情報ネットワークふらっと

https://www.jinken.ne.jp/flat_class/2024/05/post_50.html

・「災害時外国人支援用ピクトグラム」、一般財団法人自治体国際化協会(クレア)

<https://www.clair.or.jp/j/multiculture/tagengo/dis-pictogram.html>

・道内在住外国人者数(住民基本台帳人口移動報告 2023.10月末)、北海道庁ホームページ

https://www.pref.hokkaido.lg.jp/fs/9/4/5/0/6/3/9/_/参考1-2%20市町村別在住外国人数%282023.10月_住民基本台帳%29.pdf

・「万博会場で食材を「ピクトグラム」表示 宗教や菜食主義に対応」、JAPAN FORWARD、2025.3.19

<https://japan-forward.com/ja/navigate-food-menus-at-expo-2025-with-pictograms/>

・ニュース&メディア「【JICA 基金活用事業】「多文化&防災まちさんぽ in おとふけ(全2回)」が開催されました」2025.6.26

https://www.jica.go.jp/domestic/obihiro/information/topics/2025/1571286_66860.html

・「音更町 外国人もいっしょに考える防災」、NHK 北海道 NEWS WEB、2025. 6. 28

<https://www3.nhk.or.jp/sapporo-news/20250628/7000076503.html>

・にほんごさぽーと北海道 <https://www.nihongosupport-hk.or.jp/>

・多文化共生社会企画展「知らない私に出会う If I Were You/If You Were Me」、JICA 地球ひろば

<学習者のための参考資料>

・東京 2020 オリンピックススポーツピクトグラム コンセプトムービー、Tokyo2020、2019.3.12

<https://www.youtube.com/watch?v=BOjb9HYUhRc>

・Breathtaking Pictogram Performance at Tokyo 2020 Opening Ceremony、Olympics、2021.7.24

<https://www.youtube.com/watch?v=I9uVg-feZoM>

・フードピクト <https://www.foodpict.com>

・「ピクトグラムで食材を表現、多様な人々に伝える工夫」

<https://www.youtube.com/watch?v=mdD1M13JO8Q>

・「多文化共生ってなんだろう?」、JICA 九州

<https://www.jica.go.jp/cooperation/learn/material/multicultural/index.html>

(概要紹介:『ケース2災害時の避難所にてネパール出身・クリシュナさんの場合』)

※児童の実態を踏まえ、chatGPT でイラストを作成した。

・つながる世界と日本、JICA ホームページ

https://www.jica.go.jp/aboutoda/find_the_link/

・在住外国人のインタビュー動画、2025.9.7 撮影

・「ピクトグラムかるた」、日本規格協会グループ

・「キッズペディア マークの図鑑」、小学館、2019

・「世界ピクト図鑑」、児山啓一、2021

国際理解教育/開発教育 学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	靱山 修斗	学校名	北海道幕別町立札内北小学校
教科(科目)・領域	家庭科・学級活動・保健	対象学年(人数)	6年1・2組(計40名)
実践年月日もしくは期間(時数)	2025年10月～12月(家庭11 学活1 保健1 計13時間)		

【実践概要】

1. 単元名(活動名): 世界の食卓から～健康的で持続可能な食生活と献立づくり～					
2. 実践する教科・領域 家庭科 学級活動 保健	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 単元の目標(評価規準を意識して設定)					
・世界と日本の食文化や、栄養バランスと生活習慣病の関係について理解し、栄養バランスの取れた献立を作って実習を行い、振り返り、家庭生活に生かそうとする。(家庭科)【知識・技能】B(3)ア・イ ・和食への理解を深め、健康的で持続可能な食生活を実現するために、栄養バランスがよく、地域の食材を生かした献立を考え、発表・交流できる。(家庭科)【思考・判断・表現】B(3)ア ・世界の多様な食文化と健康や栄養バランスに関する情報に触れ、その背景にある地球的背景を理解し、多様性を尊重しながら、自国の食文化を見直すことができる。(国際理解)【主体的に学習に取り組む態度】B(2)ア・B(3)イ					
5. 単元の評価規準	①知識・技能	・世界と日本の食文化や、健康や生活習慣病の関係について知ることを通して、栄養バランスの取れた一食分の献立を作ることができた。 ・使用する食材に適した調理方法を理解し、適切に調理をすることができた。			
	②思考・判断・表現	・世界の食文化と日本の食文化を比べ、和食を捉え直し、栄養バランスの良い食事における諸課題に対する解決方法を考え、健康的・持続可能という視点で献立を作成、表現できた。			
	③主体的に学習に取り組む態度	・多様性、健康的、持続可能の視点を持ち、他者の意見も踏まえながら、試行錯誤して献立を作ることができた。			
6. 単元設定の理由・単元の意義					
【単元設定の理由と児童観】					
● 単元のねらい					
・既習の五大栄養素や調理法(ゆでる・いためる)に関する知識・技能を活用して取り組む					
・栄養と生活習慣病との関連を意識し、一食分の献立を工夫できるようにする					
・「世界の食卓クエスト」を通じて、架空の国を題材に食文化や栄養の違いを体験的に学ぶことで、世界の食文化を尊重する姿勢を育てる					
● 子どもたちの経験					
・5年生で五大栄養素を学習済み					
・栄養教諭との連携による「食の指導」を受けた経験あり					
・家庭や調理実習での経験があり、分担・協力して活動できる					
● 見られる課題					
・調理実習時の調味料の使い方に課題がある					
・修学旅行でのバイキングや家庭の食事に偏りが見られる児童もいる					

02

靱山 修斗

幕別町立札内北小学校・6年・家庭・特別活動・保健

● 指導の方向性

- ・栄養バランスと生活習慣病との関連を意識づけ、献立づくりと実習を通して日常生活に生かす力を育てる
- ・栄養教諭、養護教諭と連携し、専門的な観点からも学びを得る

● 学びの広がり

- ・世界の食文化に触れ、多様性や課題、知る楽しさを感じる
- ・和食や地中海食がユネスコの世界無形文化遺産に登録されていることを取り上げ、その選定理由の1つに、健康的な食生活があることを理解する
- ・日本の食文化(特に伝統的な日常食である「和食」の献立「一汁三菜」)を捉え直し、その良さを再認識する
- ・和食を含めた世界の食文化の特長を献立づくりに生かし、学びを深める

【教材観】

● 和食の定義

- ・学修指導要領解説 家庭編、教科書より: 日本で発展してきた伝統的な日常食(主に一汁三菜)
- ・ユネスコ無形文化遺産登録の理由より: 自然観、生活習慣、社会的役割を含む“食文化の総体”

● アクティビティ「世界の食卓クエスト」

- ・架空の国カード(実際の国を基に作成)と食カード、リスク・チカラカードを使って行う
- ・食の偏りや病気の発生を疑似体験することで、栄養バランスの大切さや難しさ等を実感する
- ・活動後、実際の国の様子(キルギス)を共有し、その背景等について理解を深める

● 学びの広がり

- ・和食や地中海食がユネスコ世界無形文化遺産に登録されていることを紹介
- ・栄養バランスの取れた和食を再認識し、献立づくりへつなげる
- ・ISS(国際宇宙ステーション)にいる宇宙飛行士の食事を取り上げ、栄養管理や食事方法に触れる
- ・十勝の農産物が宇宙食に採用されていることを紹介し、食事の役割を多面的・多角的に考える

● 単元後半の活動

- ・健康的な食生活(栄養バランス・病気予防)と持続可能な食生活(地産地消・食品ロス削減など)を意識した献立づくりを行う
- ・調理実習の計画 → 実施 → 振り返りへとつなげる
- ・第5時や単元の終末では、第1時のフードトラッキングを振り返り、日常に視点を戻すことにより家庭生活に生かせるようにする

【指導観】

● 導入での工夫

- ・大阪・関西万博での食事写真を活用し、食文化への興味関心を高める
- ・Gregg Segal の『Daily Bread』から写真を選定し、各国の食文化について触れる機会を設定する

● 地産地消の視点

- ・北海道の食料自給率:223%(2025年現在)
- ・十勝の食料自給率:1345%(2025年現在)
- ・子どもたちは地元産の野菜を日常的に食べ、給食もほとんどが道内産
- ・すでに地産地消が実現しているが、意識は高くないため、改めて取り上げる

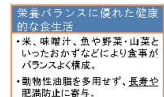
● JICA 教師海外研修での学び(キルギス、2023年)

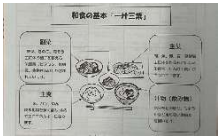
- ・肉や乳製品中心の食生活で塩・油を多用する食文化により生活習慣病が増加している
- ・医療費や国の予算を圧迫している(第3時病院訪問時の講話より)
- ・伝統的な食文化を大切にしながらも、栄養バランス改善のために地質改良などの研究も進められている(農業カレッジ等)
- ・この経験から「何を選んで食べるのか」という視点を持つことの重要性を感じた

7. 単元計画(家庭11 学活1 保健1 全13時間)

時間	ねらい	学習活動	資料など
学活	・栄養バランスの良い給食の献立を考える。	・給食の献立の考え方、実際の様子を知る。 ・栄養バランスの取れた給食の献立を作成する。(実際の給食に採用され、12月の献立に載った。)	・栄養教諭の食の指導と連携

保健	・病気の予防には、運動、食事、睡眠を考える必要があることを知る。 ・生活習慣病やがんなどの病について理解する。	・成人期に多く見られる病気(糖尿病、高血圧、心臓病等)が、子どもの頃の生活習慣と関わることをデータ等から確かめる。 ・予防には、バランスのとれた食事、運動、休養・睡眠が重要だということ理解する。	・養護教諭との連携 ・教科書 ・ワークシート
1 以下、 家庭科	・自分の食生活を振り返り(フードトラッキング)、栄養素やご飯、味噌汁の作り方など、既習事項を確かめる。 ・単元の学習の見通しを持つ。	・一定期間の食事について記録(事前課題として記録しておく)をし、可視化する。 ・栄養素の復習とともに、栄養バランスについて着目する。 ・単元の学習計画を立てる。	・事前課題として設定 
2	・大阪・関西万博の食事から、多様な食文化へ興味関心持つ。 ・世界の子どもたちの食事を知り、多様な文化を知ることを楽しむ。	・ピクチャーマッチングで、国と食事をつなぎ、多様な食文化に触れる。 ・『Daily Bread』の写真を使い、フォトランゲージ・国当てクイズを行う。(アメリカ、インド、フランス、ブラジル、UAE、セネガル、マレーシアを選定)	・大阪・関西万博で食べた食事の写真 ・Gregg Segal『Daily Bread』から、国の食文化、ファストフード、栄養バランスに着目して国を選定する。
3	・世界の子どもたちの食事を知り、その背景や課題について理解する。	・同じ『Daily Bread』の写真を使い、「健康ランキンク」または「カロリーランキンク」を行う。 ・食材の違い、特徴等に触れ、栄養、健康に目を向ける。	・Gregg Segal『Daily Bread』から、第2時と同じ国の違う人を使用(国内での差にも着目する。)
4	・各国の特色(食材や栄養、健康、生活習慣病など)について知る。	・世界の食卓クエストを通して、様々な国の食文化や特徴、栄養、に関して疑似体験し、多様な食文化と健康の関連について考える。 ・世界の食卓クエストの国の1つ、キルギスの現状を紹介し、その国の現状や風土、歴史などの背景によって、様々な状況があることを知る。 ・JICAの支援活動についても触れる。	・世界の食卓クエスト  ・キルギス訪問時の写真(バザール、病院、農業カレッジの研究)
5 本時	・和食(と、地中海食)が世界無形文化遺産に登録されていること、その背景、理由を理解する。 ・和食、日本の食文化について理解を深める。	・＜国カード＞のもとになった情報を共有し、各国の特徴と栄養について知る。 ・世界無形文化遺産に登録されている、和食と地中海食を栄養バランスについて着目して比較する。 ・和食の特徴を知り、今後の献立作りに向けて、生かしたいことなどを記述する。 	・世界の食卓クエスト＜国カード＞のもとになった各国の情報 ・ロイロノート(前時の様子写真、和食・地中海食の写真、ユネスコについて、和食の五〇〇について)で資料提示
6	・健康的、持続可能という視点を理解する。 ・宇宙食の考え方を学び、これからの食について考える。	・一汁三菜の考え方や食の指導の経験から、食事の作り方について捉える。 ・宇宙飛行士の食事方法について知る。 ・十勝の食材が宇宙食に採用されていることを知り、試食をする 	・栄養教諭との連携 ・地産地消に触れる ・国カード(ISS) ・十勝毎日新聞「宇宙日本食がおいしい」2024.12.28
7	・健康的、持続可能という視点を持ち、献立を作成できる。	・栄養バランスの取れた献立を作成する。 ・ポイントとなることを強調して交流し、評価し合う。	・ロイロノート上で作成(フォーマットをクラスルームで配布)
8	・食材、時間、分担等を考慮して、調理実習計画を立てる。	・実習する献立を選び、手順、分担、時間配分などを計画する。 ・健康的、持続可能という視点を意識した計画を立てる。	・ロイロノートで流れ、分担などの計画をする。

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	1 前時想起・ゲームから考えたこと、気づいたことを共有する T「世界の食卓クエストをやってみて、どうだったか振り返りましょう」 ・バランスよく集められた ・たくさん食材が集まるけど、バランスが… ・全然集まらない国もありました T「うまく食材が集められた国もありましたが、なかなか揃わなかった国もありましたね。イベントで、病気になってしまったところもありましたね。」 ・どうしても野菜が無くて困りました ・カードは集まるけど、同じ栄養しか集まらず、リスクに引っかかってしまったよ T「テキストマイニングをすると、2つの国が浮かび上がってきました。」	・振り返りを活用しながら、想起する。 ・世界の国の食、栄養状況のについて触れるようにする。 ・結果やゲーム中のつぶやき、会話などを紹介しながら、短時間で振り返る。 プロティ国、アキュー国...バランスが良い傾向 カーボ国、ミネロ国.....偏りが見られる傾向 リビディ国、ビタナ国.....不足している傾向 ・AI テキストマイニングの画像を画面配信する。	・毎時間の振り返りを記入しているスプレッドシート ・前時のすごろく結果の写真(ロイロノート)  ・子どもの振り返りを AI テキストマイニングした画像 
展開1 (10分)	2 世界無形文化遺産について知る。 T「実際は、それぞれある国を例にしていた。知っている国や食べ物がありましたか？」 ・プロティ国は、みそ汁があるので、日本！ T「うまくバランスが取れた2つの国は、どの国をもとにしていると思いますか？」 ・パスタやリゾットがあるので、イタリアだ！ T「2つの国は、日本とイタリアです。この2つの国には共通した事柄があります。何でしょうか。」 ・なんだろう？ T「この2つの国の食文化は、ユネスコの世界無形文化遺産に認定されています」 T「地中海食は2010年、和食は2013年に登録されて、健康的で長寿につながる食文化ということで世界から関心が寄せられてきました。」	・もとになっている国の情報を共有し、どのような国か、子どもたちの理解を確認しながら話を進める。良し悪しではなく、その国の文化等を尊重する態度を持つように話す。  ・ここでいう「無形文化遺産の和食」は、食文化全体をさすため、その中でも健康的だという部分に注目することを説明する。 ・教科書は、伝統的な日常食と説明していることも補足する。	・ロイロノート(地中海の場所、選考理由の資料等)  ・和食の申請概要 

展開 (20分)	課題 和食と地中海食を比較し、その特徴や良さを献立作りへ生かそう。	
	3 和食と地中海食の比較をし、栄養バランスのとり方に着目する。 T「具体的な和食と地中海食を見て比べましょう。それぞれにどんな特徴があるかな」 ・どちらも : 野菜・豆が多い、穀物が主食、魚を食べる ・和食 : 油が少ない、発酵食品、海藻類も食べる ・地中海食: オリーブオイルが多い、肉は少ない、乳製品が多い 4 和食の特徴について知り、献立づくりに生かそうとする。 T「和食には、基本的な献立の仕組みがありましたね」 ・一汁三菜です ・ごはんに汁物、主菜と副菜2つということですよ T「和食には、他に、五〜という考え方もあるのですが、聞いたことはありますか」 ・知らなかった ・五味は味付けのことだね ・うま味はだしを取った時にやったよ T「栄養という点でいえば、五色は見やすいですね。和食や地中海食、給食の献立やフードトラッキングを五色の視点で振り返ってみましょう」 ・給食は、色がそろっている ・自分は、濃い色が足りないなあ ・色をそろえようとすると、食材の数が必要だ ・家の食事で考えると、ちょっと足りないかもしれない…	・献立の写真と主な食材が書かれた情報シート(ロイロノート)と印刷物の両方を用意  ・教科書、給食だより(一汁三菜)  ・ロイロノートで画像提示  ・第1時のフードトラッキングのワークシートを返却、給食だより(献立面)の画像をロイロノートで配布。
まとめ (10分)	T「振り返りをしましょう。これから、献立作りをしていくうえで、どのように取り組んでいきたいですか」 ・栄養バランスをうまくとりたい ・盛り付けにも気を配って実習をしたい ・食材に合った調理方法を身に付けたい ・日本の和食の考え方をしっかり覚えて実習をしたい。 ・和食の文化を大事にしたい。 ・海外の食文化を取り入れて献立を考えてみたい。	・今日の学びの他に、次の時間につながるような内容になるよう声を掛ける。 ・スプレッドシートに記入する。

9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法)

- ・世界の食文化との比較を通して、栄養バランスのよい食事について分かる。(ロイロノート)
- ・和食の特徴やよさを理解し、自身の献立作りへ生かそうとする。(観察、振り返りの記述(スプレッドシート))

10. 学習方法および外部との連携

● 栄養教諭との連携

- ・給食献立を作成する際の考え方や思いについてお話しいただく(または、ビデオメッセージ等で紹介をする)

● アクティビティ「世界の食卓クエスト」

- ・目的: 栄養バランスを意識し、健康な体づくりとの関連を考える
- ・背景: 教師海外研修(キルギス)で、文化的な側面や気候や風土の面などにより栄養バランスが取りにくく、生活習慣病につながる国があることを学んだ。病院や国の財政を圧迫するほどと聞き、とても驚いた。また、日本も和食中心の生活がある一方、食生活の変化で生活習慣病が増加している現実もある。
- ・工夫: 架空の国を題材にしたアクティビティを通して栄養バランスに着目することで、和食の良さを再認識する機会にする。また、食材が集まらなかったり偏ったりするように仕掛けを設定し、考えるきっかけを作る。
- ・進め方: 4～6人で実施 ゴールの設定がないので、時間で制限し、周回する。
 - ① 国カードを引く。自分の国を決定し、その国の主食カードを受け取る。
 - ② 順番にサイコロを振り、すごろくを進める。止まったマスに書かれている指示を実行する。
 - －黄マス: 食カードゲット(対象の国のみ) 中央の食カード置き場の山から引く
 - －赤マス: 全員ストップして、中央に記載しているリスクチェックを行う
 - －紫マス: 一回休み、またはサイコロの結果次第で休み
 - ③ 終了後、どのような食が集まっているか、どんなリスクがあるかについて交流する。

● 宇宙食の取り上げ

- ・国際宇宙ステーションでの食生活の特徴: 地球上の栄養士による徹底した管理体制と、地球上とは異なる準備や食べ方の工夫がある。食事の約8割は指定され栄養が確保される一方、選ぶ楽しさは約2割にとどまる
- ・宇宙食の試食をして、実感を持たせる。
- ・十勝の食材が宇宙食に採用されていることなどを知り、「自分で選び、何を食べるか」という視点を深める

11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み

- ・本町では、「食の指導」として、町内の小中学校へ栄養教諭が授業を実施している。家庭科のある高学年では、栄養素や食事のとり方、朝食の必要性など、子どもの成長に必要な知識や考え方を指導してくださっているのので、連携することができる。今年度は、給食の献立作りを実施する予定で、児童が考案したメニューが実際の給食になる可能性もあるということで、栄養バランスをよく考えて献立を作る経験を実際に行うことができる。
- ・本校では、JICA 教師海外研修の経験者が3名おり、国際理解の視点をもって授業したり交流したりすることが可能である。情報を共有し、お互いの実践をお互いに活用できるようにしたい。

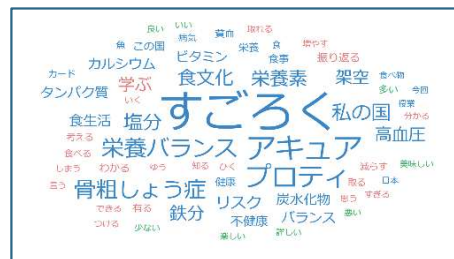
【自己評価】

12. 苦労した点

本時(世界無形文化遺産、和食と地中海食の比較)は、単元の前半と後半を接続させる重要な「つなぎの時間」として、以下の点に苦慮した。

① 前時「世界の食卓クエスト」の結果や子どもの振り返りの記述から導入を構成すること

子どもの振り返りの記述がとても充実していたこともあり、時間配分に気を付ける必要があった。特に、取り上げる2国(プロティ国: 日本、アキユア国: 地中海食の国)へ焦点を当てる際には、右図 AI テキストマイニングを活用し、短時間で分かりやすく見えるようにした。



② 国際理解教育の視点

単元全体としては、国際理解の視点が散りばめられていると思う。しかし、本時単独で見た場合、ユネスコ無形文化遺産(和食と地中海食)の比較や和食への焦点化が、「栄養バランス」や「健康」といった側面に終始し、「何が国際理解教育だったのか」が明快でなかった。

③ 教材作成のねらいと効果の調整

単元全体で見たときに、前時で使用した「世界の食卓クエスト」が、食文化の多様性だけではなく、健康的な食文化・生活習慣病・各国、各地域の食の特色等を包括している必要があった。

また、すごろくという性質上、その時の運に影響される確率が高く、マスやイベントの数の配置等全体の調整を図る必要があり、作成が難しかった。生成 AI を活用し、数万回のテストを繰り返させることである程度固めることができた。



13. 改善点

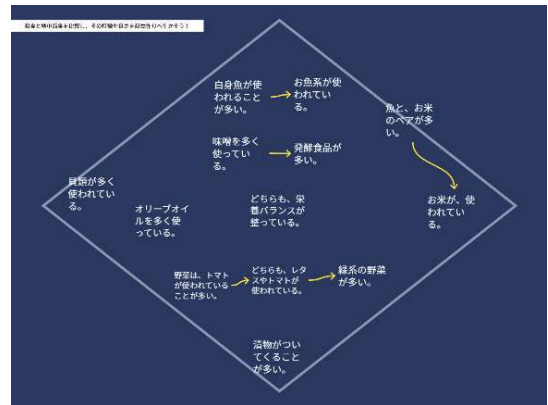
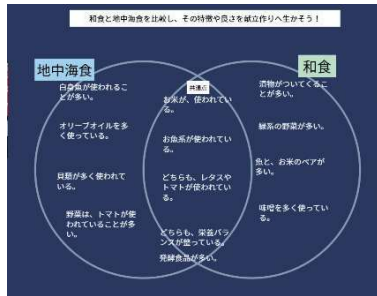
上記「苦労した点」と本時の授業実践を踏まえ、以下の点に取り組むと良いと考えた。

① 国際理解の視点を明確にするための整理と共有

本時では、ロイロノートのベン図(和食と地中海食との比較)を使用し、画面配信をすることで、短時間で全体共有をした。慣れているためお互いに困る部分はなかったと思うが、交流を通した学びという点で、ご指摘があった。

そこで、子どもは共有ノート上(ロイロノート内の機能)に、構造化して整理することとしたい。シンキングツールを切り替える(ベン図→ランキング)ことで、共通点・相違点を見つける活動の後に良さを生かすことについて考えることができる。さらに、順位付けすることで、子どもたちはそこにある理由を話したくなるだろう。その中で出てきた、健康に関わる事柄の他、それぞれの国の地理的な背景(気候、海に接しているなど)または文化的な背景(宗教など)について教師が意図的に取り上げることが可能となり、国際理解の視点がうまく活用できるのではないかと考える。

例) ベン図で情報を整理→ツールの切り替え→ダイヤモンドランキングで順位付け



※1 共有ノートで同時編集し、即時共有を行う。

※2 特徴的な項目や国際理解の視点につながる視点は、板書する。

② 内容の整理とタイムマネジメント

①のように考えると、以下のように全体的な内容の整理をし、タイムマネジメントをしなければならない。

・導入の振り返りを短時間に(AI テキストマイニング等を活用)

・展開後半の「和食の五～」の話題提供は、次時の一汁三菜や地産地消の話題に絡めて取り扱う。

14. 成果が出た点

上記のように改善を考えたが、子どもの学習の様子や振り返りの記述内容などから、一定の成果を得たと考えている。また、事後研においてたくさんの良さを見付けていただいた。

① 教科等横断的な単元構成と国際理解教育の視点の融合

家庭科の健康・栄養に関わる目標と、国際理解教育・開発教育の視点(世界の食文化の多様性、病気など地球的課題)を統合した壮大かつ一貫性のある単元構成をすることができた。ただ単に、献立を作るだけでなく、世界に視野を広げてから和食に目を向けることで、興味・関心を高めるとともに、自国の食文化を見直す機会ともなった。

② 教材の開発・接続

前時で使用した自作教材「世界の食卓クエスト」が、世界の食文化を知ることと同時に、「病気のリスク」を自分ごととして認識させる「切実な気づき」を生み出し、本時の学習へと高い興味・関心を持たせ、接続を図ることができた。また、和食と比較する対象として、単なる他国料理ではなく、「地中海食」を「ユネスコ無形文化遺産」という国際的・文化的な価値観の視点から導入し、生徒に多角的に食文化を捉えるきっかけを作ることができた。



③ 子どもの内省の実現

前時までの学習や、栄養教諭との連携による「食の指導」の想起、第1時に行った「フードトラッキング」の提示などを通して、広く世界の食文化について知り考えていた段階から自分事になることで、「どう選んで食べるか」という思考を深めることができた。具体的な行動変容の意欲を示す記述も見られ、次時以降の献立作りへの意欲も高まった。



15. 学びの軌跡(子どもの記述をもとに)

子どもたちは、前時までの世界の食文化や、健康、生活習慣病などの学習を踏まえ、本時の和食と異文化の比較を通じて、自己の食生活の課題をも客観視し、次時以降の実践活動への強い意欲を示していた。

① 健康的食文化の普遍的価値

和食と地中海食の共通点を認識し、「どちらもとても健康に良さそうでびっくりしました」、「どちらも発酵食品を使っていたり、栄養がありそうなものだったたりした」と記述している。また、「野菜はどっちも多く使っていて、いろんな食べ物が使われているのがわかりました」「世界にはまだ知らない多くの食事や文化があることを知りました」と、食材の多様性に着目することができた。

② 和食の再認識と多角的評価

「和食は普段自分たちも食べてるけど『これも和食なんだ』と思ったりするものもあって、和食についてももっと調べてみようと思った」。また、献立づくりにおいて「色(五色)も大事で、五色の組み合わせを大切にして献立を作っていきたい」と、健康だけでなく、和食について多角的な視点を獲得することができた。

③ 切実な自己反省と行動変容への意欲

自己の生活との比較を通じて、「自分の家の料理は茶色い油ものの料理が多く…(中略)…一汁三菜とは遠い存在なので、一汁三菜に少しでも近づいていけるようにしたい」と、具体的な課題を認識した。

また、「好き嫌いが多くて特に野菜などがとても苦手で…(中略)…少しずつ克服していきたい」という強い意思や、献立について「発酵食品も入れてみようと思うが、偏りのない、まんべんなく体を形成できる、栄養素で構成したい」と、次時の実践活動への意欲を明確に示した。

16. 授業者による自由記述

本時の授業実践を通して、単元のゴールを見据えた逆向き設計の授業づくりが上手く機能し、子どもの意欲を喚起しながら、「どう選び、どう食べるか」という課題意識を生み出すことができたことは大きな成果と感じている。家庭科の単元だけでは、これほど視野を広げたり様々な食文化に触れたりした上で、自分たちの食生活を見直していくことは難しい。今回はかなり広げる形にはなったが、きちんと日常生活とつなげたり将来の食を選ぶ場面を想定したりしながら単元を構成することができた。

次時以降では、自給率1345%をほこる十勝の食糧生産や、宇宙食(十勝の食材が採用されている、食の徹底管理)について取り上げる。単に栄養バランスを取ることだけではない「食の楽しさ・豊かさ・文化とは」について思考することで、栄養素を並べるだけの献立作成に留まらない単元の学びを実際に作ることができるのではないかと考えている。

また、自作教材「世界の食卓クエスト」は、悩みながらも楽しんで作ることができた。大量の情報を整理することやカードを準備することはかなりの作業量だったが、単元の中で効果的に働いたと言える。特に、生活習慣病に着目したところは、世界の食文化を見てきた中で、「その国の食」ではなく、「個人個人の食生活」に目が行く機会ともなった。

しかし、ICTの活用により、参観者の皆様に授業の内容、子どもの学習の様子や思考が見えづらくなってしまったのは、反省点の1つだ。しかし、子どもたちはよく考え、必要に応じて相談、交流をしており、直接話す交流がなかったわけでもない。単元の中における本時の役割を考えた結果、ICTの活用による情報共有をすることで、即時的に、簡単にする方を重視した。そういうねらいを含めて、参観者の皆様に活動を見えやすくする工夫はいくらでもあるはずなので、事前に準備をしておくべきだった。

単元の後半、献立を作る際には、「だれのためにどんな献立を作るのか」を各自で設定し、栄養バランスに気を配りながら考えることができていた。



和食といえはの「さばのみそ煮」です。栄養と発酵食品を取れるようにしました。



洋風にオムレツにしましたが、ごはんにも合うようにチーズとほうれん草を入れてみました。

【参考資料】

- ・『現代国際理解教育事典改訂新版』 日本国際理解学会 2025 年 明石書店
- ・『国際理解教育ハンドブック-グローバル・シティズンシップを育む-』 2015 年 明石書店
- ・『国際理解教育を問い直す-現代的課題への 15 のアプローチ-』 2021 年 明石書店
- ・『地球の食卓-世界 24 か国の家族のごはん-』 ピーター・メンチェル、フェイス・ダルージオ 2006 年 TOTO 出版
- ・『SDGs と家庭科カリキュラム・デザイン-探究的で深い学びを暮らしの場からつくる-』 新井紀子 2020 年 教育図書
- ・『地球の食卓学習プラン10改訂版』 企画制作 八木亜紀子 2017 年 特定非営利活動法人開発教育協会
- ・『Daily Bread』 著 Gregg Segal 2019 年 Power House Books 社
- ・『世界に広がる日本の食文化』 著「和食のひみつ」編集部 2023 年 メイツ出版
- ・『もっと知りたくなる日本 和食』 著 小倉朋子 2025 年 秀和システム
- ・『和食を未来へ』 農林水産省 2015 年
- ・Meiji 世界の食と文化
<https://www.meiji.co.jp/meiji-shokuiku/worldculture/> 閲覧日 (2025.8.10)
- ・ユニセフ for every child
<https://www.unicef.or.jp/minnnano/> (2025.8.10)
- ・ユニセフ for every child 栄養|ユニセフ・キルギス
https://www.unicef.org/kyrgyzstan/nutrition?utm_source=chatgpt.com (2025.8.10)
- ・GAFS 世界の食料・栄養安全保障ダッシュボード|食料危機に関するデータ
<https://www.gafs.info/home/> (2025.8.10)
- ・GAFS 国別プロフィール
<https://www.gafs.info/country-profiles/?state=Advice&country=BFA&indicator=IPCC> (2025.8.10)
- ・WHO NCD 国別プロフィール 非感染性疾患の監視、監視、報告
https://www.who.int/teams/noncommunicable-diseases/surveillance/data/profiles-ncd?utm_source=chatgpt.com
- ・文化庁 世界無形文化遺産
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/mukei_bunka_isan/ (2025.9.4)
- ・日清製粉 ウェルナビ
<https://www.nisshin.com/welnavi/> (2025.9.4)
- ・文化庁 和食の次の未来へ
https://www.bunka.go.jp/washoku_future/ (2025 9.4)
- ・農林水産省 食育の推進
<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/> (2025.9.4)
- ・地中海食 イタリア保健省
<https://www.salute.gov.it/new/it/tema/dieta-mediterranea/benefici-la-salute/> (2025.9.6)
- ・JAXA 宇宙日本食
<https://humans-in-space.jaxa.jp/life/food-in-space/japanese-food/> (2025.9.6)
- ・十勝毎日新聞電子版 「宇宙日本食がおいしい」 2024 年 12 月 28 日
- ・〃 「十勝川西長いもの宇宙日本食「おいしい」 大西宇宙飛行士がISS滞在時に実食、動画公開」2025 年 8 月 26 日

使用した教材等については、右記 QR コード先 (Google ドライブ) で共有する→



02

—
糸山修斗

幕別町立札内北小学校・6 年・家庭・特別活動・保健

国際理解教育/開発教育 学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	安生 留衣	学校名	上越市立大町小学校
教科(科目)・領域	外国語(英語)	対象学年(人数)	6 年 1 組(33 名)
実践年月日もしくは期間(時数)	2025年 8月29日 ～ 10月3日(5 時間)		

【実践概要】

1. 単元名(活動名): 同じまちで生活する仲間 ～ハロハロから広がる国際理解～					
2. 実践する教科・領域 英語(英語専科)	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 単元の目標(評価規準を意識して設定)					
・フィリピンのデザート「ハロハロ」をきっかけに、フィリピンの文化や言語に親しみをもつ。 ・日本と似ている点・違いに気づき、異文化理解を深める。 ・自分たちのまちに住む外国の人々を身近に感じ、共に生きるために大切なことを考える。					
5. 単元の評価規準	①知識・技能	・フィリピンの文化(ハロハロや生活など)について理解している。 ・自分の経験や感想などを簡単な学んだ英語を使って表現することができる。 (例:I ate halo-halo. It was sweet. / I like it. 等) ・簡単な英語を使って自分のまち(上越)の良さを紹介している。			
	②思考・判断・表現	・フィリピンと日本の文化の似ている点・違う点を、英語や日本語を交えて伝えることができる。 (例:Halo-halo is colorful. We have shaved ice.等) ・自分たちのまちに住む外国の人々と「どのように共に生きていくか」について、自分の考えを表現している。			
	③主体的に学習に取り組む態度	・フィリピンの文化や人々に親しみをもち、前向きに学ぼうとしている。 ・自分のまちに住む外国の人々を身近に感じ、共に生活するために大切なことを考えようとしている。 ・相手の文化を尊重しようとする姿勢を持ち、共生への関心を高めようとしている。 ・相手に質問したり、やり取りしたりする交流活動に主体的に取り組んでいる。(Do you like～? / We have ～等)			
6. 単元設定の理由・単元の意義					
【単元設定の理由あるいは単元の意義】					
上越市には現在、2340 人の外国人市民が暮らしており、そのうちおよそ 970 人はフィリピン出身の人々である。こうした地域の実態は、国際理解教育が「遠い国の文化を学ぶこと」にとどまらず、「自分たちが暮らすまちの仲間を理解すること」であることを示している。					
本単元では、フィリピンの代表的なデザートである「ハロハロ」を題材に取り上げる。調理実習やフィリピン人保護者との交流を通して、児童はフィリピンの食文化や暮らしを五感で体験的に理解することができる。さらに、同じ学校や地域で生活する外国の人々の存在を意識し、多様な文化を持つ人々と共に生きるために必要な態度や考え方を育むことを目指す。この学びを通して、児童は「世界の人々とつながる」という国際理解の視点とともに、「地域社会の一員として共に生きる」という多文化共生の視点を身につけ、より広い視野を持って自分や周囲の生活をとらえる力を養う。					

【児童／生徒観】

本学級は児童 33 名に加え、特別支援学級の児童 1 名が在籍している。特別支援学級の児童は多くの時間を学級外で過ごしているが、体育やマーチング活動、給食などでは共に過ごしている。活動を共にするだけでなく、言葉を交わすことも難しい相手であるが、その子の様子を見ながら、今何を欲しているのか、どんな気持ちなのかを察し、代弁したりするなど、相手に心を寄せようとする姿勢を持っている児童が多い。

本学級は3年生の外国語活動から指導している。在籍児童には中国にルーツを持つ児童がおり、以前、旧正月の話を聞く機会があった際、とても丁寧に説明してくれ、他の児童も興味深く聞いていた。英語に苦手意識を持つ児童も数名いるが、外国の文化や日本との違いには強い関心を示している。外国語の学習に対しても、「英語を話せるようになりたい！」という意欲を持つ児童が多く、言語活動では互いに掛け合い、会話練習を行うなど、前向きな姿が見られる。

【教材観】

1 学期の終わり、子どもたちは教科書の異文化理解ページでフィリピンのデザート「ハロハロ」と出会い、興味を抱いている。「ハロハロ作り」の調理実習をきっかけに、本校在籍のフィリピン人保護者と出会い、話を聞くことができる。また、在住外国人を支える機関「上越交流協会 JOIN」の活動や「やさしい日本語」などについても知ることで、地域で生活する難しさにも目を向けられる。さらに、中国にルーツを持つクラスメイトの家族の話も聞きながら、自分たちができることや、共に暮らす上で大切なことを考えさせていく。

【指導観】

本単元では、フィリピンのデザート「ハロハロ」をきっかけに、子どもたちがフィリピンの文化に触れ、日本との共通点や違いに気づくことをねらう。さらに、同じ学校・地域に暮らす外国の人々の存在を身近に感じ、共に生活する上で大切なことについて考える姿勢を育てたい。指導にあたっては、以下の視点を重視する。

① 体験を通した学びの重視

- ・調理実習やフィリピン人保護者との交流を通して、子ども自身の感覚で文化を理解する体験型活動を中心に据える。
- ・英語で簡単な表現を用いて、自分の経験や感想を伝える活動を取り入れ、言語活動と文化理解を結びつける。

② 異文化理解と共生意識の育成

- ・フィリピン文化や地域で暮らす外国人の生活の話を聞くことで、児童が自分の文化だけが「当たり前」ではないことに気づくよう支援する。
- ・在住外国人を支える機関 (JOIN など) の活動や「やさしい日本語」について知ることで、共生に向けた考えを深める。

③ 児童の関心・意欲に応じた指導

- ・英語に苦手意識を持つ児童も含め、全員が安心して活動に参加できる環境を作る。
- ・日本語と英語を交えて考えや感想を伝えることを認めるなど、児童の発達段階に応じた指導を行う。

④ 対話と協働の促進

- ・ペアやグループで意見交換や会話練習を行い、互いの考えを尊重しながら表現する力を育てる。
- ・調理や発表活動を通じて、他者の考えに寄り添い、協力して学ぶ姿勢を養う。

7. 単元計画(全 5 時間)

時間	ねらい	学習活動	資料など
1 本時	【体験】 ハロハロ(食)をきっかけに相手を知る	・フィリピンにルーツがある ALT と、フィリピン人保護者(ノブレッタさん)と一緒にハロハロ作り ・フィリピンの文化や簡単な挨拶を学ぶ	・フィリピンの基礎知識となる資料(地図、位置) ・ノブレッタさんから提供してもらった写真
2	【気付き・比較】 ・フィリピンと日本の「似ている・ちがう」を見つけよう	・前時の振り返り(ハロハロの味や感想)を学んだ英語で伝える (I ate halo-halo. It was sweet 等) ・写真や資料から「フィリピンの食べ物・学校・遊び・住まい」を紹介 ・グループで「日本とフィリピンの似ていること・違うこと」をカードに書き出し、共有	・前時で使用した資料や写真
3	【交流・自分事化】 ・同じまちに住む外国の人たちを知ろう ・ノブレッタさんに上越のおすす	・上越市に住む外国人の人数や国籍(グラフや地図)を提示 ・上越にもフィリピンの人や外国から来た人がたくさんいるということへの気づきをもつ	・「上越の国際化を考える」、「創造行政」(上越市創造行政ニュースレターNo.44, July.2019)

	めを紹介しよう ・ノブレッタさんに上越の好きなどころ、驚いたこと、困っていることを聞いてみよう (フィリピン人保護者来校) ・上越地域の外国人をサポートしている JOIN の活動紹介	・児童がこれまで総合で学んだことを英語の既習表現を用いて紹介する 例: Do you like coffee? We have “machiya cafe”. You can eat sandwich and coffee. ・「上越の好きなどころ」、「驚いたこと」、「困っていること」などをノブレッタさんに質問する。(ALT との対談形式や児童による質問) ・上越に住む外国人を支える JOIN の活動を紹介する ・ノブレッタさんの話を聞いて思ったことや考えたこと、感想をワークシートに記入する。	・上越交流協会 JOIN ホームページ(活動内容)
4 【本時】	【まとめ・表現】 共に生きるために大切なことを考えよう	・単元全体を振り返り、共に暮らす上で大切なこと、自分達ができることを考える	・これまでの活動写真 ・上越交流協会 JOIN の方の言葉を紹介する
5	【まとめ・英語表現】 共に生きるために大切なことを「英語」で言ってみよう！	【フォローアップ＆チャレンジタイム】 ・前回の振り返りをもとに同じまちで共に生きるために大切だと思うことを英語で表現する ・ We can understand each other. ・ I want to study English. ・ I want to understand each country and culture. ・ Let's have good communication! など	・前時に記入したワークシート

8. 本時の展開(概略)

本時のねらい: (4/5時間)

- ・単元全体の学びを振り返り、地域で共に暮らす上で大切なことや自分にできることを考え、表現している。
- ・英語の簡単な表現や日本語を交えながら、自分の考えをまとめて伝えている。

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (15分)	① これまでの活動を振り返る T:「今日は単元全体のまとめとして、私たちが外国の人たちと共に暮らすために大切なこと、自分たちにできることを考えたいと思います。まずはこれまでの学習を振り返りますしょう」 T:「まずは、8/29 のハロハロ作りからです」 C:「ハロハロ作りが楽しかった、また食べたい」 C:「いろいろな材料を使っている」 C:「ハロハロは甘かった」 C:「日本のかき氷やみつ豆がフィリピンに伝ってハロハロになった」 C:「混ぜすぎると甘すぎて美味しくない」 T:「ノブレッタさんから教えてもらったことを覚えていますか？」 C:「マノっていう、あいさつ」 C:「お祭りでの食事が豪華なところは似てる」 C:「クリスマスの準備は、9月から始まる」 C:「7歳、18歳、21歳でお祝いする。七五三とか成人式と似ている」 C:「フィリピンの民族衣装は、パイナップルの葉っぱからできている」 C:「みんなで食事を分かち合う」	・3～4人グループに分かれておく ・これまでの活動を想起できるよう、活動した時の写真などを掲示する	・本単元での学習で使用した資料や写真 
			「ただいま」などのあいさつ  外から帰ってきたり、どこかで目上の人に出会ったりしたら、相手の手を自分の、おでこにあてる (マノ)

T:「このように、日本とフィリピンの似ているところや違いを教えてくださいました。みなさんはどう感じましたか？」

C:「結構似てる」

C:「水が安い」

C:「島がめっちゃ多い」

T:「この前、ノブレッタさんが来てくれた時に、水のことをお聞きしましたね。またノブレッタさんには、上越のよさを紹介しました。ノブレッタさん上越のどんなところを好きと言っていたか覚えていますか？」

C:「優しさ。あと綺麗、静かって言ってた」

C:「日本語が上手く話せなくても分かってくれようとする」

T:「日本のどんなところに驚いたと言っていましたか？」

C:「トイレが綺麗」

C:「(アメリカ人 ALT) ジェニファー先生もそうだって言ってた」

ALT:「そうそう公衆トイレ、スキー場、山も」

T:「では反対に日本で困っていることはどんなことが覚えていますか？」

C:「コンビニでいろいろ聞かれるって…支払い？お箸は？温めますか？」

C:「お金の価値」

C:「水の値段が、フィリピンは 25 円、日本は 120 円くらい、アメリカは 400 円」

T:「みなさんからの質問にあった、フィリピンの米不足について。日本と同じく主食は米だから、フィリピンでも米不足があるんじゃないかと尋ねてみたところ…」

C:「米不足はあるって言ってた」

T:「そうでしたね。なぜかという、台風も来るし、気候に左右されるとのことなので、日本と変わらないということでした。だけど、主食なので、高くても米を買うということでした。ジェニファー先生はお米が高かったらどうですか？」

ALT:「I'll buy bread. If bread is expensive, I'll buy pasta or oatmeal.」

C:「お米じゃなくても大丈夫なんだね」

T:「そして・前回紹介した JOIN の活動も覚えていますか？どんな人たち人たちでしたか？」

C:「サポートしてくれる人」

C:「病院とかで通訳してくれる」

C:「料理教室とかも」

T:「外国人の人だけではなく、日本人の私たちも参加して交流できるようなイベントも企

上越で困っていること

- ・言語の問題
- ・コンビニやレストランなどで、いろいろなことを聞かれるが何を聞かれているのか分からない

例)「ポイントカードありますか」、「あたためますか」、「お箸は何語いりますか」など

- ・自宅への突然の訪問客
- ・お金の価値が違うので、何が安いのか高いのか判断がつかないことがある

例) 飲料水

日本 120 円、フィリピン 25 円、アメリカ 400 円

上越に住む外国人をサポートする 上越国際交流協会 JOIN

- ・日本語教室
- ・学校での日本語支援
- ・日本人向けの語学教室
- ・外国人相談窓口
- ・国際結婚勉強会
- ・料理交流会
- ・「英語でしゃべり場」
- ・小中学生向けの異文化理解交流イベント
- ・市内のイベントへの参加援助 (お花見、夏祭りへの参加)
- ・スピーチテスト
- ・医療通訳
- ・「わたしの健康カード」の作成案内
- ・出張講座など



上越市に住む外国人 約2,340人(2025年現在)

国籍・地域	人数 (概数)	備考
フィリピン	約970人	最も多い国籍。家族単位での定住が多く、地域行事にも積極的に参加。
中国	約420人	技能実習生や留学生、永住者など多様な背景。
ベトナム	約310人	技能実習生が中心。近年増加傾向。
韓国	約180人	長期滞在者や国際結婚による定住者が多い。
ブラジル	約140人	日系人を中心に、工場勤務などで定住。
アメリカ	約80人	教育関係者やALTなどが中心。
その他 (ネパール、インドネシア、タイなど)	約240人	多様な国籍が混在。宗教や文化も多様性に富む。

	画してくれています。前回の感想には、JOIN の活動に対してすごく興味をもっている人もいましたよね。さまざまな面から外国人の方を支えているということでした。では、上越に住む外国人はどのくらいいるか覚えていますか？」 C:「フィリピンの人が一番多い、970 人くらい」 C:「全部で 2370 人、タイとインドネシアと…」 T:「OK, Let's check! Thailand, India, Indonesia, Nepal, Philippines, America, China, Korea, Brazil, Vietnam」 T:「このように、いろいろな国の人達と共に、今の上越市があります。その一人がノブレッタさんやジェニファー先生ということになります。今日は、「同じまちでいろいろな国の人が共に生きるために大切なことは何だろう」ということを考えていきます。まずはこれまで3回の授業を振り返り、今みなさんが考えていることをシートに書いてもらいます」	・国旗を示しながら、児童と一緒に英語で国名を確認する	
展開 (20 分)	② 単元全体の振り返り (個人→小グループ交流) T:「この国際理解の学習を通して、『楽しかったこと』『驚いたこと』『印象に残ったこと』を各自ワークシートに記入し、小グループでお互いの内容を紹介し合ひましょう」 【ワークシート 児童の記述より】 C:「ハロハロ作りが楽しかったです。フィリピンの文化なども知れたし、学びながら楽しくできました。驚いたことはフィリピンもお米の文化があるということです。印象に残ったことは、水の値段が全然違うということです。」 C:「ノブレッタさんが日本はキレイ、日本語をもっと言えるようになりたいと言ってくれてうれしかったです。」 C:「ノブレッタさんが初めて会うのに、真剣に話してくれることにびっくり！ノブレッタさんにおすすめの場所を英語で話せたのが楽しかった。」 C:「ハロハロ作りで、これとこれを混ぜると美味しいかなとか、これは好きだからいっぱい入れようとするのがすごく楽しかったです。材料も私が好きなものばかりで、フィリピンと合うかと思いました。」 ③ 上越交流協会 JOIN の日本語教師の言葉を紹介する T:「前回紹介した JOIN で日本語を教える佐藤さんが、サポートをする上で大切にしていることを紹介します」 ・ノブレッタさん親子のことを知る JOIN 佐藤さんの言葉を紹介する ◆外国から来る子どもたち 「親の都合で来日するため、母国の親せきや友達とも別れてきたなどとショックを抱えている子が多くいます。日本の学校では何を言って	・個人でワークシートに記入する時間を設け、小グループ内で紹介し合う ・インタビュー内容を抜粋して掲示する ◆在住外国人の方をサポートする上で、心掛けていること ◆共に生活していく上で、JOIN が大切だと考えていることなど	・教師による事前インタビュー(2025年9月18日実施)

	いるか分からない、それでも笑顔で乗り越えている子が多いです。ポールさんもそうです。」 ◆外国から来る人々をサポートする上で大切にしていること 「言葉(日本語)が分からないだけなのに、何もできないと感じたり、劣等感を抱いてしまうことがあります。最初はとにかく「すごいね」と、ほめてはげます。その子が日本で自信を持って楽しく感じられるように、がんばれるように心がけています。」 ◆JOINの願い 「私たちは、日本語を教えるだけでなく、外国人の方達が地域で活躍してもらうことを願っています。世界の料理を紹介するイベントで、自分の国の料理を日本人に教えてもらいます。自分の国の文化を伝えられるってすごく嬉しいと思います。」 ◆大切なこと 「外国の人と共に暮らしていく上で、相互理解(お互いのことを知ること、理解し合うこと)は欠かせません。出会うこと、知ることで見方が広がります。」	
	同じまちで共に生きるために大切なことは何だろう？	
	④ 共に生きるために大切なことを考える T:「これまでの学習を通して、学んだことや考えたことを基に、『自分にできること』『大切にしたいこと』を、まずグループで話し合しましょう。それから各自ワークシートに、自分が考えたことや気づいたことを書きましよう。 【児童の発言、ワークシートの記述より】 C:「笑顔や言葉、相手の事を思いやる気持ち」が大切だと思います」 C:「違いがあっても、尊重して分かち合うことだと思いました。」 C:「助け合いや協力をすること。ユニバーサルデザイン。日本語と英語で書く。」 C:「お互いにコミュニケーション、言葉を教え合う、外国人をほめてモチベーションアップ、自分からたくさん話しかける」	・3～4人のグループで意見を出し合い、共通点や面白いアイデアを共有できるようにする。 ・各グループにホワイトボードを配り、必要に応じて出たアイデアをメモできるようにしておく ・ワークシートには、これまでに学習した簡単な英語で言ったり、書いたりする欄も設ける。自分が言えそうな文の一つ選んで書く。 ・I want to ～.(私は～したいです) ・We can ～.(私達は～できます) ・Let's ～.(～しましょう)
まとめ (10分)	⑤ 発表・まとめ ・ワークシートに書いた内容を発表してもらう C:「外国人が日本語を覚えるだけでなく、日本人が英語を覚えるのもいいと思います。」 C:「差別しない。お互いのことを知って仲良くなる。」 C:「いろいろな文化を知ろうと思う心、とにかくほめること、町を大切に、思いやる心、共に自分たちの国の事を知ること」 ・教師がまとめる T:「ハロハロの意味は『まぜこぜ』ということですよ。単なる食べ物ではなく、そこにはい	・代表者に発表してもらう (各チームのホワイトボードをモニターに映し出すとよい) 

	ろんなものを混ぜて良さを引き出すという意味も含まれています。それは、さまざまな国の出身の人々が共に暮らす、『多文化共生』の良さでもあります。私たちの生活も、さまざまな人々と、互いの良さを引き出しながら、よりよい文化やアイデアが生まれ、もっと面白いまち、暮らしになっていけばいいなと思っています」	・この時間で終わることではなく、今後も考えていくべき大切なことであることを児童に伝える ・最初に作ったハロハロが、「多文化共生」そのものともいえることを伝えたい	
--	--	--	--

9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法)

【知識・技能】

単元の学習内容を整理し、英語や日本語で表現している。(グループ活動の観察)

【思考・判断・表現】

地域で共に暮らす上で大切なことや自分にできることを考え、交流を通して伝えている。(発言、記述)

【主体的に学習に取り組む態度】

他者の考えに関心を持ち、尊重しながら自分の考えを表現しようとしている。(発言、記述)

10. 学習方法および外部との連携

【学習方法】

本単元では、児童が主体的・協働的に学ぶことを重視し、以下の方法を取り入れている。

- ① **体験型学習**: フィリピンのデザート「ハロハロ」の調理体験を通して、食文化を五感で理解する。作業中に既習の英語表現(例: Mix it! I like it.)を使用し、言語活動と結び付ける。
- ② **交流型学習**: フィリピン出身の保護者をゲストとして招き、文化紹介や簡単な英語でのやり取りを行う。「楽しかったこと」「印象に残ったこと」などをペアやグループで共有する時間を設けることで、考えを深める。
- ③ **振り返り・表現型学習**: ワークシートを用いて「自分にできること」「共に暮らす上で大切なこと」を整理する。グループで話し合った内容や各自で考えたことをクラス全体に発表し、学びを可視化・定着させる。
- ④ **言語活動の統合**: 教科書の既習表現を活用し、体験や交流を英語で表現する活動を組み込む。英語が苦手な児童も日本語を交えて安心して発表できる工夫を行う。

【外部との連携】

・**フィリピン出身保護者**: ゲストティーチャーとして来校していただき、文化紹介や生活の違いの紹介を通して、児童が外国人を身近に感じられるようにする。

・**上越交流協会 JOIN**: 在住外国人支援の現状や具体的な活動を紹介。教師が事前にインタビューした内容を紹介することで、地域の多文化共生の取り組みを具体的に理解する。

・**学校内の多文化共生の実例**: 中国にルーツを持つ児童やその他外国籍児童の事例を取り上げ、異文化理解の具体例として学習に活用する。(本人や家族の了承を得て)

11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み

① 地域の人との出会い: フィリピン出身の保護者・ノブレッタさん

事前の打ち合わせを通して、共通する遊びや文化の写真資料を準備いただき、多面的な文化理解が可能となった。児童は、文化への興味だけでなく「タガログ語や英語で話してみたい」と主体的な学びの姿を見せた。

一方的に話を聞くだけではなく、自分たちのこれまでの総合学習や英語での学びを生かして、上越のおすめを紹介するなど、双方向の交流が生まれるように工夫した。

ノブレッタさんの「驚いたこと」「困っていること」を聞くことで、児童は当事者意識をもって地域での共生について考えるようになった。

② ALT の存在やバックグラウンドを活かす

ALT のジェニファー先生が、フィリピンにルーツをもつことを生かして、ハロハロの作り方を家族や仲間に見せるなど授業準備に協力してくれた。

ノブレッタさんとの授業では、英語での対談形式としたことで、「どんなことに驚いたか」「どんなことが大変か」という深い話を引き出すことができた。コンビニやトイレの違い、ペットボトルの水の比較など、身近な視点で多文化理解が進んだ。(日本・フィリピン・アメリカ)

③ 学級担任との連携

専科教員として、児童の実態は把握しにくい面がある。学級担任と相談を重ね、日頃の人間関係、発表形式、グループワークの組み合わせなど、多面的に配慮しながら授業づくりすることができた。

④ 上越交流協会 JOIN、日本語教師・佐藤さん、笹川さん

日本語教師の佐藤さんへインタビューを行い、外国人支援において大切にしている視点や、外国にルーツをもつ子どもが抱える心理的負担について深く学ぶことができた。地域のネットワークを通して、ノブレッタさん親子を多面的に見つめる視点が児童にも生まれ、当事者意識を育てることにつながった。

【自己評価】

12. 苦勞した点 ※学習活動が展開する中での苦勞や、そこで見えてきた問題点を記入して下さい。

ハロハロ作りを「楽しい体験」で終わらせないよう意識するあまり、当初の指導案では「多文化共生について知ること」で終わらずに、当事者意識をもってほしいという願いもあり、アクションプランまで計画していた。その結果、教師の思いが児童の実態と乖離し、学習の負担が大きくなりかねないという課題が浮き彫りになった。

13. 改善点

アドバイザーの先生から「まずは知ることを大切に」という助言を受け、児童の実態に寄り添った授業設計へ立ち返ることができた。児童の反応を想定しながら問いを練ることの大切さに気づき、担任と協働して授業を構想したことで、より無理のない学びの流れに改善することができた。

14. 成果が出た点

フィリピンにルーツをもつ ALT が媒介者となり、ノブレッタさんの経験を英語で引き出すことができ、表面的でないリアルな文化理解につながった。また JOIN の佐藤さんの具体的な語りを聞いたことで、地域の外国人の思いや現状を深く理解できた。その結果、児童は「やさしい日本語を使う」などの一般的な意見に留まらず、「自分たちも英語を学ぶ」、「仲良くする」、「困っていたら動きで伝える」など、自分自身が行動する視点をもつようになった。

15. 学びの軌跡(児童生徒の反応・感想文・作文・ノートなど)

本単元は、①ハロハロ作り、②文化紹介と共通点・相違点の発見、③ノブレッタさんとの交流、JOIN の活動紹介、④「同じまちで共に生きるために大切なこと」を考える、という流れで授業を行った。

児童は、ノブレッタさんや JOIN 佐藤さんの体験や語りに触れることで、考えが深まり、心が動かされていった。「JOINの活動で、助けられている外国人がたくさんいる。外国の人と通じ合っていくのが大切だと思った」や「フィリピンに行ってみよう。JOINの活動、自分もできたらいいな。いざという時に言葉が伝わらないと大変だから助けたい」と JOIN の活動に賛同し、当事者意識を高めている児童もいる。教科書や教師の語りだけではなく、実際のモノ・ヒト・コトとの出会いが、児童の心を揺さぶり、深い思考につながっていく。

以下に、代表的な3名の児童の変容を示す。

(ア) 児童Iさんの振り返り

- ① 「私はココナッツとタピオカが苦手でした。逆にジャックフルーツとナタデココが美味しかったです。ココナッツは初めて食べました。入れすぎると混ざってあまりよくありませんでした」
- ② 「(フィリピンと日本)似ているところは、遊びが似ていること、主食がご飯、いただきますがある」
- ③ 「ノブレッタさんの話で、上越のすきなところや驚いたことの話が面白かったです。日本のコンビニやトイレがフィリピンに比べてすごくきれいなことに驚いた。私からすると、トイレはあまりきれいではない。日本と他の国は全然違うなと思った」
- ④ 「お互いを理解し合ったり、分かりあったりするのが大切だなと思いました。それと言葉がけもすごく大切だなと思いました。そうしたら外国から来た人達も安心すると思います」

Iさんにとっては、初めて食べる味への驚きや苦手さの実感から始まった学習だったが、ノブレッタさんとの交流を通じて、興味深く話を聞いたり、自分の実感と比較したりするようになっていく。そして「外国から来た人達も安心する」という言葉から分かるように相手に寄り添うような思考が見えてくる。

(イ) 児童Mさんの振り返り

- ① 「ジャックフルーツが少し苦手だったけど、ノブレッタさんが甘く煮てくれたバナナがすごく美味しかったです。フィリピンの食べ物を一つ作れたし、食べられたので良かったです」
- ② 「日本と同じように、『ただいま』の文化がある」
- ③ 「ノブレッタさんに金谷山の紹介をしたら、ぜひ行ってみたいと言われたのでうれしかったです。そしてフィリピンにも米の文化があると知ってうれしかったです。これからはフィリピンのことを知りたいと思った。JOINの活動がすごいと思った」
- ④ 「私は外国の人と日本の人で、お互いを理解し合ったり、自分の国の文化を伝え合うことが大切だと思うし、お互い褒め合うことも大事だと思います。お互いを大切にすることもすごく大切だと思う」

中国にルーツがあるMさんは、最初から異文化への興味をもって学習に臨んでいたが、ノブレッタさんとの交流を通して、相手を知るだけでなく、自分のことも伝え合い、互いを尊重し合うことの大切さに気づいていることが分かる。

(ウ) 児童Cさんの振り返り

- ① 「ハロハロ美味しかった、甘かった」
- ② 「フィリピンにも米文化があることを初めて知った。日本と同じように米不足の問題があるのか聞いてみたい」
- ③ 「JOINに行ってみよう。「英語でしゃべり場」で、英語でいろいろな人と話してみたい。やっぱりびっくりしたことは水が25円ということです。なぜフィリピンの水は25円で、日本の水は120～150円なのか知りたいです」
- ④ 「外国人が日本語を覚えるだけじゃなくて、日本人が英語を覚えるのも良いと思う」

Cさんは、日頃から英語学習や外国文化への興味関心が高い児童である。米不足や水の値段など常に日本の文化と比較しながら思考していることが伺える。私たち日本人も英語を話すことで関わり合うことが大切だと考えて

いる。

本時(4/5時間目)で児童は、④「同じまちで共に生きるために大切にしたいこと」を考えた。どの子もノブレッタさん親子や JOIN の佐藤さんの語りに出てきた子など、具体的な相手を想像しながら考えたのではないかと思われる。他人ごとではない、自分事として考える授業ができたことを嬉しく感じている。授業を通して、子どもたちからは次のような考えが多く見られた。

(ア) 思いやり・優しさの大切さ

子どもたちは「笑顔や言葉で思いやりを伝えること」「相手のことを理解しようとする姿勢」などを大切にしたいと考えていた。また「お互いに優しくしていけば共に生きていける」「言葉が分からなくても分かり合おうとすることが大切」という意見も多く見られた。

(イ) 差別をしない・平等に接すること

「違いがあっても尊重して分かち合う」「外国から来た人も差別せず平等に生活できるようにしたい」など、差別をなくすことの重要性を挙げる声が複数あった。また、「不公平がないようにしたい」「外国の人も日本に来て良い思いをしてほしい」という意見も見られた。

(ウ) コミュニケーションの工夫

「自分からたくさん話しかける」「声をかけ合ったり助け合ったりする」「コミュニケーションが大切」という、相手との関わりを増やす意見が多かった。言葉の違いを越えて関わろうとする姿勢が表れていた。

(エ) 言語や文化を互いに学び合うこと

「言葉を教え合う」「文化を知り合う」「お互いの国を理解する」「外国語や英語を覚えるのも大切」という意見が多数あった。文化を伝え合うこと、知ろうとする姿勢を大切にしたいという声が目立った。

(オ) 誰にとっても使いやすい環境づくり(ユニバーサルデザイン)

「トイレなどにユニバーサルデザインがあるとよい」「日本語と英語の表記があると助けになる」「スーパーで困っている外国の人がいたら動きで伝える」という具体的な提案もあった。

(カ) 地域への願い

「言語が違って、高田を大切にしてほしい」という、地域への思いを込めた意見もあった。

16. 授業者による自由記述

「ハロハロ」には「まぜこぜ」という意味がある。私は、多様な文化が混ざり合うことの楽しさや価値に気づかせたいという思いから、本単元を構想した。1時間目のハロハロ作りでは、どの児童も意欲的に取り組み、活動を存分に楽しんでいた。感想には「いろいろなものを混ぜて美味しかった」「家でも作ってみた」という肯定的な声が多くあった一方で、「混ぜれば混ぜるほど美味しいと思ったが、違った」「入れすぎるとよくない」という内容も見られた。これらの気づきは、多文化共生を考える上で重要な視点であると感じた。文化を「ただ混ぜればよい」のではなく、互いの違いを尊重し、それぞれのよさを生かしながら共に生きることが重要である。児童の率直な感想は、その本質を示していると受け止めている。

活動後、味の好みはさまざまであったにもかかわらず、すべての児童が「ハロハロ作りが一番楽しかった」と話してくれる。異文化との出会いは、必ずしもすべてが心地よい経験とは限らず、驚きや戸惑いを伴うこともある。しかし、別の側面を知ることによって物事の見方は変わっていく。だからこそ、「まずは知ること」が大切である。本実践を通して、児童の姿や言葉から、その「知ること」の尊さを改めて実感した。今後の授業づくりにおいても、この視点を大切にしていきたいと考えている。またノブレッタさんや JOIN のスタッフの方々とお話しながら教材化していくという過程は教師である私にとっても大変価値ある経験となった。現場や当事者の「声」を聴くことの価値を実感している。

外国語の授業を通して、「英語」という言語を教えるだけではなく、英語を話す相手の文化や価値観を想像したり、受容したり、相互理解を深めたりしながら、コミュニケーションを図っていける児童の育成を目指して、これからも研鑽を深め、授業実践に取り組んでいきたいと思う。

【参考資料】

- ・公益財団法人 上越交流協会 JOIN のホームページ <https://www.join-web.net/>
- ・新聞記事(The post【社説】上越市の増える外国人市民数や、上越国際交流協会(JOIN)の先見性に見る first appeared on 新潟県内のニュース | 2025年5月13日:にいがた経済新聞)
- ・「上越の国際化を考える」、「創造行政」(上越市創造行政ニュースレターNo.44, July.2019)
- ・「新潟県在住の外国にルーツのある方の生活と意識に関する調査報告書」、公益財団法人新潟県国際交流協会・新潟市中央区社会福祉協議会(2023年6月)
- ・「帰国・外国人児童生徒の学校受入手引き(上越市版)、財団法人新潟県国際交流協会、2011年)
- ・佐藤睦子(2023)「散在地域に暮らす外国につながる親と子に寄り添って」、「子どもの日本語教育研究 第6号」、子どもの日本語教育研究会
- ・日本国際理解教育学会 編著(2022)『現代国際理解教育事典 改訂版』、明石書店

国際理解教育/開発教育 学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	永島 悠一	学校名	糸魚川市立糸魚川小学校 実施校(兼務校): 青海小学校
教科(科目)・領域	総合的な学習	対象学年(人数)	6年 1組(17名)
実践年月日もしくは期間(時数)	2025年11月中旬 ～ 12月9日(6時間)		

【実践概要】

1. 単元名(活動名): 私たちの祭り 世界の祭り					
2. 実践する教科・領域 総合的な学習の時間	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加		
4. 単元の目標(評価規準を意識して設定)					
【総合的な学習の時間】					
・世界の様々な祭や地域の祭りについて調べる活動を通して、普遍性に気づき、人々の祭りへの願いを知り、地元の祭りを大切にしたい思いを深める。(総合的な学習の時間)					
5. 単元の評価規準	①知識・技能	・世界と日本の地域の祭りについて理解している。			
	②思考・判断・表現	・世界と日本の地域の祭りを比較し、祭りで大切なことについて自分の考えを表現している。			
	③主体的に学習に取り組む態度	・世界と日本の地域の祭りに親しみをもち、前向きに学ぼうとしている。 ・世界と日本の地域の祭りを身近に感じ、地域の祭りを大切にしようとしている。			
6. 単元設定の理由・単元の意義					
【単元設定の理由あるいは単元の意義】					
本単元では、世界各地の祭りに込められた願いや意味を理解することを通して、多様な文化への関心を高め、他者を尊重する態度を育てることを目指す。あわせて、自分たちの地域に伝わる祭り「竹のからかい」を題材とし、世界の祭りと比較調査することを通して、普遍性、人々の祭りへの願いを知り、地元の祭りを大切にしたい思いを深める。これにより、「自分たちの文化を理解することから異文化を理解することへ」という学びの流れを大切にし、伝統や地域の人々とのつながりの大切さを見つめ直す機会にしたい。					
【児童／生徒観】					
本クラスの児童は、前向きで意欲的に学習に取り組み、自分の考えや思いを進んで伝える姿が多く見られる。一方で、異文化に対して距離を置くことがある。学校行事として正月行事「竹のからかい」を全校で体験しており、幼い頃から参加して深い思いを持つ児童もいるが、十分に祭りの意義や関心を持っていない児童もいる。地域の魅力については、「きれいなヒスイ」「自然豊か」と答える子もいるが、「何もない」と答える子もいる。 本単元では、国内外の地域の祭りの比較を通して、自分たちの地域の祭り「竹のからかい」の価値や意義に気づき、地元の祭りを大切にしたい思いを深めさせたい。					
【教材観】					
子ども達は毎年1月15日に行われる地元の子正月行事「竹のからかい」に参加している。地元の祭り開催前には、毎年竹のからかい保存会の方々の協力の下、「青海小 竹のからかい」を学校行事として行っている。縦割り班ごとにチームになり、手ぬぐいを頭に巻き、左義長の歌を歌い、長い竹を引き合う経験を積み重ねてきた。地元の大切にしたいという思いを深めるために、なぜ竹のからかいをずっと子どもたちのこれまでの経験を想起させて「祭り」の特徴に考えさせ、高学年以上の子たちは世界各地の多彩な祝祭を、記事と写真で立体的に紹介している。祝祭の起源を知り、祝祭に寄せる人々の情熱に思いをめぐらせることは、世界各地の文化を再発見し、共感することがで					

04

永島 悠一

糸魚川市立糸魚川小学校・6年・総合的な学習の時間

きる。

子どもたちは毎年1月15日に行われる地元の子正月行事「竹のからかい」に参加している。地域の保存会の方々の支援を受けながら、学校行事としても「青海小 竹のからかい」を実施しており、縦割り班でチームを組み、手ぬぐいを頭に巻き、左義長の歌を歌いながら長い竹を引き合う経験を積み重ねてきた。こうした経験を通して、子どもたちは地域の伝統行事を「自分たちの文化」として誇りに思い、大切にしたいという気持ちを育んできた。本単元では、これまでの「竹のからかい」に関する体験を想起させながら、「祭りとは何か」「人々はなぜ集まるのか」「何のために参加するのか」「どのような問題があるのか」といった問いを立て、家族や竹のからかい保存会の話から話を聞いて、人々の思いや願いを考えさせたり、問題（若年人口の流失、少子化、伝承者の高齢化など）に触れさせたりする。

国内外の地域の多彩な祝祭とも比較して、祭りの起源やそこに込められた人々の願い・情熱に思いをめぐらせる。国内外の地域の祭りを比較することで、文化は異なっても、人々が喜びや祈り、つながりを大切にするという普遍的な思いを地域で守り続けていることに気付かせたい。

【指導観】

本単元では、地元のお祭り「竹のからかい」と国内外の地域の祭りを探求・比較することを人々の祭りへの思いや願いの普遍性に気づき、地元愛を深めることをねらいとしている。指導に当たっては、以下の視点を重視する。

① 地域（LOCAL）の祭りにフォーカスした問題解決学習

・問題の追求（竹のからかいと国内外の祭り調べ）や地元の人との交流を通して、子どもたちが主体的に問題に気づき、追求し、解決に向けて思考を深めていく学習の流れを大事にしたい。

② 異文化理解

・海外の地域の祭りを知ることで、各地域の特色を活かした多彩な祝い方を知り、比較することで見えてくる共通点と相違点に気づき、国内外ともに大切にしている人々の願いは先祖代々大事に守り続けていることに気づかせるように支援する。社会の状況変化と共に祭りも変化していることにも気づかせたい。

7. 単元計画（全 6 時間）

時間 日時	ねらい	学習活動	資料など
1 11/18	【問題の発見と追究】 ・日本の祭りを知る。 ・世界の地域の祭りを知る。 ・祭りらしいものの特徴を考える。	・日本と世界の祭りを知る。 ・祭りの特徴を取り出す。 →子どもから出た祭りらしいもの（衣装、屋台、食べ物、道具、遊び、人混み、神輿）	・地球の歩き方「世界の祝祭」 ・ワークシート
2 11/25	【問題の追究】 ・竹のからかいについて、時期、願い、表現、問題について調べる。	竹のからかいについて調べる。 ＊（家族や竹のからかい保存会の方	・青海町教育委員会編(1992)「重要無形文化財 青海の竹のからかい」
3 12/2 ①	【問題の追究】 ・地域の祭り「竹のからかい」について調べてきたことを伝えあったり、竹のからかい保存会の青海小の長谷川先生から話を聞いたりして、「竹のからかい」の役割と人々の思いや願いを考える。	・地域の祭り「竹のからかい」について調べてわかったことを紹介しあう。 ・竹のからかい保存会の青海小長谷川先生にインタビューを行い、話を聞く。	・竹のからかい保存会の青海小長谷川先生のお話
4 12/2 ②	【問題の追究】 ・竹のからかいと似ている国内外の地域の祭りと似ている地域（願いが豊作豊漁、除災招福）の祭りを調べ、発表準備をする。	・地元の祭りと似ている（願いが豊作豊漁、除災招福）国内外の地域の祭りを調べる。 <u>国内の祭り</u> 御田植祭り（愛媛県今治市） 長崎ペーロン祭り（長崎県長崎市） <u>海外の祭り</u> シルベスタークロイゼ（スイス アッペンツェル） ロイクラトン（タイ チェンマイ）	・「世界の祭り」「日本の祭り」などの国内外の祭りの図鑑。

5 12/9 2 限	【問題の追究】 ・竹のからかいと似ている国内外の地域の祭り ・竹のからかいと似ている国内外の地域の祭りを調べ、祭りについて知る(地域、時期、起源、願い、特徴など)。	・地域の祭りと似ている国内外の地域の祭りを調べ、発表準備をする。	・「世界の祭り」「日本の祭り」などの国内外の祭りの図鑑。
6 (本時) 12/9 6 限	【まとめ・問題の解決】 ・地域の祭りと似ている国内外の地域の祭りの発表を聞いて比較し、それぞれの特色(ちがひ)や普遍性に気付き、人々の祭りへの願いを知り、地元の祭りを大切にしたい思いを深める。	・地域の祭りと似ている国内外の地域の祭りについて伝えあい、比較し、人々の願いに触れる。	・前時までに使用した資料や写真 ・子どもたちの発表スライド ・「新潟県の祭り」巻頭分

8. 本時の展開(概略)

本時のねらい: 地元の祭りと似ている国内外の地域の祭りの発表を聞いて、地元の祭りと比較して、共通点や相違点に整理し、地元の祭りを大切にしたい思いを深める。

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	① これまでの学習の振り返りをする T:「これまでの学習を振り返りましょう。1時間目に日本の祭りクイズと世界の国紹介を聞いて、「祭りらしいもの」をみんなで考えましたね。2時間目には、地域の祭り「竹のからかい」について「祭りらしいこと」に照らし合わせながら調べました。3時間目には、竹のからかい保存会の長谷川先生のお話を聞いて地域の祭りについて深く知りました。4、5時間目に竹のからかいと似ている国内外の祭りについて調べ、今日発表してもらいます。今日は、国内外の地域の祭り発表を聞いて、それぞれの祭りの特色や共通点を見つけましょう。」	・これまでの学習を想起できるように、学習してきた祭りの特徴や写真を掲示する。	・本単元での学習で使用した資料や写真

本時の目標: 国内外の地域の祭り発表を聞いて、それぞれの祭りの特色や共通点を見つけよう!

展開 (35分)	② 地元の祭りと似ている国内外の祭りについてグループで発表をする。 T:「各班で調べてきた祭りについて発表しましょう。それぞれの祭りを比較しながら、似ていることや違っていることを考えながら聞き、気づいたことをワークシートに書きましょう。」 ・日本と世界の地域の祭り班ごとに調べてきた祭りについて発表する。(4人班 1人3分程度) 主な視点:「地域、願い、時期、表現、どのように祝うのか、自分たちが考えたこと」 【児童が発表する祭り】 ・1 班 御田植祭 開催地:愛媛県今治市 願い:豊作祈願、除災招福 歴史、開催時期:1346 年～、5 月 5 日 特色:稲の精霊と一人相撲をとり、精霊が勝つと豊作になる。	・祭りのスライド(写真)を示しながら、まとめてきた祭りの特徴と自分たちが考えたことを発表する。 ・ジグソー学習の体系で発表を行う。 <table><tr><td>シルベスター クロイゼ</td><td>御田植祭り</td></tr><tr><td>ロイクラトン</td><td>ペーロン祭り</td></tr></table>  御田植祭 in 愛媛県今治市	シルベスター クロイゼ	御田植祭り	ロイクラトン	ペーロン祭り	・地球の歩き方「世界の祝祭」 ・祭りの写真 ・祭り調べワークシート ・各班のプレゼンスライド
シルベスター クロイゼ	御田植祭り						
ロイクラトン	ペーロン祭り						

・2 班 ペーロン祭り 開催地:長崎県長崎市 願い:除災、豊漁、海上安全 歴史、開催時期:1655 年～、5 月 特色:各地から人が集まりペーロンというボートを使って競争する。 ・3 班 シルベスタークロイゼ 開催地:スイス アッペンツェル 願い:除災招福 歴史、開催時期:1633 年～、12/31～1/13 特色:仮装した人たちが家々を回って歌や鈴の音で新年を祝う。 ・4 班 ロイクラトン 開催地:タイ チェンマイ 願い:豊作感謝、水の女神に感謝 歴史、開催時期:1300 年～、10 月～11 月 特色:満月の夜に空にランタンを打ち上げる。川に灯籠を流す。 T:「4 つの祭りを比較して、「考えたこと」「共通すること」「違っていること(各地の様々な形・特色)」を各自ワークシートに記入しましょう。」 T:「それぞれの祭りを比較して、違うことは何でしょう」(特色・違い) C:「祝い方が違った。相撲やレースなど争うものが多いこと。竹のからかいに似ているなあ」 C:「服装が違う」 C:「クリスマスのようなイベントがある」 C:「その土地の良さを活かしている。」 C:「願いが各地違う」 C:「開催季節が違う」 T:「それぞれの祭りの特色は違うけど、共通していることは何でしょうか」(共通点) C:「長い歴史がある」 C:「どの祭りも悪い霊を追い払い、幸せを願っている。」 ③ まとめ T:「今日は国内外の祭りを比較しました。国内外祭りの祝い方は違うけど、願い似ていることに気づきましたね。そして、祭りは地域の文化を守ることに重要な役割をあることに気づきましたね。社会の状況の変化とともに存続の危機にある祭りもあります。祭りは地域の人たちの幸せや健康と一緒に願ったり、豊作豊漁を願う大事な願いが込められています。国内外関係なく、その思いは変わらず	 ペーロン祭り in 長崎県長崎市  シルベスタークロイゼ in スイス アッペンツェル  ロイクラトン in タイ チェンマイ ・ワークシートに 4 つの祭りの相違点と共通点を記入する。 ・地域の祭りの特色(ちがい)だけでなく、共通点も気付かせるために、追質問をする。 ・この時間で終わりではなく、今後も大切にしていってほしいことであることを子どもたちに伝える。 ・新潟県の祭りの巻頭文を紹介しながら、教師の思いを伝える
--	--

	人々の手によって守り続けてきました。 私達も、地域の人たちの願いを感じながら、その思いを大切に、お祭りに参加してほしいと思います。」	祭りは伝統文化を伝承する。 祭りは伝統技術を伝承する。 祭りは歴史を考えさせる。 祭りは先祖を回想させる。 祭りは地域の連帯を想起させる。 祭りは人々との出会いをつくる。 祭りは人に生きがいを与える。 祭りは人を明るくする。 祭りは人に感謝と敬いの心を育む。 祭りは人を大きく育てる。 そして 祭りは人生を豊かにする。	・資料「新潟県の祭り」巻頭文
まとめ (5分)	④ 振り返り	・ワークシートに本時で学んだことを記入する。	

9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法)		外国の祭りについて知ったことを、日本や糸魚川の祭りとの共通点や相違点を整理して、考えている。 (思考・判断・表現)(ワークシート、発言、観察)	
10. 学習方法および外部との連携	・ALT の活用 ・竹のからかい保存会の先生		
11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み	① 校内授業公開 ② 竹のからかい保存会の青海小学校長谷川先生から竹のからかいで行われることや願いの話を聞く。 第2時で事前に竹のからかいについて調べて、竹のからかい保存会所属の長谷川先生に質問したいことを集めまとめておいた。当日は、質問集の質問を中心に答えてもらう形式で長谷川先生から竹のからかいについて話をいただいた。さらに、アメリカ出身の ALT にも参加してもらい、外国人から見た日本の地域の祭りについて感じたことを話してもらった。自文化(長谷川先生、児童)と他文化(ALT)からの両視点から話を深めた。 ③ 伝統行事「竹のからかい」とは毎年 1 月 15 日に行われる糸魚川青海地区の小正月行事。 市内に 4 つある国の重要無形民俗文化財の一つであり、江戸時代から続いていると言われている。 1 月 7 日の子どもたちによる①「お松とり」から始まり、②竹伐り、③飾り竹、④竹のからかい、⑤飾り竹なおい、⑥賽の神の大火で幕を閉じる。特に 1 月 15 日の④「竹のからかい」は、顔に「隈取り(くまどり)」をした若衆が佐儀長(さぎのちょう)の歌を歌いながら竹の周りを回った後、2 本の青竹を組み合わせて東西に分かれ引き合い、祭りはクライマックスに達する。勝敗は竹が引かれたり、折れたり、割れたりした方が負け。勝った方は、豊年・豊漁になると言われている。祭りで使用した竹は青海の海岸で賽の神(さいのかみ)焼きをし、その年一年の無病息災と豊年・豊漁を祈願する。		

【自己評価】

12. 苦労した点 ※学習活動が展開する中での苦労や、そこで見えてきた問題点を記入して下さい。
学習のテーマとして「祭り」を扱うことの難しさを痛感した。祭りは多種多様であり、規模や形式も様々であり、単純比較するのは難しい。発達段階的にも、児童の祭りへの関心といえば屋台や出店などの食べ物に興味がいきやすい。児童と語り合っていて、竹のからかいに関して毎年参加している子とそうでないこの間にも祭りへの当事者意識の差は大きいと感じた。だからこそ、何のために竹のからかいを毎年開催しているのかという地域の人々の願いを知ることはとても重要だと感じた。どのように祭りの本質へ迫らせるか、そのアプローチに苦労した。また、担任ではなく外国語専科という週に2時間の持ち時間の中でどれだけ問題解決学習を仕組むべきか毎時間悩んだ。外国語科と総合的な学習の時間をどうにか組み合わせ単元を作れないかと模索したが表現したい内容と児童の英語の言語材料のギャップが大きいので、総合的な学習の時間に絞り、問題解決学習に取り組んだ。 第4時で児童が発表する祭りを選ぶ際に、竹のからかいと似ている国内外の祭りを調べさせた。似ている視点を「豊作豊漁」とだけ共有させてしまったため、タイのロイクラトンといった地域ではなく国内各地で広く行われている祭りを選んでしまっていた。祭りを調べる前にしっかりと似ていることの視点を児童と共有すればよかったと反省している。そのため、本時で祭りを比較するのに苦戦している児童が何人かいた。国家的祭りと地域的祭りを比較しては地域社会としての視点へ迫りにくくなってしまった反省している。 結果的に総合的な学習の時間の問題解決学習としては行えたものの、異文化理解の側面は達成できたが、本単元における国際理解教育としてのポイントを見いだせずに終わってしまった。ここからどう国際理解教育へ繋げるかが課題である。

13. 改善点

どこに国際理解教育としてのポイントを置くのが改善点の核となる。以下に2つ改善点を示す。

・1つ目は、調べた祭りに参加した子どもとオンラインで繋いで、声を聞いてみるのも面白そうである。祭りの持つ高揚感や一体感を聞いて、「祭りって楽しい！」と肌で感じることで地域の祭りを「祭りって楽しい！守っていきたい！」という意識につながり、地域社会へ視点が行き、持続可能な地域社会や祭りへ深掘りする。

・2つ目は、チーム一員として本単元に尽力してくれた ALT の先生「世界中に祭りはあるので、共通のトピックだと思う。祭りを通してもしくは祭りについて、英語でコミュニケーションを取ることもできる」の声から、外国語科にも繋げられる可能性を見つけることができた。例えば、オンラインで ALT の家族や友人に糸魚川の祭りを紹介し、逆にその地域の祭りについて紹介してもらうのもよいと思う。

14. 成果が出た点

本単元を通して、自文化(竹のからかい)について追及し、他文化(国内外の地元の祭り)と比較して異文化を理解し、祭りのもつ普遍性に気づくことができた。国内外の祭りを調べる時には、「稲の神様と相撲して豊作を願うの?」「ボートレースをして豊漁を願うんだ。港の町長崎らしくて面白い」などの声が聞かれ、地域の特色を活かして祭りを盛り上げていることに興味津々であった。

15. 学びの軌跡(児童生徒の反応・感想文・作文・ノートなど)

○児童の振り返り(4時 竹のからかい保存会の先生のお話を聞いて)

・左義長の歌の意味が分かりました。2本の竹をクロスさせるのは蝶の形にすることがわかりました。300 年前から続いているのを知ってびっくりしました。

・青海小の竹のからかいしか自分はしたことがなかったけど、長谷川先生のお話を聞いて実際の竹のからかいに行ってみたくなりました。

→竹のからかい保存会の先生からの話を聞いて、今まで何となくやっていたこと(左義長、竹をなぜ使うのかなど)の意義を知り、竹のからかいへの理解を深められた。竹のからかい開催地域外に住む児童も実際の竹のからかいに参加したい意欲を高めていた。

○児童の振り返り(本時)

・伝統的な祭りはすべて悪いものを追い払い、豊作などの良いことを願うことが多いことがわかりました。竹のからかいもそういうものだと言うことがわかりました。

・他の国も悪いものを追い払い、良いことを願うことがわかりました。もっとたくさんの祭りを調べてみたいと思いました。

・元々、私は地域の祭りに詳しくありませんでしたが、この授業で他の県や外国の祭りのことも詳しく知ることができてよかったです。また、他の祭りと自分たちが調べた祭りの違うところ、同じところ、どの祭りも何かを願って開催されていることを知ることができてよかったです。

・大体の祭りにはたくさんの願いが込められていることがわかった。たくさんの人が参加する。みんなが楽しそうにやっていてすごい。祭りを生きがいとしてる人もいる。歴史も深いことがわかった。

・祭りは人生を豊かにすることや伝統文化を継承することがわかった。

・色々な祭りでも願いはだいたい同じだということが分かった。そして、他にもいろいろな国の祭りを調べてみたいと思いました。

・祭りは除災招福で厄払いをして、豊作豊漁で幸せを願う大事な行事だとわかりました。

→国内外の祭りのことを知り、比較することを通して、祭りの普遍性に気づくことができた。祭りの持つ多様性に興味を示し、もっといろんな祭りを知りたいという記述が多くみられた。どの祭りも 100 年以上もの長い間、地域で伝統を守り続けてきたその思いの深さに触れられた。そして、祭りが地域の人々の幸福を願う重要な行事であることに気づくことができた。この思いを胸に 2026 年 1 月 15 日の竹のからかいに参加することを願う。

16. 授業者による自由記述

外国語専科になって 5 年になる。私が 1 番大事にしてきた願いは、外国語を通して異文化理解に触れ、ふるさと糸魚川への郷土愛を深めることである。国際交流を通して、糸魚川の町の魅力を国内外に発信してきた。その中で「他地域の人たちに糸魚川の魅力を知ってもらい。異文化を知るだけでいいのか」と自問自答してきた。いわば表面的に地域の魅力を伝えて終わっていたのかもしれない。「知る」のその先にある何かを探究したいと葛藤していた。さらに外国語科に国際理解のポイントをどう組み込めるか悩みに悩んだ。

今回久しぶりに専科の立場でありながら、地域の祭りをテーマに総合的な学習の時間 問題解決学習の単元デザイン作りに挑戦した。私自身、祭りについてのそこまで詳しくなかった。単元をデザインするにあたり、ありとあらゆる

る祝祭を調べた。各国、各都道府県、印象的な祭りがたくさんあり、世界一周祭り旅行をして自分の肌で感じてきたいと思ったくらいだ。

最初は竹のからかいについてあまり関心を示さなかったが、本単元を進めていく中で子どもたちが祭りを見る視点(歴史、開催地域、願い、祝い方)を学ぶことで、各祭りの楽しさや多様性に興味を示すようになった。国内外の祭りの比較を通して、地域の祭りの本質に迫り、地域への愛を深めていく姿が印象的であった。今回の学習で気づいた「普遍性」を胸にこれから出会う人々と心を通わせ、世界への視野を広げつつも、地域を誇りにして、持続可能な地域社会の担い手として歩んで行ってほしいと願う。これからも国際理解教育、開発教育、異文化理解のエッセンスを含んだ授業づくりに努める。

【参考資料】

- ・ 青海町教育委員会編(1992)「重要無形文化財 青海の竹のからかい」
- ・ 地球の歩き方編集室(2021)
「W11 世界の祝祭 -歴史と文化に彩られた世界のお祭り&祝日を旅の雑学とともに解説(地球の歩き方 W)」
- ・ 地球の歩き方「世界のグルメ図鑑」
- ・ 小林 敏行(1978)「新潟の祭り」新潟日報事業社
- ・ 竹永 絵里(2017)「世界のお祭り」
- ・ 芳賀 日出男(2006)「世界の祭り大図鑑」
- ・ 芳賀 日出男(2008)「日本の祭り事典」
- ・ 松尾 恒一(2015)「日本の祭り大図鑑」ミネルヴァ書房
- ・ 柏原 順太(2016)「日本と世界の祭り」小学館
- ・ ロブ・ロワーズ(2019)「世界一おもしろいお祭りの本」
- ・ 神崎 宣武(2016)「47 都道府県ビジュアル文化百科 伝統行事」

【資料】

- ・ 本時(6時)の板書



- ・ 本時(6時) ワークシート

Goal 国内外の地域の祭り発表を聞いて、それぞれの祭りの特色や共通点を見つけよう！

Name ()

祭りの名前	国、地域名	いつから、開催時期	願い	特色(祝い方、衣装、形など)
竹のからかい	日本 新潟県糸魚川市青海地区	江戸時代 300年 前 毎年1月15日	・豊作豊漁 ・家内安全 ・除災招福	・若衆が左儀の長を歌う ・東町と西町に分かれて竹を引き合い。 ・顔に隈取を塗る

○4つの祭りを比較して、「共通すること」「違っていること」を記入しましょう。

違うこと(各地の様々な形、特色)	共通点

国際理解教育/開発教育 学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	早川 千恵子	学校名	長野市立 浅川小学校
教科(科目)・領域	生活(8)・道徳(1)・ 学級活動(1)	対象学年(人数)	1年2組(23名)
実践年月日もしくは期間(時数)	2025年9月～12月(10時間) 11月12日(水)3校時		

【実践概要】

1. 単元名(活動名): 大豆を通じて みんなとつながる 世界とつながる					
2. 実践する教科・領域	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 単元の目標(評価規準を意識して設定)					
身近な食べ物である大豆から、世界とのつながりを知り、世界と身近な生活とのかかわりについて自分たちが感じたことや考えを伝え合い、互いの考えを認め合う。					
5. 単元の評価規準	①知識・技能	自分たちの生活に身近な大豆が世界とどのようにつながっているかを知る。 自分の考えたことをグループや大豆サミットを通じて、意見交換している。			
	②思考・判断・表現	世界で暮らす人と大豆に関わる出会いから、世界にいろいろな国があり、日本との関係性に気づく。 学びの過程での気づきを自分の言葉で表現している。			
	③主体的に学習に取り組む態度	市内外の学校との交流や世界の人と関わる学びを楽しんでいる。 大豆を通じた世界の人やものとの出会いから、自分たちにできそうなことを考えようとしている。			
6. 単元設定の理由・単元の意義					
【単元設定の理由あるいは単元の意義】					
生活科の授業で栽培している「大豆」。同じく大豆を育てている長野市内小学校5校・新潟県・千葉県・富山県の学校や地域サポーターがオンラインで集う「友情の大豆サミット」を開催し、交流活動を行ってきた。その中で大豆輸出大国であるパラグアイについて紹介し、国内だけでなく、パラグアイの人ともつながる活動に取り組んできた。 大豆は私たちの食生活で欠かせない食品だが、1学期の給食センターからの食育クイズで大豆の国内自給率がわずかであることを知り、大豆がどこからやってきているのかへの関心が高まると同時に、私たちの食べ物が世界の国から届いていることや身の回りの食べ物と世界のつながりについて学ぶ第一歩となった。 このような学びを展開している子どもたちに、大豆サミットでの学びを通じて、身近なものが世界とつながっていることについて考える機会になることを願い、本単元を設定した。					
【児童／生徒観】					
本校1年生は学年合同で朝の活動や歌、授業では体育・生活・音楽などを実施している。生活科の栽培活動の一つに大豆があり、世界で大豆輸出上位国であるパラグアイで暮らす人との交流から、大豆を通じてパラグアイに興味をもっている。 また、昨年度パラグアイと交流していた2年生から教えてもらったパラグアイ「オラの歌」を毎朝歌っており、人とつながることをとても楽しみにしている。 栄養教諭との食育指導から食に関心をもっている子どもが多く、給食や食事によく見かける大豆などの食べ物がどこから届いているのか知りたいと感じている。 いろいろな学校の子どもたちと「大豆」に関わる内容で交流している「大豆サミット」では、出会った仲間とともに学ぶことを楽しみにしている。					

【教材観】

大豆の栽培を通して出会った仲間との「友情の大豆サミット」を通して、自分の思いを伝えることや仲間の思いを知る場となっている。

大豆という身近な食べ物の国内自給率から、他の食品についても知り、世界とのつながりを考える機会となる。同時に、給食用に選別した大豆を市内の小中学校で食べてもらう活動を通して、食べ物と世界のつながりを他校への発信や他校や外部講師との連携を体験する機会となり、自分たちにできることの第一歩として感じられるだろう。

日系の移民が多く暮らすパラグアイには大豆加工品がたくさんあるということをパラグアイで暮らす子どもに教えてもらったことで、パラグアイへの親しみを感している。

生活科での大豆栽培や給食での選別など身近な大豆と関わる活動から、自分たちにできることを見える化し、さらにできそうなことを自分たちで見つけていく手がかりとする。

パラグアイ大豆農家の日系二世大西ホルヘさんは、日本とのつながりを大切に思い、わずか1%だけ非遺伝子組み換えではない大豆を栽培している理由を知り、世界と日本のつながりの深さを実感する。

本時では、大豆が世界の国とつながっていることから、栽培や給食での選別など身近な大豆との関わりを通して、今まで取り組んできた世界とつながる学習活動について、子どもたち自ら伝えたい言葉や内容を話し合うことで、取り組みを振り返る機会となるだろう。

【指導観】

授業を展開していく上で、子どもたちが世界とつながる出会いの中で感じたことやつぶやきなどを引き出ししながら、子どもたちの考えや思いを結びつけることを授業者として心がけていく。

他校との交流や栄養教諭・メディアコーディネータなど外部との連携を取り入れていくことで、子どもたちの活動が広がり、深まっていくことにつながる。

大豆サミットでの交流活動や話し合い活動を通して、自分たちの身近な生活と世界とのつながりに着目していくことや、出会った人たちと思いを伝え合うことを重ね、自分も出会った人たちを大切に思う心を育てたいと願っている。本単元での子どもたちの学びを主体的に発信できる場の一つとして「大豆サミット」を活用し、世界に仲間（アミーゴ）が増えれば、きっとその仲間（アミーゴ）を大切に思い、世界のみんなが笑顔で安心して暮らせるだろうと強く願っている。

7. 単元計画(全10時間)全てオンライン配信予定

時間	ねらい	学習活動	資料など
1 特活 9/1 13:45 保護者 参観日	たべものはどこから(栄養教諭との授業) 身近な食べ物が世界とつながっていることを知ろう ※長野市立保科小2年生(8名)・千曲市立屋代小5年生(26名)との合同授業	交流しているパラグアイでも身近な食べ物であることを知り、自分たちの身の回りの食べ物がどこから来たのかを給食を通して考え、身近な食べ物が世界と繋がっていることを知る。 	Power Point 資料(※1) 国内自給率について(農林水産省令和5年度) 給食写真(長野市第四給食センター) 長野市第四給食センター小林梨恵栄養教諭
2 生活	パラグアイで暮らす三田村しゅんさん、大西ホルヘさんに聞いてみたいことを考え、伝え合おう  	大豆サミットで交流しているパラグアイ在住の二人に質問してみたいことを考える。 自分が伝えたいことや聞いてみたいことを共有する。 大豆サミットに参加している他校の児童と意見交換をしながら、自分の思いを伝えたり、サミットメンバーの意見を聞いたりする。	ホルヘさん VTR (2024JICA 教師海外研修パラグアイで撮影) しゅんさん VTR(イグアス日本語学校作成) Google スライド 友情の大豆サミット
3 生活	ホルヘさんやしゅんさんの回答を聞いて、さらに知りたいことややってみようことを考えよう	※お返事が届いたと仮定して質問したことや伝えたいことに対して、回答内容について知る。 回答を聞いて、つながることの楽しさを感じ、今後の学習について考える。(5・6時の内容以外にも、子どもたちの意見から展開を広げていく)	ホルヘさん・しゅんさんからのお返事

4 生活	大豆にかかわって、自分たちにできることを考えよう① ・大豆の選別に挑戦しよう(栄養教諭との合同授業)	給食の大豆を選別する活動を通して、自分たちの学びを長野市内の学校へ発信する。栄養教諭に選別する理由や方法について教わり、実際に選別する。	給食用大豆 選別基準について 長野市第四給食センター 小林梨恵栄養教諭
5 生活	大豆にかかわって、自分たちにできることを考えよう② ・給食を通じて、世界とつながる学習の様子を紹介しよう	自分たちの活動をどんなふうに紹介したいのかを考える。 給食でのメッセージカードにどんな内容を伝えたいのか相談する。	給食センター便り(長野市第四給食センター作成資料) 資料取り寄せ中
6 生活 本時	今までの大豆を通した活動をふりかえり、心に残ったことを伝え合おう ・友情の大豆を通して、どんな活動をしてきたのか振り返る。 ・グループで伝え合ったことをクラス全体で共有する	自分たちがこれまでに取り組んできた大豆の活動を、作成した給食センターだよりやパワーポイント資料等を活用し、これまでの学習をふりかえる。	給食センターへ集まった他校からの感想 大豆を使った給食の写真 作成した給食センターだより これまでの活動の資料
7・8 生活	心に残った活動を学年で共有し、発信しよう ・心に残った活動を学年内で共有しよう ・大豆でつながった人や取り組んだことを発表しよう ・発表練習をしよう	友情の大豆を通じてみんなとつながり、世界とつながる学びの過程をふりかえり、大豆サミットで発信する。 発信するための内容や出番などを確認する。	写真資料(選別の様子・給食センター便り作成時など) ホルヘさんしゅんさんの写真 タブレット
9～	※子どもたちのやってみたいことを展開していく		

8. 本時の展開(概略)			
本時のねらい: 友情の大豆を通じてたくさんの人や世界とのつながりを経験した子どもたちが、これまでに活動を振り返る活動を通して、自分が心に残っていることを伝え合う。			
過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (8分)	1 本時の活動について確認する。 T「昨日の給食でチリコンカンが出たね。どんな気持ちだったかな。」 S「自分たちが頑張って分けた大豆が給食で出たからうれしい。」 S「食べた人が喜んでくれてうれしかった。」 T「他の学校からもメッセージが届いたよ。」 T「大豆について、いろいろなことをやってきたね。この大豆を覚えているかな？」 S「ホルヘさんの大豆だ。」 T「大豆でどんなことをしてきたっけ？」 S「サミットをした、いろんな学校と仲良くなった、大豆をプレゼントした、大豆を植えたけど育たなかった、給食の大豆を選別した、など」 T「大豆を通してみんながこれまでに取り組んできたことを今日はふりかえり、後でみんなが心に残っていることを伝え合ってもらおうと思います。」	・前日のチリコンカンについて想起する。 ・他校の感想を伝える。 ・友情の大豆からどんなことをしてきたかを想起する。 ・振り返った後、心に残ったことを話してもらうから思い出そうね。 ・今までに大豆にかかわって活動したことを子どもたちから吸い上げ、板書する。	チリコンカン写真 友情の大豆 これまでのサミットの掲示物 パワーポイント資料 書画カメラ プロジェクター
	本時のねらい: 今までの大豆を通した活動をふりかえり、心に残っていること伝え合おう。		
展開 (12分)	2 今までに学習した内容をふりかえる。 T「友情の大豆は、どこからやってきたのかな。」 S「パラグアイ、ホルヘさんがくれた。」	・授業資料を掲示し、今までの活動を、思い起こせるようにする。 ・パラグアイホルヘさん・しゅんさんとの交流記録	今までの授業を想起できるパワーポイント資料 掲示物

	T「ホルヘさんは日本のことを大切に思ってくれていたんだよね。」 S「しゅんさんがパラグアイでも日本と同じように大豆を育ててしょうゆや豆腐にして食べていたって教えてくれた。」 T「その大豆をみんなはどうしたんだっけ？」 S「植えてみた。けど育たなかった。」 S「他の学校のお友だちにプレゼントした。」 T「その学校の人々と大豆サミットが始まったんだね。大豆サミットをやってみて、どんなことを思った？」 S「いろんな学校の人と話せるのが楽しかった、他の学校では大豆が育っていた、千葉とか遠くの学校と出会った、など」 T「給食の小林先生とも大豆の勉強をしたね。」 S「日本ではちょっとしか大豆が作られていなかった。」 T「そこで自分たちでできることの一つとして、給食の大豆を選別したね。」 S「すごくおいしかった、他の学校の人にも食べてもらえてうれしかった。」	・友情の大豆について ホルヘさんから受け継いだしゅんさんが説明 この大豆について、どんなことをしてきたかな	給食センターだより 選別した大豆を食べた周りの感想
5 分	3 ふりかえりから、自分が心に残っていることをカードに入力する。 T「大豆の活動で自分の心に残ったことをカードに書いてみよう。」	記入用のカードを活用する。 個々で入力するようにする。 複数ある場合は、その中で1つ選んで記入するよう伝える。	記入カード
12 分	4 自分が心に残ったことをグループで伝え合う。 T「自分が心に残ったことをつたえてみよう。」 S「私は、大豆サミットで他の学校と話せたことが楽しかったです。」 S「ホルヘさんがパラグアイから日本のことを大切に思ってくれていたことが心に残っています。」 S「給食の大豆を分けて、みんなが喜んで食べてくれたことが嬉しかったです。」	グループの席に移動し、グループごとにカードに入力したことを話し合う。 話を聞く時は、話し手を見るように伝える。 うまく伝えられない様子が見られたら、入力したことを聞き出しながら話し合いに参加できるようにする。	グループごと
評価の観点：今までの大豆を通した活動を振り返り、心に残ったことを伝え合っていたか。			
まとめ (8 分)	5 本時をふりかえり、次時について確認する。 T「グループでどんなことを話し合ったかな。クラスのみんなにも伝えてくれる人はいますか。」 S「大豆サミットで発表するのが楽しみの人が多かった。」 S「来年は大豆を育ててみたい。」 S「サミットでも伝えたい。」 S「しゅんさんやホルヘさんにも聞いてもらいたい。」 T「今日みんなが話し合ったことを他の人にも伝えたいね。今度は1組さんとも伝え合ってみよう。」	・クラス全体に伝えたい思いやグループでの話し合いで気づいたことなどを共有する。 ・子どもたちの関心が高かった内容について、その理由など具体的な姿を紹介する。 ・似ている意見など子どもたちに問い返ししながら振り返る。 ・子どもたちの言葉をつなぎながら、伝え合ったことを確認する ・次時は、学年で共有することを伝える。	(タブレット) (オクリンク)

05

早川 千恵子

長野市立浅川小学校・1年・生活・道徳・特別活動

9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法)

- ・今までの学習を振り返りながら、自分たちの活動についてグループ内で伝え合う姿が見られたか。
- ・友だちの意見を聞くことや一緒に考えようとする姿があったか。

10. 学習方法および外部との連携

長野市第四給食センター栄養教諭小林梨恵先生

パラグアイグアス日本語学校大山しおん教頭先生と三田村しゅんさん(小学3年生)

パラグアイグアス農協理事長大西ホルヘさん

友情の大豆サミット参加校と参加者: 浅川小学校2年・長野市立保科小学校2年・山王小学校特別支援学級・中条小学校1・2年・東条小学校2年・芹田小学校理科専科, 長野市内地域講師吉村徹さん・山本忠文さん, 千曲市立屋代小学校5年, 千葉県市川市立宮田小学校5年・成田市立三里塚小学校, 新潟県三条市立大浦小学校1年, 富山県立志貴野高等学校, 東京都立新島高等学校

長野市メディアコーディネータ関亜希子先生

11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み

- ・現二年生が昨年度パラグアイにかかわった学習展開をしており、そこから大豆を育てようということで、校内では連学年でのつながりから始まっている。
- ・地球の反対側にあるパラグアイという国で日本のことを大切に思ってくれている人たちがいることを紹介する場として「友情の大豆サミット」を立ち上げ、国際理解教育に関心をもつ校内外の指導者たちと一緒にどのようなアプローチができそうか、どんな教材が有効かなどを話し合って推進している。
- ・「友情の大豆サミット」では、長野市内だけでなく、他県の小学生や異学年との交流の場となっており、多様な考えと出会う場となっている。
- ・JICA 教師海外研修に参加経験のある教師や海外とつながりがある教師と連携し、授業で話してもらっている。
- ・昨年度より国際理解教育にかかわる授業を「授業 zoomer」としてオンラインで配信しており、世界中から興味関心がある人たちが授業参観できるように取り組んできた。本単元も同様に長野市メディアコーディネータと連携し、可能な限り配信予定。
- ・本時の話し合い活動や大豆選別の場面についてはクラスごとの実施とするが、基本的には学年全体で展開する。
- ・本単元を授業参観で展開することを通して、保護者への理解を深めている。

【自己評価】

12. 苦勞した点 ※学習活動が展開する中での苦勞や、そこで見えてきた問題点を記入して下さい。

- ・子どもたちが授業後に感じたことや考えたことをどのように記録し、次時へとつなげていくかという点。一人ひとりの考えは異なるはずだが、授業最後に感想を出し合い共有することでふりかえりの良さにつながるが、他の人の考えを聞くことで自分の思いが薄れてしまうところがあった。
- ・本時の話し合いについて、小学1年生が小グループで伝え合うときに、自分たち自身で進行できるためにどのような手立てが必要かを考えた。

13. 改善点

- ・本時について、当初は「大豆サミット」で発表するために話し合うことが目標だったが、選別した大豆給食を食べたことをもとに、今までの活動をふりかえり、伝え合うことを通して、さらに誰かに伝えたいという思いが生まれるのではないかと考え、本時のねらいを変更した。
- ・ふりかえった内容を記録する方法として、タブレットの活用を考え、本時までの授業で活用を重ねてきたが、本時のふりかえりには、鉛筆で書きこむ形式のカードに変更した。カードにはこれまでの取り組みが思い出せるように、写真を貼り付け、また板書用のスクリーンにも同じものを映し出すようにして、記録しやすいように工夫した。
- ・グループで話し合った内容をクラス全体へ広げていく点について、教師が大切にしたい内容や今後の展開につながるような部分を膨らませながらまとめていくこともできたのではないかと考える。

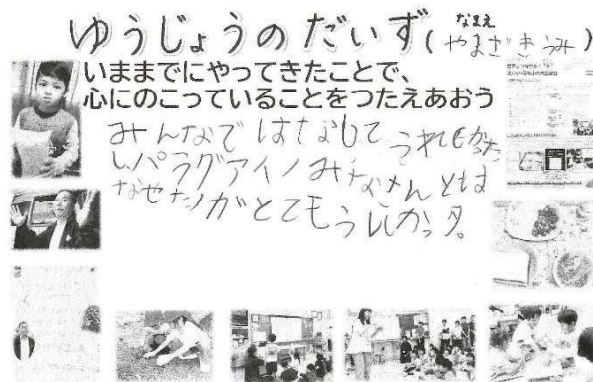
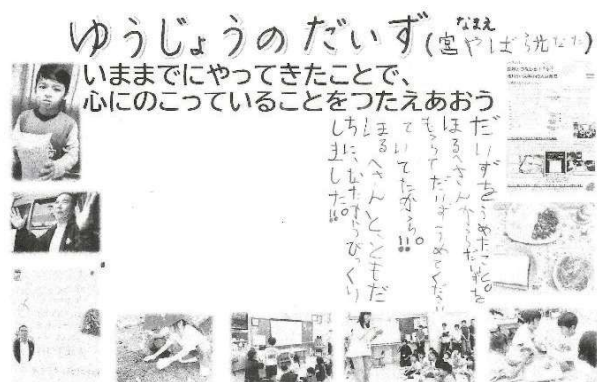
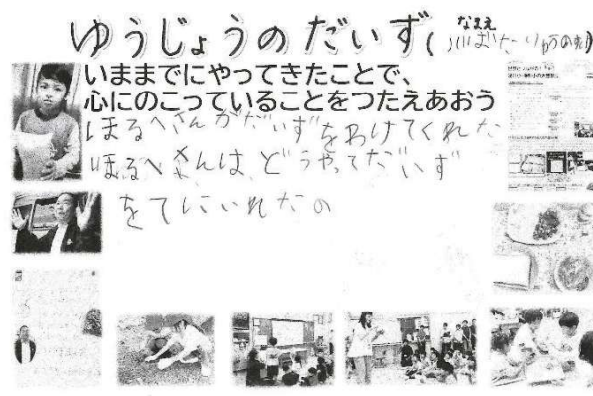
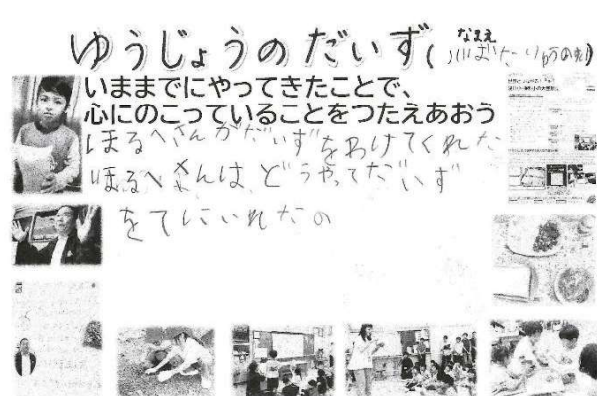
14. 成果が出た点

- ・自分たちが選別した大豆給食の翌日に、これまでの大豆にかかわる活動をふりかえることで、たくさんの人とつながってきたことが具体的に思い浮かべることができた。
- ・ホルヘさんの大豆(実物)を見せたことで、学習の原点ともいえる「ホルヘさんや世界とのつながり」について意識を向けることができた。
- ・大豆サミットでの発表や本時の話し合いの場面など単元を通して伝え合う活動を位置付けたことで、自分たちの暮らす長野市だけでなく、県外や世界の人たちと意見を交わし、多様な考えに出会う機会となった。
- ・たくさんの人とのつながる楽しさを味わったことで、世界への関心が高まり、身近なこととして感じている。
- ・子どもたち自身がやってみたいと思うことを提案し、授業で実現していくという経験を重ねたことで、いろいろなことに挑戦しながら創造していく楽しさを味わい、自ら行動する力を育む一歩となった。

15. 学びの軌跡(児童生徒の反応・感想文・作文・ノートなど)

本時のふりかえりカード、子どもたちのつぶやきなどから抜粋

- ・参観日に給食の先生からいろいろなことを教えてもらったこと。大豆(の国内自給率)が8%なのは、びっくりした。
- ・ホルヘさんは、どうしてみんなに大豆をわけてくれたのか。
- ・ホルヘさんからもらった大豆の種をまいたこと。保科小のやり方など何度も挑戦したが、浅川小1年生は芽が出なかった。千葉の学校など育てていたのはなぜだろう。
- ・大豆サミットが一番心に残った。自分たちが発表することや他の学校の発表を聞くのが楽しかった。司会をできたときもあって、またやってみたいと思った。
- ・ホルヘさんやいろいろな人と友だちになれたこと。パラグアイの人と(オンラインで)話せたことが、とてもうれしかった。



16. 授業者による自由記述

本単元では、パラグアイ在住の日系二世ホルヘさんから受け継いだ大豆を中心に位置づけ、「友情の大豆サミット」という形で本校1・2年生に加え、市内外や県外の異学年・異校種の学校や地域、そしてパラグアイとつながり、たくさんの人と交流することができ、参会者がアイデアを持ち寄りながら新しい学びの場となったことは子どもたちだけでなく、関わる教師たちにとっても創造的で何より楽しみながら授業に臨んでおり、今後の展開についても無限の可能性を感じている。

苦労した点については、今年度担当している小学1年生が遠く離れたパラグアイについてどうすれば身近なこととして感じられるのかという点だった。毎日の給食と関連付けて、食べ物と世界のつながりを栄養教諭とともに考える大豆サミット交流で出会ったパラグアイ人のカルロスから教えてもらったスペイン語やグアラニー語の歌を毎朝継続して歌い、それらの曲を音楽会でも発表したことや、人権学習参観日の授業内容にパラグアイ友情の日の活動を取り入れるなど教科横断的な位置づけを継続した子どもたちの思いと教師の願いが織り重なり合って、子どもたちの心に残る学習となったのではないかと考えられる。

本研修を受講して、発達段階に応じた教育課程のどこに位置づけるのか、どんな力をつけたいのか、扱う教材について適正であるのかなど、多面的に物事を見ることが正しい情報であるかなど展開していきたい活動が担当する学年の子どもたちにとってどのような学びであるかを考えて、本単元を展開したことは、これまでの教員人生での自分自身の授業展開についても見つめ直す機会となった。

本単元を通して、私がパラグアイで出会った人たちを子どもたち自身がまるで直接出会ったように感じ取っている姿から、教室から世界とつながり、たくさんの人とつながり、未来を創り上げていってくれるだろうと願いたい。

【参考資料】

- ・ パワーポイント資料
- ・ 農林水産省 HP: 食料自給率農(令和5年度概算)
- ・ JA 千葉 HP: 子どもも大人も一緒に学ぶ「食品自給率」
- ・ パラグアイグアス日本語学校作成: 大豆加工品 VTR
- ・ JICA パラグアイ教師海外研修での記録: パラグアイグアス農協理事長大西ホルヘさん VTR
- ・ 長野市第四給食センターだより

参考資料1: 本時活用スライド「パラグアイ ゆうじょうのだいず かつどうを ふりかえろう」一部抜粋(11/12)

11月11日のきゅうしょく チリコンカン



みんなでわけた
だいずが
きゅうしょくに!



これまでの大豆のかつどうをふりかえり、
ころろにのこったことをつたえあおう

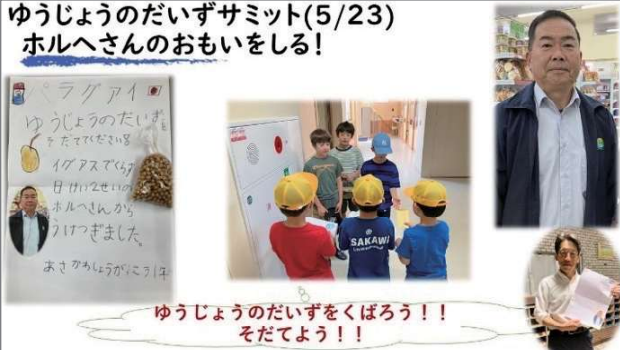
「ゆうじょうのだいず」

パラグアイ

ホルヘさんからうけついだ
しゅんさんのせつめい



ゆうじょうのだいずサミット(5/23)
ホルヘさんのおもいをしる!



ゆうじょうのだいずをくばろう!!
そだてよう!!

だいずたねまき 6がつ10にち



べあと
いっしょに、
2つずつ!

たくさんの学校といっしょに
チャレンジ!

6月26日ゆうじょうのだいずサミット3
ちいきや せかいとつながる



あさかわ小2ねん
ほしな小
さんのう小
ひがしじょう小
ちばけん みやた小
にいがたけん大うら小
とやまけんしきの高校

7月14日ゆうじょうのだいずサミット4



かんばんづくり
いつめがでるか!?
なんどもチャレンジ

サミットで 学校ごとのじょうほうこうかん

9月1日ゆうじょうのだいずサミット
ばんがいへん たべものはどこから
きゅうしょくのせんせいのおはなしをきいて

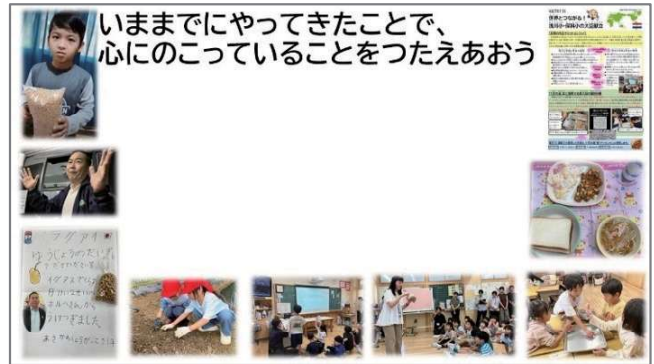


わたしたちにもできることって
あるのかな?

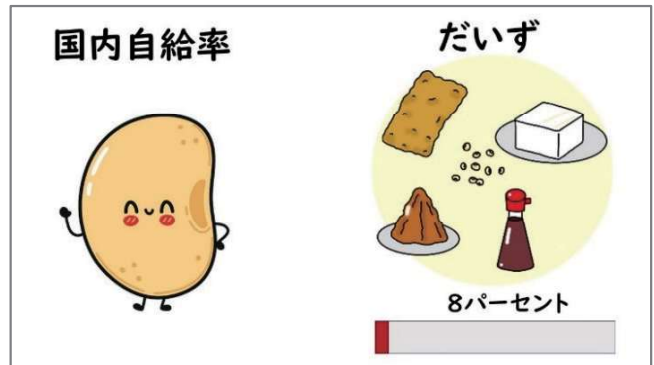
**きゅうしょくだいずの
せんべつにちょうせん!**



9月7日
世界とつながる!
浅川小・保科小の大豆献立



参考資料2:「ゆうじょうのだいずサミット ばんがいへん〜たべものは どこから」
長野市第四給食センター栄養教諭との協働授業(9/1)



パラグアイでは、みそ、しょうゆ、とうふ、納豆、豆乳など日本と同じように大豆で作られている食品があります。他にも、動物のえさや運動会のお手玉にも使っています。

大豆などの飼料が輸入されないと、たまご、肉、乳製品など国内自給率も下がってしまう。

卵:96%→13%、肉:53%→8%、牛乳・乳製品など63%→28%

給食で例えてみると… ↓



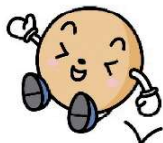
このような状況の中で、栄養教諭の先生は、地域の食材を活用して、みんなに給食を届けてくれているんだね。その中で、自分たちにできることは、何だろう？→給食用大豆の選別に挑戦！

給食センターだより:子どもたちの言葉をつないで、保科小とも一緒に作成。第四給食センター担当の長野市内の
小中学校へ配布。QRコードで子どもたちからのメッセージを動画でも配信。

令和7年11月

世界とつながる！

浅川小・保科小の大豆献立



長野市第四学校給食センター

「友情の大豆サミット」について

昨年度浅川小2年生がパラグアイとの交流で日系二世のホルヘさんから受け継いだ「友情の大豆」。その大豆を通じて、今年度は浅川小(1・2年)・保科小(2年)・その他の市内外の小学校と地域のサポーター、千葉県・新潟県・富山県・大阪府など県外の学校、そしてパラグアイの人たちがつながり、「友情の大豆サミット」を開催しています。サミットでは、大豆の生長を通して、たくさんの人たちと交流を重ね、世界とつながる授業を展開しています。

浅川小学校1年生の感想

- ◆パラグアイでは、大豆を日本と同じように食べていると、イグアス日本語学校小学3年生のしゅんさんから聞いて、びっくりした。
- ◆ホルヘさんはどうして日本にいる 私たちにも優しいのか知りたい。
- ◆日本の友だちだけでなく世界の人と会えるのがとっても楽しいし、他の学校の人と話 ができて、毎回楽しみ。
- ◆自分たちのことを発表して伝えられるのが楽しい。
- ◆他の学校の様子を知ることができて、ワクワクする。
- ◆千葉県の学校では、大豆がもじゃもじゃ育っていて、長野と違うことにビックリ。
- ◆保科小の地域の先生から大豆の育て方を教えてもらい、挑戦してみました。
- ◆2年生になったら、もう一度大豆を育てたい。

さまざまな学校が
つながる

保科小学校2年生の感想

- ◆5月に浅川小からパラグアイの大豆をわけてもらった。パラグアイの大豆、日本の黄大豆・青大豆・くらかけを地域サポーターに教わりながら育てている。上手だね～すごいな～と言って教えてくれてうれしい。
- ◆地球儀でパラグアイを探したが、見つけるまで3日かかった。見つけたときはうれしかった。
- ◆パラグアイにはみそや油揚げ・豆腐まであるんだ！
- ◆パラグアイのイグアスでは、日本語を話したり、ラジオ体操をしたり、運動会があって、日本と同じだね。すごいな。

パラグアイと
つながる

地域のひと
つながる

給食センターと
つながる



11月の給食に使用する黄大豆の選別体験

「友情の大豆サミット番外編～たべものはどこから～」では、1学期の給食センターだよりのクイズで大豆の国内自給率がとても少ないことを知り、その他のたべものについても栄養教諭の先生と一緒に調べてみました。肉や卵は、動物の飼料となる大豆等が輸入されないと自給率がかなり下がってしまうことを知り、世界の国と仲良くすることがとても大切だと感じました。これらの学習を通して、自分たちにもできることの一つとして、給食の大豆選別に挑戦することになりました。食べられるものと、食べられないもの(黒くなっているもの・穴のあいているもの)を選別しました。

ペアやグループで協力して何回もチェックしました。

たくさんのおいしく食べてほしいです。

友だちや保科小のみんなと選別するのは楽しかったです。

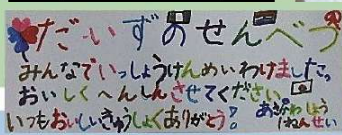


浅川小からの
メッセージ動画
視聴期限 2025.12.26



みんなががんばって分けたから、残さずに食べてほしいです。

ありがとうの気持ちでいっぱいです。



浅川小・保科小が選別した大豆を、11月の給食「チリコンカン」に使用します。

小1コース 11月11日(火) 小2コース 11月6日(木) 中学コース 11月12日(水)



国際理解教育/開発教育 学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	末永 祐利	学校名	やたなか小中一貫校 大阪市立矢田小学校
教科(科目)・領域	社会科 総合 学級活動	対象学年(人数)	4年 1組(19名)
実践年月日もしくは期間(時数)	2025年 10月中旬 ～ 11月初旬(9時間)		

【実践概要】

1. 単元名(活動名): 開催！やたなかフェスティバル！！					
2. 実践する教科・領域 ・社会科「受けつがれてきた祭りや行事」(5時間) ・総合(3時間) ・特別活動(1時間)	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加		
4. 単元の目標(評価規準を意識して設定) ・それぞれの祭りや行事の行動原理を捉え、それぞれの祭りや行事に込められた人々の願いについて考えることができる。(社会科) ・自分の住む地域やそれ以外の地域や国の祭りや行事に興味をもち、進んで調べようとするができる。(総合・国際理解教育) ・自分たちの学級の思いや願いを話し合い、自分たちオリジナルの祭りを実現させようとしている。(学級活動)					
5. 単元の評価規準	①知識・技能	それぞれの祭りについて、何時・どこで・だれが・どのように・何のためにするのかという行動原理を理解している。(社会科)			
	②思考・判断・表現	それぞれの祭りや行事について、人々の願いを考えることができる。(社会科) 学級の願いをもとに、自分たちのオリジナルの祭りについて考え、話し合うことができる。(学級活動)			
	③主体的に学習に取り組む態度	それぞれの国や地域の祭りや行事に興味をもつことができている。(総合・国際理解教育) それぞれの祭りや行事について興味をもち、主体的にその祭りについて理解しようとしている。(社会科)			
6. 単元設定の理由・単元の意義					
【単元設定の理由あるいは単元の意義】 祭りや行事には必ず、何時・どこで・誰が・どのように・何のためにするのかという行動原理がある。しかし、何のためにその祭りをしているのかを理解して祭りに参加している人は少ないように思える。児童も同様に祭り本来の意味を理解せずに参加していると予想される。その祭りに込められた意味や人々の思いを理解した上で祭りに参加することで、自分たちの住む地域への郷土愛を深めることができ、他の地域・国の祭りについても調べ比較することで、違いや共通点などを見つけ、祭りに込められた人々の思いに気づくことができる。 単元最後には視点を学級に戻し、自分たちの学級の思いや願いからオリジナルの祭りを考え話し合うことで、自文化理解を図りたい。					
【児童／生徒観】 本校の地域には、伝統的な神社(鷹合神社)があり、夏には夏祭りが開催される。本学級からも多くの児童が神社に訪れ、夏祭りを楽しむ様子が伺える。 社会科学学習アンケート(自主アンケート) ・「今までにお祭りに行ったことはありますか？」→「はい」 100% ・「お祭りが好きですか？」→「はい」 100% 好きな理由 →「花火がきれいだから」、「屋台が楽しいから」など					

06

末永祐利

やたなか小中一貫校 大阪市立矢田小学校・4年・社会・総合的な学習の時間・特別活動

・「お祭りは何のためにあると思いますか？」

→「みんなで楽しむため」、「神様にお願い事をするため」、「わからない」など

上記の回答結果から、児童はお祭りを楽しみにしていることが伺えるが、「何のためにするか」という本来のお祭りの意味を理解して参加している児童は少ない。

本学級には、韓国朝鮮にルーツのある児童が3名、中国のルーツのある児童が3名在籍している。中国にルーツのある児童の内、1名は今年度転入してきた。その児童に対し、積極的に関わりをもち、助け合って学校生活を送る様子が見られた。また、本校には民族学級「チョソン友の会」・国際クラブ「ハピネスワールド」があり、外国にルーツのある児童が放課後の時間に活動している。外国にルーツがある児童が活動へ向かう際には、「頑張ってな！」と他の児童から応援する様子も見られる。課内実践でソンセンニムから韓国朝鮮の文化を教えていただいたときには、「もっと知りたい」という意欲が見られ、外国の文化をより知りたいという意欲的な様子も見られた。

【教材観】

「受けつがれてきた祭りや行事」 わたしたちの大阪4年

本教材には、大阪府で行われる日本三大祭りの一つである「天神祭」が取り上げられている。写真やデジタルコンテンツで祭りの実際の様子を見ることができ、自分たちが住む大阪府で行われる「天神祭」に興味・関心をもつことができる。また、「天神祭」はなぜ行われているのか、人々にはどんな思いがあるのかを祭りに携わる人たちの一日の様子やインタビューなどから読み取ることができる。祭り以外にも、大阪府に昔から伝わるものとして、「人形浄瑠璃」、「旧堺燈台」、「大仙(仁徳陵)古墳」、「淀川三十石船船歌」などの文化や遺産、文化財なども取り上げられており、受け継がれてきたものを感じることができる。先人たちの働きとして見ると、次の単元である「大和川のつけかえ」にも大きく関連する。

【指導観】

まずは自分たちが住む地域の祭りや伝統行事として、「わたしたちの大阪4年」に記載されている「天神祭」について調べる。祭りや行事について調べるときには、行動原理である「いつ」・「どこで」・「誰が」・「どのように」・「何のために」に注目して調べることができるようにする。「何のために」祭りをを行うかについては、祭りの内容から想像して考え、祭りの始まりや人々の願いについて気づくことができるようにする。「天神祭」の次は、より地域の身近な祭りである「鷹合神社」の祭りについて調べる。参加したことのある祭りについて調べることで、児童の学習意欲の向上を狙う。また地域の身近な祭りについて理解を深めることによって、郷土愛を深めることを狙う。ここでも「鷹合神社」の祭りの始まりや人々の願いを考えることができるようにする。

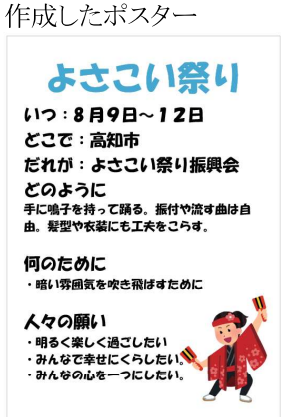
次は視点を自分たちが住む地域から日本国内へと移し、資料やインターネットなどを参考にして興味が沸いた祭りや行事について調べる。調べる際は、より理解を深めるために2つ以上のソースを活用して調べるようにする。本学級の外国にルーツのある児童に関しては、それぞれのルーツのある国の祭りや行事について調べる。調べたことをもとにポスターを作成する。ポスターには、「いつ」・「どこで」・「だれが」・「どのように」祭りや行事が実施されているかを明確に書くようにする。

また、視点を世界へと移し、世界の祭りや伝統行事についても調べ、興味をもつことができるようにする。ここでも、それぞれの相違点や共通点を整理し比較することで、人々の願いに着目させたい。

最後は視点を学級に移し、自分たちの学級の願いについて話し合う。これまでの学習で、祭りや伝統行事には必ず人々の願いがあることを理解してきていると考えられる。自分たちの学級にはどんな願いがあるかを可視化することで、オリジナルの祭りを実現するために話し合う。話し合い、考えたオリジナルの祭りは、三学期に実現できるようにしたい。

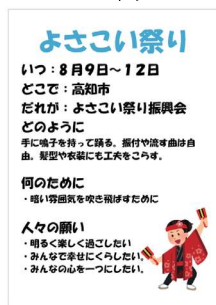
7. 単元計画(全9時間)

時間	ねらい	学習活動	資料など
1 2 3 (社会)	日本三大祭りである「天神祭」が大阪府で行われていることを知り、自分たちの住む地域に古くから伝わる祭りや伝統行事に関心をもち、調べることができる。	・「天神祭」について、教科書の資料やデジタルコンテンツなどから調べる。 ・「天神祭」を支える人たちの話をデジタルコンテンツで視聴し、人々の願いについて話し合う。	「わたしたちの大阪4年」
4 5 (社会)	自分たちの住む地域の身近な祭りである「鷹合神社」の祭りについて調べることができる。	・「鷹合神社」の祭りについて調べる。 ・なぜ、「鷹合神社」に込められた人々の願いについて考え、話し合う。	「鷹合神社」資料
6 7 (総合)	自分たちが住む地域以外の地域や国の祭りや行事に興味をもち、調べることができる。	・自分たちが住む地域以外の地域や国の祭りや行事について調べる。 ・調べたことをポスターにまとめる。	「わくわく発見！日本のお祭り」 「わくわく発見！世界のお祭り」

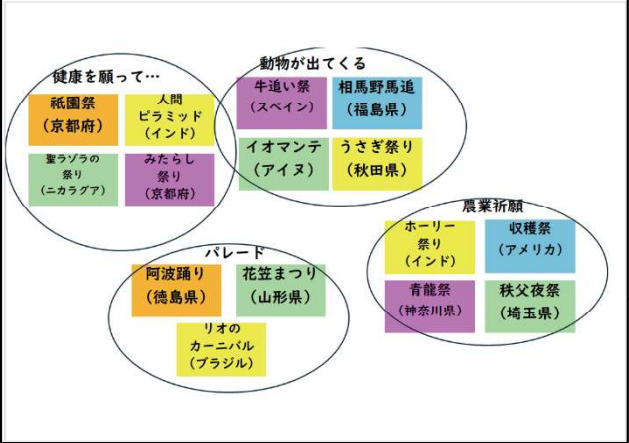
			株式会社 meiji HP「世界の食と文化<世界の行事・お祭りを比べてみよう>」 
8 (本時) (総合)	その祭りや行事に込められ人々の願いについて考えることができる。	・作成したポスターを使ってポスターセッションを行い、なぜこの祭りや行事が始まったのか、込められた人々の願いは何なのかについて考え、話し合う。	作成したポスター 
9 (特活)	自分たちの学級の願いについて話し合い、学級オリジナルの祭りや行事を実現させようとしている。	・自分たちの学級にはどんな願いがあるのかについて話し合う。 ・話し合った願いをもとに、どんな祭りができるかを話し合う。	

8. 本時の展開(概略)

本時のねらい: その祭りや行事に込められ人々の願いについて考えることができる。

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	○前時までの学習を振り返る。 T「前回までの学習では、色々な国や地域の祭りや行事について調べ、ポスターを作りましたね」 C「世界にはたくさんの祭りや行事があり、似ているところや違うところがたくさんありました」 T「自分が調べた祭りや行事については、よく知ることができたと思います。今日の学習では、他の人が調べた祭りや行事について知り、そこに込められた人々の願いについて考えてみましょう」 ○学習課題に出会う。 T「今日の学習のめあては『世界の祭りや行事について知り、そこに込められた人々の願いについて考えよう』です。」 ・ワークシートに学習課題を書く。	・前時までに作ったポスターを掲示し、世界にはたくさんの祭りや行事があることを視覚的に分かりやすく提示する。 ・天神祭や鷹合神社の調べ学習をして話し合った人々の願いについて想起できるようにする。	・ポスター例 
本時の課題: 世界の祭りや行事について知り、そこに込められた人々の願いについて考えよう			
展開1 (15分)	○ポスターセッションを行う。 T「今日はみんなが調べた祭りや行事について知るためにポスターセッションを行います。」 T「ポスターセッションでは、まずポスターを作った人から、『いつ』『どこで』『誰が』『どのように』してその祭りや行事が行われているのかを紹介してください。」	・祭りや行事の行動原理である「いつ」「どこで」「誰が」「どのように」「何のために」に着目してポスターセッションを行うようにする。 ・「何のために」には、人々の願いが込められていることが多いので、	・作成したポスター

展開2 (15分)	C(例)『よさこい祭り』は、8月9日～12日に高知市で、よさこい祭り振興会によって行われます。手に鳴子を持って踊り、振付や流す曲は自由です。髪型や衣装にも工夫をこらします」 T「次に、『何のために』この祭りや行事が行われているのか、聞き手に問いかけてください」 C(例)「よさこい祭りは何のためにしているのでしょうか？」 T「聞き手は、その祭りや行事が『何のために』行われているのか、人々の願いを考えて話し合ってください」 C・「健康に暮らすためかな？」(予想) ・「阿波踊りがご先祖様の供養だったから、徳島県と近いし、方法も似ているから、同じ意味じゃないかな？」(他の祭りと比較) T「話し合いの後に、ポスターを作った人から、人々の願いを教えてください」 C(例)「実はよさこい祭りは、暗い雰囲気を吹き飛ばすためにされていて、明るくみんなで過ごしたい、みんなの心を一つにしたいなどの願いが込められています」 ・話し手以外は聞き手になる。一人当たりの時間は3分。 ・祭りや行事の内容から人々の願いについて話し合い、話し手から本来の人々の願いを聞く。 ○全体でポスターセッションを行う。 ・数名が全体場でポスターセッションを行う。 ・全体で祭りや行事に込められた願いについて話し合う。 ○それぞれの祭りや行事を比較し、相違点や共通点について話し合う。 T「ポスターセッションでは、それぞれの祭りや行事に込められた人々の願いについて考え知ることができましたね」 T「それぞれの祭りや行事で似ているところはありましたか。祭りの内容や人々の願いを比べ、模造紙にまとめましょう」 ・付箋に自分が調べた祭りや行事の名前を書く。 ・全体で一枚の模造紙に付箋を貼り、共通する付箋を近くに貼る。 ・近くに貼られている付箋をペンで線を書いて囲む。 C・(例)「京都の祇園祭とインドの人間ピラミッドは国や方法は違うけど、健康を願って行うところは似ている」 ・(例)「山形の花笠まつりとリオのカーニバ、徳島県の阿波踊りは、パレードのような方法で似ている」	「何のために」は、聞き手に問いかけ、話し合うことで、その祭りや行事について深く考えることができるようにする。 ・話し合いでは、一問一答のようなクイズ形式にならないように、祭りや行事の内容にもとに想像し、「こうではないか？」と思ったことを意見として出すことができるようにする。 ・ポスターの「何のために」と「人々の願い」の部分付箋で隠しておくよう指示をする。	よさこい祭り いつ：8月9日～12日 どこで：高知市 だれが：よさこい祭り振興会 どのように：手に鳴子を持って踊る。振付や流す曲は自由。髪型や衣装にも工夫をこらす。 何のために ・暗い雰囲気を吹き飛ばすために 人々の願い ・明るく楽しく過ごしたい ・みんなが幸せにくらしたい ・みんなの心を一つにしたい  リオのカーニバル いつ：2月から3月 どこで：ブラジル リオデジャネイロ だれが：サンバリーグ どのように：街中が熱狂的なサンバのダンスに包まれ、豪華な衣装を身につけてダンスや山車でパレードをする。 何のために ・人々が日常のストレスを晴らし、社会的な不安から解放されるため 人々の願い ・日常のストレスを忘れて、踊り明かしたい。 ・自由にやりたい。  開催！やたなかフェスティバル！！ 名前（ ） めあて 世界の祭りや行事について知り、そこに込められた人々の願いについて考えよう。 ○友だちの調べた祭りや行事が「何のために」行われているか、分かったことを書きましょう。 <table border="1"> <thead> <tr> <th>友だちの名前</th> <th>祭りや行事の名前</th> <th>国や地域</th> <th>何のために</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td> </td><td> </td><td> </td><td> </td></tr> </tbody> </table> ○今日の学習で感じたことや気がついたことを書きましょう。	友だちの名前	祭りや行事の名前	国や地域	何のために																								
友だちの名前	祭りや行事の名前	国や地域	何のために																												

	・できた模造紙を見て、全体で話し合う。	(模造紙の例) 
まとめ (10分)	○今日の学習について振り返る。 T「今日は、祭りや行事に込められた人々の願いに注目をしてたくさん話し合いましたが、気が付いたことや感じたことはありますか？」 ・ワークシートに今日の学習の振り返りを書く。 C「どの祭りにも人々の願いが込められていた」 C「祭りの方法は違うけど、願いが似ている祭りが世界にもあった」 C「願いは似ていても、方法が違う祭りがあった」 C「もっと世界の祭りや行事について調べてみたい」 ・全体で共有する。	

9. 評価基準に基づく本時の評価(評価方法)	アセスメントシートを用いて、学習前と学習後にアンケートを実施し、各項目の回答の変化から、児童の変容を見取る。また、調べ学習、相違点・共通点の整理等を行っているときの様子や、ワークシートの振り返りから評価する。
10. 学習方法および外部との連携	・学習計画以前に、鷹合神社の宮司の方と事前に連絡を取り合い、神社の歴史、祭りや伝統行事についてご教授いただく。 ・教科書・書籍・インターネットなどから、それぞれの祭りや行事について調べる。 ・祭りや行事に関する書籍を東住吉図書館などから借用する。
11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み	(学校内) ・韓国朝鮮にルーツのある児童は、「チョソン友の会」、外国にルーツのある児童は、「ハピネスワールド」に在籍し、放課後の時間にそれぞれのルーツを大切にするために、言語や文化を中心に学び、表現している。 ・上記の国際クラブに在籍していない児童も、ソンセンニムと韓国朝鮮の遊びや演奏などを通して、韓国朝鮮の文化を学んでいる。 ・校内研修では、国際理解教育に関する研修会を開き、地球市民として物事を捉える重要性を広めた。 (学校外) ・大阪市小学校教育研究会国際理解教育部に所属し、研修担当として全市に向けた研修会を企画・運営した。

【自己評価】

12. 苦労した点	本学習を展開する前に、世界の祭りや行事に興味をもつことができるようにするために、運動会で世界中のダンスや踊りを取り入れた集団演技に取り組んだ。ダンスや踊りと祭りや行事には密接な関係があると考え、集団演技に取り入れようと考えた。2025年は「大阪関西万博」が実施されたこともあり、テーマを「やたなか万博2025」とし、文化の多様性を表現できる集団演技の構成を考えた。日本は徳島県の「阿波踊り」、韓国朝鮮は「カンガンスルレ」、フィリピンは「ティニクリン」、中国は「ウーロン」を取り入れた。最後は関西万博のテーマソングである、「この地球の続きを」の曲で、取り入れたすべてのダンスや踊りが入り混じるように踊る構成にした。祭りや行事を調べるときには、運動会の経験からこれらのダンスや踊りと関わりが深い祭りを調べようとする児童もいた。 興味をもった祭りや行事について調べ、調べたことをもとにポスターを作成するのに時間がかかった。ポスターセッションで使用するために文字を大きく書いたり、挿絵を入れたりするのに特に時間を要した。また調べて出てきた説明の文章をそのまま書くのではなく、自分で理解をしてから書くことを意識させたので、読めない漢字や言葉の
-----------	--

意味を質問されることが多かった。漢字の読みや言葉の意味まで調べ出すと更に時間がかかったため、指導者が応えたり調べたりすることが多かった。

13. 改善点

地域にある鷹合神社の祭りについて調べる際に、指導者が事前に準備した資料をもとに祭りについて調べたが、社会見学として児童と一緒に神社を訪れ、実際に神社の様子を見たり、宮司さんの話を実際に聞かせていただいたりしてもよかったのではないかと考える。そうすることで、より興味関心が湧き、深い学びに繋がったと考える。

本やタブレットを使って行動原理を中心に調べたが、児童が興味をもった祭りや行事に関する映像資料が少なかったため、表面的にしか調べることができなかった。理想は興味をもった祭りや行事の映像を見ることができることはあるが、前もって映像資料のある祭りや行事を厳選しておき、その中から興味のある祭りや行事を児童に選んでもらう方が現実的ではあると考える。

本時では、ポスターセッションの時間を一人当たり3分としていたが、2枚のポスターを3分で説明するのは厳しかったため、5分に延長した。それが原因で祭りや行事の仲間分けや振り返りの時間が短くなってしまった。ポスターセッションでは、より紹介したいポスターを1枚選び、1人当たりの時間は3分で行うのが適切であると考え。そうすると、祭りや行事の仲間分けや振り返りの時間を確保することができると考える。

本時で祭りや行事の仲間分けをしたとき、「何のために」に注目しすぎて、仲間分けをしづらそうにしている児童が多かった。その結果、目的の仲間しか集まらなかった。次の時間にもう一度仲間分けをした際には、「どのように」にも注目させ、「食べ物が出てくる」や「パレード形式」などの仲間分けもでき、広い観点のもとで祭りや行事の仲間分けをすることができた。もっと仲間分けを深める場合は、ポスターセッションと時間を分け、更に「いつ」・「どこで」などの行動原理にも注目させた仲間分けをするといのではないかと考える。

本時の学習を通して、祭りや行事に込められた人々の願いを想像したときに、それぞれの願いの原点は人々のくらしの豊かさや平和につながるということが分かったが、学習活動の中で児童がそのことに気づくことができる発問をすることができなかった。次の学習の時間にはみんなで確認はしたが、適切なのは本時の学習の中で気づくことができることであると考え。

14. 成果が出た点

「天神祭」について調べるときに、行動原理をもとに調べたことで、次から調べる祭りや行事も行動原理を軸に調べることができ、主体的に調べ学習をすることができた。日本の祭りや行事と世界の祭りや行事を1つずつ選んで調べたが、「もっと調べたい」と3つ目、4つ目の祭りや行事を調べることができた児童もいる。学級全体で世界中の祭りや行事を調べたことで、今まで知らなかった祭りや行事に出会い、児童の関心が更に高まった。

本時ではポスターセッションの手順を細かく決めて行ったため、児童が迷うことなく自信をもって調べたことを説明することができた。また、話し手が「この祭りは何のために行われているでしょうか」と聞き手に問いかけたことで、ポスターセッションを対話的に進めることができた。「何のために」祭りや行事が行われているかについて考えるとき、自分が調べた祭りや行事と重ねて考えたり、他の行動原理をもとに考えたりと多角的な視点で人々の願いに迫ることができた。

第9時で学級オリジナルの祭りや行事について話し合った。

○祭りや行事の名前 「矢田小4年なかよし祭^{さい}」

○いつ … 3学期 2月5日(木) ※学習参観

○どこで … 矢田小学校 ※詳しい場所は内容を話し合ってから決定

○だれが … 矢田小学校4年生のみんな

○どのように … 未定 ※3学期に話し合ってから決定

○何のために … もっと仲を深めるため

○みんなの願い … もっと仲を深めたい。みんなで楽しい祭りや行事にしたい。

みんなでオリジナルの祭りや行事について話し合ったとき、話し合う事柄の順を、①「みんなの願い」②「何のために」③祭りや行事の名前の順で話し合った。初めに「みんなの願い」を話し合うときは、学級目標である「敬天愛人」に立ち返って考えることができていた。「敬天愛人」には、「人を愛する」という意味があり、友だちに愛情を持って関わることを学級目標としていた。学級の現状を振り返ると、もっと仲を深める必要があるのではないかと意見がたくさん出た。そこから、「何のために」オリジナルの祭りや行事をするかが決定し、祭りや行事の名前が「矢田小4年なかよし祭」とすることになった。詳しい内容は3学期に話し合い、学習参観で保護者の方にも見ていただけたらと考えている。

15. 学びの軌跡(児童生徒の反応・感想文・作文・ノートなど)

☆「これから日本や世界の祭りを調べていきます。どんな気持ちですか？」

・天神祭や鷹合祭りを調べていて、お祭りに興味をもったので、これから世界の祭りを調べるのが楽しみです。

・いろいろなお祭りを調べたいという気持ちでいっぱいです。

・どんなことをお祭りで見ているのかが気になる。世界の祭りでどんなことをしているのか調べるのが楽しみです。

・今日の勉強をしたことによってお祭りを深く知りたくなってきました。

・まだ行ったことのないお祭りに行ってみたいです。

☆児童が調べた祭りや行事

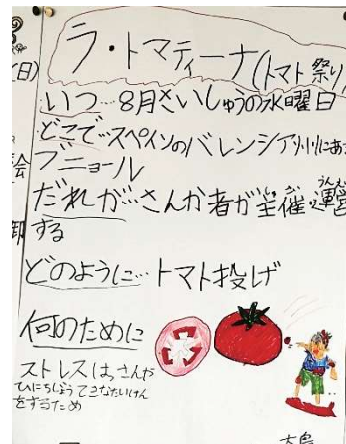
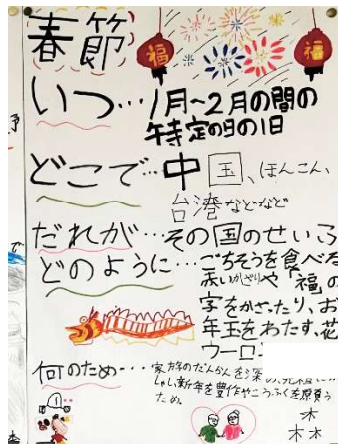
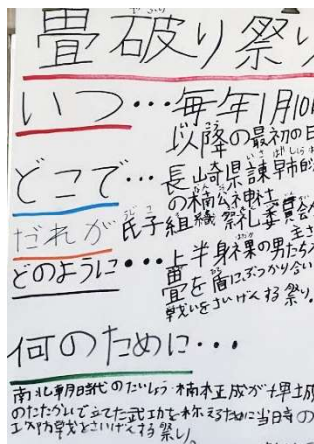
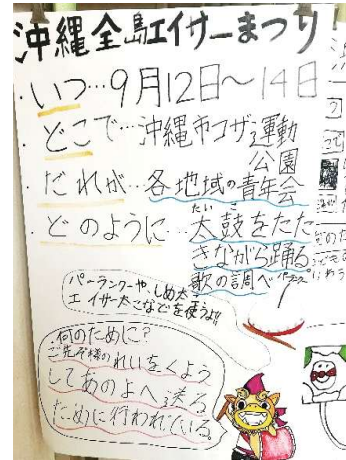
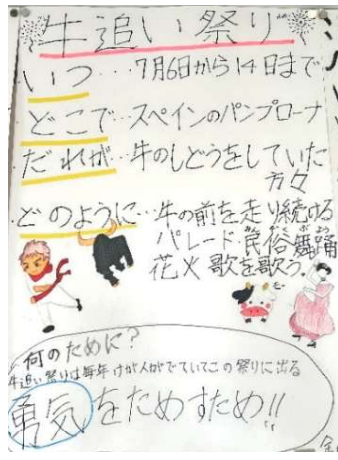
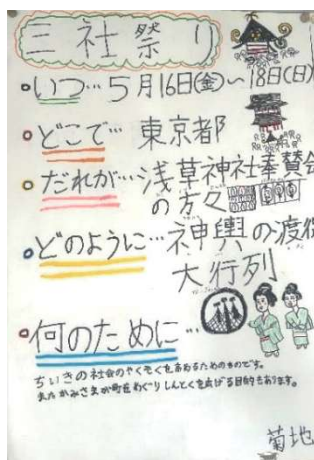
○日本の祭りや行事

- ・日吉大社山王祭(滋賀県) ・桜花祭(香川県) ・国分秋祭り(大阪府) ・長崎くんち(長崎県)
- ・花脊松上げ祭り(京都府) ・阿波踊り(徳島県) ・三社祭り(東京都) ・沖縄全島エイサー(沖縄県)
- ・豊破り祭り(長崎県) ・札幌雪祭り(北海道) ・浜松まつり(静岡県) ・唐津くんち(佐賀県) ・祇園祭(京都府)
- ・京都五山送り火(京都府)

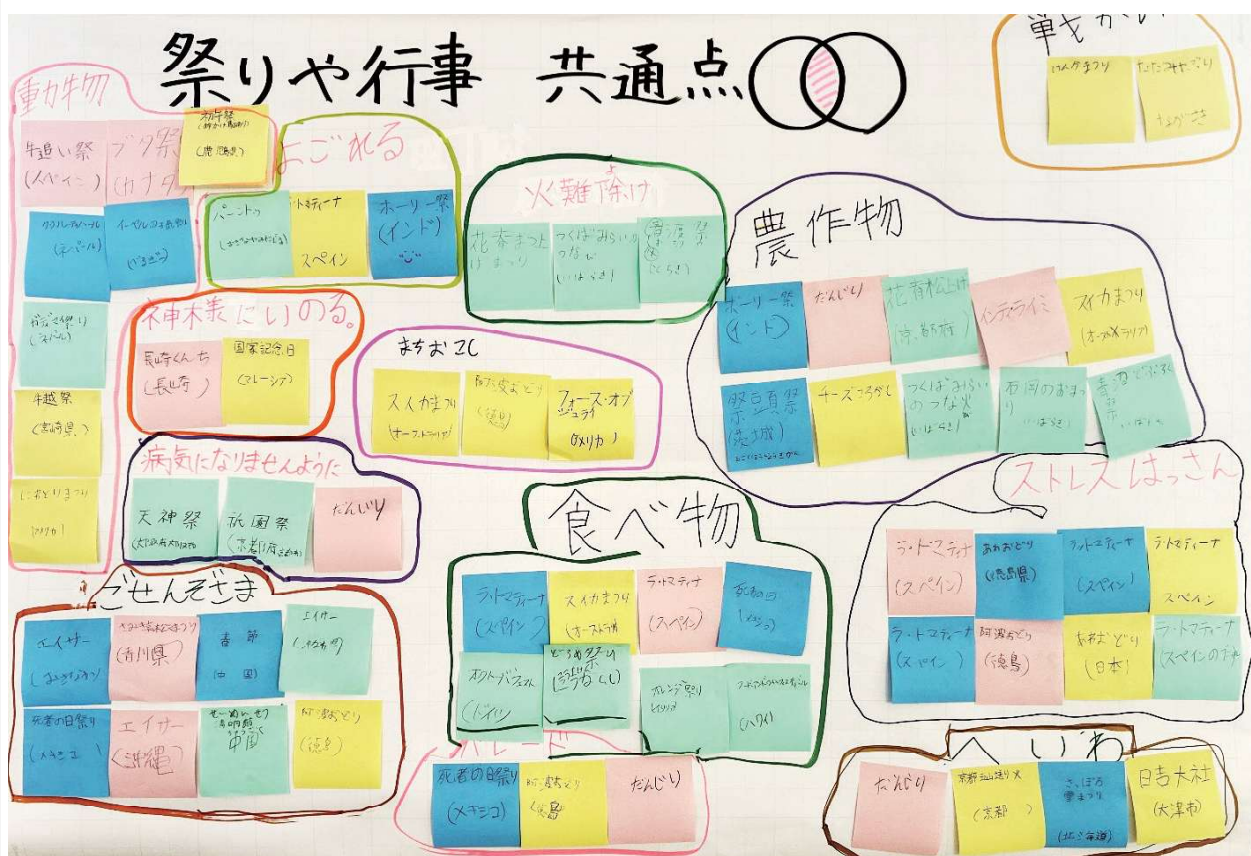
○世界の祭りや行事

- ・春節(中国) ・清明節(中国) ・ラ・トマティーナ(スペイン) ・クリスマス(ロシア) ※一般的なクリスマスと相違点あり
- ・フォース・オブ・ジュライ(アメリカ) ・国家記念日(マレーシア) ・牛追い祭り(スペイン) ・マースレニツァ(ロシア)
- ・スイカ祭り(オーストラリア) ・死者の日(メキシコ) ・ホーリー祭り(インド)

☆児童が作成したポスター



☆祭りや行事の仲間分けをした模造紙



☆学習を終えての振り返り

- ・世界の祭りや行事を調べて、知らなかったお祭りを知ることができた。もっと調べてみたい気持ちになった。
- ・友だちが調べているお祭りがおもしろそうだったので、今度調べてみようと思います。
- ・世界にはいろいろな祭りや行事があることが分かった。まだまだ知らない祭りや行事も知っていきたい。
- ・祭りや行事には必ず人々の願いが込められていたことに気づけて良かった。
- ・クラスのオリジナルのお祭りを考えた。3学期に実現させるのが楽しみです。

16. 授業者による自由記述

夏の研修を経て実践を組み立てたが、組み立てるときには「汎用性」を意識した。国際理解教育の実践を考えるときには、「教科統合型」・「教科融合型」・「教科超越型」があることをご教授いただき、今回の実践は、社会科・総合・学級活動の3つの教科の中で行う、「教科融合型」で行った。実践の導入を社会科の教科書の内容から行い、発展的な学習として総合の時間を使い、最後は自分たちの学級に視点を戻した。3つの教科・領域にまたがった実践となったが、実践を振り返ると、汎用性の高い実践になったのではないかと考える。各校でこの実践をする場合は、教科書の祭りや行事の内容から入り、各校の地域や身近な祭りや行事を調べ、日本や世界の祭りや行事を調べていくとよい。また単元の最後には視点を自分たちの学級に戻し、自分たちにも思いや願いがあることから、オリジナルの祭りや行事を考えよう。

【参考資料】

- ① 「シリーズ比較文学への誘い 祭りから読み解く世界」 山田孝子・小西賢吾 編 英明企画編集 2018年
- ② 「わくわく発見！日本のお祭り」 竹永絵里:画 河出書房新社 2017年
- ③ 「わくわく発見！世界のお祭り」 竹永絵里:画 河出書房新社 2017年
- ④ 株式会社 meiji HP「世界の食と文化<世界の行事・お祭りを比べてみよう」
- ⑤ 鷹合神社 HP <https://www2s.biglobe.ne.jp/~falconry/>
- ⑥ 東住吉区 HP (045 鷹合神社) <https://www.city.osaka.lg.jp/higashisumiyoshi/page/0000033863.html>
- ⑦ 鷹合神社 資料(宮司さんからのお話)
- ⑧ 「わたしたちの大阪4年」 日本文教出版
- ⑨ 「新しい社会4」 東京書籍

国際理解教育/開発教育 学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	山岸 史弥	学校名	大阪市立 新森小路小学校
教科(科目)・領域	国語・総合	対象学年(人数)	6年 1組(26名)
実践年月日もしくは期間(時数)	2025年11月7日(金) 全5時間(本時は2時間目)		

【実践概要】

1. 単元名(活動名): 解決?！ジェンダー探偵団! ～「自分らしさ」が大切にされる社会を目指して～					
2. 実践する教科・領域 ・国語科「発信しよう、私たちのSDGs」(3時間) ・総合的な学習(2時間)	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加		
4. 単元の目標(評価規準を意識して設定) ・自分たちの身近にあるジェンダーバイアスに気づき、そのバイアスの影響や、それが維持される背景などについて理解することができる。(総合) ・お互いのちがいを認め合い、共生社会に向けて自分たちに何ができるか主体的に考え、行動することができる。(総合)					
5. 単元の評価規準	①知識・技能	・身近な社会のジェンダーバイアスに気づき、そのバイアスの影響や、それが維持される背景などについて理解している。(国語)			
	②思考・判断・表現	・ジェンダーに関する情報や、友だちの意見を多面的・多角的に捉え、共生社会のために必要なことは何か考えている。(総合)			
	③主体的に学習に取り組む態度	・お互いのちがいを認め合い、「自分らしく」生きることのできる社会を作っていくために自分たちにできることを考え発信している。(総合・国語)			
6. 単元設定の理由・単元の意義					
【単元設定の理由あるいは単元の意義】【児童／生徒観】 日傘をさして登校したり日焼け止めを塗っていたりする男子児童に対して、同性から「女みたい」と揶揄した声がある。体育の時間、「男子は教室で着替えて、女子は別の部屋で着替える。何でいつも女子ばかり移動しないといけないの?」女子児童からそんな不満の声が聞こえたこともあった。児童同士だけではなく、教員の側にも、日常の学校生活の中に潜む、「男だから」「女だから」といった決めつけや無意識の思い込み・固定観念がまだまだ根強く残っているように感じる。本学級の実態として、一部の男子児童・女子児童の間で一緒に遊んだり、活動したりすることを極度に嫌がる・恥ずかしがる(周りからからかわれることを恐れる)雰囲気がある。思春期という発達段階もあるのだろうが、どこか男子と女子の間にある「どうせ理解し合えない」というような見えない壁があるようだ。お互いの性差・ちがいを認め合い、協力し合える学級集団を形成していくためにも、本実践による児童の変容に期待したい。					
【教材観】 国語科「発信しよう、私たちのSDGs」では、17のSDGsの目標の中から、自分の興味関心の高いものを選び、それについて調べ発信するという単元の構成になっている。前単元で、マイクロプラスチックによる海洋汚染について学習しているため、児童のSDGsに対する興味関心は十分高まっていることが予想される。ここでは、特に目標の5「ジェンダー平等」について取り上げ、世界の課題や日本の現状についてまず知ることから始める。					
【指導観】 単元の前半では、「男らしさ」「女らしさ」から生まれる抑圧や、「男」「女」に二分することから生まれる偏見や差別をつくりだしている仕組みについて知り、児童に「もやもや」を生み出す。参加型のワーク(自己や周りの友だちと対話)を通して、自分の中にある無意識の偏見や思い込みに気づき、問題を自分事として捉えられるようにする。 後半では、多様な持ち味「自分らしさ」が尊重される社会をつくるために、どう行動していくか自分事で考え、新聞					

07

山岸 史弥

大阪市立新森小路小学校・6年・国語・総合的な学習の時間

への投書という形で表現・行動化できるようにしたい。単元全体を通して、自分の中の思いや考えがどのように変容していったのか、児童の振り返りを比較分析する。

7. 単元計画(全5時間) 国語・総合的な学習			
時間	ねらい	学習活動	資料など
1 (国語)	・SDGs 目標5「ジェンダー平等を実現しよう」について、世界と日本の現状について知る。	・国語科「発信しよう、私たちの SDGs」の学習の流れを知る。 ・SDGs の目標達成度の中で特に低い目標の5(ジェンダー平等)を取り上げる。 ・世界と日本の現状について知る。	・ジェンダーギャップ指数2025
2 (総合) 本時	・自分の中にある無意識のバイアスに気づく。	・自分の体験を振り返りながら、社会にある「男だから」「女だから」といった思い込みや決めつけには何があるか考える。 ・社会の中で形成されてきたジェンダーに関する偏見や差別について知り、ジェンダー平等を妨げるものは何か考える。	・「ジェンダー視点で教育を見直すヒント集」
3 (総合)	・ジェンダーに関する「ちがいが」をあっても良い「ちがいが」か、あってはいけない「ちがいが」か、考える。	・身近にある例を取り上げ、全体で意見を交流する。 「電車の女性専用車はあるが男性専用車はない。」 「日本では男性の給料の平均を100とすると、女性の平均は60である。」等。 ・ワークを通して考えたことや感じたことを共有する。	DEAR 開発教育協会 ・「行動力をはぐむ教室-もちあじワークで多様な未来を-」 ・「ジェンダー視点で教育を見直すヒント集」
4 (国語)	・問題を自分事として捉え、ジェンダー平等を実現するために自分たちに何ができるか考える。	・身近にあるジェンダーに関するマイクロアグレッションや新聞の投書を取り上げ、お互いの考えを交流する。 ・学んだことを振り返り、自分の思いや考えを意見文の形にしていく。	・朝日新聞投書など
5 (国語)	・自分たちにできることは何か考え、行動に移す。	・お互いの意見文を読み合ったり、色々な大人(教職員)にも見てもらったりして、アドバイス等を活かすことができるようにする。	

8. 本時の展開(概略)			
本時のねらい:自分たちの身近にあるアンコンシャス・バイアスに気づき、その問題性を捉えることができる。			
過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	1. 前時の振り返り等を共有する。 T 「前回の授業では、SDGsの5番の目標である『ジェンダー平等』について学びました。いくつかみなさんの振り返りを読みます。」 「日本はジェンダー平等に課題があることが分かったんだよね。」 2. 本時の課題を確認する。	・前時の感想等を共有する。 2時間目 ジェンダー平等を さまたげているものは何だろう？ 	・児童の振り返り ・スライド ・ワークシート (めあての記入)
展開 (30分)	ジェンダー平等をさまたげているものは何だろう？ 3. 「男らしさ」「女らしさ」について考える。 T 「ジェンダー平等が実現されないのは何だと思いますか？」 C 「前回の学習では、政治とか経済の部分で女性の数が圧倒的に少なかった。」	・本時の課題に対するそれぞれの予想、考えを簡単に板書し、学習の見通しがもてるようにする。	・スライド 9～ AC ジャパン 「聞こえてきた声」

	C「もっと女性が活躍することが必要かも。」 T「まず、みんなに見てもらいたい動画があります。」 T「聞こえてきた声は、男性？女性？どちらでしたか？」 C「これは、男性の声がした！」 「赤ちゃんの世話とか、ご飯とかは女性のイメージがする。」 T「今までの経験もあるから人によって様々だと思うけれど、男はこうだとか女はこうみたいな自分の中にある思い込みってあるよね。」 T「男のイメージ、女のイメージってあると思うのですが、ここにはどんな言葉が入ると思いますか？」 C「強い・弱い」 C「仕事・家庭？」 T「グループでたくさん意見を出し合ってみましょう。」 T「男だから、男のくせに、女だから、女のくせに、といった言葉をこれまで聞いたり、言われたりした人もいないかな。」 C「男のくせに泣くなとか…」 C「女なんだから、もっと大人しくしなさいとか…」 T「私たちが無意識のうちに偏ったものの見方をすることをアンコンシャス・バイアスといいます。偏見とか、思い込みとかともいうね。」 4. 性別による役割分担・職業への偏見や思い込みについて意見を交流する。 T「たくさんの意見が出てきました。まだまだ、ジェンダーに関する偏見や思い込みってたくさんありそうだね。」 T「この掃除用具を見たことがありますか？ 多分皆さんの家でも使っている所が多いと思います。どちらが〈昔〉でどちらが〈今〉のだと思いますか？」 T「どうしてデザインが変わったのでしょうか？」 C「掃除をするのは女の人みたいな決めつけがあるから？」 T「みんなの中で、役割や職業(仕事)に男らしさや、女らしさはありますか？」 C「校長先生って男の人が多くない？」 C「保育園は女の人が多かった。園長先生も女性だったような…」 C「運転系の仕事って女の方は少ないかも。」 C「総理大臣は今までずっと男やった！」 T「実際に、校長先生は男性が多いんです。でも学校の先生全体で見ると女性の方が1.5倍くらい多い。みんなから出てきた役割や職業は、別に性別に関わらずになれる職業だけど、何でこんなにちがいや差が生まれるんだろう	聞こえてきた「声」は、男性？女性？ AC ジャパン広告 2023 「聞こえてきた声」より ・多様な意見を認めるようにする。 家庭環境やこれまでの経験などにも左右されることを伝える。 男は〇〇/女は〇〇 どんな言葉が入ると思いますか？ 男だから 女だから 男のくせに 女のくせに ・最初に自分の考えを書き、その後、ペアやグループで交流できるようにする。 ・少し時間をとり、話し合ったことを全体で共有する。 アンコンシャス・バイアス 無意識のうちに 偏ったものの見方をすること 偏見・思い込み・先入観…  床用掃除シート (昔) どちらが〈昔〉でどちらが〈今〉だと思いますか？ 床用掃除シート (今) どうして変わったのでしょうか？ ・スライドを見せながら、児童の意見を取り上げていくようにする。 ・意見が出にくければ、こちらから学校の管理職・教員の男女比などの資料を提示する。 小学校の先生 銀行員 バス運転手 警察官 漁師 花屋 警察官 看護師 パイロット 医者 大工 パティシエ 美容師 保育園の先生 職業や役割に「男らしさ」「女らしさ」はある？	・スライド 10～ ・ワークシート (自分の考えや体験などから) ・スライド 12～ ・新森小路小学校の歴代校長先生の写真など ・スライド 13～
--	---	--	--

	ね？」 C「子育てとかもあって、なりやすい・なりにくいがあるのかも。」 C「男性の方がふさわしい、とか女性には難しいみたいな古い考えがあったんじゃない？」 T「昔と今で、職業に関する捉え方もずいぶん変わってきました。このような職業は今では男性も増えてきていますよね。」 T「これは、みんなが良く知っている映画の広告です。現地の広告と比べると、どう感じますか？」 C「海外の方が強そう」「かっこいい！」 C「日本の方は可愛い。」 T「もしかしたら、こんな風に女の子は可愛くないといけない、大人しくないといけないみたいなものを知らず知らずに刷り込まれているのかもしれないね。」 5. 音声ガイドの「声」について、ジェンダー平等の観点から考える。 T「聞こえてくるのは男性の声でしょうか？女性の声でしょうか？」 C「全部女性ばかりだ！」 T「どうして女性の声ばかりだと思いますか？」 C「お世話するイメージ？」 C「聞こえやすいから？」 C「男性の声だときつく聞こえるから？」 T「ジェンダー平等という視点で見るとどうでしょう？」 C「愛想がよいのが女性とか、お世話は女性がするものとかいった偏見につながるかもしれない。」 C「男性の声も選べるといえ、最初から女性の声っていうのはどうかなあ。」 T「男の声でもなく女の声でもない、中性的な声として、Q というものが開発されたようです。ちょっと聞いてみましょう。」	昔 今  ディズニー映画 現地版と日本語吹き替え版 を提示 • どうして女性の声ばかりになるのか、そこに問題性があるのか、今までの学習の流れをふまえて、考え意見を交流できるようにする。  日常生活のこんな所でも... •スライド 17～ AIアシスタント どうして女性の声ばかり？ これって、どう思いますか？ 2019年 ユネスコによる指摘 「女性は愛想が良く従順で、 いつも人を助けて喜ばせたい と思っている」という概念を固定させる。  • AI アシスタントに関しては、設定で声を選べる点も補足する。 • 意見交流の後、ユネスコによる指摘を提示する。
まとめ (10 分)	6. 課題に対する自分の思いや考えを書き、全体で共有する。 T「では、今日の学習で分かったことや、考えたこと感じたことを書きましょう。また、ジェンダー平等を妨げているものは何なのか自分の意見も書きましょう。」 C「決めつけや、偏見がまだまだある。」 C「女性はこうあるべき、みたいなものが世の中	•多様な意見を認める。振り返りの時間をしっかりと確保できるようにする。 ふりかえり  ①今日の学習で ・分かったこと ・考えたこと ・感じたことは何ですか？ ②ジェンダー平等が実現しないのはどうしてだと思いますか？ ワークシート (振り返り)

	にはあって、そんな意識を無くしていかないとだめなんじゃないかな。」		
--	-----------------------------------	--	--

9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法)			
学習を通して、ジェンダー平等を妨げるものは何か自分の考えを持つとともに、アンコンシャス・バイアスについても理解している。(行動観察・振り返り)			
10. 学習方法および外部との連携			
- 自分事として捉えられるような学習課題(問い)の設定 - 振り返りによる自己内対話と変容 - 対話的な活動(他者との対話を通して新たな気づきを得る活動) 以上3点を学習方法として、意識して授業のデザインを行った。			
11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み			
- 校内研修(国際理解教育)として、周知する。 - 大阪市教育研究会国際理解教育部内での公開実践として位置づける。			
【自己評価】			
12. 苦労した点			
- ジェンダー平等に関する、情報収集。児童が「気づき」を得られる教材を用意したり、主体的に学びを深めていけるような学習課題を提示したりすることに留意した。 - 振り返りや成果物(投書)を書くことに対するモチベーションの差が、児童の興味関心や学力の差とつながっており、一部の児童では十分な学びの成果を得ることができなかった。			
13. 改善点			
- 男女のイメージを問う活動に時間を割きすぎてしまい、性別による役割分担・職業への偏見や思い込みについての部分で十分に時間が取れなかった。様々な情報に出会わせ「気づき」を得ることが本時の目標であったが、2時間に分け、もう少し丁寧に扱っても良かったのかもしれない。 - ジェンダー平等を取り上げるにあたって、単元学習の中に、LGBTQ など多様な性についての学びをしっかりと位置付けることも必要であった。多様な性については、児童の興味関心は高く、学習中に何度も児童から質問があった。その都度、指導者から説明することはあったが、簡易なもので済ませてしまっていることが多かった。 - LGBTQ など教室の中に当事者がいる可能性についても十分考えておく必要がある。教室の中に存在する左利きの人数ぐらい、LGBTQ の人も当たり前のように存在するのだということを児童には伝えた。			
14. 成果が出た点			
- 本単元は、国語科と総合的な学習の教科横断で行った。国語科「発信しよう、私たちの SDGs」では、単元の最後に自分たちの学びを「発信する」という活動がある。国際理解教育が目指す、「気づき」から「行動」へつなげるという展開に持ち込みやすかった。特に、「新聞の投書」と成果物を限定したことで、どの児童も自分の思いや考えを「書く」ことにこだわることができた。 - SDGsの17の目標を児童が個々に調べるのではなく、こちらが「ジェンダー平等」に絞り、課題提示したことで全体での学びが深まった。(本単元は調べ学習が主で、児童に任せた学習になりがちである。教師主導で進めたことで、単元全体を通した児童の知識理解、思考判断の変容が感じられた。)			
15. 学びの軌跡(児童生徒の反応・感想文・作文・ノートなど)			
(本時の振り返りより) 第2時			
ジェンダー平等を妨げているものは何だと思いますか？			
- 昔からの固定観念のせいで、今でもみんな女性はどう男性はこうというイメージが結構残っている。(M・S) - アンコンシャス・バイアスという言葉を知った。決めつけがジェンダー平等を妨げている。(I・Y) - 日本の古い頭でっかちな考えのせいで今問題にぶつかっているのが腹立たしいと思った。 - 男らしさや女らしさが偏見やイメージで決めつけられていて、平等を妨げていると感じた。(M・R) - 男の特徴があって女の特徴があり、それをいかしている結果だと思うので仕方がないと思った。当たり前になっていることなので変えることは難しいのではないかなと思う。(K・A)			
(新聞の投書) 単元全体を通した成果物 第5時			
男女にとらわれず好きなように			
「人」のイラストを検索すると、男の子は青とか緑、黒にズボン。女の子も赤やピンク、紫にスカートを使ったイラストが出てくる。でも実際には、男の子がピンクの服を着ていることもあるし、女の子が緑の服を着ていることもある。男女の固定観念にとらわれずに自分が好きなように色やファッションを決めることが大切だと感じた。ま			

だまだ世間では、男の子はこれだ、女の子はこれだという決めつけや偏見が多いと思った。そもそも性別とかいう概念をなくしたら、ジェンダーとか気にせずに過ごせるのではないだろうか？LGBTQもない。男女とか性別とかいう概念をなくそう。自分らしさを受け入れられる社会になるように私は私にできることをしていきたい。男女にとらわれず好きなように生きられる社会に。(I・Y)

- ・ジェンダー平等を妨げるものとは

ジェンダー平等を妨げているものは、男女それぞれの「イメージ」だと思う。

例えば、男は、青や黒などの「イメージ」高いが女は赤やピンクなどの「イメージ」がある。他にも男は短髪、女は、長髪や男は仕事をして、女は家で家事をする等の「イメージ」が今は「当たり前」と認識されているからこのような男女差別が起こるのではないだろうか。つまり、ジェンダー平等を達成するにはこの「当たり前」をなくしていく必要があるだろう。そのためには、自分らしさをもっと大切に。そして相手の立場になって考えることが、大事なのではないのだろうか。(M・S)

- ・決めつけ・押しつけ なくてもいいんじゃない？

女の子はピンクや赤・服装は可愛いらしい服やスカート、男の子は青や緑・服装はカッコいい服やズボン。そんなイメージを持っていますか？女の子だから行儀よく、男の子だから泣かない。その考えはもう古いのではないのか。今は多様性の時代になってきている。そういう男女の決めつけや押しつけはなくていいんじゃないの？と私は思う。日常の中にもたくさんの決めつけがあると思う。女の子が男の子らしい遊びや髪型、服装をしていても良いと思う。逆に、男の子が女の子らしい遊びや髪型、服装をしていても良いと思うし、自分のことは他人に振り回されず自分らしさをだせばいい。女の子は〇〇、男の子は〇〇というイメージや偏見をなくしていけば嫌な気持ちになる人も少なくなると思う。そのイメージや偏見をなくするためにはどうすればいいのか。答えはまだ出ていないけれど、これからも考え続けていきたい。(M・R)

- ・僕が言いたいのは、決めつけることはだめということです。例えば、青色は男子、ピンク色は女子、サッカーは男子、女子はあやとりなどの勝手な決めつけだと思います。他人に決められないで自分の好きなことをしたらいいと思います。今日から守ろうと思った。(K・A)

16. 授業者による自由記述

授業前と授業後の振り返りを比較すると、単元の最初から多くの児童が高い興味関心を持って学習に取り組んでいることが分かる。「男らしさ」や「女らしさ」といった、自分たちにとっても身近なテーマを学習課題として設定したことで、自らの知識やこれまでの見聞等をもとに、「自分事」で学習課題に迫っていくことができたのではないかと考える。単元当初、一部の児童には「仕方ない」、「自分たちにできることはあるのか」、といった諦めや無関心な感想もあった。しかし、学習を進めていく中で、「やはり偏見や差別はいけない」、「自分は、気をつけたい」といったような気持ちの変化も見られた。

単元の1～2時でジェンダー平等に関する課題について、十分な「気づき」を得た児童は、その後の学習でも、自分たちの思いや考えをしっかりと巡らせ、投書という形で「行動」に移すことができた。また、児童同士でそれぞれの投書を読み合う時間を設け、お互いの学びをさらに深めることもできた。「これって、おかしくない？」、「それは、決めつけだよ」、授業後に、教室でそんな声が聞こえてくるが増えた。自分たちの身の回りの生活や、社会に対する関心、気づきのアンテナが、より高く張り巡らされるようになったと感じている。

【参考資料】

- ・「ジェンダー視点で教育を見直すヒント集」DEAR 開発教育協会
- ・「行動力をはぐくむ教室-もちあじワークで多様な未来を-」ワークシート
- ・ジェンダーに関する朝日新聞投書(声)より抜粋
- ・<https://youtube.com/watch?v=rN2ZCPTJPjA&feature=shared>
- 動画「あたりまえ」って何？「なぜ男子ばかり怒られるの？」【性別による無意識の思い込み】
- ・AC ジャパン広告2023「聞こえてきた声」
- <https://www.youtube.com/watch?v=sE2j2eLaBQ8>

授業実践事例

中学校

国際理解教育/開発教育 学習指導（活動）案

【実践者】

授業者氏名	鈴木 達也	学校名	星の杜中学校・高等学校
教科（科目）・領域	社会科（地理的分野）	対象学年（人数）	1年 Luce 組（27名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2025年11月28日（金）		

【実践概要】

1. 単元名(活動名)： 世界の諸地域 (アフリカ州)					
2. 実践する教科・領域 中学校 社会科 (地理的分野)	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 単元の目標 (評価規準を意識して設定)					
・ 諸資料をもとにアフリカの教育問題やその背景にある貧困や文化的な要因を、SDGs と関連させて理解する。(知識・技能) ・ アフリカの教育問題やその背景にある貧困や文化的な要因を多面的・多角的に考え、よりよい国際支援のあり方について考察し、自分の考えを論理的に表現する。(思考・判断・表現) ・ 国際社会の課題を「自分事」として捉え、持続可能な社会の実現に向けた国際支援の在り方について、自ら積極的に探究する。(主体的に学習に取り組む態度)					
5. 単元の評価規準	①知識・技能	諸資料をもとにアフリカの教育問題やその背景にある貧困や文化的な要因を、SDGs と関連させて理解できる。			
	②思考・判断・表現	アフリカの教育問題やその背景にある貧困や文化的な要因を多面的・多角的に考え、よりよい国際支援のあり方について考察し、自分の考えを論理的に表現できる。			
	③主体的に学習に取り組む態度	国際社会の課題を「自分事」として捉え、持続可能な社会の実現に向けた国際支援の在り方について、自ら積極的に探究しようとする。			
6. 単元設定の理由・単元の意義					
【単元設定の理由あるいは単元の意義】					
生徒が「自分たちの価値観」だけでは国際問題は解決できないということに気づくきっかけを得る。「教育」という身近なテーマを入りに、SDGs の各目標が複雑に絡み合っていることを学ぶ。そして、「日本からの支援策」を考えるという活動や単元の終末の「皆さんが考えた支援策で、本当にアフリカの人たちは幸せになりますか?」という切り返しの発問によって、生徒たちの多面的・多角的な思考を促す。これにより、生徒たちは国際協力の難しさや奥深さを実感するとともに、一方的な支援ではなく、現地の文化や習慣を尊重し、共生を目指す姿勢の重要性について考える。この学習を通して、グローバルな視点と批判的思考力を兼ね備えた、未来の国際社会を担う人材の育成を目指す。					
【生徒観】					
本学級の生徒は男子7名、女子20名の合計27名である。第3学年になると海外研修旅行を控えており、また高等学校における生徒の約40%が半年～1年の中・長期留学に参加することから、近い将来に海外渡航を経験する生徒である。					
【教材観】					
本単元は、学習指導要領社会「2 内容」の「B 世界の様々な地域」の「(2) 世界の諸地域」を受け					

て設定した。空間的相互依存作用や地域などに着目して、主題を設けて課題を追究したり解決したりする活動を通して、世界各地で顕在化している地球の課題は、それが見られる地域の地域的特色の影響を受けて、現れ方が異なることを理解したり、地域で見られる地球の課題の要因や影響を、アフリカ州という地域の広がりや地域内の結びつきなどに着目して、それらの地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現することが求められている。

アフリカ州の教育問題の複雑さを捉えるため、ウガンダを事例とする。初等教育無償化による高い就学率という成果（光）と、その裏にある低い修了率や教育の質の課題（影）を、統計資料や写真で対比的に示す。これにより、生徒が課題を多角的に発見できるようにする。

次に、JICA 等による学校建設（ハード面）から教員養成（ソフト面）まで、国際協力の多様なあり方を提示する。その上で、良かれと思った支援が意図せぬ問題を生む事例を投入し、支援の難しさや多面性に気づかせたい。

【指導観】

この単元を通して、生徒が「かわいそうだから助ける」という一面的な視点から脱却し、現地の文化や人々の自立を尊重する視点から、「本当に必要な支援とは何か」を主体的に探究させることを目指し、生徒が海外渡航をした際に、多面的・多角的にその国の現状を感じてほしい。

単元を通じた課題解決型学習を実現するため、ワン・ペーパー・ポートフォリオ（OPP）シートを活用する。これにより、生徒が単元を貫く学習課題を常に意識し、各時の学習に取り組み、単元終末の表現活動に生かすことができるようにする。

7. 単元計画（全4時間）			
時間	ねらい	学習活動	資料など
1	SDGs の 17 のゴールには関連性があることを理解する。	○教育を受けられないことによって生じる影響について話し合い、ウェビングマップにまとめることで、SDGs のゴールそれぞれが関連しあっていることを捉える。	・ SDGs 関連資料
2	アフリカ州の特色を自然地理的、人文地理的な側面から理解する。	○教科書や地図帳などの諸資料から、アフリカ州の特徴を白地図にまとめる。 ○単元を貫く学習課題を設定する。「なぜアフリカには学校に通えない子供たちがいるのだろう。私たちにできることはあるのだろうか？」	・ 教科書 ・ 地図帳 ・ 白地図
3	事例として取り上げるウガンダの教育の現状について諸資料に基づき考察する。	○ウガンダの教育の現状について、情報を収集、整理、分析し、Xチャートにまとめる。	・ 就学率、識字率、写真など
4	前時の学習を踏まえて、日本ができる支援策を考える。	○アフリカ州の教育水準の向上のために日本ができる支援策について話し合う。 ○単元を貫く学習課題について、自分の意見をまとめる。	
5 本時	切り返しの発問をもとによりよい教育支援の在り方について考察し、単元の学習を振り返る。	○自分の意見を他者と共有する。 ○新たな資料をもとに「あなたが考えた支援策で、みんなが幸せになるのか」という視点で話し合う。 ○単元の学習を振り返る。	・ ODA 資料

8. 本時の展開（概略）

本時のねらい：持続可能な社会の実現に向けた教育支援の在り方について、教育支援が社会の課題を解決するための糸口になりうるということを多面的・多角的に考察する。

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (5分)	1 本時の学習の流れを捉える。 T「今日は、単元のまとめの授業です。よりよい教育支援の在り方について考えていきます。」	・ 学習の見通しをもてるようにするため、1 時間の流れを黒板等に掲示する。	

展開 (35分)	2 前時に考えた教育支援の方法について意見交換する。 T「前の時間に考えた教育支援の方法について意見交換をします。意見交換はワールド・カフェの方法で行います。」 ・学校を建てる ・先生を派遣する ・資金援助を行う ・ICTの技術を伝える	・短時間で多くの他者の意見と触れられるようにするために、ワールド・カフェ形式での発表を行う。	資料①ウガンダの教育課題
	3 実際にウガンダで教育支援を行っている青年海外協力隊・小田さんの事例を取り上げ、小田さんがどのような取り組みをしたかを考える。 T「この人物は、ウガンダで教育支援を行っていた青年海外協力隊の小田さんです。ウガンダには資料①のような教育課題がありました。小田さんはどのような取り組みをしたと思いますか。」 ・先生を増やすためにポスターを作る。 ・英語の授業を増やす。 ・日本の体育の授業をした。	①教員不足と大規模クラス 1学級に100人を超えるクラスもあり、教員が不足している ②言語の壁による学力差 授業は英語で行われるので、英語の理解度に差がある子どもたちの間で学力格差が生じている ③カリキュラムが未整備 特に体育においては、長い間カリキュラムが整備されていない 参考：JICAマガジン (https://jicamagazine.jica.go.jp/article/?id=202312_11s)	資料②小田さんによるウガンダの教育支援
	4 小田さんの取り組みを知ったうえで、第1時に作成したウェビングマップを見て、自分たちが考えた支援策や小田さんの取り組みによって、ウガンダの社会にどのような効果をあたえる可能性があるかを考える。 T「小田さんは次のような取り組みをしました。」 T「アフリカ州の学習の最初に、皆さんが作成したウェビングマップを見てみましょう。自分たちが考えた支援策や小田さんの取り組みによって、ウガンダの社会にどのような効果を与える可能性がありますか。」 ・子どもたちが、家事をすることなく、学びに集中できそう。 ・様々な産業が生まれて、モノカルチャー経済ではなくなりそう。 ・経済発展して、貧困から抜け出せそう。	・国際的な課題の要因が複合的であることを考えられるようにするために第1時で作成したウェビングマップを参照させる。 ①授業の工夫 算数の授業で折り紙を使い、図形を楽しく直感的に学べるようにした。言語の壁を越えて学習する有効な手段になった。 ②体育教育の実践 子どもたちに体を動かす楽しさや、ルールを守って協力することの大切さを教えた。 ③文化交流 習字や七夕といった日本文化を紹介。子どもたちの視野を広げ、様々な価値観を尊重する心を育てる。 参考：JICAマガジン (https://jicamagazine.jica.go.jp/article/?id=202312_11s)	

			資料③第1時に作成したウェビングマップ
まとめ (10 分)	5 単元の学習を振り返る。 T「アフリカ州の学習を通して、あなたが感じたこと、考えたこと、疑問に思ったことを書きましょう。」 ・社会問題はつながっていると思った。 ・教育支援によって解決できることは教育だけではないと思った。 ・支援を行うことは、もしかかもしれないけど幸せになる人が増えるのかもしれない。 ・他の国ではどんな支援が行われているか疑問に思った。	・文章記述が進まない場合は、「みんなが幸せになる国際支援」という視点を与える。	

9. 評価規準に基づく本時の評価（評価方法）

持続可能な社会の実現に向けた教育支援の在り方について、教育支援が社会の課題を解決するための糸口になりうるということを多面的・多角的に考察できているか。（振り返りシート）

10. 学習方法および外部との連携

- ・グループ活動
- ・JICA 提供の諸資料

11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み

- ・校内研修における授業実践の報告

【自己評価】

12. 苦労した点

- ・授業時数の変更に伴う計画の圧縮

当初の計画よりも単元の授業時数が1時間少ない状況での実施となり、全体的なタイムマネジメントに苦労した。

- ・活動量と授業時間のバランス

単元のねらいを達成するために必要最小限の活動を維持したが、50分という限られた枠に対して学習活動が多くなってしまった。その結果、本来であれば生徒同士で支援策を伝え合う時間を十分に確保しなかったものの、進行を優先せざるを得なかった。

13. 改善点

- ・考えたり、意見を伝え合ったりする時間の確保

活動量の多さから、生徒同士が互いの意見を共有・深化させる時間を十分に取ることができなかった。

また、自分たちで考えた支援策を深めるプロセスを重視するため、活動ごとの配分を見直し、生徒がじっくりと思考を巡らせる余裕を持たせた展開にする余地がある。

14. 成果が出た点

- ・ウェビングマップ活用による学習の連続性

単元の導入で作成したウェビングマップを終末段階でも再利用し、「自分たちが考えた支援策や小田さんの活動が、ウガンダ社会にどのような効果を与えるか」を書き込ませる活動を行った。これにより、単元を通して考えることが明確かつ一貫したため、単元のねらいから逸脱することなく学習を進めることができた。

- ・思考支援とグループ活動の活性化

視覚的なマップを用いたことで、生徒にとって思考の整理がしやすかったようである。グループ活動においても、ウェビングマップが共通の足場となり、生徒たちがスムーズに意見を出し合い、活発に活動に取り組む姿が見られた。

15. 学びの軌跡

「日本と遠く離れているアフリカ州の国には、深刻な問題が様々あり、それらがいまだ解決されていなくて、日本では当たり前のことも特別だったりすることが多いので改めてありかたみを感じました。これらの問題解決にすけて取り組んで いる人々国々がたくさんいるあることをふまえて、自分自身にもできることがないかを考えて生活したいです。」

「世界的に見たら、教育を受けられない子どもがたくさんいることは知っていたけど、授業料が無料になったことで十分な教育を受けられなかったり、カリキュラムが悪いなどの、たくさん問題があることを知ったので、寄付など自分にできることをしたいと思った。」

「アフリカの学習を通して、アフリカのどんなところでどんなことが起こっているかを知れて、自分なりに解決案を考えることができました。解決などを教える中で1つのことが解決できても他に課題があったり、新しい課題が生まれてきたりしました。自分の国とはちがう問題があることを、改めて認識できました。」

16. 授業者による自由記述

本単元では、アフリカ州の抱える課題について、現状を知るだけでなく、その解決策を生徒自身が多角的に考察する活動を取り入れた。生徒の振り返りに見られるように、生徒たちは課題解決の難しさや、事象の複雑性・連鎖性に気づくことができた。例えば、教育普及のための「授業料無料化」が、逆に「教育の質の低下」や「施設不足」という新たな課題を引き起こしている現状など、物事を一面からではなく多面的・構造的に捉える力が養われたと考える。

また、学習を通して日本とアフリカの環境を比較し、自らの置かれている環境のありがたさを再認識する姿も見られた。特に、多くの生徒が「知る」段階にとどまらず、「寄付など自分にできることをしたい」「自分自身にもできることがないかを考えて生活したい」といった、主体的な行動変容への意欲を示した点である。遠い地域の課題を、自らの生活と地続きの問題として捉え、その解決に向けて主体的に関わろうとする態度の変容は、本単元の大きな成果である。

【参考資料】

・ JICA マガジンホームページ https://jicamagazine.jica.go.jp/article/?id=202312_11s

国際理解教育/開発教育 学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	赤羽 晋治	学校名	松本市立明善中学校
教科(科目)・領域	総合的な学習の時間 特別の教科 道徳	対象学年(人数)	1年(71名)
実践年月日もしくは期間(時数)	2025年 10月 ～ 2026年 3月(20 時間)		

【実践概要】

1. 単元名(活動名)：松本魅力化プロジェクト ～松本の「観光」と「暮らし」を切り口に～					
2. 実践する教科・領域 総合的な学習の時間(3時間) 特別の教科 道徳(1時間)	3. 学習領域 総合的な学習の時間、特別の教科 道徳				
		1	2	3	4
	A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加		
4. 単元の目標(評価規準を意識して設定) 異文化理解の視点を持ちながら、自分たちが住む松本の良さと課題を理解し、松本をよりよくしていくための問いをもち、探求しながら、自分なりのアクションプランを考えることができる。					
5. 単元の評価規準	①知識・技能	① 松本市の観光(インバウンド)の特徴と課題を理解している。 ② 外国人観光客や海外にルーツがある人たちと共生していく際の良さと課題を理解している。			
	②思考・判断・表現	① 松本の観光の特徴と課題を生かした自分たちの考えたアクションプランを、他者にわかりやすく発表することができる。 ② 外国人観光客や海外にルーツがある方たちと共生していくためにどうしたらよいか考え、自分なりの考えをもっている。			
	③主体的に学習に取り組む態度	① 地元松本への興味関心をもち、進んで調べ学習や友との話し合いに参画し、よりよい松本の観光のために自分たちに何ができるか考えようとしている。 ② 外国人観光客や海外にルーツがある方たちと共生していくために、日々の生活やこれからの将来の中で自分に何ができるか考えようとしている。			
6. 単元設定の理由・単元の意義 【単元設定の理由あるいは単元の意義】 松本市では、コロナ禍以降のここ数年で駅前の再開発が進み、ホテルや商業施設が次々と整備されている。その一方で、昔ながらの通りや観光地の姿も変化しつつある。観光動向に目を向けると、国内観光客数は横ばいで推移しているものの、外国人観光客の増加が著しく、この傾向は今後も継続すると見込まれる。 また、松本市「多文化共生に関するアンケート報告書(令和6年度)」によれば、現在、松本市には約4,500人の外国籍住民が居住しており、その数は近年増加している。したがって、松本で生活するうえで外国人観光客及び外国籍住民のかかわりは、今後ますます重要な課題となっていく。 生徒たちは、このような近年の松本市の変化を感じ取りながらも、日常生活の中で深く意識する機会は少ない。そこで、「外国人観光客(インバウンド)」と「松本に暮らす外国籍住民」という視点から自分たちの住む松本市を改めて見直すことにより、地域の良さと課題に気づくとともに、多文化共生への意識を育むことをねらいとして、本単元を設定した。 【児童／生徒観】 本校は松本市のやや郊外に位置し、これまで国際交流への取り組みはほとんど行われてこなかった。しかし、生					

09

赤羽 晋治

松本市立明善中学校・1年・道徳・総合的な学習の時間

徒たちは1学期末の宿泊学習で、インバウンドに成功している白馬村を訪れた。そこでスキー場の代表者やオーナーの方々から、白馬のインバウンドの光と影について直接話を伺ったことにより、生徒たちは「白馬＝インバウンド」というイメージを持つようになった。

一方で、自分たちが暮らす松本市もまたインバウンドで成果を上げている地域であることへの認識は十分でない。しかし、生徒たちがよく訪れるショッピングモールや駅前には次々と新しい店舗が開業し、外国人観光客や多言語の標識が目に見えて増加している現状がある。

また、生徒の多くは将来的に市内の高校へ進学し、その後も市内で生活が続けることが予想される。そのため、外国人観光客との関わりは今後の成長過程で避けて通れない課題である。また、日本全体においても、国内外の異文化との共生は、いわゆる VUCA (volatility, uncertainty, complexity, ambiguity 変動性・不確実性・複雑性・曖昧性)と呼ばれる予測困難な社会を生き抜くうえで欠かせない力となっている。今回の学習を通じて、そのような多文化共生への意識を育むことをねらいとする。

さらに、本年度の1学年には、母親がフィリピン国籍や中国籍である生徒、また本人が中国籍である生徒など、海外にルーツをもつ生徒たちが在籍している。したがって、異文化理解は生徒にとって身近で具体的な課題である。本学習を通して、生徒たちが将来、海外にルーツをもつ人々と関わる際に大切にすべきことを考えられるようにもなってほしい。ただし、このテーマは大変デリケートな側面を含むため、指導にあたっては十分な配慮が求められる。

【教材観】

本単元では、「松本の魅力化」をテーマとし、生徒一人ひとりの興味・関心を出発点に、一ひとりの「問い」を設定し、自分なりの視点や切り口から探究活動を進めていく。探究の過程では、調べ学習にとどまらず、仲間との話し合いや地域の人々との交流を通じて、学びをより深めていくことを目指す。ただし、「問い」は何もないところから生まれるものではないと考える。ある程度の知識を獲得や、様々な人や事実、事象との出会いを通して生まれてくるものであると考える。

本単元は後期の総合的な学習の時間(約20時間)を通して行われる。本時は、そのような探究に取り組む前段階として位置づけている。松本市の観光の現状や住民の観光に対する意識、さらには松本に暮らす海外にルーツをもつ人々の意見を聞いた後に実施する授業である。本授業では、日本と海外の文化の違いについて考えることを通して、「松本の良さ」と課題を多角的に捉え始めた生徒が、さらに一歩進んで「共生」の課題やその重要性に気づききっかけとなることを期待している。

【指導観】

指導対象学年は中学校1年生である。本学年では3年間を通じて総合的な学習の時間において「探究」のプロセスを繰り返し経験することを重視している。

探究的な学習の過程は、以下の4段階に整理されている。

①【課題の設定】体験活動などを通して課題を見だし、課題意識をもつ

②【情報の収集】必要な情報を取り出し、収集する

③【整理・分析】収集した情報を整理・分析し、思考を深める

④【まとめ・表現】気づきや発見、自分の考えをまとめ、判断し、表現する

(文部科学省『今、求められる力を高める 総合的な学習の時間の展開 ―未来社会を切り拓く確かな資質・能力の育成に向けた探究的な学習の充実とカリキュラム・マネジメントの実現―』より)

この中でも、課題の設定、すなわち「問い」を立てることが探究の鍵であると考え、3年間を通して「問い」を深めながら、探究のサイクルを何度も回すことを目標に授業を構想していきたい。

また、この探究のサイクルを繰り返す中で得られる成果は、単に「問い」に対する結論にとどまらない。社会に存在する多様な課題に触れ、その過程で社会の多様性に気づいていくことも大切な学びである。本単元では「異文化理解」の視点を取り入れることで、探究の過程を通して多文化共生の意識を育むことをねらいとする。

7. 単元計画(全4時間)

時間	ねらい	学習活動	資料など
1 総合	白馬村と比較しながら、生徒の視点で松本市の良さや課題を考える。	1. 1学期に行った白馬宿泊学習の振り返り、白馬村の「よさ」と「課題」を考える。 2. 生徒たちの感じる松本の「良さ」と「課題」を考える。	令和6年度観光動向調査報告書(松本市観光課)

【カード1】インドネシア人のムハンマドさんはイスラム教の教えでハラルでない食事を食べることができない。しかし、A市にはハラル対応のお店がなくレストランで食事をする事ができない。	【カード2】アルゼンチン人のミシェリさんは、とある不動産屋さんでアパートを借りようとした際に、「外国人お断り」と言われて、借りることができなかった。				
【カード3】カナダ人のソフィアさんはおしゃれとしてタトゥーを入れている。しかし、タトゥーがあるために温泉に入ることができない。	【カード4】アメリカ人のジェイソンさんは日本に来て 10 年で日本語もペラペラだが在留カードを常に携帯していなければ警察に捕まる恐れがある。				
【カード1】 S「ハラルのお店が一つもないのはよくないから、各市に一つはハラル対応のレストランを作るべき。だから、あってはいけないちがいだと思う。」 S「ハラル対応のお店を探せばいい。別の市にはあるはず。だから、あってよいちがいだと思う。」 【カード2】 S「これは絶対あってはいけないちがいだと思う。『外国人だから』という理由だけで差別している。」 S「日本人より手続きがたくさんあるのはしょうがないと思うけど、そもそも借りられない、のはよくないと思う。」 【カード3】 S「日本ではタトゥーはよくないイメージがあるからダメ。タトゥーを見て怖いと思う人もいるかもしれないから。」 S「でも、そもそもなんでタトゥーは日本ではだめなの？ソフィアさんはおしゃれのために入れてるだけなのに。」 S「タトゥーを隠すシールがあるって聞いたよ。だから、入りたかったらそれをすればいいから、そういうルールがあるのはあっていいちがいだと思う。」 S「でも、わざわざシールを買わないと入れないなんて不公平だと思う。でも、タトゥーをいやと思う人がいるのも事実だから難しい。」 【カード4】 S「外国人の中には悪いことをする人もいるかもしれないから、在留カードは必要だと思う。」 S「でも、在留カードを持っていないだけで捕まるのはおかしいと思う。なんだか外国の人を差別しているみたいな気がする。」 4. グループの意見を全体で共有する。 T「『どちらともいえない』に分類し理由を教えてください。」 S「【カード1】宗教上の理由だから本人が買えることはできない。でも、だからといってA市に一人の人のために別にレストランをつくることも難しいから。」 S「【カード2】は絶対あってはいけない！差別だと思う。」 S「【カード3】はタトゥーの捉え方が国によって異なるから難しい。どっちが正しいとかなないから。」 S「【カード4】は日本に住む人のことを考えたら在留カードの携帯はあったほうがいいのかもしいけど、外国人からしたら大変。」 T「『どちらともいえない』に分類したカードの特徴はどんなことがありますか？」	・まずは個人で考える時間をとり、その後グループ追求をする。 ・どうしてその分類にしたのか、理由を大切にするように伝える。 ・わからない言葉がある場合には、全体で取り上げ、説明する。 ・カード4については、場合によっては日本で活躍されている外国人タレントさんを例に挙げることでイメージしやすくする。 自作「ちがいい」カードワークシート 〈ホワイトボードの使い方〉 <table border="1"> <tr> <td>あってよいちがいい</td> <td>あってはいけないちがいい</td> </tr> <tr> <td colspan="2">どちらともいえないちがいい</td> </tr> </table> ・ホワイトボードを活用し、それぞれの班の意見を一斉に見ることができるようになる。 ・聞いてみたいことがあるグループへの質問タイムを設け、それぞれのグループの分類の意図を共有する。 ・似た経験がない場合には、4つの中で一 ホワイトボード、ホワイトボードマーカー	あってよいちがいい	あってはいけないちがいい	どちらともいえないちがいい	
あってよいちがいい	あってはいけないちがいい				
どちらともいえないちがいい					

	S「それぞれの国で宗教や慣習、文化が異なるから難しい。」 5. 今までに自分の経験で似た経験がないか、これからそうした場面に遭遇したらどうするかを考える。 S「前に電車に乗ったときに、外国人の人たちがずっとおしゃべりしててうさかった。でも、あれもあの人の国では普通のことだったのかもしれない。」 S「前に美術館に行った時に外国人が写真を撮っていて注意されていた。でも、海外の美術館だともしかしたら写真撮影がいい場所も多いのかもしれない。」 S「自分が『え！？』と思っても、その人にはその人なりの別の理由があるのではないかと考えることが大切だと思う。」 S「決めつけたりせず、聞いてみるのが大切だと思う。」	番悩んだ事案について、具体的な行動を考える。 ・「日本と海外のちがいがいい」だけでなく、「ちがいがいい」は普段の生活の中にもあることに言及している生徒がいれば全体に共有する。	
まとめ (5分)	6. 本時で学んだことや気づいたこと、今後の生活に生かしていきたいことを振り返る。 S「松本には外国人観光客が増えているから、自分が『ちがう』『変だ』と思っても、別の理由があるかもしれないと思って、話しかけたり、接したりしたい。」 S「今回は『日本と海外のちがいがいい』だったけど、日本人同士でも『ちがいがいい』はあるから、友達とかかわりの中でも、相手の背景にあることを考えて生活したい。」	・海外につながる生徒もいるため、シェアする内容については配慮する。	

9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法)

- ・日本の文化を相対的に捉え、海外との違いに気づくことができる。【知識・理解】
 - ・自分の考えや根拠を示しながら、文化や価値観のちがいを『あってよい』『あってはならない』『どちらともいえない』に分類し、その理由を説明できる。【思考・判断・表現】
 - ・異文化理解の視点から、異なる文化的背景をもつ人々と共に生活していく際に自分が配慮すべきことや自らの行動の在り方について考えている。【主体的に学習に取り組む態度】
- 上記を、友との話し合い、ワークシートより評価する。

10. 学習方法および外部との連携

- ・英語の授業におけるJICA 青年海外協力隊(アフリカ隊員)との交流
- ・松本市観光課への松本市の観光についてのヒアリング
- ・3時間目のパネルディスカッションに向けて外部講師(ALTら)との授業の目的のすり合わせと内容の確認
- ・各テーマに関連した住民との交流

11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み

- ・学年の先生方と個別および全体での総合的な学習の時間の中で「国際交流の視点」を取り入れることの意識のすり合わせを図った。
- ・英語科の先生と教科横断的な学びの実現可能性について話をし、青年海外協力隊との交流に至った。

【自己評価】

12. 苦労した点 ※学習活動が展開する中での苦労や、そこで見えてきた問題点を記入して下さい。

① 単元構想

今回、本研修を受けた目的ともかわるが、この3月までJICA 青年海外協力隊としてブラジルで活動をし、この4月から日本の学校に復帰し、かつ総合的な学習の時間の主任を任せていただくにあたり、「総合的な学習の時間をダイナミックに使って、生徒たちに異文化理解について考えを深めてほしい」と思っていた。そこで、文化祭明けの後期の総合的な学習の時間をどのように、生徒たちのにとって学びのある学習にするかを考えることに苦労した。学校、生徒の実態を考え、総合的な学習の時間のテーマを「松本の魅力化」と据えつつ、そこに、道徳の授業で「日本と海外の違いをさらに深掘りする」という構造にすることに一番苦心した。

② 前時のパネルディスカッションのパネラー探し

単元構想が出来上がり、パネルディスカッションの内容が重要な位置づけになり、パネラーを探す段取りになり、パネラー探しと、パネラーと総合的な学習の時間でねらっていることと今回のパネルディスカッションの目的を共有することに時間がかかった。また、細かい点で言えば、年度当初に決まっていなかった講師を呼ぶことへのハードルが高く、パネラーに來校してもらう際の謝礼や交通費の出所をどうするかを管理職らと相談することに苦心した。

③ 学年の先生方とのビジョンの共有

20時間の総合的な学習の時間のビジョンと、その中で「松本の観光や暮らしに関する基本的な知識や考え方を身に着けるための4時間」という小単元の位置づけを丁寧に説明し、独りよがりの授業(単元)にならないように、夏休み中から何度も学年の先生方に共有を図った。特に、本時に当たる道徳の時間は各クラスで行うことを想定していたため、同じ学年の他クラスの先生には、特に想いとビジョンを伝えながら理解を得ることに尽力した。

13. 改善点

① カードの内容

本時、結果的に「あってはいけない」にカードを分類したグループは一つしかなかった。また、その一グループもグループ内では意見が割れており、「満場一致の『あってはいけないちがい』」ではなかった。授業後の振り返りでも大津先生、藤原先生より「人権や教育にかかわる差別的なカードを入れたらよかった」というコメントをいただいた。本来であれば、生徒たちにとって身近な「学校の中のちがい」に着目することも考えたが、今回、単元の流れから「日本に住む(来る)外国にルーツのある『大人』」を対象にカードを構想した。そこで、「外国人のアパートを借りる際の問題」をカードに加えることにした。(本授業案では修正済み)

② 社会科的な振り返り(まとめ)

授業後の振り返りで藤原先生より「社会科的な振り返りもあるとよかった」とコメントをいただいた。本授業は「道徳」の授業であったこと、またグループ内でも議論が白熱し、意見がまとまらないグループもあったことから道徳的なまとめを前面に出した振り返りにしてしまった。「宗教、人権、文化・慣習」など各カードの内容を掘り下げ、それぞれのちがいを社会科的な見方で捉えなおす時間をとるべきだったと反省した。

③ 自分の体験と照らし合わせて考える時間の設定

本時では、授業案にあった「5. 今までに自分の経験で似た経験がないか、これからそうした場面に遭遇したらどうするかを考える。」を行うことができなかった。その理由は授業時間の問題と、生徒が振り返りを記入する前に、グループ内で意見が割れた生徒たちの意見から「今、みんながやった話し合いでさえ意見が割れるんだから、国が違ったら意見が割れて当然だよ」という話を私がしたため、生徒が自分事として捉えていると感じたためである。しかし、授業後の大津先生のコメントでも「自分の経験と照らし合わせることの重要性」を教えていただき、そのことをさらに深く考える時間を別で設けるなどの工夫が必要であったと感じた。

14. 成果が出た点

① 前時とのつながり

前時のパネルディスカッションで多くの生徒が日本と海外のちがいに着目していたので、その流れで本時をスタートすることができ、本時の動機づけがうまくできていたように感じる。

② カードの色分けとホワイトボードの使い方

ちがいのちがいカードを色分けし、ホワイトボードに張ったことで、カードの分類をパッと見てわかるようにした。そのおかげでホワイトボードを動かしながら似たグループごとのまとめ、異なる意見のグループを際立たせて意見を聞くことができた。

③ カード(ちがい)の内容

最初にブラジルのちがいを全体で共有した際に、すでに意見が割れており、各グループでの追求でも白熱した議論がなされた。特に一つのグループでは、意見がまとまらず、全体追求の場でも議論が続いた。カードの内容は議論を呼ぶ内容ではあったと思う。

④ グループ追求の時間

今回、事前の想定でもなるべくグループ追求の時間を短くし、全体追求を長くすることを考えていた。理由は、グループで意見がまとまらないこともあることや、ほかのグループの意見を聞くことで考えが凝り固まらず、視野が広がると考えたためである。実際、10分でほぼすべてのグループが分類ができ、できなかったグループはこのまま話し合いを続けても意見がまとまらないだろうと思われる状態であったので、良かったのではないかと考える。

15. 学びの軌跡(児童生徒の反応・感想文・作文・ノートなど)

①A 生の学び

10/7 「松本市の魅力～観光客の視点から～」

振り返り「自分が住んでいるところなので、あまり魅力がないと思っていたけど、今回、観光客の意見を聞いて、松本市の魅力が分かった気がした。最近は海外の人たちが来ているので、松本市の魅力がより多くの人に伝わってほしいです！」

10/14 「松本市の魅力～住民の視点～」

振り返り「私は松本は田舎で嫌だと思っていたけど、大人の意見を聞いてよいところだったんだと改めて実感した。」

たしかに他の県に比べると田舎だけど安心、安全で暮らせているなと思ったので、大切にしていきたいです！」

10/21 「松本の魅力～外国人住民の視点～」

振り返り「3人の話を聞いて、改めて自分が安心、安全に暮らせているんだなと思った。一番印象に残ったのは、電車が時間通りに来るから急がなければならないということ、当たり前だと思ってはいけないなと思った。」

松本のことを「田舎で魅力がない」と思っていたA生は、観光客・日本人住民・外国人住民それぞれの意見(視点)を得ることで、松本に対して、自分にはなかったプラスの側面に気づくことができた。特に、3時のパネルディスカッションから「自分のあたりまえは当たり前ではない」ことに気づいた。

A生は、本時の振り返りで「海外でも日本から来る人のことを考えてやっているんだから、日本もそうした方がいいと思う。同じ日本人でも考え方が違ったので、色々な人がいるなと思った。」と記述し、日本国内でも多文化共生が重要であることに気づいた。

②B生の学び

10/7 「松本市の魅力～観光客の視点から～」

振り返り「長野県にある松本城や上高地などは外国人の人たちにも多く知られていることが分かった。」

10/14 「松本市の魅力～住民の視点～」

振り返り「自分たちの班で考えた松本市のいいところは住民の人たちも同じように考えていていいなと思った。課題点にも共感するところが多くあった。」

10/21 「松本の魅力～外国人住民の視点～」

振り返り「自分たちは感じていなかった課題点があつて面白いと思った。外国人から見ても松本はいいところばかりでやっぱり素敵だなと思った。」

B生は観光客・住民の視点を得る中で、自分のもとの意見を比較しながら、その違いに面白さを感じた。

本時を終えてB生は、意見の違いの大事さに関心を寄せながらも、国の文化やルールなどがあるために違いをすり合わせることの難しさに気づいた。

本時の振り返り:「先生が話していた通り、同じ日本人でも意見の食い違いがあるのが個人的には大切だと思った。だけど、国は国のルールがあるから、いい違いなのか、あつてはいけない違いなのか、考えるのが少し難しかった。」

③C生の学び

10/7 「松本市の魅力～観光客の視点から～」

振り返り「松本市は「食」が人気ということが分かりました。確かに食の文化は日本の中でも有名なものが違うし、外国とも全然違うので魅力的なんだなと思いました。」

10/14 「松本市の魅力～住民の視点～」

振り返り「松本市は、国宝の松本城があつたり、治安が良いけど渋滞があつたり、遊ぶところが全然ないということが分かりました。それを外国から移住してきた人はどう思っているのかしっかりと学びたいです。」

10/21 「松本の魅力～外国人住民の視点～」

振り返り「松本市は、私たちと同じような考えの、良いところ、改善点があることと、外国とは全然違うことが分かりました。」

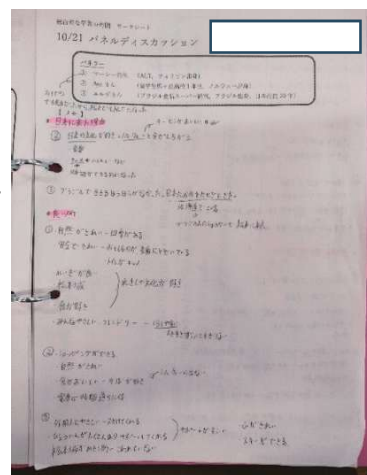
C生は、学びを進めるうちに「海外から移住してきた人はどう思っているのか」と、自分以外の人の意見に関心を持つようになった。

パネルディスカッションでは、「良いところ、課題」など項目建てしながら話をまとめるなど、パネラーの意見を自分なりに整理し、理解しようとする姿が見られた。

本時の振り返りでは、1人1人の考えや感じ方の違いに着目し、「一人ひとりの意見を大切にしよう」と思うなど、異文化尊重の精神を身に着けた。

本時の振り返り:

今日学んでみて、1人1人の考え方は違うし、感じ方なども違うので、ひとりひとりの意見を大切にしようと思いました。外国とのちがいがたくさんあるけど、ここは日本なので、日本の考え方を尊重した方が



いいと思う。でも、外国では、その国を尊重したらよいと思いました。

④D 生, E 生の学び

D 生 本時の振り返り:

「グループの中でも意見がバラバラになったから、もっと他国の人とかわるの
はとても大変だと思った。難しい内容だったけれど、他国のことを勝手に決め
つけたりするのはいけないことだと思った。それぞれ事情があるから、決めつけるのはダメだと思った。」

E 生 本時の振り返り:

「今回の授業は少し難しかった。考え方がみんな同じとは限らないから、意見の一致が難しかった。今後、外国人と
かわるようになって迷うことが出てくると思った。その時は、自分の意見だけでなく、相手の意見も深く聞いてみ
たい。」

D 生, E 生は、本時の授業の振り返りで「難しかった」という趣旨の振り返りを行った。本時、友と意見をすり合わ
せる過程で、人と人との考え方の違いに気づき、その違いを埋めあわせる多文化共生の難しさと大事さに気づい
た。

16. 授業者による自由記述

本校は国際交流の意識があまりない学校であり、生徒が国際交流の意識をもつきっかけとなる小単元になること
を願いとして授業実践を行った。4時間の構成の小単元を終えて、生徒たちは「自分たちの当たり前が当たり前で
はない」ことを、言葉ではなく、具体的な国と国のちがいや経験として感じる事ができたように感じる。

本年度、ユネスコの「日韓教師対話」にも参加させていただき、韓国とのつながりもできたことから、授業外で「韓
国文化体験講座」や3年生の総合的な学習とコラボして韓国の学校との交流を計画している。(11、12月)。

今回、夏休みに本研修に参加し、全国の先生方と話をする中で、国際交流や異文化理解を学校の中で進めて
いくにあたり、やりたいことがあってもできない葛藤や逆に学校の風土として国際交流が行いやすい学校など、学
校の特徴や学年のカラーなど様々な要因が大きく関係しており、一概に「よい国際理解教育」はないように感じた。

同時に、先生方の熱い想いに触れ、私自身も「もっと何かしたい」という想いを強くした。先生のもつ「思い」を出発
点に、学校や生徒の実態に合わせて、「国際理解教育」を進めていくことが大事だと感じた。

今回、実際に授業づくりをする中で、学年の先生方との共有を図る中で「これこそ異文化理解だな」と感じる場面
が多々あった。自分の想いを押し付けるだけではなく、教師自身が「異文化理解」の視点を持ちながら、本校に合っ
た形で、今後も国際理解および日々の教育活動を進めていこうと思った。

【参考資料】

単元を構想、実施する上での教師のための参考資料、学習者のための参考資料、ウェブサイト、データリソースなど

- ・松本市観光統計分析
<https://www.city.matsumoto.nagano.jp/uploaded/attachment/115239.pdf>
- ・令和6年度観光動向調査報告書(松本市観光課)
<https://www.city.matsumoto.nagano.jp/uploaded/attachment/112692.pdf>
- ・令和6年度松本市観光における市民意識調査結果(松本市観光課)
<https://www.city.matsumoto.nagano.jp/uploaded/attachment/109554.pdf>
- ・松本市 多文化共生に関するアンケート報告書(令和6年度)
<https://www.city.matsumoto.nagano.jp/uploaded/attachment/111908.pdf>
- ・開発教育推進セミナー 編(1999)『新しい開発教育のすすめ方: 地球市民を育てる現場から』古今書院
- ・学びのプログラム集 —2023年度 JICA 中国・四国 教師海外研修 授業実践報告書—
https://www.jica.go.jp/domestic/chugoku/activities/kaihatsu/sougo/_jcsFiles/afldfile/2025/04/21/diverse_society_2023.pdf

国際理解教育/開発教育 学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	小谷 勇人	学校名	埼玉県春日部市立武里中学校
教科(科目)・領域	社会科(地理的分野)	対象学年(人数)	1年1組(40名)
実践年月日もしくは期間(時数)	令和7年11月中旬 ～ 11月下旬(5時間)		

【実践概要】

1. 単元名(活動名): 第2編 世界のさまざまな地域 第2章 世界の諸地域 小単元名 北アメリカ州						
2. 実践する教科・領域: 社会科		3. 学習領域				
			1	2	3	4
		A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
		B グローバル社会	相互依存	情報化		
		C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
		D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 小単元の目標(評価規準を意識して設定)						
ア 北アメリカ州に暮らす人々の生活を基に、州の地域的特色を大観し、理解させる。【知識・技能】						
イ 北アメリカ州において、地域で見られる地球的課題の要因や影響を、州という地域の広がりや地域内の結びつきなどに着目させて、それらの地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察、表現させる。						
ウ 北アメリカ州について、「移民と経済」の視点を生かし、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究させる。【思考・判断・表現】						
【主体的に学習に取り組む態度】						
5. 小単元の評価規準		①知識・技能	①大陸と島々からなる多様な自然、移民によって持ち込まれ育まれた文化、世界に影響を与える巨大な経済力などの特色を概観し、理解している。 ②北アメリカ州の国では、移民が経済の発展に重要な役割を果たしてきたことを理解している。			
		②思考・判断・表現	①北アメリカ州の国が多様な農産物を大量に生産できる理由を、気候、生産方式、農場経営の仕方などの特色から説明している。 ②アメリカ・カナダの五大湖沿岸、アメリカのサンベルトの工業地域について、主な工業の種類とそれが発展した理由を比べて、図表などに適切にまとめている。			
		③主体的に学習に取り組む態度	①北アメリカ州を概観して設定した単元を貫く課題の回答を予測し、見通しをもって主体的に追究しようとしている。 ②自らの学習を振り返りながら、粘り強く考察することを通して主体的に単元を貫く課題を追究し、社会に関わろうという態度を示している。			
6. 単元設定の理由・単元の意義						
【単元設定の理由あるいは単元の意義】						
本小単元では、空間的相互作用や地域などに着目して、「北アメリカ州」が世界の中で最も経済力を持つに至った産業の実態を捉えるとともに、その産業の発展に大きく関わった移民の姿についての主題を追究したり解決したりすることをねらいとする。						
北アメリカ州には多くの移民が見られる。広大な国土を活用した農業や、豊富な鉱産資源を利用した工業が発展し、移民たちはこうした産業で働いてきた歴史がある。現在も北アメリカ州には豊かさを求めて世界各地から多くの移民がやってきており、北アメリカ州の学習には「移民と経済」という視点は切っても切れない関連性があるものと考えている。その際、現在まで移民が土着する過程における移民の痛み・葛藤について授業で触れることで生徒に社会正義の実現の視点の芽生えが出てくるのではないかと考えている。本実践においては、カナダの日系移民の痛み・葛藤を想起させる授業展開を取り入れることでその芽生えにつなげたい。						

【生徒観】

本校は埼玉県東部に位置し、東京都から長距離の私鉄線が伸びていることによりベッドタウンとなっている。また、地域には大規模な公営団地、学区内には関東地方では最古の民間レベルのモスクがあるなど近年急速に外国人・外国にルーツをもつ人々が居住する地域に変化している地域に位置する学校となっている。このような国際色豊かな環境にもかかわらず、校内ではマジョリティである日本人の文化や生活様式にマイノリティの外国人・外国にルーツをもつ生徒は合わせる同化傾向になっていることは否めない。このようなマイノリティとなる生徒をエンパワーメントするために「移民」の視点をもつ授業の役割は大きいと考える。かつては日本も移民送り出し国であったという生徒にとって意外な事実、現在地域に居住する移民受け入れ国となっている日本を見つめ直す機会にもなり、さらに外国人・外国にルーツをもつ生徒にとっては自尊感情を高める効果が期待されるものと考えている。

【教材観】

本単元にあたる世界の諸地域の単元を「移民」の視点で貫いて学習する。「移民」の視点を取り入れる際に、より効果をもつ単元配列がどのようなものであるかを追究したい。仮説として、それぞれの州における「移民」の状況をストーリー性のある配列で学ばせることを考えた。その理由に、国際理解教育の知見を生かし、人の生き方や痛み・葛藤までを考える視点を取り入れることがある。現在の構想は、①オセアニア州「移民の変化による他地域との結びつき」⇒②ヨーロッパ州「移民の増加と統合する未来」⇒③アフリカ州「移民の歴史と成長の可能性」⇒④北アメリカ州「移民と経済」⇒⑤南アメリカ州「移民による開発と環境への課題」⇒⑥アジア州「多様な民族と経済成長」の順序の履修とした。なお、移民を学習の軸として取扱う際に意識したい問いとして、①「彼らの市民意識はどこにあったのか？」②「なぜ彼らは、そのコミュニティ(地域)で生きていくことを選択したのか？」という本質的な問いをそれぞれの州の学習の要所で投げかけることによって、文字通り「社会を生きる市民の育成」を掲げる社会科の学びになると考える。

小単元にあたる「北アメリカ州」の学習は、人種・民族の分布、産業立地(主に農業・工業)に着目し、多面的・多角的に考察することを通して北アメリカ州の地域的特色を理解させることを目指す構成とする。具体的には北アメリカ州が地域によって人種・民族、産業に様々なちがいが見られる理由(背景を含む)を歴史、地理、政治、経済、自然、社会的要因などと関連付けて理解させる。その中で、日系移民に注目することで「移民」という現象がグローバル化に伴って世界中で当たり前になっている現象であって、日本も例外ではなく、さらに私たちの身の回りにも「移民」が存在していることをつかませたい。

【指導観】

本小単元の指導にあたっては、北アメリカ州の産業、とりわけ農業と工業が高い国際競争力をもっている要因を、「自然環境」「鉱産資源」「交通網の整備・発達」「産業の効率化」「移民」などの視点から理解させる工夫が求められる。農業や工業の発展に関する様々な情報を収集し、分類したり、統合したりすることを通して、それぞれの産業の特徴を見いださせる。具体的には、グループごとに仮説を立て、情報収集を行い、関連する情報を読み取り、整理することを通して、北アメリカ州の産業(とりわけ農業と工業)の発展が北アメリカ州の自然環境、鉱産資源、産業の効率化、移民の受け入れなどと、どのように関連しているのかを多面的・多角的に考察させる。そして、集めた情報をもとに、自分たちなりに北アメリカ州の産業の発展要因を結論付ける活動を行う。このような活動を単元の1次で行った上で、「移民」の視点に着目し、単元の2次での学習を展開していく。2次では、北アメリカ州の移民の分布の特徴やその特徴によって生まれるハイブリッドな文化の豊かさに気づかせる。また、カナダの日系移民が現地で果たした役割を理解するとともに、自身のルーツにつながる文化を継承することの重要性に気づかせる機会をつくってきたい。

7. 単元計画(全5時間)

時間	ねらい	学習活動	資料など
1	【北アメリカ州の自然環境と移民】 ○北アメリカ州の自然環境の特色や移民の特徴について理解する。	・主題図をもとに北アメリカ州の自然環境や人種・民族構成の特色を読み取り、読み取った特色をもとに探究する学習課題を発見する。	・写真「ロッキー山脈の山々」 ・地図「北アメリカの自然、降水量」 ・雨温図「ハバナ、ニューヨーク、モントリオール」 ・グラフ「移民の出身州別人口の変化(アメリカ合衆国・カナダ)」
	＜単元の学習課題＞北アメリカ州に多く見られる移民は、地域にどのような影響を与えているのか。		

2	【北アメリカ州の産業の様子】 ○北アメリカ州の農牧業の特色や、移民が農牧業にどのように関わっているのかについて理解する。	・農業の分布図をもとにアメリカ合衆国の中西部で大豆やトウモロコシが大量に生産されているのは、自然環境が適しており、広い土地を生かし、企業的な農業によって展開されていることを追究する。また、そこで働くヒスパニックやアジア系の移民の存在を読み取る。 ・カナダ西部でインド移民が農場に集団で働いている話から安価な労働力として働く移民の姿を捉える。	・写真「センターピボットとよばれる大規模なかんがい農業」 ・地図「アメリカ合衆国・カナダの農業」 ・動画「アメリカ合衆国の農業」 ・写真「メキシコ系の労働者によるレタスの収穫」
3	○北アメリカ州の工業の特色や、移民が工業にどのように関わっているのかについて理解する。	・北アメリカ州の鉱工業の傾向および主要な工業地帯から、それぞれの工業地帯の特徴を調べる。 ・シリコンバレーの住民構成から近年はアジア系の割合が増えていることを読み取る。 ・ICT産業が急速に発展する現代において、アジア系の移民が果たしている役割を捉える。	・グラフ「アメリカ合衆国の工業生産額の工業生産額の地域別割合の変化」 ・地図「アメリカ合衆国・カナダの鉱工業」 ・動画「アメリカ合衆国の工業」 ・コラム「アジア系の社員として働く」
4	【北アメリカ州の経済を支える移民と生活文化】 ○北アメリカ州の移民の分布の様子や、移民が地域に与える文化的影響について理解する。	・州別に見たアメリカ合衆国の人口構成の地図からアフリカ系、アジア系、ヒスパニックの人々の割合が高い州の分布を読み取り、その理由を説明する。 ・移民の存在によって生まれたハイブリッドな生活文化(例・ジャズ)について捉える。	・地図「州別に見たアメリカ合衆国の人口構成」 ・写真「ニューヨークにあるイタリア人街」 ・写真「ロサンゼルス日本人街」
5 本時	【カナダに渡った日系移民の役割】 ○北アメリカ州を支える移民の中に日系移民がいる歴史的事実を通し、人々の移動の背景や自身のルーツにつながる文化を継承することの重要性を理解する。	・カナダのバンクーバーにあるスティーブストンという港町で明治時代以降に移住した日本人が果たした役割について資料やゲストティーチャーの話から学び、現在でも子孫が現地において日本文化を受け継ぎながら暮らしていることを追究する。 ・最後にまとめとして学習課題の回答を各自が論述する。 ・人々の移動の背景や自分自身のルーツにつながる文化を継承していることの重要性を捉える。	・ゲストティーチャーの話 ・地図帳「北アメリカ州」(帝国書院) ・写真「数の子の展示物(ジョージア湾街詰工場)」「日系漁師像」「工野庭園」「武道場」「日系移民センター」 ・資料3「カナダに渡った日本人の「活躍」と「正義」(『海外移住資料館 学習活動の手引き』)」

8. 本時の展開(概略)

本時のねらい: 北アメリカ州を支える移民の中に日系移民がいる歴史的事実を通し、人々の移動の背景や自分自身のルーツにつながる文化を継承していることの重要性を理解する。

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (10分)	1 カナダに渡った日本人の存在を知る T「突然ですが、日本のおせち料理の具材をイメージしてください。何を最初にイメージしますか。」 S「黒豆」「栗きんとん」「昆布巻き」「数の子」 T「実は数の子は95%が輸入に頼っています。果たしてどこからやってきているのでしょうか。」	・身近な食文化に関する話題から授業を開始することで興味・関心を高めさせる。 ・ニシンの産卵場所が現在学んでいる北アメリカ州に多いことを補足する。	写真「おせち料理」 地図「ニシン漁場」

	S「中国」「ベトナム」「フィリピン」「アメリカ」 T「正解はアメリカ・カナダ・ロシアです。中でもカナダ太平洋側のバンクーバーという都市が有名です。地図帳で場所を確認してみましょう。」 	・地図帳でバンクーバーと日本の横浜が海路でのつながりが深くなっていることを確認させる。	地図帳「北アメリカ州」(帝国書院) 写真「数の子の展示物(ジョージア湾缶詰工場)」
	T「この数の子のもととなるニシン漁には日本人が大きく関わっていました。果たして、このバンクーバーという街と日本人にはどのような関係があったのでしょうか。」 <実際の生徒の回答> ・日系漁師の像があるということは、この街の漁業のスタートは日本人だった。 ・バンクーバーと日本の中で数の子などの日貿易を行う関係であった。 ・船で遭難したカナダ人を日本人が助けてあげてその記念として建てられた。	・考える時間を少し与えることで展開にスムーズにつながる。 	写真「日系漁師像」
展開 (30 分)	2 カナダに渡った日本人の役割を知る T「今日はゲストとしてカナダの日系移民を研究している大学の先生にバンクーバーに渡った日本人がいたことについて話してもらいます。(授業日の都合がつかない場合は事前に収録した動画を流す)」 10 分 T「カナダに渡った日系移民の話聞き、疑問に感じたことを簡単に書きだそう。その後、周りの人と話し合い、自信のある質問にして全体の場で発表しましょう。」 <実際の質問> ・なぜ日本から遠いカナダに移住しようと思ったのか。 ・カナダにやってきた日本人をカナダ人はどのように思っていたのか。 ・当時の日系移民はどのように暮らしていたのか。	・第三者の方に授業へ関わってもらうことで興味・関心を高める効果が期待される。 <ゲストティーチャーの話のポイント> ○和歌山県出身者がカナダへ移住した事実(「アメリカ村」バス停標識) ○工野儀兵衛と三尾村について ・生徒の思考を促すために、ゲストティーチャーの話には正解につながる内容を含めない。 ・机間指導をしながら、各自が考えている質問に価値づけを行う。(良い気づきがある内容に赤線を引いて称賛する)	資料3「カナダに渡った日本人の「活躍」と「正義」(『海外移住資料館 学習活動の手引き』)」

↓ T「たくさんの素晴らしい質問が出ましたね。皆さんの質問の中で『当時の日系移民の暮らし』について取り上げます。まずは、グループに配った6つのカードを古い順番に並べてみてください。裏面は見ないで並べ替えてください。」 T「正解は2→6→1→5→3→4の順番です。1と6は明確な時期を示せないなので、おまけで順番は気にしません。全部正解した班はありましたか。さて、気になる裏面を見てください。この後は、カードの情報をつかみながら、ワークシートの2つの問いの答えを班で話しながら考えましょう。問い①は『当時の日系移民はどのように暮らしていたのか。今はもういないのか。』、問い②『どのようにして日系人は受け入れられていったのか。また、受け入れられるまでにどのようなことがあったのか。』についてです。それでは活動を始めてください。」 ⇒活動後、数班に発表させる。 <実際の生徒の回答> 問い① ・白人に比べて低賃金・重労働であったものの現地でさまざまな仕事をしていた。 ・日本人同士で協力しあって暮らしていた。 ・日系文化センターがあるということで、日系移民が現在も現地で暮らしている。 問い② ・日系人は過酷な環境下であっても勤勉に働くことで次第に現地に受け入れられていった。 ・高い造船技術が現地で高く評価される日本人がいたことから現地で日本人コミュニティができて認められていくことにもつながった。 ・受け入れられる中で白人の日本人排斥運動や差別・偏見がある過酷な環境であった。 T「他にもカナダに移住した日本人は製材所での運搬、森林の伐採業や鉱業などの重労働をしていました。それも低賃金でした。このような状況の中でも、その仕事ぶりを認めてもらうようになっていきます。しかし、カードにあった日本人排斥運動があったことや日常的にアジア人への差別の問題があるなど、日系移民は現地で生きていく上で苦しみや葛藤を抱えながら懸命に生きていました。このような当時の状況をあなたはどのように思いますか？」 <実際の生徒の回答> ・当時のカナダは白人社会だから仕方がない。 ・明らかな人種差別だからおかしい。 ・過酷な環境の中でも懸命に頑張っていた日本人の存在を知って辛く悲しい。	・数枚のカード(表に画像、裏面に歴史的事実)を活用し、それらを時系列で並べる活動を行うことで生徒の思考を促す。 ・日本人は低賃金・重労働であったなどの過酷な環境下であっても勤勉に働くことで次第に受け入れられていったことを捉えさせる。 ・現在の日系移民が日本人としてのアイデンティティを失わずに文化を継承していることを捉えさせる。 ・日本人移民排斥運動などの移民の苦しみや葛藤について触れることで生徒に社会正義の実現の視点を芽生えさせる。 ・「仕方がない」という発言が出た時に、なぜそのように思うかを掘り下げたい。ただし、社会正義の実現の芽生えを目的としているので、「これは本当に仕方がないことかな」と問い返す程度とする。	カード①「工場で働く日本人女性」  カード②「日本人排斥運動」  カード③「工野庭園」  カード④「日系文化センター」  カード⑤「ムラカミハウス(造船所)」  カード⑥「かつての日系コミュニティ」 
---	---	---

まとめ (10分)	3 本時と単元のまとめを行う T「日系移民に関する学習から、人々が世界各地へ移動する背景や自分自身のルーツを絶やさずに誇りをもって生きていることが分かりましたね。それでは、最後に学習課題の回答をそれぞれが論述しましょう。」	・人々の移動の背景や自分自身のルーツにつながる文化を継承していることの重要性に気づかせる。	・ミライシード「オクリンクプラス」
	＜単元の学習課題＞北アメリカ州に多く見られる移民は、地域にどのような影響を与えているのか。		
	＜実際の生徒の回答＞ ・北アメリカ州の国々は多くの移民で構成されており、あらゆる産業で移民が経済成長と深く関わっていることが分かった。 ・北アメリカ州に多く見られる移民が、それぞれの地域に持ち込んだ文化が地域において混ざり合うことで新しい文化へと成長した。 ・移民は労働者、アイデア、文化の多様性をもたらし、地域の成長に貢献している。一方で、社会的・政治的な緊張を引き起こす可能性もある。		

9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法)
・北アメリカ州を支える移民の中に日系移民がいる歴史的事実を通し、人々の移動の背景や自分自身のルーツにつながる文化を継承していることの重要性を理解している。(ミライシード オクリンクプラスの記述内容)
10. 学習方法および外部との連携
【学習方法】 本時:ゲストティーチャーへの質問を基に、より良い質問を練り上げる活動 カードを活用してどのような歴史的事実があったのかを読み取る活動 単元:1時においてグループごとに仮説を立て、情報収集を行い、関連する情報を読み取り、整理する一連の調査活動 【外部との連携】本時:ゲストティーチャー(カナダの日系移民を研究している大学の先生) 単元:JICA 海外移住資料館およびカナダバンクーバー日系移民センター出典の資料
11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み
・埼玉県国際理解教育研究会および全国海外子女教育国際理解教育研究協議会での発表や情報発信 ・他の先生方(主に社会科教諭)に向けての指導案やワークシートの作成とデータ共有 ・本実践を論文形式にまとめ、懸賞論文として提出をする。また、学会にて発表を行う。

【自己評価】

12. 苦労した点
学習活動において生徒の声を生かしてつなげることを意識して丁寧に行っていた結果、時間が押してしまった。最終的には、まとめの時間が急ぎ足になってしまった。次の時間の積み残しとして時間を取るようになってしまった。また、カードを作成して教師から出された問いに答えるグループ活動において生徒の思考を深める工夫を練っていたが、まだ生徒が活動する時間が必要に感じた。教師がやらせたいことを1時間に詰めた展開であったので、活動に無理が出てしまう学習になるという問題点が出てきたと考えている。
13. 改善点
・思い切ってこの学習内容は2時間構成とすることも考えられる。1時間目はカナダに渡った日系移民の暮らしを丁寧に読み取る活動を中心とし、2時間目はその後の日系カナダ人としての暮らしにスポットをあてて授業展開し、後半は学習問題の回答をじっくり出すという構成の方が生徒に無理させないものであったのではないかな。 ・「日本人の移民」と「日系人」という言葉が授業の中で先生も生徒も混在する展開となってしまった反省点があった。別の言葉なので混同するべきではなかった。今回は世界の諸地域の中で初めて日本から移民がいたという事実にはスポットを当てたので、最初にそのような人たちがいたことをより丁寧にかつ「日本人の移民」と「日系2・3世」の定義などを触れる必要があった。その後のカードの読み取り作業の問いの中に、「日系人はまだいるのか？」を考えていたので、触れないようにしすぎてしまった。丁寧に分けて考えさせたい。
14. 成果が出た点
授業の流れの中でどうしても出させたいポイントは、生徒側からの発言で、押さえることができた。指導案を練り込んで作成した結果だと思っている。普段は、本時の展開についてはシンプル・コンパクトに指導案を作ろうと考えているので、今回の研修を通して、「予想される生徒の回答」「具体的な教師の問い」「本時の展開に資料を写真で盛り込む」などの新たな知見を得られた。

授業全体を通してゲストティーチャーの話やカードを活用した場面などメリハリがある活動になったことで、最後まで生徒がずっと集中して取り組むことができた。

カナダへの日本人移民を取り上げることによって、現在の多文化共生(受入側としての視点)について、また、自分事として考えることができるという工夫が生徒にも理解できる教材化に成功したと考えている。

15. 学びの軌跡(①生徒の反応から ②単元課題への回答の分析から)

①生徒の反応から

授業前から、いつもの教室にはいないゲストティーチャーやJICAの職員の方の存在、オンラインで公開されるということから、どんな授業が展開されるのだろうという期待感でいっぱいであった。

導入ではおせち料理の数の子に注目させることから始まったが、時期的にお正月が近いということで話題としてピッタリであった。その後、カナダのバンクーバーにある「日系漁師像」の問いから遠く離れたカナダに移住した日本からの移民の存在に大変驚いていた。そして、盛り上がりが最高潮に達したのがゲストティーチャーの登場であった。一斉に視線が向けられていたのが印象的であった。和歌山県三尾村がカナダのバンクーバーに移住していった人がいたという意外な事実の話に生徒は食い入るように説明に耳を傾けていた。

ゲストティーチャーが灯した火を消さない展開として教師はゲストティーチャーの話を聞いて疑問に思ったことを問いとして考えてもらう発問を投げかけた。その結果、一人の生徒の「カナダにやってきた日本人をカナダ人はどのように思っていたのか」という問いに助けられ、スムーズに「当時の日系移民がどのような暮らしをしていたのか」という次の学習につなげることができた。次の展開であるカードを活用して生徒の思考を深める活動ではまだ時間が欲しかったという率直な思いを漏らした生徒がいる。この時間をいかにたっぷり取るかが、この授業の鍵となっただけに反省材料となった。

授業の終盤では、「日本人移民排斥運動」などの移民の苦しみや葛藤について触れることで生徒に社会正義の実現の視点を芽生えさせることを目標にしていた。その当時の日本人の心情を思う中で、大多数の白人社会に飛び込むことで差別や偏見を受けたことに「仕方がない」と回答した生徒も出たので、「本当に仕方がないことかな？」と切り返した際の多少困惑していた生徒の顔を出させたことで社会正義の実現の視点の芽生えがあったと考えている。まとめの時間の回答内容は②で扱う。



②単元課題への回答の分析から

ここでは生徒の記述内容から移民の視点を強く出した単元構成の授業を受ける中で、生徒にどのような変容があったかを分析していく。本単元や本時のねらいにつながる記述をした内容を取り上げる。生徒の背景や普段の様子を踏まえながらの分析内容であるので、教師の主観が入っていることは否めないが、お読みいただきたい。

・文化の多様化・料理・言語・音楽・習慣などが混ざって新しい文化が生まれる。また、移民の出身国との交流が増えて外交にも良い影響がある。多国籍企業が育ちやすい。

前時と本時で伝えたかった「文化のハイブリディティ」について言及している記述である。さらに、その内容に移民の出身国とのつながりや既習の多国籍企業のことも絡めて記述できていることを評価している。

・差別などの過酷なこともあったが、現地に様々な文化や技術を伝え続け、母国の歴史をつないだ。そして、移住先をさらに栄えさせた。移民はその国に大きな影響を与えていると思う。

本時のまとめとして教師が行った「人々の移動の背景や自分自身のルーツにつながる文化を継承していることの重要性」について直接ではないものの触れている記述であることを評価している。「母国の歴史をつないだ」という記述は、本時の授業を受けなければ出てこない内容であると考えている。

・多文化社会をつくることに貢献したり、移民の人々によって新しい技術が発展したり、良い影響を与えていた。しかし、急すぎると現地の人々に混乱をもたらしてしまう悪い影響がある。

世界の諸地域の大単元をオセアニア州から始めた理由として、「多文化社会」を肯定的に創造できたオーストラリアの様子から学びを始めたいという思いがあった。さらにヨーロッパ州においてEUからイギリスが離脱した理由などを丁寧に学んでいった結果、北アメリカ州の学習も加えて花開いた記述となったと評価している。

・北アメリカ州は多くの移民が集まることで「たくさんの文化が混じり合い、新しい文化が生まれる」等のメリットがある一方で、「差別や対立が起きやすい」等のデメリットもある。それでもたくさん発展していて栄えている州になっていることから、移民は大きな影響を与えている。

前時では世界の諸地域のスタートで扱ったオセアニア州から本単元の北アメリカ州までの至る所で学んだ「移民」のメリットとデメリットを整理する時間をグループ活動として与えた。言葉としては教えてはいないが、「文化のハイブリディティ」のメリットを捉えながらも差別などのデメリットがあることをまとめている。それでも移民が経済的に大きな影響を与える存在として活躍していることを記述できていることを評価している。

・オーストラリアの白豪主義の時のように現地にいた人が移民に対して職を取られてしまうのを恐れて差別的な法律ができてしまう。それは良くないことだが仕方がないとも思ってしまう。いきなり外から来た人に自分たちの国を奪われてしまうと思っての行動だと思う。

この記述を取り上げた理由は、本時のねらいを達成していることを評価しているというよりも「移民」がもつ多様性を生かす以前の「多文化共生社会」を創り出す難しさを端的に示しているからである。この状況を打破する可能性は社会正義の実現の視点を持たせることである。事実、このような授業を行っても移民のデメリットを強調する記述は出てくるので本当に難しいことである。中学校1年次では社会正義の実現の視点を芽生えさせるためにも本時の終末で行ったような自身の考えについて「本当に仕方がないことかな？」と問いかけ続けたい。

16. 授業者による自由記述

・社会科の授業の構成として、教科書では記述がないチャレンジングな内容であったが、移民について無理なく入れ込むことができたことで国際理解教育として汎用性が出るものとなったと参会者からお褒めの言葉があった。また、授業として良く構造化することができた。汎用性のある社会科としての実践になったと考えている。

・北アメリカ州の学習は教科書ではほぼアメリカ合衆国を取り上げているので、カナダよりもアメリカ合衆国の方が社会科の教材として、生徒にとっては分かり易かったのではという参会者の疑問があった。カナダの日系移民を取り上げた理由としては、北アメリカ州の単元をアメリカ合衆国だけでなくカナダ・メキシコ・キューバなど多様な国家を授業の中において取り上げたいという思いからであった。それでもアメリカ合衆国の巨大な産業の様子は学習内容として取り上げるべきなので、必然的に他の国は自然や文化などの視点での取り上げとなると考えた。また、アメリカ合衆国の移民は今までに社会科や総合的な学習の時間などで多く教材化されているが、カナダの日系移民についてはほぼ取り上げられていないという独自性から教材化したかったという思いもあった。

・今回の研修では他の教員も活用できそうな汎用性の高い授業実践事例を求めていると捉えていたので、自分自身の思いを全開に出す授業展開ではなく、従来の社会科教育の学習内容の文脈で捉えた時に無理のない範囲での「自分らしさ」を出すことを心掛けたつもりであった。一方で、逆にそれがもったいなかったという意見もあった。

【参考資料】

- ・中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会科編. 2017
- ・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 社会科. 2021
- ・独立行政法人国際協力機構 横浜センター 海外移住資料館『海外移住資料館 学習活動の手引き<三訂版>』. 2024
- ・草原和博・大坂遊『学びの意味を追究した中学校地理の単元デザイン』明治図書. 2021
- ・吉水裕也『本当は地理が苦手な先生のための中学社会地理的分野の授業デザイン&実践モデル』明治図書. 2018

国際理解教育/開発教育 学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	告野 さつき	学校名	神戸市立 福田中学校
教科(科目)・領域	保健体育	対象学年(人数)	3年 3組(35名)
実践年月日もしくは期間(時数)	R7年 10月31日(1 時間)		

【実践概要】

1. 単元名(活動名): 人々を結びつけるスポーツ					
2. 実践する教科・領域 保健体育	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 単元の目標(評価規準を意識して設定)					
スポーツの社会的価値を理解し、多様性と協力の重要性を認識する力を育む。					
5. 単元の評価規準	①知識・技能	国際スポーツ大会の社会課題を書き出したり、話し合ったりしている。(国際理解教育) スポーツの社会的価値(多様性・共生・公平性)について理解している。(保健体育)			
	②思考・判断・表現	肯定的な事例と課題的な事例を比較し、自分の考えを論理的に表現できる。(保健体育) SNS やメディアの情報を批判的に読み解き、課題に対する自分の意見を持てる。(国際理解教育)			
	③主体的に学習に取り組む態度	スポーツの社会課題について、課題の解決に向けた学習に自主的に取り組もうとしている。(国際理解教育)			
6. 単元設定の理由・単元の意義					
【単元設定の理由あるいは単元の意義】					
現代社会においては、国籍・文化・性別・身体的特徴・価値観など、さまざまな「違い」を持つ人々が共に生きることが求められている。中学3年生は、進路選択や社会との接点を意識し始める時期であり、他者との違いに向き合い、共に生きる力を育むことが重要である。 本単元では、ラグビーワールドカップ2019の「ONE TEAM」に象徴される多様性の受容と協力の姿勢を肯定的に捉える一方で、男子バスケットボールの審判への誹謗中傷といった課題事例を通じて、スポーツが持つ社会的な価値と課題の両面を学ぶ。 これにより、生徒は「違いを超える」とは単なる協力や仲良しではなく、他者を理解し、尊重し、課題に向き合う姿勢を持つことであると実感を伴って学ぶことができる。					
【生徒観】					
男子16名、女子19名(内、特別支援学級生徒1名)が在籍している。この3年間で総合的な学習の時間などで国際理解教育などをテーマに取り扱ったことがなく、各教科に含まれている内容を取り扱っている程度である。本校には外国籍生徒は1名もおらず、日ごろから異文化に触れ合う機会がほとんどない。LGBTの生徒が在籍していて、そのような生徒に対して一定の理解はある。					
【教材観】					
本教材では、ラグビーワールドカップ2019の「ONE TEAM」に象徴される多様性の受容と協力の姿勢を肯定的に捉える一方で、パリオリンピックにおける男子バスケットボールの審判への誹謗中傷を通じて、スポーツにおける課題を					

考察する。違いを超えるためには、単なる協力だけでなく、正確な知識・情報リテラシー・他者への尊重が不可欠であることを学び、共生社会の実現に向けた態度を育むことができる。

【指導観】

中学3年生は社会との関わりを意識し始める時期であり、進路や将来を考える中で、他者との関係性や価値観の違いに向き合う力が求められる。本授業では、スポーツという身近で興味関心の高い題材を通じて、「違いを超える」ことの意味を具体的に考えさせることで、自己理解と他者理解を深めることを目指す。

体育理論では、身体活動の技術や知識だけでなく、スポーツが持つ社会的・文化的な価値を学ぶことが重要である。ラグビーワールドカップ2019の「ONE TEAM」は、多国籍チームである。違いを乗り越えるためにチームとして様々な活動を行い文化の違いを受け入れる工夫を重ねた結果、ベスト8という今まで日本でなしえなかった結果にもつなげることができた。そのような肯定的な例として紹介する。一方、パリオリンピックの課題事例では、SNSによる誤情報や偏見がスポーツの公平性や尊重を脅かすことを示し、スポーツの持つ課題にも目を向けさせる。

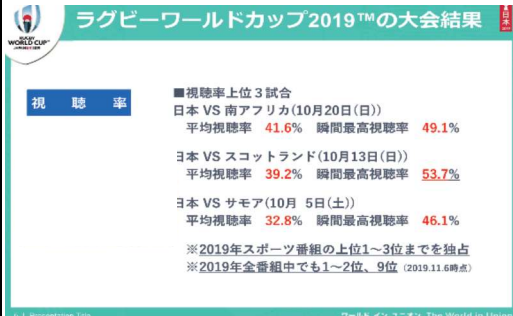
7. 単元計画(全1時間)

時間	ねらい	学習活動	資料など
1 本時	スポーツを通じて、国籍や文化の違いを超えて協力し合うことの重要性を理解する パリオリンピックの課題事例を通じて、スポーツが持つ社会的な価値(多様性・共生・公平性)を理解する	○多国籍の選手が多いラグビー代表選手がONE TEAMになるために日頃から取り組んでいたことは何かを予想し、意見を出し合い共有する ○クラスの体育会への取り組みにつなげられるか話し合う ○パリオリンピックの日本代表戦の審判についての意見を共有する ○単元を振り返る	ラグビーワールドカップの動画 資料①ワールドカップ TV 視聴率 資料②パリ五輪 バスケットボール日本代表戦の審判の SNS 誹謗中傷内容

8. 本時の展開(概略) 本時のねらい

スポーツを通じて、国籍や文化の違いを超えて協力し合うことの重要性を理解する

パリオリンピックの課題事例を通じて、スポーツが持つ社会的な価値(多様性・共生・公平性)を理解する

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (19分)	1. ラグビー日本代表 の例を紹介し、スポーツを通じて国籍を超えて一つになれることを共有する T)この人は誰でしょう？ヒントは何年か前に日本でブームになったよね？ ・リーチマイケル。ラグビーの日本代表選手 ・誰かな？見たことある T)その通り。この人がブームになったのではなく、ラグビーワールドカップが今まで日本ではあまりクローズアップアップされなかったけど話題になったよね T)この時の日本代表選手のメンバーを知っている？ ・外国人の子供がいる ・外国の人多い T)でもこのときの日本の流行語大賞を覚えてる？ ・覚えてない T)「ONE TEAM」。そのこと	当時のラグビー日本代表の写真を見せる その当時の TV 視聴率と日本代表の戦績を見せる	写真① 写真② 資料① 

93

展開 (27 分)	2.パリオリンピックの写真を見て、スポーツを通じて社会問題になっているテーマを考える T)では今回のラグビーの内容で、「スポーツを通して違いを超える」ということができたということがわかったね。これをスポーツの好事例と考え、そうではない部分もあります。次の大会の写真はオリンピックのパリ大会の写真です。 ・これ絶対ファールじゃないやん ・これで負けるとかかわいそう T)この試合が終わった後でも大きな論争となりました。みなさんはこのことについてどう思いますか？ ・開催国びいき。審判賄賂受け取っているわ。 ・やり直したほうがいい。抗議する ・本気で頑張っている人に失礼 ・終わったことはしょうがない。 T)では次の資料を見てください。知っている人もいますが、この後この4つの視点から考えましょう。審判のSNSには抗議の内容や誹謗中傷が殺到しました。 このような状況で、SNS上での誹謗中傷や抗議がどのような影響を与えるか、またそれに対して私たちがどのように対応すべきかについて考えてみましょう。皆さんはどのように思いますか。 1) SNS上での誹謗中傷の影響 ・審判の人が追い詰められてできなくなる ・審判の人が自殺するかも ・デジタルタトゥーが残る ・他の大会の審判がしにくくなる 2) 抗議の正当性 ・SNSではなくてIOCに言う ・VARを使う ・行き過ぎた抗議はダメ 3) スポーツマンシップの重要性 ・終わってから文句を言わない	見せた後写真の概要を説明する ワークシート3記入 記入後、グループで共有する 写真③について追加情報を提示(資料③を見せる)する グループで話し合う。 そのあとワークシート4を記入	写真③ バスケ男子「16.4秒の悲劇」 資料③ 3つの SNS の誹謗中傷コメント ワークシート3
----------------------	---	--	--

	・仲良く礼儀正しい ・お互いいい気持ちで終われるようにする ・第3者は口を出さない 4) SNSの使い方 ・いやなコメントをしない ・人種のことや性別の差別的なことは書かない		
まとめ (5分)	グループの意見を聞きこのグループ内でも様々な意見があったと思います。全員全く同じというグループはありましたか？ ・全員ではないけど何人かは同じ意見があった ・ほぼ一緒 異なる意見や価値観を持つ人と対話する際に、その人と尊重し、受け入れることはできましたか？ ・受け入れられる ・状況によって、ついつい誹謗中傷などしてしまうこともあるかもしれない この一つのテーマでお互いの意見を尊重することも違いを超える一つです。最後に振り返りシートに最後に気づいたことを書きましょう。	個人で記入	ワークシート4

9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法)

スポーツを通じて、国籍や文化の違いを超えて協力し合うことの重要性を理解し、表現できる。
 パリオリンピックの課題事例を通じて、スポーツが持つ社会的な価値(多様性・共生・公平性)を理解し、表現できる。
 (グループ討議での発言、振り返りの記述)

10. 学習方法および外部との連携

1. アクティブ・ラーニングの導入

グループ討議・協働学習を通して、ラグビーとオリンピックの事例を比較し、「違いを超える」ために必要なことを話し合う。また、授業後に自分の気づきや考えを記述することで、内省を促す。

2. ICTの活用

- ・映像資料(試合映像、インタビューなど)を活用して臨場感のある学びを提供。
- ・タブレットやPCを使って意見共有を行う。

11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み

今まで国際理解教育を大々的に取り入れたことはないので1からのスタートである。学年では、9月～10月の期間中に道徳や保健分野でも取り入れる予定である。まずは、学年で取り組みを入れて教材等を他学年に紹介し、来年度は計画的に総合的な学習にも取り入れたい。その際、JICA 関西との交流事業なども取り入れられたらと考えている。また、次年度から神戸市では部活動が廃止となり、地域移行クラブになる。そこで JICA 関西の場所を拠点に、国際理解を学べるクラブを立ち上げる。そこでは子供たちの学びの場だけではなく、教員の学びの場にもしていく予定である。そこで教材の共有なども積極的に行っていきたい。

【自己評価】

12. 苦勞した点

- ・自身の国際理解という点での理解不足を痛感した。
- ・指導案は、第1案でパリオリンピックのボクシング女子の内容も盛り込むことを考えていたが、トランスジェンダーの見解というところでも、こちらの認識不足があったと感じた。結局、時間の関係でその内容は取り入れないことにしたが、人権にかかわることを題材にするときに、発問の仕方などで逆に偏見を生んだりしてしまうので、安易な発言

はできないので、取り上げる際は注意しないといけない。

・本指導案の作成にあたり、大津先生から多くのご指導と添削をいただきました。その過程で、私自身が「多様性」や「公平性」といった言葉を、安易に用いてしまいがちであることに改めて気づかされました。言葉の選び方一つひとつに配慮し、より適切かつ慎重に表現することの重要性を学ぶことができました。

13. 改善点

前半にラグビーワールドカップ、後半にオリンピックのバスケットボール日本代表戦の内容を行ったが、どのクラスもどうしても後半の内容が印象深かったので、最後の振り返りも、後半の内容に集中してしまった。やはり、審判のジャッジなど自身の身近なことから考えやすかったこと、「なんで」「どうして」という題材だったので興味をもちやすかったからだと考えられる。また、ワークシートもこちらが思っている以上に、毎回の課題でワークシートに一生懸命書いていたので、最後の振り返りの時間が個人で書いて終わってしまった。「このような状況で、SNS 上での誹謗中傷や抗議がどのような影響を与えるか、また、それに対して私たちがどのように対応すべきかについて考えてみましょう。皆さんはどのように思いますか。」という問いに対して、4つの視点で考えさせたが、2つの視点にしたらもう少し時間を短縮できる。

14. 成果が出た点

・やはり、これだけ添削していただき、何度も見直した指導案をすると、どのクラスもグループワークでも差があるものの、とても積極的に話をしている様子だった。普段であれば、人に意見を伝えることより自分で書くほうが話し合いをしなくてすむ、と考える生徒でも積極的に発言していた。

・体育会が近いということもあって、前半のクラスが仲良くなるためにという発問では、子どもたちが楽しそうに自分たちのことに置き換えて話していた。この後に、実際に自分たちで話し合ったことを実現させられる機会があったら、もっと良かったと思う。このグループワークで積極的に話し合いをしていたクラスは、体育会練習中の作戦を考える場面や、バスケットボールの授業の中で、1学期よりも協力して話し合えるようになっている。

・はじめに授業を行ったクラス(4組)には、日本人の父とタンザニアの母がいる生徒がいる。普段から肌の色のことでクラスの生徒からからかわれることがあり、その生徒が怒りを抑えていることもあった。今回の授業でも、本人や周りにはどんな反応になるかと心配していたが、授業内でとても積極的に話しており、いつもからかっている生徒も興味深そうに話を聞きながら会話をする場面が見られた。本人も普段は家族の話などあまりしないが、もう一つの母国の話を、授業後の休み時間にも生き生きと話す様子が見られた。今回の授業における最大の成果は、外国にルーツを持つ生徒が、これまで日常的に感じていた偏見や差別的な場面について、国際理解教育の授業を通じて自ら向き合い、結果として自己肯定感を高めることにつながった点である。また周囲も理解が深まり、差別的な発言ではなく興味関心につながることだ。このような場面をみられたことが、一番やってよかったと思えた点である。

15. 学びの軌跡(児童生徒の反応・感想文・作文・ノートなど)

1組) 振り返りと感想(後半のバスケの内容の意見が多かった)

・楽しくプレーできるようにルールっていうのは1度したことはも戻れないからルールの下で楽しむ。そして審判も間違ってしまうことは誰にでもあるから必要以上に責めない。

2組) 振り返りと感想(ラグビーの外国人が多いということをはば知らないクラスだったのでその意見もあった)

・ラグビーは日本代表に外国人がいてもいいことがいと知らなかった。グローバルミーティングなど自発的にチームメイトがしているのがいいと思った。そういうとチームは強いチームを生んだんだと持った。

3組) 振り返りと感想(自分の審判の経験から相手の気持ちに立っても考えるという意見が多かった)

スポーツは人と人との関係を差別なく結ぶことができ、それによって誰かと何かを達成することや喜びや絆が芽生えるが、その人間関係のなかでよくないことが起こってしまうこともあるのでお互いいい気持ちでいられるような関係を結びたいです。

・写真をみたときはファールちゃうやん。日本チームかわいそうだと思ったが、自分がテニスの審判をしたときに、やっぱり審判も一生懸命やってもうまいかないこともある。もう少し別の目線からも考える必要があると思った。

・スポーツは差別なく結ぶことができればそれによって誰かと何かを達成することができる

・今回の授業を受けて国の文化や違いを超えてみんなで楽しくそれぞれの高みを目指しスポーツをすることが人と人がつながるために大切なことだと思った。

4組) 振り返りと感想(一番スポーツに興味を持っている生徒が多く、世界情勢などにも興味があり話し合いが盛り上がったクラス)

・バスケで審判のことなどで炎上しすぎると国際問題に発展し、最悪戦争が起きるかも。何事でもほどほどが大切だが、止めるためにVARなどを積極的に導入したり、SNSへの規制を積極的にするべき

・外国人選手をいれることで日本人の活躍のチャンスも減るかもしれないと思ったが、日本人選手も刺激になって強くなると思う。また、さまざまな国の人と協力して同じ方向に向かうことができることはスポーツのいいところだと感じた。

16. 授業者による自由記述

・この授業のほかに道徳で授業も国際理解教育を行った。もっと生徒に世界のことを知ってもらう機会を作りたいと感じたし、自分自身も一緒に学びたいと思った。

・現在の日本の社会情勢では、外国人に対する風当たりが強い傾向が見受けらる。そのため、来年度以降も多文化共生や国際理解教育について積極的に発言していくべきか、慎重に考える必要があると感じている。逆に考えると、そういう時こそ誤解偏見を減らすためにもすべきともいえる。もっと年間計画から学年全体に取り入れたいと思った。そのためには同じ職場の教員にどう理解を深めていくかが課題であるので、1月2月の研修で話し合いたい。

【参考資料】

- ・ラグビーW杯が日本にもたらしたもの 経済効果分析&大会成果分析レポート - ラグビーリパブリック - Page 2
- ・パリ五輪『16・4秒の悲劇』…バスケット男子日本に何が起こっていたのか!? 河村勇輝は嘆き、相手監督も驚いた証言でひも解く“世紀のファウル”:中日スポーツ・東京中日スポーツ
- ・【男子バスケット】河村ファウル判定問題、止まらぬSNS「誹謗中傷被害」女性審判に続きFIBA インスタも被害 - ライブドアニュース
- ・<https://www.bbc.com/japanese/articles/c4ngn82wgxpo>
- ・現代国際理解教育事典改定新版(2022/3/6 明石書店 国際理解教育学会著)
- ・ラグビーワールドカップ 2019™日本大会 大会報告

国際理解教育/開発教育 学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	野瀬 晴佳	学校名	大阪市立今津中学校
教科(科目)・領域	総合的な学習の時間	対象学年(人数)	2年5組(37名)
実践年月日もしくは期間(時数)	2025年10月 ～ 11月(3時間)		

【実践概要】

1. 単元名(活動名): すべての人が輝く多文化共生意識のデザイン					
2. 実践する教科・領域 総合的な学習の時間	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 単元の目標(評価規準を意識して設定) 持続可能な社会の実現に向けて、多様な文化や背景を持つ人々への理解と尊重を深め、無意識の偏見に気づきながら、誰もが安心して幸せの中で暮らせる地域社会をつくるために主体的に行動することができる					
5. 単元の評価規準	①知識・技能	・多文化共生(国籍や民族などバックグラウンドの異なる人々が、互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと)の意味を自分なりに理解し、自分ごととして捉えることができる ・日本で暮らす外国人や訪日外国人の生活課題についての具体的な事例を説明できる ・資料やインタビュー内容をもとに、情報を正確に読み取りまとめることができる			
	②思考・判断・表現	・自分の無意識の偏見やマイクロアグレッションについて振り返り、多文化共生の課題として捉えられる ・多様な文化背景を持つ人々の立場や困難に対して共感的に考え、課題解決のための具体的な方法やアイデアを創造することができる ・班活動や発表の場で、自分の考えや意見をわかりやすく伝え、他者の意見を尊重しながら議論に参加することができる			
	③主体的に学習に取り組む態度	・多文化共生の大切さを理解し、自分の偏見に気づくことに前向きに取り組む態度が見られる ・地域社会で外国人のためにできることを考え、自発的に行動しようとする意欲や責任感を持っている ・他者と協力しながら学びを深め、共により良い社会をつくる姿勢を持っている			
6. 単元設定の理由・単元の意義 【単元設定の理由あるいは単元の意義】 現代社会は、国籍や文化、言語、価値観が多様に混ざり合う多文化共生社会である。本校がある大阪の外国人居住者の増加や訪日外国人の多さ、さらに今年は大阪・関西万博が開催され、国際色豊かな地域としてますます多文化共生の意識が求められている。 本単元では、生徒が自分の中にある無意識の偏見やマイクロアグレッションに気づくことから始め、多様な文化背景を持つ人々が日本で直面している課題や困難を学ばせたい。この学びを通じて、生徒一人ひとりが地域の一員として、多文化共生社会を実現する具体的な行動を考え、実践する力を育むことを目指す。 また、SDGsが掲げる「誰一人取り残さない社会」や「不平等の解消」「平和で公正な社会の実現」と密接な関連が					

ある。多文化共生の理解と実践を深めることで、生徒達がグローバルな視点と地域社会への責任感を養い、持続可能な社会づくりに主体的に関わる態度を身につけることを期待している。

【児童／生徒観】

小学校からSDGsの学習を進めており、中学入学時にはその意義や目標項目の基本的な内容は理解できている生徒が多かった。1年次は、更にSDGsの理解を促したり、個人の興味関心を深めるための学習を行った。その中で教師海外研修で得た知見を活かし、ペルーの日系社会や発展途上地域のことに目を向けた。また、南アフリカにルーツのあるゲストティーチャーより民族問題や難民問題について学ぶ機会もあった。NHK『SDGsかるた』に応募し、各々の理解を深めたり周りに広めたりすることもできた。このような学習を進める中で、今世界が抱える課題を自分ごととして考え、日本に暮らす自分達が世界のためにできることを考え始める段階にある。

【教材観】

今回は多文化共生についてJICAリソースを使ったり、日本に住む外国人の生の声を聞いたりして、生徒達がリアルな感覚を伴って学習を進められるようにしたい。多文化共生をテーマにした理由は、教師海外研修で訪れたペルーの日系社会や、地球の反対側で日本のアニメや漫画に人気があることについて、生徒達が大きな興味関心を抱いたことである。遠く離れた国で日本のルーツを持つ人々が様々な苦労や葛藤を重ねて、長きにわたり生活を紡いできていることや、私達の普段の何気ない暮らしの中での習慣や慣習が大切にされていることに感銘を受けていた。ある日系ペルー人の方が、幼い頃に日本にやってきた時の心の葛藤や、周りの日本人からの言動に傷ついたことなどを語り、生まれ育った環境の言葉や文化が違う中で生活することの難しさを感じていた。将来的に、生徒達も他の国や地域で暮らす可能性も決して低くはなく、また実際に大阪でも様々な国の人が暮らしている。その中で、地球上のあらゆる場所で誰もが心豊かに幸せに暮らすことのできる共生社会を創造する必要性を学び、実生活で意識的に行動に移せることを目的として教材を選んだ。

【指導観】

生徒一人ひとりの考えや価値観を大切にできるよう指導していきたい。決まりきった正解を探すのではなく、一人ひとりが自分の考えを持ち、各々の範囲で意識変革を促せるようにしたい。生徒達が日本で生活している時に外国人と共に暮らす上で必要となる意識を身につけたり、逆に外国で自分が外国人として暮らす時に必要となる意識を学んだりすることを通して、あらゆる角度からの視点を持ち、様々な状況に置かれた人々の立場になって考えることのできる共生社会の創り手となることを目指したい。

7. 単元計画(全 3 時間)

時間	ねらい	学習活動	資料など
1	・開発途上国の文化や生活を知り、異文化に対する理解を深める	ゲストティーチャー(エクアドル海外協力隊元隊員)の話を聞く ・エクアドルの学校の様子や、エクアドルの子ども達との関わりについて ・ダンスを通じたコミュニケーションについて ・「エクアドルという国の人」「発展途上国の人」というラベリングをせずに、相手を一人の個人として関わることで、深いコミュニケーションが実現できたことについて	JICA国際協力出前講座
2 (本時)	・マイクロアグレッションを知り、違いを尊重するコミュニケーション力を身につける	シチュエーションカードを使って会話する	JICA資料「多文化共生ってなんだろう？」
3	・共生に向けた「自分の言葉・行動」を考える	ALTのインタビュー動画を視聴する JICA教材「マイノリティーの心情理解」を視聴する ロールプレイング	JICA教材「マイノリティーの心情理解」

8. 本時の展開(概略)

本時のねらい: マイクロアグレッションを知り、違いを尊重するコミュニケーション力を身につける

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
-------	-------------------	-------------	--------

導入 (10分)	○本時の説明をする 「先日はJICAの海外協力隊の方のお話を聞き、開発途上国の文化や生活を知り、私達の生活の当たり前が当たり前ではない世界があるということがわかりました。改めて確認すると、多文化共生社会とは、国籍、民族、文化などの違いにかかわらず、すべての人が個人として尊重され、社会の一員として対等な関係で共に生き、能力を十分に発揮しながら自己実現できる、創造的で豊かな社会のことでした。」 「そのような社会を創っていくために、私達ができることは何か。一人ひとりがどんな意識や気持ちでいることが大切か。今日はそのことを考えていきましょう。」	多文化共生社会 国籍・民族・文化などの違いにかかわらず すべての人が個人として尊重され、社会の一員として対等な関係で共に生きる 	
展開 (30分)	○自分の中のアンコンシャス・バイアスに気づく 「次の文の人物は女性か、男性か、どちらだと思いますか」 Aさん→女性 「14歳からボクシングを始め、17歳でプロデビュー。現在まで26戦18勝。ボクシングジムも経営中。」 Bさん→男性 「趣味はお菓子作り。家族の誕生日にケーキを焼いてお祝いしている。」 「ボクシングをするのは男性だと無意識に思い込んでいませんか？」 「お菓子作りや料理が得意なのは女性だと思い込んでいませんか？」 「私達は気づかないうちに物事を判断してしまうことがあります。」 「これらの無意識の偏見や思い込みのことを、アンコンシャス・バイアスといいます。その偏見が具体的な言葉や態度に表れた無意識の差別的・否定的な言動を、マイクロアグレッションといいます。」 「最初に私達の持つ性別についてのアンコンシャス・バイアスに気づきました。それでは、国籍や民族についてはどうでしょう。普段の生活で外国人の方を見かけることがあったり、友達がいたりすると思います。実際に大阪には2024年12月現在で 189, 281 人住んでいます。皆さんの住むここ、鶴見区では 2,426 人が住んでいます。色々なルーツのある人達と関わることは特別なことではありません。私達の中の無意識の思い込みを見ていきましょう。」 ○「シチュエーションカードを使って、相手の立場に立って考えてみましょう」 ①「日本語上手だね！どのくらい勉強したの？」 ②「名前読めないからニックネームをつけてもいい？」 ③「なんだかそのお弁当のおいきついね」 ④「イスラム教では断食をするでしょ？大変そうだね」 ⑤「なんでそんな服を着てるの？」(民族衣装や宗教的な服装) ⑥「え、夏休みに帰省しないの？意外だね」 ⑦「外国人は日本のマナーを知らないよね」 ⑧「見た目ですぐに外国人とわかるよね」 ⑨「どこの国の人？」→「日本人です」→「いや、本当の国籍を教えてください」 「これらの言葉は言われた人にとってどう感じると思いますか？」 「どんな人が言われている可能性がありますか？」 →予想される生徒の意見 ・①日本で生まれて日本語で育っている人。外見は外国人に見えるが、国籍も日本。 ・②本当の名前で呼んでほしいのに… ・③自分の国で大人気で大好きな料理なのに、自分の国を否定された気分	説明をしすぎずに、生徒が自分自身の内側に目を向けられるようにする。 大阪市の外国人住民数は年々増加していることを押さえる 班で活動を行う 日常会話の中で「ほめているつもり」「冗談のつもり」で使っている言葉が人を傷つけている場面があることに気づかせる	大阪市の外国人住民数の推移(グラフ) ・シチュエーションカード ・ワークシート

	・④大変なことではないのにな。変なことに言われてショック。 ・⑤なんで？聞かれる意味がわからない。みんながスカートやズボンをはいているのと同じなのに。みんなと違うから聞かれるのかな。 ・⑥本当は国に帰りたいけど…費用や治安の問題で帰りたくても帰れないのに… ・⑦そういう人もいるかもしれないけど、一括りにして外国人と言われたくないな。自分はマナーに気をつけているつもりなのに。 ・⑧あらためてみんなと違うことを強調されると、壁を作られている気持ちになってしまう。 ・⑨日本で生まれて日本語で育っている人。外見は外国人に見えるが、国籍も日本。 ①「日本語上手ですね！ どのくらい勉強したの？」  ②「名前読めないから ニックネームつけてもいい？」  ⑧「見た目ですぐに外国人と わかるよね！」  「相手への配慮がある言い方を考えてみましょう」 →予想される生徒の意見 ・①「あなたの日本語とても聞き取りやすいね」 ・②「名前の読み方を教えてくれる？ちゃんと覚えたいんだ」 ・③「いろんな国の料理を知るのは面白いね。どんな料理か教えてくれない？」 ・④「イスラム教の断食について教えてくれない？」 ・⑤「その服素敵だね。何か意味が込められているの？」 ○全体で共有 「それでは班ごとに発表してもらいます。それぞれ、自分達とは違う意見もあるかもしれないのでシェアしましょう。」	「誰でもやってしまっていることがあ る」ことを伝える 率直な意見を出せるような雰囲気を作る 言い換え＝我慢ではなく、「伝えたいことを相手の立場も考えて表現すること」であると伝える	
まとめ (10分)	○まとめ 「ワークシートに気づいたことや感じたことを書いてみましょう」 「自分達の考えや、他の班の発表を聞いてどんな気づきがありましたか？これからの生活でどう活かしていきたいですか？」 ・自分達の何気ない考えや行動が、人を傷つけている可能性があることを知ってショックを受けた。 ・自分にとっては普通の言葉でも、相手にとってはナイフになり得ることを知った。 ・自分の感覚が他の人と同じだというのは思い込みだということがわかった。 ・様々な文化の良いところを知ろうとする態度を持ちたい。 ・相手の捉え方に配慮しながら、違う文化の素敵な点を見つけてそれを伝えたい。 ・アンコンシャス・バイアスについて異文化の人と話す機会を持ちたい。 ・傷つけるのを恐れて異文化の人達と関わるのを避けるのではなく、自分のアンコンシャス・バイアスに気づく意識を持ちながら積極的に関わってみたい。 ・まずは仲良くなりたい。 「これからの生活で皆さんがどんな意識で暮らしていきたいか、考えを共有しましょう。」 (何人かに発表させる)	 宣言文を作ろう わたしたちは多文化共生社会を作るために これらの意識でいることや 行動をとることを宣言します！ 	

	「これから各班で宣言文を作ってみます。これからの生活で皆さんがどんな意識で外国の方と関わったりするか、具体的にまとめてみましょう。」	共生社会を自分ごととして捉え、普段の生活で意識して、小さなことから行動に移せるよう促す。	
	「班の代表の人は各班の宣言文を発表してください」		

9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法)

- ①日常生活の中の無意識の偏見やマイクロアグレッションについて気づき、理解することができた。
- ②自分の無意識の偏見やマイクロアグレッションについて振り返ることができた
- ③地域社会で外国人のためにできることを考え、自分から積極的に行動しようとする意識を持つことができた

10. 学習方法および外部との連携

- ・JICA 国際協力出前講座
- ・学習者同士の交流

11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み

○JICA国際協力出前講座

ゲストティーチャー(エクアドル海外協力隊元隊員)にお話頂いた。JICAからの講師決定の連絡以降は、講師と教師の間で直接やり取りができた。そのため、今回の取り組みの全体像と、教師が昨年教師海外研修に参加した経験から途上国や日系社会に関する生徒の学習履歴を細かくお伝えすることができた。また、2月に行われたワン・ワールド・フェスティバルで登壇されていた講師を教師が偶然拝見していたことから、国際協力・交流の話題で意気投合することができた。講師と教師が直接やり取りできることで、講座の充実度が上がったように感じる。



生徒の中には、海外に興味があったり、将来国際協力に関わりたいという人もいる。そのため、今回の協力隊元隊員からの実際の経験に基づくお話は、生徒にとって大変印象深い様子であった。また、対面での講座を希望したことも、大変有意義であった。講師のエネルギッシュな雰囲気や、生徒が海外のダンスを体験できたことは、対面ならではの空気を感じられて、生徒の学びが更に深まった。今の生徒達はインターネットを通じて様々な活動をしている人のことを知ることができて、中学生が海外で活動している人に実際に会うという機会は多くはない。その意味でも、今自分の目の前で話している人が実際に海外に行って活動していたという現実が、普段はできない貴重な学びになったようだった。また地域や家庭に対して、学校ホームページで講座の報告をし、生徒が地域や家庭で国際理解について発信するきっかけを作ることでもできた。実際に講座の後に友達や家の人と講座の内容について話した人やこれから話そうとしている人の割合は52%であった。

○学習者同士の交流

シチュエーションカードを使って、班活動を行った。今回の主な目的の一つに、「自分の当たり前が他者の当たり前ではない」ことに気づくというものがあり、そこに向かう過程で他者との交流が不可欠であると考えた。自分にとっては何気ない一言や行動が、他者にとっては傷ついたり、心を閉ざしたりする原因になるかもしれない。今回は多文化共生、とりわけ外国人との関わりを取り上げたが、日常の学校生活での人間関係にも活かせると思う。これまでにクラスの中でも「自分は言われても嫌ではないから、相手もそうだった」ことによる人間関係のトラブルがあった。これまでの生育環境や家庭環境など、様々な背景を持つ同士が一つのクラスという社会で生活していくことの大変さのようなものを実感している生徒も少なくないと思う。その中で、周りの生徒の価値観を知ることや、他者との比較の中で自分の価値観を知ることが、今後の学校生活に活かすことができるという点で、有意義だったと考える。



【自己評価】

12. 苦労した点

外国人がアンコンシャス・バイアスを感じるシチュエーションを考えることと、その状況がなぜアンコンシャス・バイアスとなり得るのかという理由を考えることが難しかった。自分の中の無意識の偏見は、「無意識」であるからこそ気づきにくいものだ実感した。このことは生徒に気づいてほしいことでもあるので、授業者自身が実感できたことは大きな収穫であると思う。実際、生徒も難しく感じていたようだった。授業者側は予想される意見を考えてはいたものの、生徒に考える手立てとなる有効な助言ができたかは定かではない。また、外国にルーツを持つ生徒の中から「自分は何とも思わない。」という意見があり、対応に困る場面もあった。そこで、同じ言葉でも多様な受け取り方があり、嫌な気持ちになる人もいる、と伝えたが、それも価値観の押し付けになっている気がした。

また、この学びを実際の行動につなげるという目的のため宣言文を書かせたが、当たり障りのない内容に終始した印象がある。個々の意見が反映された宣言文を期待していたが見受けられなかった。

13. 改善点

なぜそのシチュエーションで、アンコンシャス・バイアスを感じるのか、またどういった言い換えをしたらよいか、ということについて、1つ例を挙げてクラス全体で考え方を共有するのは有効な手立ての一つと考えられる。まず例を示すことでスムーズな話し合いに入れるかもしれない。また、他の班で出た意見を共有する時間を取りたい。班活動を行う際には、それぞれの班で完結させるのではなく、全体場で共有することを意識したい。今回は時間の関係上省いたこともあるので、シチュエーションカードを4枚か5枚程度にして、問い返しを深める時間の余裕を持ちたい。

また、価値観の押し付けにならないようにするために、良い考え方・悪い考え方というものではなく、物事をどう捉えるかも自由であるということを生徒としっかり確認しておく必要がある。自分の考えとは違う他の考えを想像することを練習する場であるということを説明しておくことで、「自分は何とも思わない」が他の人は違う考えを持つかもしれないということに想像力を働かせられるようになると期待する。

最後に、宣言文の内容が一般的かつ表面的なものにとどまったことについて考えたい。アンコンシャス・バイアスの導入部分で、自分事として捉えさせる工夫が必要であった。日常生活の中で、生徒自身がマイクロアグレッションによって傷ついたり、傷つけられたりし、葛藤やジレンマを感じた経験などを思い起こさせることで、自分事として捉えさせたい。

14. 成果が出た点

今回、テーマを「すべての人が輝く多文化共生意識のデザイン」とした。生徒は大阪・関西万博で世界の人々や文化と触れ合う機会が多く、世界への興味関心が広がった1年だった。また、昨年の教師海外研修での学びも印象に残っており、生徒との日常会話の中でペルーの話題があがることもある。しかし、生徒達はまだ世界のことを自分事として捉えることが難しい印象があったため、SDGs学習の取り組みを通して、少しでも世界と生徒との距離を縮めようとしてきた。今回の生徒の感想を見ると、実際に自分達の行動を考えることによって、外国の方達との交流へのハードルが下がった印象を受ける。成果が出たと感じられる点として4点にまとめた。

①言葉の壁、様々なコミュニケーション

コミュニケーションの方法は言葉だけではないことに気づいていた。英語が話せなくてもダンスやスポーツなど様々な方法で心を通わせることができる。生徒の中には、今やっているスポーツやピアノなどを通じてコミュニケーションをとってみたいという意見もあった。このように、自分ができる方法で他者と積極的に関わろうとする意識が芽生えたことは大きな成果の一つだと考える。

②国際理解・国際協力の意識

近年、国際協力や支援の認識が発展途上国に向けて「やってあげる」というものから、「共にやる」という考えが広がっている。今回は日本を多文化共生社会にするためにできることを考えるという課題にしたため、「やってあげる」という意見が多くなってしまったという予想をしていたが実際は少なかった。自分がこうしたいとか、お互いにこうしたい、といった意見が多く、同じ目線で異文化を捉えていることがわかった。異文化を単に自分達とは異なるものとして捉えるのみでなく、そこから一歩進んで、まずは正しく知ろうとすることや、寄り添おうとすることに意識が向いていた。

③自己理解と日常の人間関係へ

自分の中のアンコンシャス・バイアスに気づき、今まで自分が知らなかった自分に出会っていた。日常の人間関係でも相手に対して無意識の思い込みを持っているかもしれないと気づいたことで、関わり方を改めていこうとする意見もあった。また、自分の意図とは違う意味で相手に伝わることから誤解が生じ、人間関係のトラブルに発展することもある。言葉の意味や使い方を改めて考えたことで自分や他者を理解しようとする態度が身につく、人と人が関わるうえでの大切なことに思いを寄せられていた。

④行動への一歩

様々な状況に置かれた人の立場に立って、いろんな受け止め方をする人がいるということに想像力を働かせられるようになった。日常の中でも、自分の当たり前が他者の当たり前とは違う、ということを念頭に置き、人間関係を育んでいきたいという前向きな姿勢が見られている。将来海外とつながる仕事がしたいという思いが出てきた生徒や、来年のクラス替えの時に自分から話しかけてみたいという生徒がいた。今回の学習が何らかの形で生徒に影響を与え、行動につながることを期待している。

15. 学びの軌跡(児童生徒の反応・感想文・作文・ノートなど)

【JICA国際協力出前講座】

<意識の変容が見られる生徒の感想>

- ・先入観で人を決めつけず、どの国の人ともコミュニケーションをとることが大切だということがわかりました。
- ・暗い感じの人が多いのかなと思っていましたが、エクアドルには陽気な人がたくさんいることがわかりました。
- ・外国の人は見た目がこわいと思っていたけど、優しい人や陽気な人達がたくさんいることを知った。
- ・今までは言葉が通じないから外国の人と関わることに興味がなかったけれど、今回の話を聞いて、いろんな人と関

わることに興味を持ちました。

・今までは貧困な国などには支援が必要だと思っていたけど、支援だけではなくて心や文化のつながりも大切なことだとわかりました。これからは物事を広く考えてみようと思います。

・今までは貧しい国の人に興味がなかったが、自分も何か力になりたいと思った。

＜今後の展望が見られる生徒の感想＞

・初めて会った人でも、見た目で判断せず喋ってみないと何もわからないから、ちょっとでも喋ってみようと思った。来年のクラスでは自分から喋りかけてみます。

・もっと外国の方との交流も増やしたい。

・来年、新しいクラスで誰かと友達になりたい時、第一印象だけで、あの子とは友達になれないと決めるのではなく、話しかけてみることを心がけようと思いました。

【本時(アンコンシャス・バイアス)】

＜気づきや意識の変容が見られる生徒の感想＞

・自分も無意識に偏見を持っていた。偏見があるから言葉も無意識に差別的になっていることがあった。

・無意識に思い込んでいることが自分で思っている以上にあった。

・一人ひとりの考え方や感じ方が違って、人それぞれ個性があつていいなと思いました。

・「意外」などの差別感があると、相手が嫌な思いををすると思いました。

・言い換えで、言葉がやわらいでいるところもあったけど、遠回しに嫌味を言われている気がするのに気づいた。

・相手が嫌にならないようにする話し方はたくさんあると気づいたため、話し方が考えた方が良かったと思いました。

・自分が発する言葉が人を傷つけていたかもしれないという気づきがありました。

・他の班の意見で「あなたはとても話しやすいです」という意見がいいなと思いました。

・他の班の発表を聞いて相手を敬うというワードが多いなと感じました。

・自分がいいと思って発言したのがよくなく思われている可能性があることに気づきました。

・人には見た目で判断しきれない個性があることに気づいた。

＜今後の展望が見られる生徒の感想＞

・これからは人を傷つけるような言動をしないように意識して行動できると思う。

・自分が発する言葉が人を傷つけていたかもしれないという気づきがありました。

・見た目からの情報で話すのではなく、相手のことを知ってから、ふみこんだ会話をする。

・勝手な偏見や考えを改めてどうなんだろうと考え直し、色々な人との交流を深めること。

・宣言したとおり、見た目で判断せず文化を尊重しあうことは大切だと思うのでこれから意識しようと思う。

・思ったことをなんでも口に出さないようにしようと思いました。

・色々な方への配慮を忘れずに、これから今回の学習を思い出して関わっていこうと思いました。

・見た目で判断して、外国の方だから日本語がしゃべれないと決めつけて、かかわらないようにするんじゃなくて、聞いてみたりするようにしようと思いました。

・外国の人と文化が違うのは当たり前なので、嫌な気持ちになるような指摘をしないようにしてみんなが住みやすい社会になるように意識したいです。

＜宣言文＞「わたしたちは多文化共生社会を作るために()ことを宣言します！」

・見た目で判断せず文化を尊重しあう

・お互いの気持ちを理解し合い、平等に接し合う

16. 授業者による自由記述

今後の自分自身の課題や、目指す子どもの姿などが見えた。今回は、生徒から表面上の当たりさわりのない意見が多く見られたが、今後は生徒達の心の中にある率直な意見を引き出す力を身につけたい。生徒一人ひとりの心の葛藤のようなものを深く掘り下げて浮かび上がる正直な思いこそが実生活に活かせるし、生きる力につながると思う。誰が考えても同じ、綺麗な意見だけではなく、個々の生まれ育った環境や価値観などを踏まえた、その人だからこそ表現できる生きた意見を引き出すことを目指したい。

とはいえ、今回の学びを通して生徒の中で「すべての人が輝く多文化共生意識のデザイン」の土台が形作られ始めたと思う。これから土台を大きくしっかりとしたもの育てていく素地ができた。多文化共生意識の決まった正解はなく、一人ひとり違うものである。一人ひとり違う意識をみんなの中で育てていくことの過程が、多文化共生社会の実現なのだということを、今回生徒から教わったような気がする。

【参考資料】

・『国際理解教育 地球市民を育てる授業と構想』大津和子

・JICA「多文化共生ってなんだろう？」

・大阪市「大阪市の外国人住民数統計のページ」<https://www.city.osaka.lg.jp/shimin/page/0000431477.html>

・福岡県女性の活躍推進ポータルサイト https://joseikatsuyakuouentai.pref.fukuoka.jp/unconscious_bias/

国際理解教育/開発教育 学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	森田 幸樹	学校名	西宮市立塩瀬中学校
教科(科目)・領域	総合的な学習の時間	対象学年(人数)	1年5組(33名)
実践年月日もしくは期間(時数)	2025 年 11 月～12 月(6時間)		

【実践概要】

1. 単元名(活動名): 世界とつながる一步:聞く・話す・調べるを通した、本物を感じる国際交流				
2. 実践する教科・領域 総合的な学習の時間	3. 学習領域			
		1	2	3
	A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生
	B グローバル社会	相互依存	情報化	
	C 地球的課題	人権	環境	平和
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加
4. 単元の目標(評価規準を意識して設定)				
○生徒が JICA による国際協力の取り組みや異文化の実態について学ぶことで、世界には多様な価値観や課題が存在することを理解する。				
○兵庫県に住む海外ルーツの方との交流を通じて、身近な場所にも国際的なつながりがあることに気づき、実際の対話を通して異文化への関心や共生社会への態度形成につなげる。				
5. 単元の評価規準	①知識・技能	国際協力や異文化理解に関する基本的な情報を、JICA 講座や交流準備を通じて正しく理解し、交流に向けた質問づくりや役割分担などの活動に活用することができる。 - 生徒が講座の内容を整理し、質問や資料に反映できているか - 異文化に関する語彙や表現を適切に使えているか		
	②思考・判断・表現	異文化や多様な価値観に対して自分なりの考えを持ち、交流の場面で相手の話を受け止めながら、自分の言葉で問いかけたり、感じたことを振り返りで表現したりすることができる。 - 対話の中で、相手の話に反応しながら質問や感想を述べているか - 振り返り活動で、自分の気づきや考えを具体的に言語化できているか		
	③主体的に学習に取り組む態度	世界や地域の人々に関心を持ち、「もっと知りたい」「自分にもできることがあるかもしれない」と感じながら、交流準備や振り返り活動に意欲的に取り組む姿勢を示すことができる。 - 質問づくりや交流準備に積極的に関わっているか - 振り返りで、今後の学びや行動につなげようとする姿勢が見られるか		
6. 単元設定の理由・単元の意義				
【単元設定の理由あるいは単元の意義】				
日本社会は今、国籍や文化の異なる人々と共に暮らす時代へと移行している。兵庫県西宮市においても、外国籍住民や海外にルーツを持つ子どもたちが地域に定着し始めており、今後、学校生活や地域活動の中で異文化と出会う機会が増えていくことが予想される。				
本単元では、JICA 海外協力隊員によるオンライン出前講座と、兵庫県国際交流員(CIR)との交流活動を中心に				

13

森田 幸樹

西宮市立塩瀬中学校・1年・総合的な学習の時間

据えている。これらの実体験に基づく学習活動は、生徒にとって異文化理解の入り口となり、国際社会の中で生きる自分自身の在り方を考える契機となる。JICA 隊員からは、日本人が海外でどのように働き、現地の人々と関わっているのかを学び、CIR との交流を通じては、日本に住む外国人がどのような思いや背景を持って生活しているのかを知ることができる。これらの学びは、生徒が「国際理解」を単なる知識としてではなく、身近な人との関係性の中で実感を伴って捉えることを可能にする。

中学 1 年生という発達段階において、こうした体験的な学習は、他者への共感や尊重の姿勢を育み、共生社会の担い手としての意識を芽生えさせる上で極めて有意義である。限られた時間の授業の中であっても、実際に人と出会い、話を聞き、考えるというプロセスを通じて、生徒が自らの生活と国際社会とのつながりを実感できるよう、本単元を設定した。

【児童／生徒観】

本学級の生徒は、学校の授業や学習塾などで英語の学習には意欲的に取り組んでいるものの、海外旅行や海外での生活経験を持つ生徒はほとんどおらず、日常生活の中で異文化に触れる機会は限られている。実際に「将来海外に行ってみたいと思うか」という問いに対しても、「行ってみたい」と答えた生徒は約 2 割にとどまり、多くの生徒にとって海外や異文化はまだ遠い存在となっている。こうした実態から、生徒が身近な地域や社会の中で国際的な視点を持ち、異なる文化や価値観に対する理解を深めることが求められている。中学 1 年生という発達段階において、他者との違いに気づき、受け入れる力を育むことは、今後の共生社会を担う基礎となると考える。

【教材観】

本単元では、JICA 海外協力隊員によるオンライン講座および地域在住外国人との交流活動を実施する。教科書的知識では得られない一次的・実践的な情報に触れる機会を提供し、生徒の内面に深い揺さぶりを与える教材である。

① JICA 海外協力隊員の講座

日本人が海外で果たす役割や現地の人々との協働の実態を通じて、国際協力の意義を具体的に理解する場とする。これは、生徒が「世界における日本人の姿」や「自分が果たし得る役割」について考える契機となり、国際的視野の育成に資する。

② 地域在住外国人 (CIR) との交流

異文化が地域社会に存在することを実感させるとともに、外国人が日本で生活する上で抱える思いや背景に触れることで、多文化共生の視点を育む。生徒は「異文化＝遠い存在」という認識を転換し、身近な他者との関係性を通じて国際理解を深化させる。

これらの教材は、生徒の生活実感に根ざしたリアルな出会いを通じて、国際理解を「知識」から「経験」へと転換する役割を担う。中学 1 年生という発達段階においては、抽象的な国際問題よりも、具体的な人との関わりを通じて「違いに気づく」「共通点を見つける」「自分の考えを言葉にする」ことが重要であり、本教材はそのような学びを促進する構造を有している。生徒の「もっと世界を知りたい」「自分にもできることがあるかもしれない」という内発的動機を喚起し、将来的な進路選択や価値観形成に影響を与える「学びの原体験」として機能することが期待される。

【指導観】

本単元では、JICA 海外協力隊員による講座と兵庫県国際交流員 (CIR) との交流を通じて、生徒が「世界と自分」「地域と異文化」とのつながりを実感し、共生社会の担い手としての意識を育むことをねらいとする。指導にあたっては、以下の視点を重視する。

① 体験を通じた国際理解の促進

海外で活動する日本人 (JICA 隊員) の話を聞くことで、国際協力の現場を具体的に理解させる。
地域に暮らす外国人 (CIR) との交流を通じて、異文化が身近に存在することを実感させる。

② 異文化理解と共生意識の育成

「異文化＝遠い存在」という認識を転換し、身近な他者との関係性を通じて多様性への気づきを促す。
異なる文化や価値観に触れ、共生社会を担うために必要なことを自分事として考える力を養う。

③ 対話と振り返りによる学びの深化

一方的な知識伝達ではなく、生徒の問いや気づきを引き出すファシリテーターとして関わる。
交流後の振り返りを通じて、体験を学びへと昇華させ、次の学習や生活につなげる。

このような指導を通じて、生徒が「もっと世界を知りたい」「自分にもできることがあるかもしれない」と感じるような学びの動機を育み、国際社会における自己の在り方を主体的に考える力を培うことを目指す。

7. 単元計画(全6時間)			
時間	ねらい	学習活動	資料など
1	自分の生活(衣食住・教育)を振り返り、JICA 出前授業で交流する国の生活と比較することで、文化の違いや共通点に気づき、主体的な問いを持つ力を育てる。	・ワークシートを用いて、自分の生活(朝食、住居、学校生活など)を振り返る。 ・「〇〇国に住むとしたら？」というテーマのもと、JICA 国際交流対象国について詳しく調べる。 ・日本との違いや驚きをグループで共有する。 ・派遣教員への質問をグループで考え、質問カードにまとめる。	自文化振り返り用ワークシート(衣食住・教育のチェックリスト形式) JICA 公式サイト「出前授業」紹介ページ(対象国の情報) JICA 地球ひろば「教材を探す」より『つながる世界と日本』冊子教材(PDF)
2	JICA 派遣教員の体験談を聞き、事前に立てた問いをもとに交流することで、異文化への関心と理解を深める。	・JICA オンライン出前授業を受講し、派遣教員の体験談や現地国について学ぶ。 ・生徒が質問カードをもとに直接質問する。 ・感想をワークシートに記入し、クラスやグループで共有する。	生徒が作成した質問カード 振り返り用ワークシート
3	兵庫県国際交流員(中国・韓国・アメリカ)との交流に向けて、文化的背景を理解した上で、交流に必要な視点や質問を考える。	・海外の人が兵庫県で生活する上での利便性や困り感などを予想し、まとめる。 ・各交流員の紹介ページを見て、これまでの背景を知る。 ・交流に向けた質問をグループで話し合い、質問を作成する。(質問は事前に送付しておく)	兵庫県国際交流活動紹介ページ(CIR) 西宮市国際交流協会(NIA)活動紹介ページ 西宮市「多言語生活ガイド」 JICA 公式 YouTube 「2022 年度移住史・多文化理解オンライン講座 ～歴史から『他者』を考える～」
4	国際交流員との交流を通じて、日本の文化や暮らしの魅力を再発見するとともに、外国人が日本で生活する際に直面する課題や困りごとを理解することで、多様な価値観に気づき、共生社会のあり方について考える力を育む。	・国際交流員のこれまでの経歴や実体験を紹介してもらい、生徒が前時に考えた質問に答えてもらう。 ・自分たちで立てた予想と比較することで、多様な価値観に気づく。 ・追加質問や交流を行う。 ・交流で得られた気づきをワークシート(Excel)に記入する。	生徒が作成した質問の一覧表 Excel ワークシート
5 本時	国際交流員との交流からの気づきを共有し、共生社会において大切なことを交流員と共に考える。	・前時の気づきを共有する。 ・共生社会の実現における大切なことを考える。 ・グループで振り返りを共有し、他者の視点に触れることで理解を深める。 ・交流員の方の考えを聞く。 ・「共に生きる」とはどういうことだと思うか	ワークシート

6	JICA 出前授業や兵庫県国際交流員との交流を通じて得た学びや気づきを振り返り、「共に生きる」社会の実現に向けて自分ができることを考える。	自分の考えをワークシートに記入する。 •これまでの学習(JICA 出前授業・国際交流員との交流)を振り返り、印象に残ったことや自分の考えや心情の変化をワークシートに記入する。 •グループで振り返りを共有し、他者の視点に触れることで理解を深める。 「共生社会に向けて自分ができること」を一人ひとりが言語化し、短く発表する。 教師が全体をまとめ、今後の学びや生活へのつながりを示す。	これまでの活動を振り返る自作スライド JICA 教材『共につくる私たちの未来』 JICA 公式 YouTube「国際協力ってなんだろう？」シリーズ 振り返りワークシート(オリジナル)
---	---	--	---

8. 本時の展開(概略)

本時のねらい: 国際交流員との交流を通じて、「共に生きる」ことの意味を考え、誰もが共に生きることのできる社会の大切さに気づける。

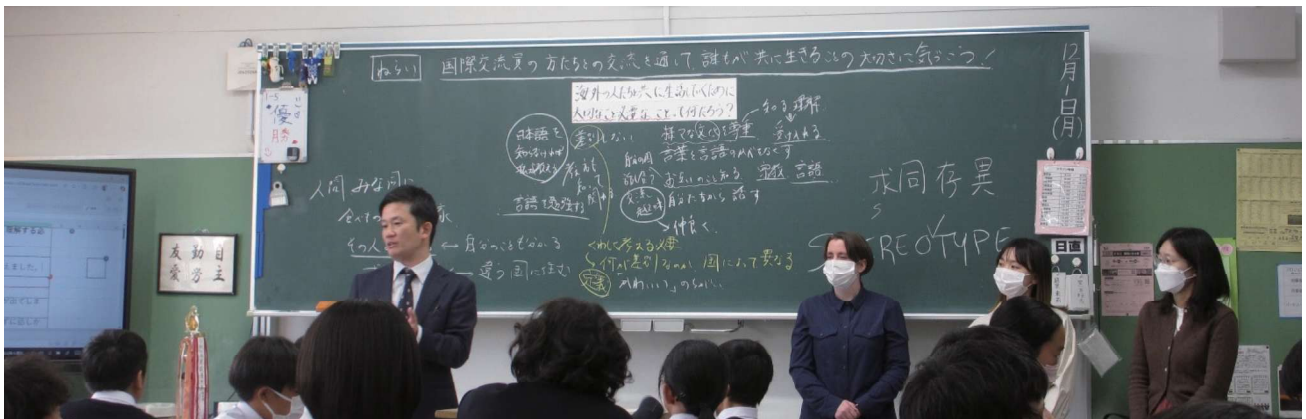
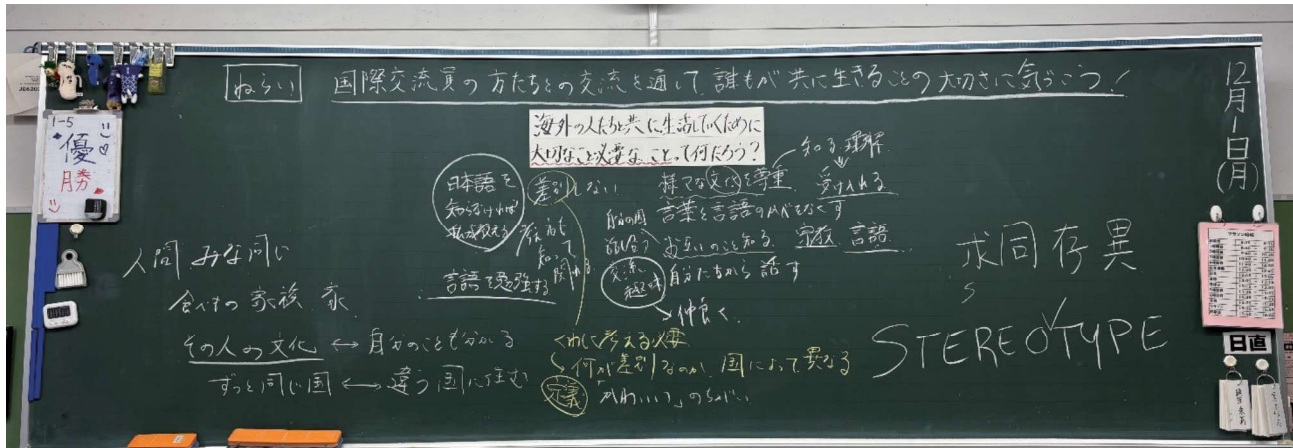
過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (10分)	1 前時の交流の振り返りをする。 T「交流員の方のお話を聞き、交流をしてみてもどんなことに気づきましたか。」「みんなの気づきを見てみよう」 ・日本は世界の中では生活しやすいと思っていましたが、韓国や中国の方が暮らしやすいと聞いて驚きました。 ・他国と日本との違いが思っていたよりも多かった。 ・日本の不便なところが多く出ていたので、そこが日本の課題だなと思った。 ・他の国にもいいことがあるし悪いこともあるけど、やっぱり自分の国がいいと思った。 T「前時は交流員の方々が日本に住んでみて感じた、日本の良し悪しについて話してくださり、みなさんは自分の予想と比較して自分の考えを持つことができました。今回は、日本に長く住んでいる我々と、交流員の方々のような海外の方も含め、誰もが共に生きることにどのようなことが必要なのか考えていきます。」	数人の生徒に発表させる。 大型モニターに Excel シートを映し出し、いくつか紹介する。4時間目終了後に、紹介する感想を確認しておく。 ジブンゴトとして考えられるように、今の自分が何をできるかを考えるように促す。	気づきを記入した Excel シート

本時のねらい：国際交流員の方たちとの交流を通して、誰もが共に生きることの大切さに気づこう

展開1 (20分)	2 共生社会の実現に向けて、意見を交流し、自分の考えを深めていく。 T「日本にいられた海外の方と、共に生活していくためにはどのようなことが大切だと思いましたか。自分の考えを Excel シートに記入してください。」 ・相手の文化を知り、思いやりを持って恥ずかしがらずにちゃんと話す、接する。 ・自分の国の文化も大切だけど、一緒に生活し	・感情面だけでなく「自分にできること」への視点を促す発問を意識する ・グループで話し合った内容を踏まえて、自分の考えを記入させる。 ・教員は「対等」「相互理解」という視点を持つ。 ・切り返し発問で、グループの意見	問いを黒板に掲示する 自分の考えを記入するための Excel シート
--------------	---	--	--

展開2 (15分)	ていく人の国の文化をゆっくりでもいいから、受け入れていくことが大事だと思う。 ・日本の文化と相手の国独自の文化をしっかりと理解する必要があると思いました。 ・言葉、言語の壁をなくすこと。 ・海外から来た人に日本の事を教えられるように僕たちが日本の事を知らなきゃいけない。 ・みんな同じ人間として接する。 T「グループで意見交流してください。」 ・言葉と言葉の壁をなくす。 ・違う国だからと差別しないことが大切。 ・様々な言語をもっと勉強する。 ・日本語を知らなければ、私が教える。 3 交流員の方たちの意見や考えを聞く T「それでは今度は、海外から来て日本に住んでいる交流員さんにご意見を聞いてみたいと思います。交流員のみなさんは共に生活していくためにはどのようなことが大切だと思いますか。」 ・求同存異(中国の言葉) ・人間皆同じ。 ・食べ物や家、その人の文化など他国のことを理解することで自分の国のこともよく分かってくる。(違う国に住んでみるとわかる) ・お互いに違う考え方をしても、間違いじゃないと受け止める心が大切だと思う。 ・“みんなと同じ”ではなく、“違っていてもいい”という考え方を持つこと。 ・何が差別なのか、国によって異なる。外見を例にとっても、国によって認識が異なるからこそ、詳しく考える必要がある。	をつなげたり、広げることで深めていく。  ・Excel シートで他の人の意見を参考にしながら意見交流してもよいと伝える。 ・話し合っていることを机間指導で聞き、いくつかのグループを指名して発表させる。 ・教師がファシリテーターとなって進行し、3名の考えや意見を聞く。その際に、生徒の考えについても意見してもらえよう発問する。 ・ポイントとなる言葉を黒板に板書していく。 ・あくまで一個人の意見であるということを抑える。	
まとめ (5分)	4 授業を振り返る T「今回はみなさんに“生の声”を聞いてもらいたいという想いがあって、実際にゲストの方をお呼びして交流しました。」 T「交流員の方の意見を聞いたみなさんは、共に生きるとはどういうことだと思いましたか。振り返りシートに記入してください。」	国際交流員プロフィール ・李霞（りか）中国広東省 ・李多彬（イダビン）韓国大邱広域市 ・Anna Schnell（シューネルアンナ）アメリカ合衆国ワシントン州 ・実際に交流した目的やねらいを簡潔に伝える。 ・次時は今回の振り返りを共有し、自分たちができることについて考えていくことを伝える。	振り返りシート(自作) 





9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法)

「共生とは何か」「自分にできること」など、単元目標に沿った思考の深まりが見られる。(振り返りシート)

異文化や多様な価値観に触れて得た気づきや、交流を通して生まれた自分なりの問いや考え、今後の行動や学びへの意欲につなげることができている。(振り返りシート)

10. 学習方法および外部との連携

【学習方法】

本学習では、生徒が主体的・協働的に学ぶことを重視し、以下の方法を取り入れた。

- ・JICA オンライン出前授業の実施
- ・国際交流員の方たちによる交流型学習
- ・Excel シートを活用した振り返りによる相互参照

【外部との連携】

- ・JICA オンライン出前授業
- ・西宮市政策局市長室秘書課交流チーム
- ・西宮市国際交流協会
- ・兵庫県国際局・国際交流協会

11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み

- ・兵庫県海外子女教育・国際理解教育研究会「多文化共生・国際理解教育研修会」での実践発表
- ・西宮市教育委員会(国際理解教育部会)との連携

本単元では、国際協力や多文化共生の「本物の」事例に触れることで、生徒の興味関心を高めたいという思いがあった。研修アドバイザーの藤原孝章氏にご紹介いただき、西宮市政策局市長室秘書課交流チームの様な並びに西宮市国際交流協会様、兵庫県国際局・国際交流協会様のお力添えを頂戴し、この度の授業を実施することができた。前半では、JICA 海外協力隊員によるオンライン出前授業を行い、日本人が海外で果たす役割や現地の人々との協働の実態を学ぶことで、国際協力の意義を具体的に理解する機会を提供した。後半では、兵庫県国際交流員(CIR)(中国・韓国・アメリカ出身)をゲストティーチャーとして招き、日本で生活する上での思いや背景を直接聞くことで、異文化理解を「知識」から「体験」へと転換することをねらった。こうした連携により、教科書では得られない一次情報に触れる機会が生まれ、生徒は「違っていてもいい」という価値

観や「もっと交流したい」という意欲を持つようになった。ゲストを「教える人」ではなく「共に考える仲間」と位置づけ、双方向の対話を重視した。

学習者同士の関係性づくりにも配慮し、個人の意見を Excel シートに記入し、グループで交流する仕組みを取り入れた。この方法により、生徒は他者の考えを参照しながら自分の意見を深めることができ、対話の質が向上した。さらに、JICA 隊員の話を通じて「世界と自分のつながり」を実感し、CIR との生の声を聞く交流を通じて「地域にある異文化」を理解することで、共生社会のあり方を自分事として考える契機となった。異文化理解が「遠い世界」から「身近な現実」へと変わり、共生社会への態度形成につながった。

【自己評価】

12. 苦労した点

当初の指導案では、生徒主体の対話を重視し、ゲストティーチャーとの交流を通じて「共に生きることの大切さ」を深めることをねらいとしていた。しかし、実際の授業ではいくつかの課題が浮かび上がった。

第一に、ICT 環境の不安定さである。指導案ではタブレットや Excel シートを活用し、意見の可視化や共有を通じて学びを深める計画を立てていたが、西宮市のネットワーク環境の不具合により、スムーズな進行が難しい場面があった。このことは、協働的な学びを支える基盤整備の重要性を改めて認識させるものとなった。

第二に、発話のバランスである。指導案では、生徒が主体的に考え、発言する場を確保することを重視していたが、ゲストとの交流を円滑に進めるために教師の補足説明や問い返しが増え、結果として教師の発言比率が当初の予定よりも高くなった。生徒の意見は多く出たものの、さらに深めるためには、教師の介入を最小限にし、ファシリテーターとしての役割に徹する工夫が必要である。

第三に、時間配分の難しさである。指導案では、交流後に「共に生きる」ことを考える話し合いを十分に行うことを想定していたが、実際にはゲストとの対話に時間を要し、深い議論に至る前に授業を終える場面があった。今後は、前半の個人・グループ活動を簡潔にし、交流後の振り返りや再話し合いに重点を置く時間設計が求められる。これらの課題は、国際理解教育の本質である「対話を通じた気づき」をさらに充実させるために重要な点であると考える。

13. 改善点

本時の授業では、指導案で意図した「共に生きることの大切さ」を深める学びを目指したが、実践の中でいくつかの課題が浮かび上がった。まず、話し合いの内容が、中学生の総合的な学習にふさわしい深い思考を引き出すことが難しかった。視点の提示や問いの質を高める工夫が不足していたことが要因である。

次に、既習内容との接続が不十分であった。小学校で国際理解教育を受けているはずであるが、その学びを踏まえた問いや導入ができず、学習の連続性を確保することができていなかった。

さらに、授業が「交流としての国際理解」に偏り、地域課題や現代的な社会背景を扱う視点が弱かった。コンビニの外国人店員や海外志向の変化など、身近なテーマを取り上げる余地を残したことは改善すべき点である。加えて、話し合いの時間は長かったものの、教師の発話が多くなったことで、生徒主体の対話を促すファシリテーションに課題を感じた。これらは、国際理解教育の本質である「対話を通じた気づき」をさらに充実させるための重要な示唆であり、今後は問いの質の向上、時間配分の工夫、そして生徒主体の学びを支える仕組みづくりを意識して取り組みたい。

14. 成果が出た点

本単元の最大の成果は、生徒の意識や態度の変容である。授業前の調査では、海外や異文化に対する興味関心が乏しく、「海外に行ってみよう」と答えた生徒は約 2 割にとどまっていた。しかし、JICA 海外協力隊員の講話や兵庫県国際交流員 (CIR) との交流を通じて、生徒の認識は大きく変化した。授業後の感想には、「海外に行ってみよう」「住んでみたい」「文化を尊重することが大切だと思った」「日本と外国にはそれぞれ良いところがある」「差別をなくすことが大切」など、異文化理解や共生社会への態度形成につながる言葉が多く見られた。

特に、交流を通じて「海外はどこも治安が悪い」という先入観が解消されるなど、「現地の人の話を聞いてみないと分からない」「お互いの文化を尊重することが大切」という気づきが生まれたことは重要である。また、「韓国に行ってみよう」「バヌアツの人も私たちと同じ人だと思った」など、具体的な国名を挙げて関心を示す記述もあり、国際理解教育の目的である「世界と自分のつながりを実感する」学びが達成されたといえる。

さらに、ICT を活用した意見共有や、ゲストとの双方向の対話により、生徒は自分の考えを言語化し、他者の視点に触れることで思考を深めることができた。これらの成果は、国際理解教育における「体験を通じた学び」の有効性を示すものであり、今後の授業実践においても継続的に取り入れる価値があると強く感じた。

15. 学びの軌跡 (児童生徒の反応・感想文・作文・ノートなど)

本単元の開始前、生徒の多くは海外や異文化に対する関心が乏しく、「海外に行ってみよう」と答えた生徒は約 2 割に過ぎなかった。しかし、JICA 海外協力隊員の講話や兵庫県国際交流員 (CIR) との交流を通じて、生徒の意識は大きく変化した。授業後の感想には、次のような言葉が並んだ。

感想はこちら



「海外に行ってみたい」「住んでみたいと思った」

「日本には日本の良いところがあるし、外国には外国の良いところがある。どこの国が良い悪いではなく、お互いの文化を尊重し、差別をなくすことが大切だと思った」

「海外は治安が悪いという先入観があったけど、話を聞いて海外にも良いところがたくさんあることが分かった」

「現地の人話を聞いてみないと分からないと改めて思った」

これらの記述から、生徒が「海外＝遠い存在」という認識を改め、異文化を尊重する態度や共生社会への意識を育んだことが読み取れる。また、「韓国に行ってみたい」「バヌアツの人も私たちと同じ人だと思った」など、具体的な国名を挙げて関心を示す記述もあり、学びが実感を伴って広がったことが分かる。

さらに、「日本の当たり前は他の国では当たり前ではない」「お互いの違いを理解することが大切」という言葉は、単なる知識習得にとどまらず、価値観の転換が起きている証拠である。交流を通じて「共に生きる」ことを考え、差別や偏見をなくす必要性に気づいたことは、国際理解教育の本質に迫る学びであった。

このように、生徒の言葉からは、興味関心の芽生え → 価値観の変容 → 行動意欲の形成という学びの軌跡が明確に読み取れる。今後は、この変容を一過性に終わらせず、地域課題や世界の課題と結びつけながら、持続可能な社会の創り手を育む学びへと発展させたい。

16. 授業者による自由記述

私は、国際理解教育は「与えられるもの」ではなく、子どもたち自身が「学びたい」と感じるものであるべきだと考えています。初任校では、国際理解教育が例年通りの形で繰り返される現状に疑問を持たずに過ごしていました。しかし、ある授業を通して自分自身の国際理解への無知を痛感し、「世界に触れた上で教壇に立つべきだ」と強く思うようになりました。その思いから、文部科学省の在外教育施設派遣制度に応募し、ロンドン日本人学校で3年間勤務しました。

ロンドンでの実践では、SDGsをテーマにしたジュニア EXPO プログラムに取り組み、子どもたちが「いのち輝く未来社会」を考える場を創りました。難民問題を扱った生徒の発表をきっかけに、国連 UNHCR 協会と連携し、実際に専門家の話を聞く機会を実現したことは、私にとって大きな転機でした。この経験から、国際理解教育は「教えるもの」ではなく、子どもたちが主体的に学びを広げる環境を整えることが重要だと確信しました。

今回の単元でも、海外や異文化への関心が乏しかった生徒たちが、JICA 海外協力隊員や兵庫県国際交流員との交流を通じて、「海外に行ってみたい」「文化を尊重することが大切だと思った」と語る姿に、国際理解教育の力を改めて感じました。今後は、この学びを一過性の体験に終わらせず、地域課題や世界の課題を結びつけながら、持続可能な社会の創り手を育む授業を構築していきたいと考えています。

私は、校内の国際理解教育主任として、今回の研修で得た知見を積極的に共有し、現場にある「例年通り」という風潮を変革していきたいと思っています。そして、「教室から世界へ～未来を共に創るチカラを育む～」を体現する授業を、子どもたちと共に創り続けたいと思います。

最後に、本研修に参加させていただけたことに心から感謝申し上げます。アドバイザーの先生方からいただいた専門的なご助言は、授業改善の方向性を明確にする大きな支えとなりました。特に、授業後にいただいた「視点の提示」「時間配分」「問いの質」など、専門的なご助言を今後の実践に必ず生かしていきます。

また、運営スタッフの皆様の丁寧なサポートにより、安心して学びを深めることができました。この学びを現場に還元し、校内外で国際理解教育の重要性を広めていくことを、今後の使命として取り組んでまいります。

【参考資料】

- ・グローバル時代の国際理解教育～実践と理論をつなぐ～
日本国際理解教育学会 編著 2010年発行 明石図書 出版
- ・国際理解教育～地域市民を育てる授業と構想～
大津和子 著 1992年発行 国土社 出版
- ・新版シミュレーション教材「ひょうたん島問題」
藤原孝章 著 2008年発行 明石書店 出版
- ・外国人労働者問題をどう教えるか
藤原孝章 著 1994年発行 明石書店 出版
- ・国際理解～重要用語 300 の基礎知識～
大津和子 溝上泰 編集 2000年発行 明治図書 出版
- ・多文化教育の授業開発と実践～多様性の尊重と社会正義の実現を目指して～
中澤純一 著 2023年発行 明石書店 出版
- ・JICA 公式サイト「出前授業」紹介ページ
- ・JICA 地球ひろば「教材を探す」より『つながる世界と日本』冊子教材
- ・JICA 公式 YouTube「2022 年度移住史・多文化理解オンライン講座 ～歴史から『他者』を考える～」

国際理解教育/開発教育 学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	池田 やよい	学校名	宇和島市立城南中学校
教科(科目)・領域	技術・家庭	対象学年(人数)	3年(102名)
実践年月日もしくは期間(時数)		2025年10月～12月(4時間)	

【実践概要】

1. 単元名(活動名): 未来へ続く私たちの食文化ー食でつながる愛媛とハワイー					
2. 実践する教科・領域 技術・家庭科(家庭分野) B(3)ア(エ)地域の食文化、地域の食材を用いた和食の調理	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加		
4. 単元の目標(評価規準を意識して設定) ・地域(愛媛)の郷土料理とハワイの料理について理解することができる。 ・地域の食文化を継承するために自分なりの考えを持つことができる。 ・異なる食文化に関心を持ち、互いを尊重しながらよりよい生活を目指そうとする。					
5. 単元の評価規準	①知識・技能	・地域とハワイの食文化の特徴を理解している。			
	②思考・判断・表現	・地域とハワイの食文化を比較し、共通点や相違点に気づき、自分の言葉で考察や意見を表現している。 ・地域の食文化を継承するための取組を考え、工夫しようとしている。			
	③主体的に学習に取り組む態度	・よりよい食生活の実現に向けて、地域やハワイの食文化へ関心を持ち、実生活に生かそうとしている。			
6. 単元設定の理由・単元の意義					

【単元設定の理由あるいは単元の意義】

食事は、人間にとって生きるための大切な行為であり、中学生にとっても当たり前に関心の高い事柄である。食文化を学ぶことは、単に料理の知識を得るだけでなく、歴史的背景や生活様式などを具体的に知ることができ、持続可能な社会の在り方を考える契機にもなりうる。また、自国と他国の食文化を比較することによって他国の文化を理解したり、自国の文化を再発見したりすることもできる。食文化を学ぶことは、親しみを持って異文化を理解することができると考え、この単元を設定した。

【児童／生徒観】

本校は、四国の南西部に位置し、少子高齢化・過疎化が著しい地域にある。生徒の多くは、就学前から現在の地域に暮らしており、地元を大切に作る気持ちが強く、ボランティア活動や地域行事への参加など地域と主体的な関わりを持って行動している。その一方で、中学や高等学校の卒業後には地域を離れ、都市で生活を送りたいと考えている生徒が多く、地域の生活文化の継承が難しい状況にある。食への興味・関心は高いが、食に関する知識や調理経験は乏しく、実践力は伴っていない。総合的な学習の時間では、「地域を知る」をテーマとして郷土料理について調べた生徒もいる。郷土料理の名前を知っているものの、料理の特性から日常食として取り入れる場面は少ない。

このような生徒の実態を踏まえ、本単元では、食文化を通して、他国や自国の歴史的背景や生活様式を知り、地域社会の一員としてよりよい生活を営もうとする力を育てたいと考える。

【教材観】

愛媛の郷土料理は、生徒にとって親しみのある料理であるが、日常的に食している生徒は少なく、自ら調理した経験のある生徒は稀である。そのため、生徒が地域の文化を再認識し、誇りや関心を持つきっかけとして、愛媛の郷土料理について学ぶことは意義があると考え。また、宇和島市はハワイ州ホノルル市と姉妹都市提携の関係にあり、ハワイ州との交流もある。ミックスプレートを含むハワイの食文化を扱い、異文化理解について考えさせたい。

本単元では、他国の食文化と地域の食文化を知り、両者の比較をきっかけとして、異文化理解を図り、自分たちの生活や食文化を客観的に見つめることから、将来にわたって自分たちの食文化を継承しようとする態度を育むことができる考える。

【指導観】

愛媛とハワイという異なる地域の食文化の理解を通して、地域の食文化の価値と継承の重要性を意識させたいと考えている。指導に当たっては、写真スライドや動画を用いて視覚情報から愛媛とハワイに関する食文化の理解を容易にし、クイズなどの参加型活動によって生徒の興味・関心を喚起し、主体的な学びを促したい。また、ハワイ出身の ALT をゲストティーチャーに迎え、ハワイの食文化を生徒たちにとって身近なものとしたい。さらに、グローバル化が進む現代において、自国の食文化を深く理解し、次の世代へつなぐための具体策を生徒自身に考える機会を与えたい。そして、持続可能な社会の担い手として食文化の継承に積極的に関わろうとする意識を育みたい。

7. 単元計画(全 4 時間)

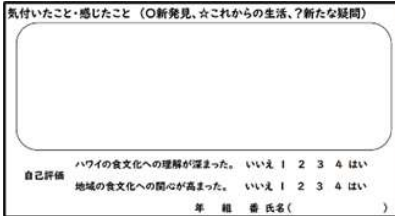
時間	ねらい	学習活動	資料など
1	日本や地域の食文化について理解する。	・郷土料理や地域の食材アンケート ・全国の郷土料理調べ ・地域の食材の動画視聴	写真スライド ワークシート
2 本時	ハワイの料理について知り、愛媛の郷土料理との共通点、相違点を理解する。	・ハワイの料理クイズ ・愛媛の郷土料理とハワイの料理の比較	写真スライド 動画「弁当からミックスプレート」 ワークシート
3	地域の食文化を継承するには何ができるかを考え、工夫できるようにする。	・未来に残していきたい地域の食文化を表現	ワークシート
4	地域の食材を用いた調理ができるようにする。	・地域の食材を用いた和食とハワイの料理を調理する。	

8. 本時の展開(概略)

本時のねらい: ハワイの食文化について知り、地域の食文化と比較する。

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (3 分)	ハワイの人は、どんなものを食べていると思いますか。 ・ハンバーガー ・ココナッツ ・ロコモコ ・トロピカルフルーツ	ALT との会話を通して、ハワイの料理に関心を持たせる。	
展開 (35 分)	ハワイの料理を知ろう。 料理画像を提示し、ALT が料理名と簡単な説明をする。 料理写真を見て、どんな食材が使われているか考えよう。 ハワイ料理のクイズに挑戦しよう。  どの国の影響を受けた料理か？ ①日本 ②中国 ③フィリピン	タブレットの機能を活用し、楽しみながら食材を確認できるようにする。  多文化が融合しているハワイの料理の特徴を分かりやすくするため、複数の国の影響を受けた料理をクイズに盛り込む。	ハワイ料理の画像

ハワイにあるポケのお店を見てみよう。 動画と画像を見る。 ポケは、たくさんの種類があり、伝統的な料理が変化してハワイの人に親しまれています。 愛媛の料理では、どうでしょうか。 ハワイと愛媛の料理を比べてみよう。 ハワイの料理と愛媛の料理をくらべて、同じところや似ているところ、違うところは、どんなところですか。 食材や調理法に注目してみよう。 共通点 ・魚を使っている。 ・ごはんを使った料理がある。 ・いもを使っている。 ・揚げ物がある。 ・葉っぱで包む料理がある。 ・しょうゆで味付けしている。 ・生魚を食べる。 ・すりつぶした料理がある。 ・もち粉を使っている。 ・盛り付けに青ネギをちらしている。 ・丼料理がある。 ・地元でとれる食材を使っている。 相違点 ・ハワイの料理は肉で、愛媛の料理は魚が使われている。 ・愛媛は、肉が少ない。 ・ハワイには、煮る料理がない。 ・愛媛は、盛り付けの色どりがいい。 ・ハワイの料理は、他の国の影響がある。 ・愛媛の方が多くの調味料を使っている。 ・愛媛は、みそを使っている。 ・一品に使われる食材がハワイの方が少ない。 ・ハワイの料理は、見た目がシンプル。 紹介した料理以外にも ALT の先生がよく食べていたハワイの料理があるそうです。 どんな料理か教えてください。 (ミックスプレートの写真を見せる。) この料理には、どんな特徴がありますか。 ・一つの皿にいろんな料理が盛り付けてある。 ・ごはんがアイスのように盛り付けてある。 ・料理の下にキャベツがしいてある。 この料理は、ミックスプレートといいます。 ミックスプレートは、どのようにして作られたと思いますか。 ・一度にたくさん食べたかったから。 ・一皿で盛り付けが簡単だから。 ・運びやすくするため。 ・いろんな国の料理を合わせたから。	ハワイの料理には、伝統的なハワイアン料理とロコ料理があり、伝統的な料理も変化して、今現在も日常的に食べられていることを伝える。 ハワイと愛媛の料理カードを用意し、比較しやすくする。 料理写真の裏面に材料名があるカードとし、食材の比較をしやすくする。  魚 米 卵 しょうゆ さとう みりん 酒 ヒントカードを用いて、料理の共通点や相違点を考えやすくする。 学習支援アプリを活用し、即座に回答を共有できるようにする。 <table><tr><th>共通点 (同じところ・似ているところ)</th><th>相違点 (違うところ)</th></tr><tr><td>食材 調味法 その他</td><td></td></tr></table> 写真を見て、自由な発想で回答できるようにする。	共通点 (同じところ・似ているところ)	相違点 (違うところ)	食材 調味法 その他		ポケの店の動画 料理カード
共通点 (同じところ・似ているところ)	相違点 (違うところ)					
食材 調味法 その他						

	ミックスプレートがどのようにして生まれたか、アニメを見ましょう。 弁当からミックスプレートへのアニメを見る。 地域の食文化を知ると、その地域の自然・生活・歴史を知ることができます。		弁当からミックスプレートへのアニメーション
まとめ (10分)	今日の授業の振り返りをします。 ハワイと愛媛の料理を比べて、気付いたことや感じたことはどんなことですか。 ミックスプレートの由来を知って、気付いたことや感じたことはどんなことですか。 地域の食文化について、どんなことを考えましたか。 ・ハワイの料理は愛媛と似たところがあった。 ・食文化は歴史と関係している。 ・違いを受け入れて料理が変化していた。 ・ハワイの料理を食べてみたい。 ・他の国の料理について知りたい。 ・食を通じてさまざまな人と関わりたい。 ハワイからきた ALT の先生の話をお聞きしよう。	 ALT に自分のルーツを語ってもらい、ハワイに日本や他の国からの移民がいたことを実感させる。 ALT の家族がハワイでの生活で食事を通じて文化を継承してきたことを伝え、次時につなげる。	ワークシート

9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法)

- ・地域とハワイの食文化の特徴を理解している。(ワークシートへの記入)
- ・地域とハワイの食文化を比較し、共通点や相違点に気付き、自分の言葉で考察や意見を表現している。(ワークシートへの記入)

10. 学習方法および外部との連携

- ・ハワイの料理写真を活用したクイズを通して、ハワイの食文化の概要を学習させる。
- ・ハワイの料理と地域の料理の比較を通して、地域の食文化に対する関心を高める。
- ・ALT をゲストティーチャーに招き、ハワイの食文化をより身近なものにさせる。
- ・宇和島市がハワイ州と姉妹都市提携の関係にあることからハワイ料理をとりあげた。

11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み

- ・英語科以外の教科である技術・家庭科(家庭分野)で ALT と一緒に授業を構成した。
- ・ハワイに関する画像は、ALT に用意してもらった。授業者が用意したものは、ALT に確認してから使った。
- ・ハワイの料理の画像は、ウェブサイトから引用し、より現地の様子に基づいたものになるよう努めた。
- ・授業公開について、国際理解教育に関心のある校内外の教員等に告知した。

【自己評価】

12. 苦労した点

- ・単元構成の段階において、技術・家庭科(家庭分野)の授業として、どの国の食文化をとりあげたらよいか、私自身の知識がなく、情報収集の方法も限られていたため、苦労した。
- ・ハワイの料理は、本校の生徒にとって身近なものではなかった。そのため、1時間の授業の中で、ハワイの料理を理解させるため、どのような教材にすればいいか、難しいと感じた。
- ・授業を通じて、生徒が思考を深める場面はどこにあるのか、意図的に設定することが難しかった。単にハワイの料理を大まかに知るのみに終わってしまう恐れがあり、2つの料理の比較のみでは、思考を深めるところまで到達しなかった。
- ・他国の料理との文化比較をした後に、自分の地域の食文化を継承するための取組を考えさせる方向へ向かわせるにはどうしたらいいか、関連する内容ではあるが、難しかった。

13. 改善点

- ・料理画像を見比べて共通点や相違点を見いだすことが難しい様子だった。そこで、まず、比較の視点として、食材と調理法に注目させるようにした。また、料理画像だけでなく、食材の情報を加えたカードを用意し、カードを

見て食材を比べさせた。さらに、共通点のある料理名を示したヒントカードを用意し、共通点や相違点を探しやすくした。

- ・本時の授業の後、自分の地域の食文化を継承するための取組を考えさせることが難しかったが、ALT の会話でハワイでの生活で、正月など家族や親族が集まった場面で和食を食べていることを知った。また、「和食を食べることは、自分たちのルーツが日本にあることを忘れないため。」という言葉があった。そこで、授業の終末に ALT の話を聞かせ、食文化の継承の実例を紹介することができた。
- ・ハワイ料理と愛媛の料理をどちらも12種用いて比較をしたが、種類が多く比較が難しくなってしまった。料理を6種程度に減らして、簡単に比べられるようにしたい。
- ・「弁当からミックスプレートへ」のアニメーションを活用したが、ハワイの移民の歴史について詳しく触れることはできなかった。授業者自身が知識を得て、アニメーションに付け加えて解説できるようにしたい。

14. 成果が出た点

- ・ハワイの料理を扱うことで、ハワイの料理について興味・関心を高めさせることができた。
- ・「弁当からミックスプレートへ」のアニメーションを活用することによって、短時間で分かりやすくハワイに日本人が移民として渡っていたことを知らせ、食文化には歴史的影響があることを理解させることができた。
- ・ハワイと愛媛の料理を比較することによって、地域の食文化をより深くとらえさせることができた。
- ・授業者自身がハワイの食文化を通してハワイの生活について新しい知識を得た。
- ・授業者自身のハワイへの渡航経験は、30 年前であり、当時の経験に基づかない授業を構成した。
- ・海外での実体験がなくても実践できる指導案の提案になった。
- ・ALT と授業準備を進める中で、授業者自身に多くの学びがあった。

15. 学びの軌跡(児童生徒の反応・感想文・作文・ノートなど)

生徒の振り返りから

ハワイの料理は、ハワイならではの料理もたくさんあるけど、他の国をリスペクトしたものも沢山あって、すごくいいなと思いました。ミックスプレートは、昔ハワイで働いていた様々な国の人たちの繋がりがなるもので、動画を見ると、様々な国の人たちが、少ない時間の間に人との関わりと食事を大切にしていたんだなと感じました。また、ハワイの料理のほかにも、いろんな国の料理を通じていろんな国を知りたいと思った。

ハワイの料理は知らないものばかりだったし食べたこともないけど、意外と日本の料理と似ている箇所もあって美味しそうだなと思いました。

生魚を食べる国は少ないと聞いたことがあったけど、ハワイも生魚を食べる習慣があることを知りました。

今まで国外で旅行に行ってみたくと思ったことはあまりなかったけど、今回の学習を通して機会があればハワイに行ってみたくなと思いました。

スーパーとかで、ハワイの料理やその料理を作る素とかが売っているのか気になったので、スーパーに行った時見てもみよと思います。

ハワイと愛媛の食文化を比較してみて分かったことは、食材は違っても 調理法など共通点が思ったより沢山あって驚いた。

ご飯を食べていく上で、「これはどこの料理なんだろう」など考えながら食べると面白いなと思いました。

今日紹介されなかった以外のハワイの料理について気になりました！

もっと自分の街の文化を知って大切にしていきたい。

ハワイアンポケを宇和島の魚で作ってみたいと思った。

ハワイと宇和島の食べ物が似ている理由は、単に地理的なものではなく、ルーツとして日本やさまざまな国の人、文化が混ざり合ったことにより、結果として似通っていることにとっても納得した。その地域の食文化を分析してみても、歴史的、地理的状況も同時に鑑みることもできるので、他の地域のものでも、是非、してみたい。

ハワイと愛媛では海に囲まれているという同じ環境から多くの料理に魚が使われているという共通点を見つけることができた。また、食文化からその地域の環境や歴史を知りことができるのだと知れた。

食事をするうえで味だけでなく、なぜその料理が作られるようになったかなどの由来も知ることさらに食への深みがでると思うため、食文化についても積極的に調べていきたいと思う。そして、食を通すことでさまざまな人と関わることができたらいいと思う。

16. 授業者による自由記述

授業を構想している過程で ALT のルーツが日本にあることを知り、あまりにも身近なところに日系移民の子孫がいたことに驚いた。彼の家族が自分達のルーツについてよく話をしていたこと、正月におせちや巻きずしなどの和食を食べる習慣があること、など、ALT からの話によってハワイの日系移民や食文化に関する情報を得ることがで

き、この授業を通じて私自身のハワイへの文化理解が高まった。

ALT とハワイの料理作りを行い、生徒も親しみを持って楽しみながらハワイの料理に触れていた。

【参考資料】

- ポケの店の動画 <https://www.youtube.com/watch?v=pBUhyxKbcgA>
- 弁当からミックスプレートへの動画 <https://www.youtube.com/watch?v=lJY2NUlyyGc>
- ハワイの伝統料理「ハワイアンフード」～先住民が伝承する食文化に触れる～
<https://aminaflyers.amina-co.jp/list/detail/993>
- ミックスプレート画像 <https://www.youtube.com/shorts/okXUrECe4Ko>
- 森茂岳雄ほか(2024)『三訂版 海外移住資料館 学習活動の手引き』JICA 横浜 海外移住資料館
- 文部科学省(平成 29 年)『中学校学習指導要領解説 技術・家庭編』
- ハワイ州観光局公式日本語サイト <https://www.allhawaii.jp/>
- アロハプログラム <https://www.aloha-program.com/>

国際理解教育/開発教育 学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	夏井 ひとみ	学校名	宮崎県諸塚村立諸塚中学校
教科(科目)・領域	英語科	対象学年(人数)	3年 A 組(10名)
実践年月日もしくは期間(時数)	令和7年11月28日(金)(8時間)		

【実践概要】

1. 単元名(活動名): Reading 2 Malala's Voice for the Future 『Sunshine3』開隆堂				
2. 実践する教科・領域 【合科的単元】 英語科授業 6 時間 道徳1時間 学級活動1時間	3. 学習領域			
		1	2	3
	A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生
	B グローバル社会	相互依存	情報化	
	C 地球的課題	人権	環境	平和
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加
4. 単元の目標(評価規準を意識して設定) ○ マララさんのスピーチ(2013年7月12日、ニューヨーク国連本部に招かれ、教育の重要性や平和の大切さを世界中に向けて訴えたスピーチ)に込められた力強いメッセージを理解する。 【英語科】 ○ 「自分自身と国際社会との繋がり・未来を共に創るチカラは何か・自分にできること」を考え、グループで意見交換しながら解決策を発表する。 【英語科】 ○ 自他への敬愛の大切さを学び、未来を共に創ろうとするチカラは育てる。 【道徳】 ○ 3・4時で見えてきた世界や日本の課題の解決策を見だし、SDGs目標4とSDGs目標5を達成し、男女が協働する社会づくり(未来を創るチカラ)を考える。 【学級活動】				
5. 単元の評価規準 【英語科】	①知識・技能	【知識】 ・ 客観的な視点と主観的な意見が組み込まれた文章の構成を理解している。 【技能】 ・ 客観的な視点と主観的な意見が組み込まれた文章の構成の理解をもとに、マララさんが経験してきたことや彼女の考えについて、概要や要点を読み取る技能を身に付けている。		
	②思考・判断・表現	・ マララさんの思いについて理解するために、彼女の物語を読んで、概要や要点を捉えている。 ・ マララさんについて理解を深めるために、簡単な語句や文を用いて、マララさんへのメッセージを書いている。		
	③主体的に学習に取り組む態度	・ マララさんの思いについて理解するために、彼女の物語を読んで、概要や要点を捉えようとしている。 ・ マララさんについて理解を深めるために、簡単な語句や文を用いて、マララさんへメッセージを書こうとしている。 ・ 世界や日本の「子どもたちの教育の現状や男女格差の実態」を調べ、国際社会の平和や発展に寄与し、未来を共に創ろうとする態度が見られる。		
【道徳】	① 主として人との関わりに関すること	自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方が		

15

夏井 ひとみ

諸塚村立諸塚中学校・3年・外国語・道徳・特別活動

	B-11 相互理解、寛容	あることを理解し、寛容な心をもって謙虚に他に学び、自らを高めていく。
	② 主として集団や社会との関わりに関すること C-11 公正、公平、社会正義	正義と公正を重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努める。
【学級活動】	① 知識・技能 (何を知っているか、何ができるか)	多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。
	② 思考・判断・表現 (知っていること、できることをどう使うか)	集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする
	③ 主体的に学習に取り組む態度、人間性等 (どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか)	自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。
6. 単元設定の理由・単元の意義		
【単元設定の理由あるいは単元の意義】		
中学校第3学年の英語教科書『Sunshine 開隆堂』では、女性や子どもの人権のための活動を続け、14年に史上最年少(当時 17 歳)でノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイさんについて書かれた”Reading Malala’s Voice for the Future”がある。そこで、SDGs 目標4「すべての人々に包括的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」、目標5「ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児にエンパワーメントを図る」を実現するために「女性教育とジェンダー」を考える英語授業と道徳・学級活動の授業を教科横断的に授業計画した。複数の領域にまたがり、知識や理解を深め、世界や日本の「子どもたちの教育現状や男女格差の実態」を学び、国際社会の平和や発展に寄与し、未来を共に創ろうとするチカラを見いだしていくことは大変意義深く、効果的なカリキュラム・マネジメントと考える。		
【生徒観】		
本校(諸塚村立諸塚中学校全校生徒27名)は、昨年度、JICA 宮崎の西村真由美様をお招きし、男女共同参画社会づくりをねらいとした人権教育を実施した。人権教育では、生徒たちは、誰もが自分らしく生きていき、一人ひとりがかけがえのない大切な存在であることに気付くことができた。 そこで、今年度は、女性が教育を受ける権利の世界の実態、日本のジェンダー状況、社会的性差(ジェンダー)を学び、「女性(男性)の社会の中での役割」や「女性(男性)はこうあるべきだ」といった考え方は、人間がつくるものであることに気付かせたい。そして、ジェンダーは時代や文化によって変化するものであることに気付かせ、ジェンダーを考えるきっかけにしたい。		
【教材観】		
英語の教科書から、マララさんの功績やマララさんの思いを理解させたい。JICA 宮崎に講話依頼し、「女性教育とジェンダー」を考える道徳の授業を計画し、グローバルな視点や地球規模の課題意識を育み、諸塚村から、より良い世界を共に創る生徒の育成を目指した授業作りに励みたい。		
【指導観】		
英語の授業では、マララさんのスピーチ(2013年 7 月 12 日、ニューヨーク国連本部に招かれ、教育の重要性や平和の大切さを世界中に向けて訴えたスピーチ)に込められた力強いメッセージを理解させたい。そして、「自分自身と国際社会との繋がり・未来を共に創るチカラは何か・自分にできること」を考え、グループで意見交換しながら解決策を発表させたい。道徳では、自他への敬愛の大切さを学び、未来を共に創ろうとするチカラは育てたい。専門性の高い学びや気づきを必要と考え、JICA 宮崎に講話依頼し、人権や平和の観点からの新たな気づきを見付けさせたい。学級活動では、見えてきた世界や日本の課題の解決策を見だし、SDGs目標4とSDGs目標5を達成し、男女が協働する社会づくり(未来を創るチカラ)を考えさせたい。級友との多面的・多角的な意見交換の時間設定を多くし、外部資源(JICA 宮崎や宮崎県男女共同参画センター)の講話を計画し、対話的で深い学びにしたい。		

7. 単元計画(全8時間)				
時間		ねらい	学習活動	資料など
1	2 時間 英語	・ マララさんの思いを理解する。	【英語科授業:教科書本文理解 1 st and 2 nd Stage】 ・ マララさんの物語を理解する。	・ 『Sunshine 3』 開隆堂
2				

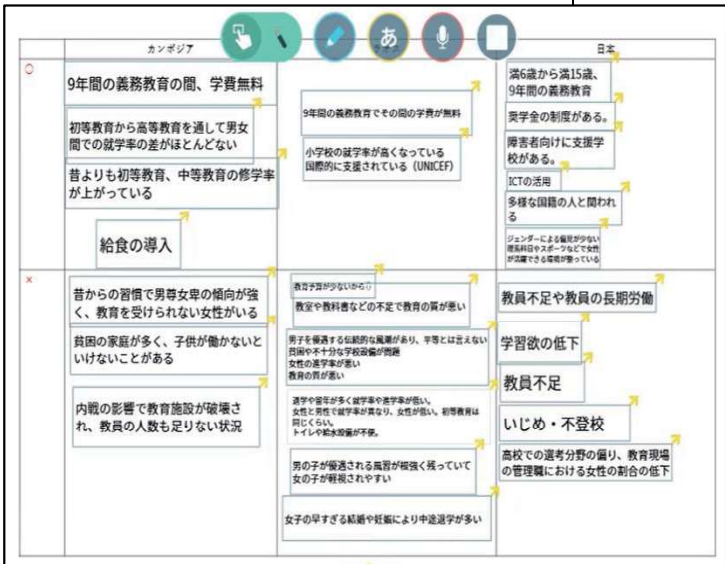
3	2 時間 英語	- 世界や日本の「子どもたちの教育の現状」を理解する。 - ジェンダーの平等を考える。	【英語科授業:世界と日本の現状理解】 - 世界や日本の「子どもたちの教育の現状や男女格差の実態」を調べ、理解する。 - グループで意見交換しながら、世界や日本の課題をみつける。	- ALT(ザンビア出身)との協働授業 『「生きる力を育む」国際理解教育実践資料集』JICA 地球ひろば 『共につくる私たちの未来』JICA 地球ひろば
4				
5	1時間 道徳	自他への敬愛の大切さを学ぶ。	【道徳:講話】 自他への敬愛の大切さを学び、未来を共に創ろうとするチカラは育てる。	宮崎県国際交流協会多文化共生アドバイザーの派遣依頼
6	1時間 学級活動	男女共同参画社会に向けての取り組みを理解する。	【学級活動】 3・4時で見えてきた世界や日本の課題の解決策を考える。 - 男女が協働する社会づくり(未来を創るチカラ)を考える。	『中学生生活と進路 3』宮崎県版
7	1時間 英語	マララさんについての理解を深める。	【英語科授業:教科書本文理解 3rd Stage】 マララさんへメッセージを書く。	ALT(ザンビア出身)との協働授業
8 (本時)	1時間 英語	国際社会の平和や発展に寄与し、未来を共に創ろうとする態度を育てる。	【英語科授業:まとめ・発表】 国際社会の平和や発展のために、「自分自身と国際社会との繋がり・未来を共に創るチカラは何か・自分にできること」を考え、グループで意見交換しながら解決策を発表する。	『Sunshine 3』開隆堂 - ALT(ザンビア出身)との協働授業 - 宮崎県国際交流協会 Zoom 参加 - JICA 宮崎 Zoom 参加 - 宮崎県男女共同参画センターZoom 参加

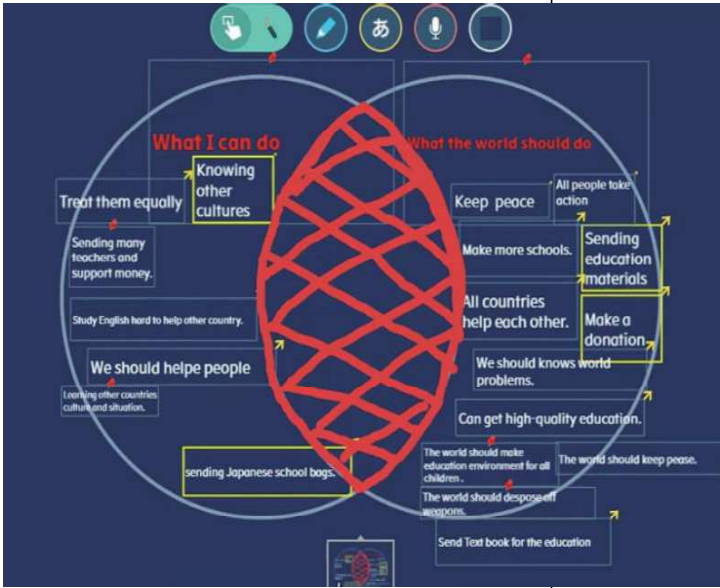
8. 本時の展開(概略)

本時のねらい: ○ 「自分自身と国際社会との繋がり・未来を共に創るチカラは何か・自分にできること」を考え、グループで意見交換しながら解決策を発表することができる。(思考力、判断力、表現力等)

○ 国際社会の平和や発展に寄与し、未来を共に創ろうとする態度を身に付けることができる。(学びに向かう力)

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	1 前時の確認をする。 T1:What did you write to Malala? T2:I wrote about my dreams. I want to be a teacher to help children. 2 Small Talk をする。 マララさんへのメッセージを級友と共有する。 T1:Let's share your message to Malala. S1:I wrote about my hope. I hope girls in your country can go to school to study. S2:I wrote about myself. I am a lucky student because some students can't go to school.	前回までの学習内容の確認をしっかりと押さえるために、最初に、ALT の参考回答表現を聞かせ、生徒たちの表現の幅を広げさせる。 I read Malala's voice for the future. I was moved by the word when the whole world is silent, then even one voice becomes powerful," Because I didn't think that one voice could becomes powerful for the world. I studied education in other countries It isn't good for girls. Most of girls have to work hard for the family and can't go to school. I want the world to have equality. 【生徒 A の書いたマララさんへのメッセージ】	タブレット共有ノート

展開 (35分)	3 今日の目標を確認する。 T1:Do you know the meaning of SDGs4 and SDGs5? T2:Yes. SDGs4 is about giving education for everyone and SDGs5 is about giving chance to everyone and giving power to all women and girls. T1:What is the goal? What should we do? T1:Today's goal is 「未来を共に創ろうとするチカラはどんなチカラが必要なのだろう」	自分自身と国際社会の繋がりや自分達ができることがイメージしやすいようにSDGsのカードを黒板に貼り、意味を確認させる。 	- SDGs4とSDGs5のカード - SDGs目標4「すべての人々に包括的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」 - SDGs目標5「ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児にエンパワーメントを図る」
本時の目標：未来を共に創ろうとするチカラはどんなチカラが必要なのだろう。			
	4 世界や日本の課題を意見交換する。 T1:We studied about Education in Cambodia, Laos and Japan. Tell me about Cambodia. T1:Can children go to school? S1:Most girls can't go to school. T2:What do girls who can't go to school usually do in Cambodia? S2:They work every day. T1:Can they earn enough money? S1:They usually work but they can't earn enough money. T1:What is the problem for children and women? T2:If they don't go to school, they can't read and write. S1:They can't work and earn money. T1:How about Laos? T2:How about Japan? T1>Please check it. Which country is the best? S1:Iceland is. T1:Let's watch News about Education and Gender in Iceland. T2:Iceland gives equal chances to women and men. So, everything is equal. Men and women are equal in Iceland. T1:Can children go to school in Iceland? S2:Yes, they can. More women go to	1時から7時までに分かった世界や日本の課題や考えたことを多くの級友と意見交換をさせ、新たな気づきを持たせる。 - 更に気づきを深めさせるために、1時から7時までに分かったことや考えを掲示し、視覚的に理解を深めさせる。 	- タブレット共有ノート - JICA地球ひろば資料

	the University than men there. T1:Are women independent? S2:Yes, they are. They are independent. 5 解決策を考える。 T1:What do you need to do to help children who can't go to school? T2:I study hard and I want to be a teacher. T1:Please tell me what the world should do. T2:Make more school. Make many events for charity. T1:I will give 10 mins to think about it and let's share your opinions. T1:Which part is the most important? S1:Center. T1:Center is the most important part. This is the power. This is the power to make a better world. T2:What did Malala say in her speech? S1:One Child, one teacher, one book and one pen can change the world. Education first. S2:Let us make today's dreams tomorrow's reality. T1:What is the power to make a better world?	例) 男女格差の実態  - 世界経済フォーラムの男女平等に関する調査で7年連続1位のアイスランドの現状を紹介し、男女格差の大きな国と何が違うのかに気づかせる。 - 自分でできること、世界がすべきことの項目に分け、シンキングツール (PMI/KWL) を使い、まとめさせる。  【資料2 個人やグループで自分や世界(社会)は何かできるかを考えたロイロノート共有ノート】	
まとめ (10分)	6 「未来を共に創るチカラは何か・自分にできること」を表現する。 T1:We are going to listen to the opinions of JICA 宮崎 and 男女共同参画センター to solve the problem. T1:What did you learn today? What will you do for the future to make a better world? T2:I learned education is important and I will help and send money to	マララさんの思いや世界や日本の現状を正しく理解させるために、外部講師とのやりとりは日本語とさせる。(JICA 宮崎、宮崎県国際交流協会、宮崎県男女共同参画センター)	- Zoom - タブレット

build schools. S1:I learned we should help everyone to go to school and I will be a teacher to help them. S2:I learned about education in other countries and we can give them books. T2:It is nice that you want to help other students who can't go to school. That's a very good idea to think about others. T1:I want you to write your opinion. T1 How was the class? T2 It was very interesting because we found very goods idea to be a better world. We could find the power to change the world.	宮崎県国際協力推進員   公益財団法人 宮崎県国際交流協会  宮崎県男女共同参画センター - 新たな気づきや学びをさせるために、多くの級友の考えや外部の専門的な説明を聞かせ、自分自身の考えを深めさせる。 「共に創るチカラ」を級友と対話を通して、自分の考えを深めさせるために考えを共有できるよう提示する。	
--	--	--

9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法)

- 「自分自身と国際社会との繋がり・未来を共に創るチカラは何か・自分にできること」を考えることができた。

(記述)

- グループで意見交換しながら解決策を発表することができた。

(観察・記述)

- 国際社会の平和や発展に寄与し、未来を共に創ろうとする態度を身に付けることができる。

(観察・記述)

10. 学習方法および外部との連携

令和7年11月に上記7のような単元計画を立案した。カリキュラム・マネジメントとして、①村立小規模校であることから、対話的な取組時間を多く取り入れることができ、多くの考えを多角的・多面的に知ることができること、②外部資源(外部講師)を生かし、専門的な知識を持たせ、村から世界へと羽ばたく人材育成が必要なこと(中学校卒業後は親元を離れて、進学する生徒が多い)、③諸塚中学校の教育目標である「高い志と向学心にあふれ ふるさとを愛し、自分に誇りと自信をもった生徒を育成する」から「自分自身に誇りと自信を持たせ、共に創るチカラ」を見いだす教育効果を考えること、の3点から、カリキュラム・マネジメントした。

昨年度は、JICA 宮崎や宮崎県国際交流協会から「男女共同参画社会づくり」や「多文化共生社会の在り方」を学んでいる。昨年度の学びから更に「未来を共に創るチカラとは何か。自分たちになにができるのか。何がしたいのか。」を考え、深めていく時間になりたい。そのために、今年度も、JICA 宮崎や宮崎県国際交流協会と連携した授業計画を立てた。

11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み

①校内での研究授業実施

②校内掲示板での国際理解教育コーナー設置

12. 苦労した点

○「未来を共に創るチカラとは何か」を考えさせ、深めていく授業時数が少なかった。より効果的な授業展開にするために、英語授業と道徳の横断的な取り組みにしたが、他教科と関連し、更に授業時数を増やすことが難しかった。

○外部講師との十分な打合せやフィードバックができなかった。事前準備と反省の時間捻出が難しかった。

○英語授業であったため、自分の考えを英語で表現しないといけなかった。その為、生徒達に伝えたい表現の幅を狭めてしまったのではないかと課題がある。しかし、英語表現で自分の考えを一生懸命伝えようとしていた。

13. 改善点

○「未来を共に創るチカラ」としての実践を具体的に考えさせる必要があった。「何を、どのように、どこで、どうするか」を具体的に考えていく授業展開が「創るチカラ」となったのではないかな。

○”What I can do”と”What should the world do”の重なる部分を深める必要があった。

○PowerなのかActionなのかを明確にしなければならなかった。

○Powerの定義を持つべきであった。Power＝力のイメージが強かったのではないかな。自分を引き出すものの意味合いにすると良かった。

○外部講師のコメントは、導入時でも良かった。導入時に、ゴールイメージを持たせる外部講師の言葉にすると効果的な活用だった。

14. 成果が出た点

○単元計画からゴールイメージを明記することで、毎時間の学びをゴールに向かって深めていくことができた。

○日本や外国の教育の現状を日本語でまとめたことで、各国の良さや課題を把握することができ、次時への効果的なまとめができた。(資料1)

○個人やグループで「自分は何ができるか」や「世界(社会)ができること」を自分事として考えることができた。(資料2)

○生徒の感想から「教育は重要であり、世界は平等であってほしい。」、「日本の教育は他の国よりも良いということに気付いた。もっと他の国の事についても知りたい。」、「教育は重要であり、女性を尊敬したい。」など、世界のことや世界の教育の現状を知ることができたことが分かる。(資料3)

○「男女平等」、「自他への敬愛」の大切さを感じ取っていることが分かる。(資料4)

15. 学びの軌跡(生徒の授業まとめコメント)

以下の英文は、本時の生徒たちの学びのポートフォリオである。

- ・ (1) マララさんについての理解を深め、マララさんへメッセージを書いた。

I read Malala's voice for the future.
I was moved by the word when the whole world is silent, then even one voice becomes powerful,"
Because I didn't think that one voice could becomes powerful for the world.
I studied education in other countries
It isn't good for girls.
Most of girls have to work hard for the family and can't go to school.
I want the world to have equality.

【資料3 生徒 A のマララさんへのメッセージ】

I read Malara`s Voice for the fiuture.
I was moved by the word Let us make today's dreams tomorrow's reality.
Because this word gives us hope.
I studid education in other countries.
It made me thinkJapanese educationnal situation is better than most countries.
I want all children in the world to get a good education.

【資料3 生徒 B のマララさんへのメッセージ】

I read "Malala's voice for the future".
I was moved by the word "One child, one teacher, one book, and one pen can change the world".
Because when I hear the this word, I was surprised and my heart was moved.
I noticed that going to school makes me happy.
I studied education other contries.
It isn't good for girls.
Because boys can have higher education more than girls.
I want all children to have equal education in the world.

【資料3 生徒 C のマララさんへのメッセージ】

(2)「自分自身と国際社会との繋がり・未来を共に創るチカラは何か・自分にできること」を考え、グループで意見交換しながら解決策や本時の気づきを書いた。

I learned about education in the world.
I think Japanese education is better than in other countries.
I want to learn about education in other countries.

【資料4 生徒 A の本時の学び・感想】

I learned education is very important.
Because some children can not go to school in the world.
I want the world to be equality.

【資料4 生徒 B の本時の学び・感想】

I learned that going to school makes us happy.
Because going to school is important.
I hope to spread this around the world.

【資料4 生徒 C の本時の学び・感想】

16. 授業者による自由記述

授業を重ねるごとに、SDGs 目標4「すべての人々に包括的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」、目標5「ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女児にエンパワーメントを図る」を実現するために、何ができるのかを真剣に考える「学びに向かう力」の向上を見ることが出来ました。

特に、宮崎県男女共同参画センターからお越し頂いた講師の山田成美様の講話では、「女性教育とジェンダー」や「日本と世界の子どもの教育現状や男女格差の実態」を学び、国際社会の平和や発展に寄与し、未来を共に創ろうとするチカラとは、どんなチカラなのかをグループで話し合うことができました。生徒たちは、自分自身に無意識の固定観念があることに、「気づくこと」の大切さに気付いたようでした。この授業内容を動画作製し、生徒達と動画視聴し、学びを再確認することができました。学級通信にも QR コードで授業内容を動画視聴できるようにし、家庭においても「未来を共に創るチカラ」を考えてもらう工夫もしました。

更に最終時の英語授業では、外部講師を大いに活用し、「自分に何ができるか」を考えることができました。ザンビア出身の ALT ビリー先生との協働授業、JICA 宮崎から梅村様、宮崎県男女共同参画センターから山田様から助言を頂いた生徒たちは、「この学びを今後どう行動に移すのか」を更なる課題を見いだし、自分や社会の未来を真剣に考える良い機会になったと考えます。

計8時間の“Malala's Voice for the Future”の Reading の教材単元から、「世界を知ること」、「教育の現状」、「男

女平等」、「自他への敬愛」を感じることができました。2月には、アフリカでの人道支援活動紹介を予定しています。今後も、グローバルな視点や地球規模の課題意識を育み、諸塚村から、より良い世界を共に創る生徒の育成を目指した授業作りに励みたいです。「授業づくりの励み」が私自身の「未来を共に創るチカラ」としたいです。

【参考資料】

- ・ JICA 地球ひろば（2023）『「生きる力を育む」国際理解教育実践資料集』
- ・ JICA 地球ひろば（2025）『共につくる私たちの未来』
- ・ 宮崎県中学校教育研究会進路指導・キャリア教育部会編（2025）『中学生生活と進路3—キャリア教育・学級活動用テキスト—』 宮崎県
- ・ 藤原孝章（2021）『ひょうたん島問題』 明石書店
- ・ 日本国際理解教育学会編（2021）『国際理解教育ハンドブッカーグローバル・シティズンシップを育む—』 明石書店
- ・ 大橋正明 高柳彰夫（2020）『SDGsを学ぶ 国際開発・国際理解入門』 法律文化社
- ・ 藤原孝章 奈須正裕 田中浩彦（2020）『SDGsカリキュラムの創造—ESDから広がる持続可能な未来』 学文社
- ・ 大津和子（1992）『授業づくりハンドブック③社会科—一本のバナナから』 国土社
- ・ ブレイディみかこ（2021）『他者の靴を履く—アナーキック・エンパシーのすすめ—』 文春文庫
- ・ 末永幸歩（2023）『13歳からのアート思考』 ダイヤモンド社

授業実践事例

高等学校

国際理解教育/開発教育 学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	高橋 謙介	学校名	山形県立小国高等学校
教科(科目)・領域	地理探究	対象学年(人数)	3年 1組(12名)
実践年月日もしくは期間(時数)	令和7年 10月 ～ 11月(4時間)		

【実践概要】

1. 単元名(活動名): オーストラリアの多文化主義から考える難民問題					
2. 実践する教科・領域 地理探究	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 単元の目標(評価規準を意識して設定)					
・オーストラリアにおける多文化主義の背景及び現状を理解する。 ・難民が置かれている状況を理解する。 ・日本の難民受け入れの現状を踏まえて、今後日本は難民に対してどうしていくべきか、自分の考えを持ち表現することができる。					
5. 単元の評価規準	①知識・技能	・オーストラリアにおける多文化社会の背景及び現状を理解している。 ・難民について理解をするとともに、その発生原因や受入国の影響について理解する。			
	②思考・判断・表現	・日本の難民受け入れの状況について、日本は今後どうしていくべきか、自分の考えを持ち、表現することができる。			
	③主体的に学習に取り組む態度	・授業の諸活動に意欲的に参加し、自分が今後多文化社会に対してどう向き合っていくかを考えることができる。			
6. 単元設定の理由・単元の意義					
【単元設定の理由あるいは単元の意義】					
現在日本は、少子高齢化による労働力不足やグローバル化が進行し、外国人人口が増え続けている。そのような現状から、多文化主義を実践しているオーストラリアについて学習することは、これからの社会を生きる生徒にとって有益なことである。オーストラリアにはアジアを中心とした外国人が多く存在しており、また、難民の受け入れも積極的に行っている。そこに着目し、難民がオーストラリア社会に与える影響について考えることで、オーストラリアの現状だけではなく、日本はこれから難民に対してどうするべきか考えることができる。また、同時に難民について、なぜ発生してしまうのか、その社会的な構造まで考え、理解を深めていきたい。 この単元を通して、オーストラリアの多文化主義の理解から難民について理解を深め、難民をほとんど受け入れていない日本の現状について考え、今後どうしていくべきか考えることができる。					
【児童／生徒観】					
3年1組の地理探究選択者は、地理に対して意欲的に学ぶ姿勢が見られる。これまでは知識の習得だけではなく、問題演習にも取り組んできた。演習を通して、物事を多面的・多角的にとらえる力や、持っている知識を組み合わせ一つ一つの解答を導き出す力を養ってきた。1人で考える力の他にも、仲間と協働して演習をする場面も設定しており、違う考えを受け入れる力、自分の考えを伝える力も養ってきた。全体的に、地理的事象に対する興味関心が高く、主体的に学習に取り組むことができている。また、本校は毎年インドからの高校生の受け入れや、研修旅行も台湾であるため異文化についての興味関心も高い。					
【教材観】					
グローバル化及び人口減少が進む日本は、今後外国人の流入が進むと考えられている。その中で同じ先進国であり多文化共生を実現しているオーストラリアの現状を学ぶことは、これからの日本で生きていく生徒にとって有益な					

ことであると考え。『いのちの持ち物けんさ』ワークショップでは自分の身近にあるものや日常を改めて振り返ることができ、自分という存在を見つめ直すことができる。そのうえで難民の人たちの痛みを共感することで、国境を越えた他者理解に繋がると考える。また、実際に難民支援を行っている団体の話を聞くことで、よりリアルに感じることができ、難民問題は実際に起きているのだと課題意識を持つことができる。

【指導観】

難民問題を単なる世界で起きている出来事として認識するのではなく、自分たちにも関係があり、将来関わるかもしれないという気持ちになってもらえるような授業展開、声かけを行う。生徒の感想を丁寧に拾い上げ、そこから生徒が新たな気づきを得られるようにしていきたい。そして難民の気持ちに共感して終わるのではなく、発生してしまう原因や難民の受け入れ国での立場、社会に与える影響など、より深い理解ができるように指導していきたい。

7. 単元計画(全4時間)			
時間	ねらい	学習活動	資料など
1	オーストラリアが多文化社会になった背景とその現状を理解する。 その中で特に難民に焦点を当て、難民問題を考えるきっかけを作る。	○授業プリントを中心に学習する	授業プリント
2	喪失の疑似体験を通して難民の人たちの痛みを共感する。 難民に対する国際的な理念を確認する。	○UNHCRの「いのちの持ち物けんさ」(3人1組のグループ) ○「世界人権宣言」及び「難民条約」について確認する。	UNHCR 「いのちの持ち物けんさ」
3 (90分)	実際に難民支援を行っている団体の話を聞き、難民についてより深く理解する。	○「難民を知るワークショップ」	認定 NPO 法人 Ivy https://ivyivy.org/index.html
4 本時	日本が難民を受け入れることで国内にどのような影響がでるのかを考える。そのうえで自分はどうしていくべきか、何ができるかを考える。	○KJ 法でグループごと意見を出し、まとめる ○個人での振り返りを行う	難民条約 世界人権宣言 日本での難民を経験した人の声

8. 本時の展開(概略)

本時のねらい: 日本が難民を受け入れることで国内にどのような影響がでるのかを考える。そのうえで自分はどうしていくべきか、何ができるかを考える。

過程・時間	発問および学習活動 T 教師の働きかけ・予想される生徒の回答	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	前回まで習ったことをグループで思い出す。 T オーストラリアの多文化共生を学ぶところから前回の Ivy の話まで様々学んできたと思います。グループの人たちと話してちょっと思い出してみましょう。 ・いのちの持ち物けんさやったね ・Ivy の話はリアルだった T そこでどんなことを感じたの？ ・何かを失う辛さがわかった ・本当に今、現在起きていることだと実感した 「世界人権宣言」及び「難民条約」の内容を復習して、難民に対する国際的な理念を再確認する。 T 2時間目の授業で「世界人権宣言」及び「難民条約」について学習したと思うけれど、難民に対する国際的な理念はどんなものだったか。	生徒が活動した内容だけでなく、その時にどんな気持ちになったのか、何を考えたのか、そういった気持ちを振り返ることができるような声かけを行う。	前回までの授業プリント 難民条約（一部抜粋） 1. 難民を彼らの生命や自由が脅威にさらされるおそれのある国へ強制的に追放したり、帰還させてはならない (難民条約第33条、「ノン・ルフールマン原則」) 2. 庇護申請国へ不法入国した不法に在ることを理由として、難民を罰してはならない (難民条約第31条) という決まり事があります。どちらも難民に保護を保障し、生命の安全を確保するための大切な決まりです。 引用: UNHCR 日本

	たかな。確認してみよう。 • 様々な権利があったけれど「すべて人は、迫害を免れるため、他国に避難することを求め、かつ、避難する権利を有する。」というのがあったよね。 • 「難民を彼らの生命や自由が脅威にさらされるおそれのある国へ強制的に追放したり、帰還させてはいけない」とあったようにしっかりと保護しないといけないんだよね。	世界人権宣言（一部抜粋） 第三条 すべて人は、生命、自由及び身体の安全に対する権利を有する 第十四条 1. すべて人は、迫害を免れるため、他国に避難することを求め、かつ、避難する権利を有する。 引用：国際連合広報センター		
展開 (35分)	日本が難民を積極的に受け入れたら、国内にどのような影響があるかを考える。(KJ法) T これまでの授業を踏まえて、日本が積極的に難民を受け入れることになったとしたら、どのような影響が出るかを考えてみよう。今回はメリットと課題について考えていきます。 まずは受け入れることで起きるメリットと課題について日本の立場になって考えていこう。 メリット • 労働力が増える • 様々な文化が入ってきて多文化になる 課題 • 財政が厳しくなる • 治安が悪くなる T 次に難民として日本で暮らすことになった人たちの立場に立って考えてみよう。 メリット • 治安はいいから安心して暮らせるかも • インフラは比較的整っているよね 課題 • 日本語は難しいかも • 冬は寒いよ T 難民でやってきた方に子供ができれば、その子供たちにはどんな影響があるだろうか？ • 日本語話せるようになるのかな • 学校で仲間外れとか差別にあったりするかも T 難民の人たちはずっと日本に住み続けるのかな？ • ずっといると思う • たしか帰るんじゃないかって？ • 国が落ち着いたたら帰りたいよね • 日本住みやすいからそのままいるんじゃないの？ 実際に日本での難民を経験した人の声を紹介する 実際の難民の声のポイント 「亡命する難民はタフであり、精神的にも強い人が多い。自分の置かれた状況を深く理解し、自分の人生の再チャレンジをいつも探っている」 「難民は日本経済を支える人材を提供する可	難民に対する国際的な理念を踏まえて、受け入れることを前提として考えていくことを確認する。 前回までで使用したプリントなどを準備させ、より学んだことに基づいて意見が出せるようにする。 意見が出せない生徒に対して、「人手が増えたらうれしい場所はあるかな？」など具体的にイメージできるような声がけを行う。	大判用紙の使い方 日本が難民を積極的に受け入れたら、国内にどのような影響があるか 日本の立場 メリット 日本の立場 課題 難民の立場 難民の立場	この問いかけは状況をみて随時行う。 ここでは授業者が読み上げ、各グループには読み上げたのちプリントを配布する。 難民を知る基礎知識より抜粋、要約の上で紹介する。 ※別添資料

能性を有している。日本で保護された難民が本国帰国後に重要なポストに就き、日本の企業誘致などを促し、日本経済を支える人材になりうる」 「難民は日本の文化と言葉を一生懸命学ぼうとしている。日本人と共生していくことを望んでいる」 T この声を聞いてみんなはどう思った？ また、新たに思いついたことがあれば書いてみよう。 ・帰った後母国で貢献しているね ・日本を支援したいって言っているね ・帰った後のことは考えたことなかった 出た意見の深掘りをおこなう T それでは付箋は出そろったと思うので、次は深掘りをしていきます。例えば「治安が悪くなる」という付箋があるとしたら、なぜ治安が悪くなってしまうのか、といったようにそれぞれの付箋についてそうなる原因を考えてください。今回は特に課題の方で出た付箋を中心に考えてみてください。 ・治安が不安定になる → 仕事がなくなったら犯罪が増えてしまう ・財政が厳しくなる → 難民の人たちを支援するための費用が必要であるから。 ここで再度国際的な理念を確認する T ここで再度国際的な理念を再確認してみよう。みなさん覚えていますか？ 先ほどでた課題とこの理念を照らし合わせて感じることはありますか？ グループで話してみてください。 ・難民の人たちの生活も大事だし、自分たちの生活も大事だね。 ・予算も限られているだろうし一筋縄ではいかなさうだね。 先ほどのワークで深掘りした課題を解決するための方法を考える。 T ここからは先ほど深掘りした課題について、その課題を解決するために考えられる方法を考えていこう。様々課題が出たと思うけれども、今回は特に2つに絞って各グループで考えてみてください。方法とその理由を考えてみてください。 ・日本語習得に向けた支援を行う T 誰が日本語を教えるのかな？ ・外国人向けの日本語学校とか？ ・Ivyさんみたいな NGO 団体？ ・難民を経験した外国人の人とかだと気持ちもわかっていいかもね ・就職支援を行う	「難民」として日本で暮らした経験から思うこと⁴¹⁾ ミヨウ・ミン・スウェ⁴²⁾ 私は「難民」という言葉に非常に違和感を抱く。亡命する難民はタフであり、精神的にも強い人が多い。自分の置かれた状況を深く理解し、日々頑張っている人が多いのだ。そこで、難民自身が自らの人生をもっと輝かせるために、難民受け入れ国の手厚い支援が必要不可欠になる。日本社会で、今後難民を受け入れるには、まず難民に対する正しい知識と理解を深める教育が必要だ。⁴³⁾ 難民は日本経済を支える人材を提供する可能性を有している。日本で保護された難民が本国帰還後に当確政府の重要ポストに就き、日本の企業誘致などを促し、日本経済を支えてくれる貴重な人材になることも考えられる。もちろん、国内で就職して日本経済を支える人材にもなり得る。⁴⁴⁾ 難民として日本の社会で暮らしていくことはそう簡単ではない。肌の色も違い、文化も違い、言葉も違う難民と直接話したことがあるという日本人は1%に満たないかもしれない。でも、彼らは日本の文化と言葉を一生懸命学ぼうとしているのだ。日本人と共生していくことを望んでいる。⁴⁵⁾ 難民を知る基礎知識より抜粋、要約⁴⁶⁾ 思いつくところから付箋を書いていくように指示をする。また、できるだけすべての付箋について深掘りできるようにする。 時間がなければ1つ
--	--

	T どういった職業についてもらうのかな？ ・収入が安定している職業がいいね ・自分の国での経験を活かせる職業がいいね ・一番はその人が就きたい仕事に就くことだよ ね 出そろったらグループごと発表を行う		
まとめ (10分)	・個人での振り返り ○個人での振り返りをします。各自プリントに記入してください。 T 今回学んだことを踏まえて、これから生きていくうえでどんなことを意識して生活していくとよいか、プリントにまとめてみよう。 ・これから外国の人とかかわるときに、外国人だからという理由で敬遠しないで、1人の人間としてしっかり向き合いたいと思った。もしもその人が難民だとしたら相当な苦勞をされていると思うので、思いやりの気持ちをもって接していけるようにする。 ・難民の方々の支援をしっかりとすれば日本は世界は良い方向に動いていくのではと思った。私も今を生きる人間として何か少しでも協力できることがないかと思ったので、まずは自分で難民についてもっと知りたいと思う。 T 今回は特に難民に焦点を当てて考えましたが、日本には難民だけではなく移民の方もたくさん流入してきます。今回感じたことを忘れずに生活してください。	グループでの活動が中心だったので、個人でしっかりと向き合う時間にする。	授業プリント

9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法)

日本が難民を受け入れることで国内にどのような影響がでるのかを考えることができたか。
そのうえで自分はどうしていくべきか、何ができるかを考えることができたか。
(ワークショップの様子、プリントへの記入状況)

10. 学習方法および外部との連携

UNHCR の「いのちの持ち物けんさ」をアレンジして実施する。また、3時間目には認定 NPO 法人 Ivy さんにお越しいただき、難民を知るワークショップを中心によりリアルな目線で難民について考えていく。Ivy さんは私自身、教師海外研修の事前研修でお世話になった後に、昨年度も本校にお越しいただき開発教育ワークショップを行っていた。今回もその繋がりから依頼した。本時では KJ 法を用いて考えを深めていく。

11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み

校内での授業研究の実施
職員研修での情報共有
他県地理部会での公演

【自己評価】

12. 苦勞した点

難民と移民の違いをしっかりと学習したうえで本時の授業を展開するべきだった。移民も難民も「外国人」とひとくくりにして考えている生徒も見られたため、授業展開に工夫が必要だった。生徒がこちらの予想よりも多くの付箋を出してくれたため、時間が足りなかった。

13. 改善点

移民と難民の区別をしっかりとしたうえで授業を展開するべきだった。そのために、実際に日本での難民問題について、より理解を深めることが必要であると感じた。社会の現実を知ったうえで自分たちには何ができるか、どうしていくべきか、といったより複雑な課題に向き合わせるような授業展開が必要である。本時で行ったような付箋の原因

を考えることや、影響を考えるといった「深掘り」ではなく、現実社会で実際に起きているジレンマを体験させ、その上で自分の答えを出すといった思考の深掘りが必要である。

14. 成果が出た点

単元全体を通して難民についての理解を深めることができた。特に申請の難しさや世界の現状について理解が深まったと感じる。

本時では、模造紙を使い授業を行ったので生徒の考えをより多く引き出すことができた。難民を積極的に受け入れるうえでの課題について考えることができた。

15. 学びの軌跡(児童生徒の反応・感想文・作文・ノートなど)

○授業を受ける前難民についてどのような印象を持っていたか。

- ・悪い印象があった。悪いニュースで取り上げられてばかりだったから。
- ・あまりいい印象はなかった。自国ににいるのが危ないから必死になって逃げているという印象。
- ・難民は多く受け入れたほうがいい。そんなに手間はかからないだろう。
- ・難民を受け入れることは簡単。日本にはあまり縁がない話と思っていた。
- ・難民によって治安が悪くなりそうだ。難民との共生は難しいだろう。

○今回の授業を通して学んだこと。

- ・難民になるまでとても大変だと思った。様々な申請をしないと行けないし、難民になれたとしても大変なことがたくさん待っていると思った。
- ・難民を支援するには多くの時間とお金がかかることが分かった。支援をするにも適切なもの、職、住居が全く分らず、これはまず意味がないんじゃないかと思うこともあった。
- ・日本の受け入れ態勢はやはり遅れている。受け入れることで互いに良い点もあるが、課題の方が目立つ。言語の壁はやはり大きく、難民に安心安全が訪れる日は遠いと感じた。
- ・難民は安全な国に逃げることもできて、仕事や支援が少ないため満足はできないと思う。
- ・難民と共存するためにはまず自国が余裕がないとやっていけないと感じた。
- 今回学んだことを踏まえて、これから生きていくうえでどんなことを意識して生活していくとよいか。
- ・日本にも難民が何人か入ってきていることを全然知らなかった。もっと世界のことや難民のことを知らなくてはと思った。
- ・相手がだれであろうと思いやりをもって生きていきたい。
- ・他国で暮らせと言われた時に、私たちは英語を学ぶ機会があったので伝えるすべを知っているけれど、難民の方々はその機会すらなく、何もわからないところで生活しなければならないことを考えると、学ぶことのありがたさを改めて意識していこうと思う。
- ・人に聞いたことだけではなく、しっかり自分で考えて行動することが必要。他国の情勢を気にして、難民となった人と会った時にはどう関わっていけばよいかを考えていきたい。
- ・どんなことも他人事とせず自分事として生きていきたい。

16. 授業者による自由記述

今回は難民というテーマで授業を展開したが、やはり難しいと感じた。世界における難民の状況、難民申請の難しさ、日本における難民問題など、難民問題と言っても多くのことを学ぶ必要があると感じた。高校三年生であれば、これらのことを学習したうえで本時の授業を行えば、生徒にとってより深く考えられる授業になると感じた。今回初めて難民についての授業を実践した。一つの授業を作るのにここまで多くの本を読んだことは初めてであり、また、大津先生をはじめいろんな方から助言やアドバイスをいただくことができた。授業を実際に展開していく中で、そのアドバイスの意味を身に染みて感じることもできた。この授業は今年で終わりではなく、来年度も再来年度もアップデートを重ねてより良い授業にしていきたいと思っている。

【参考資料】

- ・ JICA なぜ難民は増え続ける？ 平和な社会をつくるため必要なことは【世界をもっとよく知りたい！・5】
https://www.jica.go.jp/information/topics/2024/p20250107_01.html
- ・ UNHCR 難民についての授業の広場 <https://www.japanforunhcr.org/news/2017/forteachers>
- ・ HUFFPOST シリア難民たちは何を持って逃げてきたのか カバンの中身を見せてもらった
https://www.huffingtonpost.jp/2015/09/08/syrian-refugees-reveal-bags_n_8104814.html
- ・ オーストラリア多文化社会論 移民・難民・先住民族との共生を目指して
(関根政美・塩原良和・栗田梨津子・藤田智子)
- ・ 現代国際理解教育辞典(日本国際理解教育学会)
- ・ 難民を知るための基礎知識～政治と人権の葛藤を超えて～(滝澤三郎・山田満)

国際理解教育/開発教育 学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	堀 奏音	学校名	私立 青森明の星中学・高等学校
教科(科目)・領域	地歴公民・地理総合	対象学年(人数)	1年 5組(23名)
実践年月日もしくは期間(時数)	2025年 10月 (3時間)		

【実践概要】

1. 単元名(活動名): 居住・都市問題とSDGs					
2. 実践する教科・領域	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 単元の目標(評価規準を意識して設定)					
発展途上国でみられる居住・都市問題を具体的な事例を通して現状や背景を理解し、SDGs11「住み続けられるまちづくり」の視点から、課題とその解決策を考察し、持続可能な都市づくりについて自ら考える力と態度を育てる。					
5. 単元の評価規準	①知識・技能		発展途上国でみられる居住・都市問題について、具体的な事例を理解することができる。		
	②思考・判断・表現		都市が持続可能であるための課題と改善策を、SDGs 11 の視点で考察することができる。		
	③主体的に学習に取り組む態度		持続可能な都市づくりについて、主体的に考えることができる。		
6. 単元設定の理由・単元の意義					
【単元設定の理由あるいは単元の意義】					
現代において、都市は経済活動や人口が集中することにより、交通渋滞や環境悪化、スラムの拡大など多くの課題を抱えている。特に発展途上国の都市では、急速な都市化によりインフラ不足や大気汚染などが深刻化しており、SDGs の達成に向けた国際的な課題となっている。この単元では、地理的な視点から都市問題をとらえ、持続可能な都市づくりについて考察することを目的とする。					
【児童／生徒観】					
本校の1年5組は、コミュニケーションを積極的に取ろうとする姿勢や、わからないことも一生懸命に理解しようとする雰囲気がある。英語科であることもあり、生徒たちがグローバルな視点で地理的な事象を考察することで、持続可能な社会への関心を深め、主体的に行動する意識を育てていくことができる。また、SDGs に関連付けて地理総合を学習することで、地理という科目がより身近なものと感じられることに加え、本校のグローバル教育という点からも、国際理解のきっかけになることが期待される。					
【教材観】					
SDGs という言葉の認知度はここ数年で格段に高くなっているが、正しく内容を理解できている人はそれほど多くないように感じる。普段から使用している地理総合の教科書を用いて行う授業の延長線上に SDGs の考えがあるということに気づかせ、SDGs が身近なものであることや、目標 11「住み続けられるまちづくり」を、世界の様々な背景を抱えた各地で実現するために必要なことは何かを考えさせたい。					
【指導観】					
地理総合の都市問題の分野をベースに、生徒同士が「答えのない問い」について考え、高校生なりの問題意識をもち疑問を抱かせるとともに、世界の様々な国や地域に目を向け、グローバルな視点を持つきっかけとしたい。					

7. 単元計画(全 3 時間)			
時間	ねらい	学習活動	資料など
1	都市への人口集中が世界的に進んでいることを主題図やグラフから読み取るとともに、都市に人が集まる背景について理解する。	- なぜ都市に人が集まるのか、その理由をグループで議論する。 - 都市人口率について、主な国のデータを読みとり、その傾向を把握する。 - SDGs について触れ、目標 11「住み続けられるまちづくりを」について、住み続けられる都市とはどのような都市か、ワークシートに列挙する。	- 写真資料 - ワークシート
2 本時	途上国の都市問題を理解し、それらが SDGs とどのように関連しているかを考え、解決に向けた取り組みについて知り、自分たちにもできることを考える。	- 都市に人口が集中するとどのような問題が起こりうるか、ワークシートに記入する。 - 途上国の都市問題に関連する SDGs 目標は何か、議論する。 - 解決に向けた取り組みにはどのような例があるかを知り、自分たちにもできることはないかを検討する。	- 写真資料 - ワークシート
3	先進国の都市を例に挙げ、インナーシティ問題と、その解決に向けた都市計画を行ったロンドンの事例から学ぶ。	- 人口減少に転じた都市では、どのような問題が発生したのか、グラフを読みとる。 - ロンドンの都市計画の例を、日本の都市と比較検討する。 - 自分が住むまちが持続可能であるために、必要なことは何か議論し、まとめる。	- 写真資料 - ロンドン中心部と郊外の人口推移を示したグラフ - ワークシート

8. 本時の展開(概略)			
本時のねらい: 途上国の都市問題について考え、SDGs と関連付けて理解し、自分たちにもできることを考える。			
過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5 分)	前時の振り返り T 前回の最後に、SDGs11 について確認しました。では、『住み続けられるまち』とは、どのようなまちだと考えましたか。 (前時に記入したワークシートを利用) - 安全であるまち - インフラが整っている - 仕事がある - 買い物や通勤がしやすい	前時の続き 生徒に声をかけ、発表を促す	ワークシート(前時から使用していたもの)
展開 (35 分)	都市の人口一極集中について(グラフを提示) T 途上国で、首位都市に人口が集中するのはなぜでしょう。農村と都市を比べてみます。 T 雇用機会(働き口)は、都市と農村のどちらが多いのでしょうか。 - 都市 T 所得水準は、都市と農村のどちらが高いのでしょうか。 - 都市 T 病気になったときに、医療サービスを受けやすいのは都市と農村のどちらでしょうか。 - 都市 T 高校や大学などへの進学を考えたときに、都市と農村ではどちらが教育機会が多いでし	グラフから、どの程度の人口集中度合いかを認識させる 2 択の問いなので、挙手させて確認する。	グラフ: フィリピンの都市圏別人口順位

	ようか。 ・都市 T 買い物や通学通勤など、普段の生活を考えると、都市と農村ではどちらが便利でしょうか。 ・都市 T 趣味・娯楽・文化など、自分に合った生活がしやすいのは、都市と農村のどちらでしょうか。 ・都市 T 皆さんが農村に住んでいたら、どう思いますか。 ・農村での暮らしは苦しいので、都市に移住したくなる。 ・都市に移住すれば、暮らしが良くなるような気がする。 T このように考えてみると、農村には雇用機会が少なく、所得水準も低い農村から、人々が都市に移住する理由がわかりますね。 農村から人々を押し出す要因をプッシュ(push)要因と言います。 逆に、都市では一般的に、雇用機会が多く、所得水準も高く、さらに医療を受けられる機会も多く、より高い教育を受けられる機会が多く、しかも、生活が便利で暮らしやすいとされています。 このように、都市が人々を引き付ける要因をプル(pull)要因と呼びます。 このプッシュ要因とプル要因によって、都市への人口集中が起こっています。 T 人口が一極集中すると、どのような問題が起こるのか考えてみましょう。 (写真 4 枚 A～D を順に提示) (写真 A) ・高層ビルとスラムが両方あるから経済力に大きな格差があると思う ・治安が心配 (写真 B) ・児童労働で何とか生活している ・ゴミの中から金目のものを探して暮らしている (写真 C) ・住む場所が足りていない ・衛生面は大丈夫かな (写真 D) ・渋滞がひどいので環境に良くない ・渋滞のせいで、通勤通学がしにくい	↓ 板書例 4 枚の写真から、人口の一極集中をビジュアル的に認識させる	写真: マニラの高層ビルとスラム、廃棄物を集める少年、水質汚染が進む川沿いに立つ住宅、交通渋滞
--	--	--	--

	T 途上国で起こっている都市問題について、12 枚のカードを配ります。どのように関連しあっているか、矢印でつないでみましょう。	カード…スラム化, 貧困, 飢餓, 学校に通えない, 仕事につけない, インフラの未整備, ゴミ問題, 安全でない水, 交通渋滞, 大気汚染, 不衛生な環境, 感染症の蔓延 以上の 12 枚	グループごとに、ウェビングさせる。 ↓ 解答例
			↓ 解答例
	T 都市問題に関連する SDGs 目標はどれか、グループで話し合ってみましょう。 ・住むところの問題があるから SDGs11 ・水質の問題があるので SDGs6 ・収入が安定していないから SDGs1 ・多くの目標が関連している	SDGs の多くの目標が関連しあっていることに気付かせる	↓ 解答例
			↓ 解答例
まとめ (10 分)	学生国際協力 NGO FEST TOKYO について紹介する	生徒が各自のタブレットを用いて、FEST TOKYO のホームページにアクセスし、団体概要や活動内容などを調べる。	FEST TOKYO: スラム地域を対象とした「自立支援」を行っている国際協力 NGO

	T 学生国際協力 NGO FEST TOKYO はどのような活動をしている団体か、タブレットで検索して調べてみましょう。 ・スラム地域の支援をしている ・フィリピンで活動している ・井戸の建設をした ・水道をはじめとしたインフラ整備をしている ・「過剰介入を避けつつ、最低限のリスク管理を行う」をテーマに活動している		
	T 学生国際協力 NGO FEST TOKYO はこのような(皆さんが調べた)活動をしています。皆さんも、今またはこれから、何ができることはあるでしょうか、考えてみましょう。 ・途上国の人々の暮らしに関心をもつ。 ・国際協力をしている NGO について調べてみる。 ・日本における都市への人口集中についても考えてみたい。 ・将来、途上国へのスタディーツアーに参加したい。	ワークシートに記入 記入したことを発表させる	

9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法)

- ・途上国の都市問題の現状を理解する。(ワークシート)
- ・都市問題と SDGs 目標との関連を考えることができる。(観察)
- ・SDGs の各目標達成には、他の目標との関連が強いことを理解する。(ワークシート)
- ・都市問題の解決に向けた取り組みについて、自分たちにできるは何かを考えることができる。(ワークシート, 観察)

10. 学習方法および外部との連携

【学習方法】

- ・写真を用いて、気づいたことを挙げる。
- ・ホワイトボードを用いて、SDGs に関する項目のウェビング。
- ・ワークシートに、自分の考えを記入する。
- ・各自のタブレットで、国際協力 NGO について検索し調べる。

11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み

本校では、総合的な探究の時間の中で、SDGs をはじめとしたグローバル教育に取り組んでいる。今回の地理総合での授業にとどまらず、他教科の教員と連携しながら、授業を展開していきたい。また、高校1年生だけでなく、本校の中学生に対して授業を行う機会を設け、校内全体で国際理解教育の機運を盛り上げていきたい。

【自己評価】

12. 苦労した点 ※学習活動が展開する中での苦労や、そこで見えてきた問題点を記入して下さい。 ・農村と都市を、雇用や教育などについて、農村と都市ではどちらの方が恵まれているかを考えるところで時間をかけず、逆に写真を見せて考えさせる部分に時間をかけすぎるなど、時間配分に苦労した。 ・最後に NGO を紹介し、自分たちにできることは何かを考えさせようとしたが、高校 1 年生からすると「募金」「ボランティアに参加」「ゴミを出さない」などといった、想定よりもレベルの低い回答が多くなってしまった。問いかけ方が正しくなかった結果であると言える。
13. 改善点 ・ホワイトボードを用いて、途上国に見られる都市問題の関連を矢印で繋いでいく時間をとったが、グループごとに、なぜそのようなつながりになるのかを説明させるべきであった。各グループで答えが異なるため、お互いの考え方をシェアさせると、さらなる学びがあった。 ・ロイノート等を有効に活用し、各自で考えたことや気づいたことが、その場でタブレットを通してお互いに送り合うことで、他の班の考え方も知ることができ、より学習内容や思考を深めることができた。
14. 成果が出た点 ・生徒に、地理総合の教科書の内容を用いて、途上国の都市問題や SDGs について考えさせることによって、他国のこととはいえ身近な問題としてとらえることができた。
15. 学びの軌跡(児童生徒の反応・感想文・作文・ノートなど) 以下、授業の最後に発問した「今またはこれから、何ができることはあるでしょうか、考えてみましょう。」に対する、生徒のコメント(一部)です。 ・SDGs についてもっと学ぶことで、他の SDGs に関連する多くの問題があることに気付いた。ボランティア活動を通してこれらの問題の予防・解決に最善を尽くすべきだと思う。 ・世界に目を向け、今の現状を知り、何ができるのかを考えることが大切だと思った。 ・少しずつ自分のムダを減らして、地域のために活動できることを、一人だけでなくみんなでやれるようにする。
16. 授業者による自由記述 ・恥ずかしながら、自分自身がきちんと指導案を作成して、それに基づいて授業を展開するのは、教育実習以来である。改めて、指導案を作成する大切さや、生徒のことを考えながら授業展開を検討していく難しさを実感した。 ・大津先生に、大変ご丁寧にご指導いただき、授業実践をするまでは「絶対うまくいくとても良い授業」になるという、根拠のない自信があったが、実際に授業を行ってみると、反省すべき点が多々あり、自分の未熟さを実感した。 ・今後この授業が、私の「テッパンネタ」として、校内で活用できるようにし、本校のグローバル教育の一助となれるようにしたい。

【参考資料】

単元を構想、実施する上での教師のための参考資料、学習者のための参考資料、ウェブサイト、データリソースなど

・写真・グラフは全て本校で採用している教科書からの引用 〔地理総合 世界に学ぶ地域へつなぐ(二宮書店)p192～193〕 ・学生国際協力 NGO FEST TOKYO https://www.ngofesttokyo.com/
--

国際理解教育/開発教育 学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	青木 和也	学校名	栃木県立小山南高等学校
教科(科目)・領域	外国語(英語コミュニケーションⅡ)	対象学年(人数)	2年 普通科文Ⅱ組(28名)
実践年月日もしくは期間(時数)	2025年 10月 ～ 11月 (8時間)		

【実践概要】

1. 単元名(活動名):服の向こうにある世界—ファストファッションから考える					
2. 実践する教科・領域 外国語	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 単元の目標(評価規準を意識して設定)					
生徒がファストファッションに関連する社会的・環境的問題を理解し、持続可能な選択肢を考える力を養う。具体的には、ファストファッションの問題を多角的な視点で捉え、問題解決に向けた具体的な行動やアイデアを提案できるようになることを目指す。また、ディスカッションや英作文を通じて、批判的思考力と英語で発信する力を向上させる。					
5. 単元の評価規準	①知識・技能	ファストファッションの概念、背景、影響について理解し、ファストファッションが生み出す社会的・環境的な問題を理解する。			
	②思考・判断・表現	ファストファッションがもたらすメリットとデメリットを批判的に考察し、二つの立場から議論できる。持続可能なファッションの未来について、自分の考えを発表することができる。			
	③主体的に学習に取り組む態度	ファストファッションの問題に対して自分自身の意見を持ち、積極的にディスカッションに参加する。			
6. 単元設定の理由・単元の意義					
【単元設定の理由あるいは単元の意義】					
本単元は、高校生にとって身近で関心の高いテーマであるファッションを通じて、環境問題や社会的責任について考える力を養うことを目的としている。特に、手軽に購入できるファストファッションが及ぼす影響を理解し、持続可能な選択肢を意識することが重要である。					
【児童／生徒観】					
生徒たちは、日常生活において自分の身の回りの世界を中心に物事を捉えがちであり、視野が限定されている。また、自らの欲求や関心を優先して行動し、その背後にある社会的・環境的な影響には十分に目を向けていない。しかし、彼らが日々行っている消費行動は、世界各地の人々の労働や環境問題と密接に関わっていることを知ることができれば、身近な行動を見直すきっかけになる。今後の学びを通して、自らの選択が地球規模の課題とつながっていることを理解し、より持続可能で責任ある消費活動へとつなげていくことが期待される。					
【教材観】					
ファッションは高校生にとって最も身近で関心の高いテーマの一つである。日々の生活に直接関わり、自己表現の手段として大きな意味を持つ一方で、その背後には労働環境の過酷さや環境破壊、大量廃棄といった地球規模の課題が潜んでいる。本教材は、生徒が身近な関心事から学びを出発させ、やがて社会的・国際的なつながりに思いを広げることを可能にする。英語の文章や資料を通して問題の背景を知るだけでなく、ディスカッションや表現活動を通じて自らの考えを深めることができる点に大きな意義がある。また、消費行動と世界の現状を結び付ける契機として、持続可能な未来を考える学習に適している教材である。					

【指導観】

本単元の指導においては、生徒が自分たちの生活と世界の課題を結び付けて考えられるよう、気づきを促す学習過程を重視する。教師が一方的に知識を与えるのではなく、資料やディスカッションを通じて生徒自身が問いを立て、多様な視点から問題を捉えられるよう支援することが重要である。また、立場別ディスカッションや英作文などの活動を通じて、単なる知識理解にとどまらず、自分の考えを表現し他者と共有する経験を積ませることで、批判的思考力と協働的な学びを育む。さらに、学習内容を日常の消費行動に結び付けさせることで、学びを自己の行動変容へとつなげ、持続可能な社会の担い手としての意識を高めていくことを目指す。加えて、立場や利害の異なる役割を演じる過程で、生徒がジレンマに直面することが予想される。その際、教師は生徒が感じた葛藤を共有・整理する場を設けることで、「多様な価値観の中でどう判断するか」という実社会に近い学びを体験させ、理解をより深めるよう支援する。

7. 単元計画(全 8 時間)

時間	ねらい	学習活動	資料など
1	ファストファッションの問題に対する認識を深める。	① 事前アンケートで生徒の意識を把握する。 ② 写真を見せ、感想を自由に書かせ、発表・ディスカッションを行う。 ③ 記事を読み、問題について深く学ぶ。 ④ ポートフォリオ記入で振り返りを行う。	・アンケート用紙 ・写真(スウェットショップ、ランドフィル) ・記事(ファストファッションの影響)
2 本時	異なる立場からファストファッションを考え、視点を広げる。	① 前回の内容を簡単に振り返る。 ② 立場別ディスカッション(消費者、労働者、企業、環境保護団体)。 ③ 各グループで意見を発表し、学びを深める。 ④ ディスカッション後、全体で感想を共有。	・立場別ディスカッション用資料(簡単な英文) ・発表用シート
3	持続可能な選択肢を学び、実生活でできる改善策を考える。	① エシカルファッションやリサイクル素材について考える。 ② 実生活でできる改善策をグループで提案する。 ③ 提案内容を全体で共有し、最も実行可能なものを選ぶ。 ④ バングラデシュで衣類製造をしている現地の知人からのメッセージを紹介し、実際に働く人々の声に触れる。	・エシカルファッションの事例資料 ・改善策提案シート ・現地からのメッセージ(動画)
4,5	ファストファッションの問題点と持続可能な選択肢について、プレゼンテーションを準備する。	① 各グループでファストファッションの問題点と持続可能な選択肢について資料を作成。 ② プレゼンテーションの発表に向けて資料を整理。	・ファストファッション問題に関するデータ、事例資料 ・プレゼン用資料作成テンプレート
6	各グループのプレゼンテーションを通じて学びを深める。	① 各グループが準備したプレゼンテーションを発表。 ② 他のグループの発表にフィードバックを行い、意見交換。	・プレゼンテーション資料 ・フィードバックシート
7	ファストファッションに関するテーマを英語で表現し、意見を述べる力を養う。	① 「体育祭で使うTシャツを毎年作り変えるかどうか」というテーマについて、英作文を作成する。 ② 作成した英作文をクラスでシェアし、他の生徒からフィードバックを受ける。	・英作文作成シート ・フィードバックシート
8	ファストファッションの問題を実生活に関連付け、エシカルな選択肢を考える力を養う。	① 「体育祭で使うTシャツを毎年作り変えるかどうか」というテーマでディスカッションを行い、持続可能性やエシカルな選択肢を考える。	・英作文作成シート ・フィードバックシート

8. 本時の展開(概略)											
本時のねらい: 異なる立場からファストファッションを考え、その後自分の意見を他の生徒と共有して深める。											
過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)								
導入 (5分)	1 前時の振り返り T「前は、ファストファッションが引き起こす問題について考えてきました。その中で、こんな意見が出ました。」 T “Last time, we talked about problems of fast fashion. These were some ideas.” S ・安く買える裏で人が苦しんでいる。 ・労働環境がとても悪い。 ・大量生産・大量廃棄が問題。 ・環境や命より利益が優先されている。 T「今日はこの“問題”をもっと深く理解するために、異なる4つの立場(消費者・労働者・企業・環境保護団体)の視点から考えます。」 T “Today we will think more deeply. We will see fast fashion from four sides: consumer, worker, company, and environment group.”	・前時の記憶を呼び起こし、本時の目的を理解する。 ・消費者以外からの視点で書かれている意見を意図的に取り上げ紹介する。	・前時の意見 抜粋スライド								
		Today, we will see fast fashion from four sides: <table border="1"> <tr> <td> CONSUMER 消費者</td><td> WORKER 労働者</td><td> COMPANY 企業</td><td> ENVIRONMENT GROUP 環境保護団体</td></tr> </table>	 CONSUMER 消費者	 WORKER 労働者	 COMPANY 企業	 ENVIRONMENT GROUP 環境保護団体	・黒板				
 CONSUMER 消費者	 WORKER 労働者	 COMPANY 企業	 ENVIRONMENT GROUP 環境保護団体								
展開 (15分)	T「このあとそれぞれのグループで、4人が別々の立場に分かれてディスカッションを行います。役割は座っている場所によって決めます。」 T “Now, in each group, everyone will take a different role. Your role is decided by your seat.” (左前＝企業 / 右前＝消費者 / 左後＝環境保護団体 / 右後＝労働者) T「ディスカッションのテーマは、この3つです。自分の立場になったつもりで考えてください。」 T “The discussion topics are these three. Please answer as your role, not as yourself.” ディスカッションのテーマ 1. In your role, what is the most important thing in the fashion industry? (あなたの立場にとって、ファッション業界で一番大切なことは何ですか?) 2. In your role, who should take	<table border="1"> <tr> <td>Left Front</td><td> COMPANY 企業</td><td> CONSUMER 消費者</td><td>Right Front</td></tr> <tr> <td>Left Back</td><td> ENVIRONMENT GROUP 環境保護団体</td><td> WORKER 労働者</td><td>Right Back</td></tr> </table>	Left Front	 COMPANY 企業	 CONSUMER 消費者	Right Front	Left Back	 ENVIRONMENT GROUP 環境保護団体	 WORKER 労働者	Right Back	
Left Front	 COMPANY 企業	 CONSUMER 消費者	Right Front								
Left Back	 ENVIRONMENT GROUP 環境保護団体	 WORKER 労働者	Right Back								

	responsibility for the problems of fast fashion? (あなたの立場から見て、ファストファッションの問題では誰が責任をとるべきですか?) 3. In your role, which way should the fashion industry go in the future? (あなたの立場から考えて、この先のファッション業界はどの方向に進むべきですか?) T「初めに、ディスカッションに向けて、自分の立場がどのような状況にあるのか、説明文を読みましょう。」 T “First, before discussion, read the paper and understand the situation of your role.” T「読んだら、3つのテーマについて自分の立場の考えをまとめてみましょう。」 T “Then, think about the three topics and write the ideas of your role.”	・生徒は立場説明文を読み、重要だと思う点や主張したいことをワークシートに整理する。 ・分からない単語は日本語訳を確認してよいと伝える。 ・感染症流行時には、資料配布は教師が行い、生徒間で回さないようにする。 演じる立場(あてはまるものに○をつける) 労働者 企業 消費者 環境活動家 質問① In your role, what is the most important thing in the fashion industry? (あなたの立場にとって、ファッション業界で一番大切なことは何ですか?) ・労働者の生活と安全 ・企業の利益と成長 ・消費者の安くて流行の服 ・環境の保護 メモ欄 ・労働者: _____ ・企業: _____ ・消費者: _____ ・環境活動家: _____	・立場説明文 (英文・日本語訳付き) ・ワークシート
(20分)	3 立場別ディスカッション T「それでは、役割になりきって話し合いを始めましょう。」 T “Now, speak as your role.” T「意見を言うときは、必ず理由も言ってください。」 T “Please give reasons for your ideas.” T「まず司会を決めましょう。そしてルールを守って話し合いましょう。」 T “First, choose a leader. Then, follow the rules.” S 消費者の立場 ・おしゃれでコスパの良い服を楽しみたい。 ・安くて流行の服が買えるのは嬉しいが、作る人の苦しみも考えるべき。 ・消費者が行動を変えれば企業も変わる。	 Discussion Rules ～みんなで気持ちよく話すために～ ・<u>司会を1人決める</u> ・話すときは「話す順番アイテム」を持っている人だけが発言できる ・理由をいれて、1人30秒以内で話す ・相手の意見をよく聞き、話の途中で口をはさまない ・メモをとって整理する ・生徒は司会を決め、ルールに従ってディスカッションを行う。 ・教師は必要に応じてグループに入り、発言を促す。 ・感染症流行時には、マスク着用や距離を確保。	・ワークシート

	・服を大切に使い、労働者や環境にやさしい選択をすることが大切。 <u>労働者の立場</u> ・命と安全、そして生活を守ることが大切。 ・安全な職場と適切な労働時間、休憩、給料が必要。 ・企業と国が責任を持って労働環境を改善すべき。 ・働く人が誇りを持って安心して働ける社会にしていける。 <u>企業の立場</u> ・利益と成長を維持しながら、社会的責任を果たすことが重要。 ・労働者や環境への配慮を強め、信頼できる企業になるべき。 ・リサイクルやエコ活動を進め、ブランド価値を高める。 ・安さと流行、そして人の幸福を両立する産業を目指す。 <u>環境保護団体の立場</u> ・環境を汚さない服づくりと資源の保護が大切。 ・企業がまず責任を持ち、できない場合は外部が監視・支援する。 ・大量生産・大量廃棄を減らし、リサイクル素材や長く使える服を広める。 ・環境と人の両方にやさしいバランスのとれた社会を目指す。		
まとめ (10分)	4 振り返り T「最後に、今日のディスカッションを振り返りましょう。」 T “Let’s look back on today’s talk.” T「まず、自分の感想をワークシートに書きましょう。」 T: “First, please write your reflection on the worksheet.” T「次に、グループで感想をシェアしてください。一人ずつ順番に発表しましょう。」 T: “Next, share your reflection in your group. Take turns one by one.” T「グループでの話し合いが終わった人から、Teams の Forms にアクセスして、今日の授業の感想を入力してください。」 T: “After your group discussion, please access Teams Forms and write your reflection of today’s lesson.” S ・立場によって考え方や責任の感じ方	・迷っている生徒には 「どの立場の話が印象に残った？」と促す 「自分の意見と違った立場の意見を聞いて、新しい気づきがありましたか？」 と問いかける ・記入内容は回収して次時の資料に活用する ・感染症流行時には、グループでの感想のシェアは省略する。	・ワークシート ・振り返りシート (Forms) に意見を書く。

が違うとわかった。 ・安さ・環境・働く人のことなど、どの立場にも正解があると感じた。 ・話し合うことでお互いの改善点に気づけて、考えを深めることができた。 ・すべてを企業のせいにするのではなく、自分たちにもできることがあると思った。		
---	--	--

【自己評価】

9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法) ① 知識・技能(観察)(ワークシート) - 4つの立場(消費者・労働者・企業・環境保護団体)の視点を理解している。 - 立場ごとの背景や課題(労働環境、環境負荷、企業戦略、消費者行動)について、英文資料と日本語をもとに把握できている。 ② 思考・判断・表現(観察)(ワークシート) - 与えられた立場の視点から、ファストファッションの問題を論理的に説明できる。 - その立場の主張を理由とともに述べられている。 - 他の立場の意見を聞き、自分の意見の修正や補足ができている。 ③ 主体的に学習に取り組む態度(観察)(ワークシート) - グループディスカッションに積極的に参加している。 - 他の意見に耳を傾け、相づちや質問を行っている。 - 振り返りシートに、自分の気づきや学びを具体的に書いている。
10. 学習方法および外部との連携 現地の声の導入 バングラデシュで衣類製造に携わる現地の知人からのメッセージ(動画・音声・文章)を紹介することで、生徒は「ファストファッションの背景で働く人々のリアルな姿」に直接触れることができる。これにより、学習内容が抽象的な知識にとどまらず、現実社会の課題として実感を伴って理解される。
11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み 本単元の実施にあたっては、校内外の多様な関係者と連携しながら、国際理解教育の実践を広げることが重視した。特に家庭科教員をゲストティーチャーとして招き、「衣服の消費と生産」という観点から多角的に学びを深めた。英語科で扱う「ファストファッション」のテーマに対し、家庭科から衣生活や持続可能な消費の視点を補完することで、生徒は自らの生活と世界のつながりを実感しながら学ぶことができた。 また、授業で使用した指導案やワークシートを校内共有フォルダに整理・保存し、他教員が再活用できる体制を整備した。学習者同士の関係性の面では、立場別アクティビティやディスカッションを多く取り入れ、異なる価値観を尊重しながら対話する姿勢を育んだ。これにより、生徒一人ひとりが国際的課題を「自分ごと」として捉え、思考を深める学びが生まれた。
12. 苦労した点 ※学習活動が展開する中での苦労や、そこで見えてきた問題点を記入して下さい。 本時の目標は「異なる立場(消費者・労働者・企業・環境保護団体)の視点からファストファッションを考え、意見を共有することで、自分の考えを広げ深める」ことであったが、実際には一部のグループで議論が偏り、特定の立場(主に企業)に責任を集中させる結論に至る場面が見られた。多様な視点を踏まえた対話的な深まりを引き出すことの難しさを痛感した。
13. 改善点 今後は、特定の立場への偏りが生じた際に、生徒の思考を広げるための切り返しの発問や問い返しをあらかじめ複数準備しておく必要があると感じた。 例えば、 ・「企業だけでなく、消費者や他の立場にできることは何があるだろうか。」 ・「責任を分け合うとしたら、どのような形が理想だと思うか。」 といった問いを用意しておくことで、より多面的な議論を促すことができると考える。
14. 成果が出た点 一部に偏りは見られたものの、多くの生徒が自分の立場以外の意見を理解しようと努め、多様な価値観を意識する姿勢が育まれた。また、グループ内での発言量が増え、普段あまり意見を述べない生徒も、役割を演じることで安

心して発言できていた。全体として、授業のねらいに迫る学びが見られた。

3. 今日の授業の目標はどれくらい達成できましたか？ (0 点数)

[詳細情報](#)


15. 学びの軌跡(児童生徒の反応・感想文・作文・ノートなど)

(生徒の授業振り返りより抜粋)

- ・全て企業のせいじゃないことがわかりました。
- ・違う立場の人と話すことによって、お互いに改善すべき点を見つけ出すことができました。
- ・いろいろな視点から物事を見て考えることの大切さがわかった。でも、すぐには改善できないと思った。
- ・ファストファッションの問題についていろんな立場からの意見を考えたり、それぞれが出来ることをしてファストファッションの問題を解決することが大事だと思った。
- ・それぞれの立場で共通する考え方があったり違う考え方があるのがわかりました。様々な立場ができる最大限のことをすれば解決に向かうのかなと思いました。
- ・環境に優しくコスパがいい服が一番いいと思った。

これらの発言から、「他者理解 → 多面的思考 → 自分ごと化」への変化が読み取れた。

16. 授業者による自由記述

本研修を通じて、カリキュラム全体を見通した授業設計の重要性を改めて認識した。8時間にわたる単元を独自教材によって構築するのは初めての試みであったが、実際に授業を実施する中で、単発的な授業と比較して、単元として計画的に構成された学習では生徒の思考の深まりや学びの定着度が格段に高まることを実感した。今後は、年間カリキュラム全体の体系化を進め、より長期的な視点で生徒の資質・能力を育成できるよう取り組んでいきたい。

結びに、本研修を企画・運営してくださった JICA の皆様、並びに授業立案から公開授業当日まで一対一で丁寧にご指導くださった先生方に、心より感謝申し上げます。本研修は、これまでに参加したいずれの研修にも増して、教員としての力量を着実に高めることができた、極めて有意義な機会となりました。

【参考資料】

- ・ILO(国際労働機関, 2021) 調査
- ・Rana Plaza 崩壊(2013 年, バングラデシュ)
- ・Statista(2022) 調査
- ・Recruit 進学総研(2023) 調査
- ・UNEP(国連環境計画, 2021) 報告

国際理解教育/開発教育 学習指導（活動）案

【実践者】

授業者氏名	根岸 彩夏	学校名	群馬県立大間々高等学校
教科(科目)・領域	外国語 (英語コミュニケーションⅠ)	対象学年(人数)	1年3組(17名)
実践年月日もしくは期間(時数)	令和7年10月～11月(11時間)		

【実践概要】

1. 単元名(活動名): Lesson4 Miracle Mirror 夢のような絶景にかくされた影						
2. 実践する教科・領域 外国語 (英語コミュニケーションⅠ)		3. 学習領域				
			1	2	3	4
		A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
		B グローバル社会	相互依存	情報化		
		C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
		D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 単元の目標(評価規準を意識して設定)						
ボリビアのウユニ塩湖を例に、自然が生み出す素晴らしさを知るとともに、ボリビアが抱える問題について知り、その解決策について考える。						
5. 単元の評価規準		①知識・技能	[知識]to 不定詞<to＋動詞の原形>を用いた文の形・意味を理解している。英語で書かれるメール文の形式を理解している。 [技能]to 不定詞<to＋動詞の原形>の理解をもとにボリビアのウユニ塩湖について書かれた文章の内容を読み取る技能を身につけている。			
		②思考・判断・表現	ボリビアのウユニ塩湖の後ろに潜んだ影について、英語で書かれた資料を読み取り、どのような問題や困りごとがあるのかを読み取り、解決策を提案することができる。			
		③主体的に学習に取り組む態度	本文の内容やウユニ塩湖に関する追加の情報をもとに、これまで学んできたことをまとめ、自身の意見やその理由を英語で書こうとしている。(メール文の作成)			
6. 単元設定の理由・単元の意義						
【単元設定の理由あるいは単元の意義】						
本単元では、南米ボリビアにあるウユニ塩湖という「絶景」を取り上げ、その自然の壮かさや美しさにまず触れることで、生徒の海外に対する関心を引き出す。興味・関心を高めた上で、その背後にある観光公害や環境問題、現地住民の生活への影響といった「負の側面」にも目を向けさせる。そうすることで、物事には様々な視点があり、一面的な見方では見落としてしまう課題があることに気付かせたい。						
また、英語のメール文を通じて情報を読み取り、自分の意見を発信する活動を通じて、多面的・多角的に物事を捉え、自分の考えを英語で表現する力の育成を目指す。このような学びを通して、生徒たちがこれからのグローバル社会で求められる批判的思考力や異文化理解の素地を養うことを、この単元の大きな意義とする。						
【生徒観】						
英語学習に前向きに取り組むことのできるクラスである。普段からメリハリをつけて授業に取り組むことができおり、英語に苦手意識を持つ生徒が多いものの、互いに教え合ったり、共に考えたりする姿がよく見られる。年度当初で行った英語に対する意識調査では、「英語が好きですか?」という質問に対し、約24%(3組のアンケート確認)の生徒が肯定的な回答をしたが、英語に対する抵抗感を抱いている生徒が多い。また、「英語を学ぶことは必要だと思いますか?」という質問に対しては、約82%(3組のアンケート確認)の生徒が必要だと答えており、英語の重要性を感じている生徒が多いことが分かる。						
今回の単元では、「ウユニ塩湖」に焦点を当てるが、生徒たちが視野を広げ、多様な視点から物事を捉える機会となることを願っている。						

【教材観】

本教材は、南米ボリビアにある「ウユニ塩湖」という自然の驚異を題材にしており、生徒たちに地球の多様な自然や文化への関心を引き出すことを目的としている。特に、雨季にのみ見られる「天空の鏡」としての絶景は、写真や文章を通じて生徒の好奇心を刺激し、身近ではない世界に目を向けるきっかけを与えてくれる。

また、単に「美しい場所」として紹介するだけでなく、観光地化が進むことによる環境問題や地域社会への影響といった課題にも触れ、自然や観光を一面的に捉えるのではなく、多角的に考える視点を養う構成としたい。

英語を学ぶことを通して、情報を読み取り、背景にある社会的・文化的な要素に目を向ける力を育成できる教材であり、言語活動と探究的な学びを結びつける点においても高い教育的価値を持っている。

【指導観】

本授業では、ウユニ塩湖を題材とした教材に加え、JICA 事務局の協力のもと、JICA 協力隊員によるオンライン出前講座を取り入れることで、生徒たちが教室を越えたリアルな学びを体験できるようにする。実際に現地と繋がり、インタビュー活動等を通じて直接話を聞くことにより、教科書の内容を「知識」として受け取るだけでなく、それを自分の問いに変え、主体的に深める学びへと発展させていく。

また、群馬県では、エージェンシーを発揮する「自律した学習者」を育成するために、各授業において、〔自己決定〕、〔対話・交流〕、〔試行錯誤〕の場面を取り入れ、問題解決的な学びを展開することを目標としている。本単元においても、問いかけや発問の仕方を工夫することで、生徒たちが当事者意識を持ち主体的に学習に取り組めるように工夫したい。また、教師やクラスメイトとの対話を通して理解を深め、試行錯誤しながら自分の思いを形にする場面を設定し、生徒自身が自己成長を感じられるような時間にしていきたい。

指導においては、生徒がウユニ塩湖の魅力とその課題をバランス良く捉えられるよう導くことを大切にする。自然の美しさに心を動かされる一方で、環境や地域社会への影響にも目を向けさせ、物事を多面的に考察する力を育てることが狙いである。教師は、生徒一人ひとりの関心や理解の深まりに寄り添いながら、必要に応じて語彙や表現の支援を行い、思考を深める問いかけを通して学びを広げる支援者としての役割を果たしたい。

このように、本授業は「言語を使って学ぶ」「世界と繋がる」「多様な視点で考える」という複数の要素を融合させた、生徒の学びに深い意味をもたらす実践的な英語教育を目指すものである。

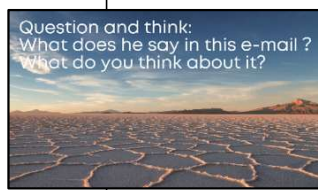
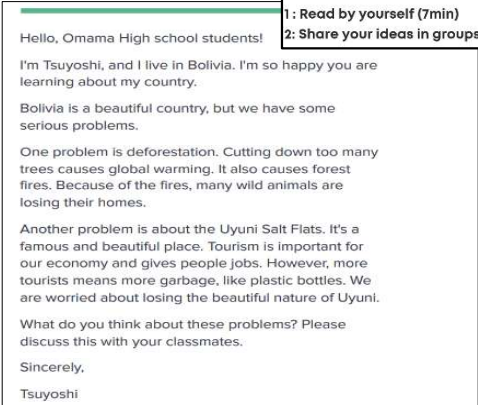
7. 単元計画(全10時間)			
時間	ねらい	学習活動	資料など
1 ～ 4	英語で書かれたメール文を読むことを通し、自然界の奇跡として知られる「ボリビアのウユニ塩湖」について知る。	• New Words の習得 • 問いかけの共有 (K-W-L チャート) : → K (知っていること): ウユニ塩湖について知っていることを出し合う W (知りたいこと): ウユニ塩湖について知りたいことを出し合う • メール文の読み取り方を学ぶ • ウユニ塩湖の写真やメール文からウユニ塩湖の特徴や魅力を見つける • 音読活動でインプット	
5 ～ 7	ボリビアに現在派遣されている JICA 海外協力隊の川邊剛さんとの交流を通し、現地の声を聴き視野を広げる中で、ボリビアの自然環境について考える。 *オンライン出前講座: 11月12日(水)9:00～9:50 (1学年全体で実施)	• JICA ボリビア事務局の方への質問をグループで考える • オンラインでの交流(事前にいくつか質問を送付し、回答していただく) • 「ボリビア」を巡る問題点について、クラスメイトと意見交換をする	
8 本時 12月8日 (月)5限	ボリビアやウユニ塩湖に関する現状や問題点を知り、課題解決に向けた方法を英語で提案する。	• メール文を読み、ボリビアやウユニ塩湖が抱える問題点について読み取る • グループに分かれ、英語で自分たちの意見をまとめ共有する〔書くこと〕	オリジナルのメール文

9	前時で課題解決の提案をもとに、異なる立場における利害の対立やジレンマについてディスカッションを行う。 (一部英語で、その他は日本語で実施)	・各グループから出た提案について、与えられた立場から考察をする。	
10 ～ 11	ウユニ塩湖について学んできたことを、メール文にしてまとめる。 (メールを送る対象→JICA 海外協力隊の剛さん、JICA ボリビア事務局の方)	・メール文の書き方を学ぶ ・これまでの学びを踏まえて自身の考えを英語でまとめる ・自分が印象に残った話・感謝・提案などを整理してから英語で書く ・ピアレビュー(互いに読み合ってフィードバック) ・メール文を実際に入力してみる	

8. 本時の展開(概略)

本時のねらい:

英語で書かれたメール文を読み取り、ウユニ塩湖に関する現状や問題点を知り、課題解決に向けた方法を英語で提案する。

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	○前時の確認 T: Last month, we talked with him. Do you remember his name? S: Tsuyoshi-san! T: Yes, he lives in Bolivia now and we learned lots of things about Bolivia! So today's mission is here. Let's read the e-mail from Tsuyoshi-san in English! T: Today's goal is ... Question and think: What does he say in this e-mail? What do you think about it? →つよしさんのことを全体で思い出したのち、本日の活動概要について全体に共有する。		  ●メールの相手: 川邊 剛さん (JICA海外協力隊) 
展開 (40分)	○グループ(4or3人1組)をつくる T: OK, so let's make a group of four(three). STEP1: ○JICA 海外協力隊の方からいただいたメール文(英語)を生徒たちに配布し、グループで内容を読み取る。 (個人で読み取り(7分)→グループで確認) ☆メール文の要点 <Problem1: ボリビア全体について> ・森林破壊が深刻化しており、地球温暖化の原因となっている。野生生物の生息地が失われつつある。 <Problem2: ウユニ塩湖について> ・ウユニ塩湖は大切な観光資源であり、雇用も生み出しているが、観光客の増加による環境問題が深刻。(ごみ問題)	・欠席状況に合わせて、グループの人数を調整する。	メール文 ワークシート  1: Read by yourself (7min) 2: Share your ideas in groups and help each other. 

○メール文で読み取れた2つの Problems について全体で確認する。 T: Have you finished reading the e-mail? Next, let's check the story. There are some problems he mentioned in his e-mail. What kinds of problems? 予想される生徒の回答 S1:「森林破壊で動物の住かなくなっていること。」 S2:「観光客によるごみ問題。」 STEP2: メール文を踏まえて、<u>ボリビアの現状と困りごとに対する解決策/アイデア</u>をグループで話し合い、提案する。 T: Next, let's think about the following thing! Talk with your group members about how to solve this problem. (ここからは日本語で説明) では今から、このメール文で読み取ったボリビアの現状と困りごとの解決法やアイデアについて、話し合ってもらいます。グループごとに、次の立場にいる人々へ向けて、意見を考えていきましょう！現状を伝え提案する際は、 <We learned ～/We knew that ～/You should～/How about～？>というフレーズを使ってみましょう。 Group1→Local tour guide(現地の観光ガイド) Group2→Environmental protection organization(環境保護団体) Group3→Japan Overseas Cooperation Volunteers(JICA 海外協力隊) Group4→Tourist from abroad(海外からの観光客) Group5→People living in Bolivia(ボリビアに住む人々) ※ウユニ塩湖の近くを想定 皆さんは、この立場にある人々と直接あったことはありませんが、彼らへのメッセージ/提案を作成してみましょう！ T: In this part, let's make English sentences (About 3 sentences) You can use the dictionary, so please write in simple English. ～Group Work～ 予想されるグループの解決に対するアイデア	2つのproblems  1つ目: deforestation (森林伐採) ▶ global warming (地球温暖化) • Because of fires, many wild animals are losing their homes (火災が原因で、多くの野生動物がすみかを失っている) 2つのproblems  2つ目: About the Uyuni Salt Flats More tourists = More garbage (多くの観光客) (多くのごみ) ・「提案の構成」「使える表現」など、英語のアウトプットを支援する。 <提案する内容> 現状＋問題の解決策やアイデア <使える表現> Group Work ! メール文を踏まえて、 STEP2: ボリビアの現状＋困りごとに対する解決策やアイデア をグループで話し合い、英語で提案する。【3文以上】 <現状や提案で使える表現> • We learned～ • We knew～ • You should～ • How about～?  困りごとの解決策やアイデアを伝える対象 • Group1→ Local tour guide (現地の観光ガイド) • Group2→ Environmental protection organization (環境保護団体) • Group3→ Japan Overseas Cooperation Volunteers (JICA海外協力隊) • Group4→ Tourist from abroad (海外からの観光客) • Group5→ People living in Bolivia (ボリビアに住む人々) ・各グループの様子を伺い、必要に応じてヒントを与える。(ヒントは多く与えすぎないようにする)
--	---

	<u>S1<観光ガイドの立場></u> We learned that there are many problems in the Salar de Uyuni. We think that you should ask tourists to throw away garbage properly. Holding a seminar is a good idea. <u>S2<環境保護団体の立場></u> We knew that Bolivia has various problems such as environment. We were very sad. You should build a recycling system in Uyuni to protect the environment. <u>S3<JICA 海外協力隊の立場></u> We knew many things from this e-mail. We were surprised at the problem of deforestation. We have heard similar problems occur in other countries. How about teaching the importance of environment to children in Bolivia? <u>S4<海外からの観光客の立場></u> We learned many problems after reading the e-mail from Tsuyoshi-san. We thought that environment is very important, so we have to do something to protect nature. You should bring your own bottle and try to reduce trash. <u>S5<ボリビアに住む人々の視点></u> We are very shocked because Uyuni is very beautiful, but there is so much garbage there. We want to preserve this precious heritage, so there is a good idea. How about consulting a government agency and cooperate?		
まとめ (5 分) ・グループで本日の感想や学びを共有→数名指名し全体で共有 T: We have only 5 minutes, so let's share your feeling or today's learning. Talk with your group members! ～Group talking～ How about ○○? S1:とても難しかったけど、ウユニ塩湖の環境問題について知ることができた。 S2:実際にボリビアに行ってみたくなった！ S3:解決策を英語で提案するのがとても難しかった。次はもっといろいろな表現を使ってスムーズに提案したい！	グループでの取組み状況で、振り返りの時間を調整する(3～5 分)	グループ共有 What did you learn today?  ・今日の学び ・感じたこと ・考えたこと	

9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法)

- ・英語で書かれたメール文を読み取り、「ウユニ塩湖」の現状について理解することができる。(ワークシート)
- ・メール文をもとに自分たちの意見やアイデアを英語でまとめ、表現することができる。(グループでの活動、Canvaでの共有)

10. 学習方法および外部との連携

- ・JICA ボリビア事務局
…オンライン出前講座の調整・連絡をしていただき、授業の進め方等についてもご助言をいただいた。
- ・JICA 海外協力隊(オンライン出前講座の実施)
…ウユニ塩湖やボリビアの特徴について教えていただき、ボリビアの環境問題を中心にお話していただいた。

11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み

- ・JICA 出前講座を毎年各学年で実施(2025年度は、3学年生徒を対象に、ベトナムの方にお話を伺う予定)
- ・インドやタイの生徒さん、先生方と交流予定(2026年2月～3月)

【自己評価】

12. 苦労した点

生徒たちの英語力の差が顕著であり、単元テーマ(ウユニ塩湖の環境問題)で伝えたいことに対応しつつ、全生徒にとって適切な難易度の英文(JICA 海外協力隊からのメール文)を用意することに苦労した。

本時で用意したメール文は、生徒たちにとって語彙や構文の難易度がやや高かったと考える。そのため、内容理解に時間を要し、メイン活動である解決策の提案に十分な時間を割けなかったグループが見られた。授業の中心として置いていた「環境問題の解決策を英語で提案する」活動において、生徒たちが自力で英文を構築するのではなく、外部ツール(Google 翻訳など)に頼ってしまう傾向が見られた。日頃の授業から、生徒が使える語彙やフレーズを体系的に増やしていく必要性を感じた。

13. 改善点

本時の「環境問題の解決策を提案する」活動について、提案を伝える「対象」の絞り込み方が、生徒の思考の深さに影響を与えると感じた。

●方法1:提案対象をあえて絞らず、生徒自身に最も効果的だと考える対象を決めさせることで、主体的な判断力を促す。

●方法2:対象をあらかじめ絞ることで、特定の立場からの視点に基づいた、具体的な提案を深く考えさせる。

生徒たちの習熟度や単元の目標に合わせて、上記の方法を使い分け、提案活動の質を上げていきたい。

また、生徒のテーマに対する関心をさらに引き出し、深い学びに繋げるための授業づくりが必要である。教師が用意した問いに答えるだけでなく、学習活動の中から「自発的に生まれる疑問や気づき」を積極的に拾い上げ、そこから議論を深掘りする時間を設けていきたいと感じた。

14. 成果が出た点

この単元では、遠く離れたボリビアのウユニ塩湖を題材しており、「少しでもボリビアを身近な国にしたい」と考え、単元の途中に JICA 海外協力隊(ボリビア在住)の川邊さまにお話をいただいた。川邊さまと生徒たちが直接オンラインでやり取りをすることで生まれた繋がりが、本時の授業にも活かされ、生徒たちはウユニ塩湖の環境問題を単なる知識としてではなく「ジブンゴト化」して捉え、積極的に解決策の提案活動に取り組むことができた。

また、授業設計において最も意識した「汎用性」を達成することができた。本指導案は、特定のクラスや教師に限定されることなく、他の英語科教員とも協力して実践・展開できる構成となった。

本指導案は、既に同僚の先生方にも実践いただき、フィードバックを得る段階にある。今後は、この共同実践を通じて指導案をさらにブラッシュアップし、本校の年間指導計画の中に位置付けられる探究的なテーマ単元として確立していく。

15. 学びの軌跡(児童生徒の反応・感想文・作文・ノートなど)

—生徒の振り返り記述より(抜粋)—

- ・問題を提案するのは簡単だけど、解決するために必要なのは、人々の意思にあるから、解決させることは難しいと思った。
- ・英文を作ることだけに集中していて提案する相手について考えられていなかった。ボリビアでも大変なんだなって知れたのに、ちゃんと向き合えなくて悔しかった。
- ・ボリビアのウユニ塩湖について勉強していたけど、きれいな所しか学べていないんだなと思いました。川邊さんの話を聴いて、授業では勉強しなかった内容を知れたので良かったです。
- ・ウユニ塩湖は、きれいなところだけど、その反面、問題が多く困っている人が沢山いることが分かりました。ゴミ問題など、自分たちが意識をして生活すれば変わっていくと思うので、意識して生活していく人が増えたらいいなと思いました。
- ・“光があるものには影がある”という言葉に納得しました。難しい文を調べて、グループでなるべく分担して、解決策を英文で書くことができてとても勉強になりました。
- ・いいところにも何かしらの問題が起きていることを知れた。

16. 授業者による自由記述

本研究授業の準備においては、「JICA 開発教育指導者研修」を通じて自身の授業スタイルを深く内省し、生徒の思考力や判断力、および主体性を最大限に引き出す授業について様々な角度から考え抜くことができた。目の前の生徒たちの実態と、探究的な学習目標を両立させた授業を構築することは非常に難しかったが、大津先生との綿密な対話を経て、指導案を完成させることができた。この経験で得られた学びは、今後の教育実践に確実に繋げていきたい。

教育者として、英語の教材を通して、社会や世界が抱える複雑な問題について深く考える機会を生徒たちに提

供したいと考えている。単に語学力を高めることにとどまらず、「知らないことを知ることの楽しさ」や、「世界と繋がる喜び」を体感させたい。そのためにも、これからも授業者自身が学び続ける姿を生徒に見せ、生徒との活発なインタラクションの中で「生きた授業」を作り上げていく。

【参考資料】

- ・ JICA (国際協力機構) ボリビア事務所ホームページ
- ・ 大島正裕『ボリビアを知るための65章【第3版】』 赤石書店, 2025年

授業実践事例

特別支援 学校

国際理解教育/開発教育 学習指導(活動)案

【実践者】

授業者氏名	村吉 多賀子	学校名	沖縄県立八重山特別支援学校
教科(科目)・領域	高等部社会科、歴史総合	対象学年(人数)	高1年～高3年 (8名)Aグループ
実践年月日もしくは期間(時数)	2025年 11月6日 (2/4 時間目)		

【実践概要】

1. 単元名(活動名): 【社会:オ 我が国の国土の様子と国民生活、歴史】「異文化の中で生きる」を学ぶ					
2. 実践する教科・領域 特別支援学校 (知的障害教育課程) 高等部 社会	3. 学習領域				
		1	2	3	4
	A 多文化共生	文化理解	文化交流	多文化共生	
	B グローバル社会	相互依存	情報化		
	C 地球的課題	人権	環境	平和	開発
	D 未来への選択	歴史認識	市民意識	社会参加	
4. 単元の目標(評価規準を意識して設定) 世界と日本のつながりを歴史の中で見出し、異なる文化の中で互いに協力し、平和な世界を実現するために何ができるかについて考える。					
5. 単元の評価規準	①知識・技能	移民や外国人が異文化で生活することになった背景やその中で起こった出来事について理解することができる。			
	②思考・判断・表現	南洋移民の紙芝居から考えを深め、親しんだ場所とは異なるところで生活した当時の人々の気持ちを想像し、自分の考えを表現することができる。			
	③主体的に学習に取り組む態度	学んだことを踏まえて、よりよい社会のあり方について考え、世界の国々の人々と共に生きることにについて自分の出来る事を考え、表現することができる。			
6. 単元設定の理由・単元の意義 【単元設定の理由あるいは単元の意義】 本授業は知的障害者教育課程の学習指導要領「社会」を基として単元を構成し、大項目「オ 我が国の国土の様子と国民生活、歴史」の内容を扱うものとする。単元構成としては、高等学校「歴史総合」の内容項目を参考としている。 太平洋戦争以前、沖縄は昭和恐慌から続く慢性的な恐慌と台風や干ばつに襲われ、米はおろか芋さえも口にできない状況だった。「ソデツ地獄」と呼ばれるこのような深刻な食糧不足と経済不安は、沖縄から多くの海外移民や出稼ぎ労働者を出す要因となった。その中で当時「外地」と呼ばれ、日本統治下にあった南洋群島へも多くの出稼ぎ労働者が向かった。南洋群島のひとつであるパラオには、1937 年当時、日本人在留者 1 万 1 千人がいたが、そのうち4割あまりが沖縄県出身者であった。(『沖縄県史 移民』より) 多くの先人たちが、親しんだ場所から離れて異文化の中で生活することになった状況は、近年海外から日本・沖縄に來ている外国人の姿と重なる。この単元学習を通して、なぜ昔、沖縄の人が海外へ移民することになったのか、どのような生活をしていたのかについて学び、境遇を想像することで、身近な外国人の生活を想像し、価値観が多様な社会にあって他者と協働することの大切さを考える機会としたい。					
【児童／生徒観】 クラスの人数は 8 名で軽度の知的障害を主障害とする高校1年生から 3 年生までの生徒たちである。特別支援学校学習指導要領知的障害教育課程においては2段階にあたるものとして単元ごとの目標を設定している。授業中の発言は活発で、社会問題にも関心が見られる。新聞スクラップを社会科の毎週の課題としており、記事についての自分の考えを対話の中で表現することもできる。文章でまとめるには時間がかかる。 近年、地元でクルーズ船の寄港や航空機の国際線離発着が再開されたことなどにより、外国人観光客に街中で多く出会うようになった。そのことを授業の中で話題にしたところ、生徒たちから排外的な発言をする場面があった。今後も生徒たちが住む地域では観光客が増えてくるだろうし、本校が「職業教育と就業体験に関する協定」を結ぶ企業においては、外国人人材を積極的に登用しており、卒業後、外国人と同僚として働くことになる生徒もいるだろ					

う。それらを踏まえれば、異文化理解や多様な他者との協働意識は大切なことと考える。本単元の学びを通して、生徒たちに異文化への寛容性や多角的な見方・考え方を身に着けてほしい。

【教材観】

本単元を学習するために、まず「亀おじいとパラオ」の紙芝居を紹介したい。これは授業者の祖父を題材とし史料をもとに、生成AIの助けもかりつつ作成した紙芝居で、①戦前祖父がパラオに移民したこととその背景となった沖縄の出来事②祖父のパラオでの暮らしと戦争③パラオからの引揚と戦後沖縄の状況、を柱とした物語である。紙芝居の全部において「あなたならどうするか?」と、生徒に問いかける形をとる。問うことによって祖父の人生を追体験し、自分事できるように工夫した。

3, 4時間目では島内で働く外国人についての理解を促す。亀おじいの紙芝居を思い出しながら、異文化の中で暮らすとはどのようなものか、彼らが抱える困り感を解消するためにどのようなことができるのか、生徒と一緒に考えていきたい。

【指導観】

知的障害教育課程の生徒たちの特性として概念的スキルを習得する上での困難さがある。歴史分野を学ぶ上で、過去の人々の気持ちを想像させることに困難があると考え、工夫する必要があるので、紙芝居や動画教材をもって視覚的・具体的に表したい。また、自分の考えを整理しまとめる作業に時間が必要なので、紙芝居の「わたしならどうするか?」と自分の考えを表現する場面では、いくつかの選択肢から選べるように工夫した。

4時間目においては、課題解決を行うことを目指すが、外国人が暮らしやすい社会をつくることは、私たちにとっても安全・安心で住みやすい社会につながるということを伝える。

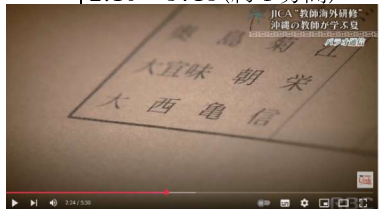
7. 単元計画(全4時間)

時間	ねらい	学習活動	資料など
1	【知・技】 ・海外移民や出稼ぎ労働者について知る。	・新聞記事を読む	・地元紙
2 本時	【思・判・表】 ・移民として生まれ育った場所とはちがうところで生活することになった人の気持ちを想像する。 ・自分ならどのような選択をしたかを考える。	・ニュース映像を見る ・紙芝居を見て、登場人物の気持ちを想像する。 ・紙芝居を見て、自分ならどうするかを選択する。	・ニュース映像(琉球放送) ・紙芝居「亀おじいとパラオ」
3	【知・技】 ・国内の外国人労働者の状況について学ぶ。	・新聞記事を読む。 ・重要な用語をインターネットで調べる。 ・調べた情報を他者に説明する。	・地元紙 ・インターネット
4	【主体的に学習に取り組む態度】 ・国内の外国人の生活実態を想像し、多文化共生社会を生きるものとして自分にできることを表現する。	・ロールプレイング ・模造紙マッピング	・外国人へのインタビューカード ・模造紙

8. 本時の展開(概略)

本時のねらい: ①パラオへ行った先人の気持ちを追体験し、自分の考えで「選択」することができる。

②生まれた場所とは違う所で生活することになった人の気持ちを想像することができる。

過程・時間	教師の働きかけ・発問および学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	(T) 2年前、私はパラオ共和国というところへいきました。パラオは日本からずっと南にある島国です。「教師海外研修」といって、先生たちが勉強するために海外へ行くプログラムがあります。その研修でパラオへ行きました。それでは、この映像を観て下さい。 ○ニュース映像を見せる。 (発問1) ニュースに出てきた「私」は何に驚いていましたか?	・健康観察、出席確認を行う ・一部を抜粋して伝えるため、「なぜ私がパラオへ行ったのか」等前後関係の説明を行う。	ニュース動画 RBC【琉球放送】Links! 2:10～3:13(約1分間) 

	・「先生のおじいさんがパラオにいた、ということ。」		
展開 (30分)	(T)では、これから私の祖父を題材にした紙芝居をみてもらいます。その中で、いくつかの質問があるので、「私だったらどうする？」と考えてみてください。 ○紙芝居「亀おじいとパラオ」 p2「亀おじいとわたし」 (T)2年前、たまたまパラオ共和国へ行ったときにびっくりする出来事がありました。そのお話を今日は紙芝居で紹介させてください。 なんと私の祖父がずっと昔、そこに居たということです。沖縄から約2200Kmも離れたこの小さな島にまさか祖父が住んでいたなんて。本当におどろきました。 (T)沖縄からパラオまで、距離は遠い？ 近い？ ＜実際の反応＞・遠いなあ p3「なぜ教えてくれなかった？」 (発問2)「Q なぜ、おじいさんはパラオのことを孫の私に話してくれなかったのでしょうか？」 (予想される回答) ・「あまり良い思い出じゃなかったから？」 ・「忘れてしまってたから」 ・「無口だったから」 ＜実際の反応＞ ・驚かせたかったから ・心配させたくないから ・戦争があったから p5「1930年代沖縄」 亀おじいさんが生まれたころの1930年代の沖縄。経済的にとても苦しく、「ソテツ地獄」と言われる苦しい時代でした。人々は米も芋さえも口にできず、多くの農民が野生の蘇鉄を食糧にしました。毒性を持つ蘇鉄は、調理法をあやまると死の危険性があります。それにも関わらず、人々はお腹がすいていたので、その実や幹を食べるほかないほど、飢えは深刻でした。 p7「南洋への移民」 (T)住人の中には、苦しさから抜け出すために海外へ移民する人、出稼ぎに行く人が多くいました。亀おじいさんは、当時日本の領土だった「パラオ」へ家族と向かいしました。 (発問3)「Q あなただったらどのような選択をしますか？ そのままふるさとに残る、海外へ行く？」	・単純に紙芝居を読むのではなく、随所で、「あなただったらどうする？」を考えることができるようにする。その際に答えやすいように選択肢を提示する。 ・答えが出てこない生徒へワークシートの選択肢を参考にするように促す。 【選択肢】 ①あまり良い思い出ではなかったから 3 ②忘れていた ③おじいさんは元々無口だったから ・沖縄に残る選択をした場合、その後沖縄ではどのような出来事があった	紙芝居 「亀おじいとパラオ」 ワークシート p2「亀おじいとわたし」  p3「なぜ教えてくれなかった？」  p5「1930年代沖縄」 

・「一緒に行く」 ・「怖いから残る」 ・「海外じゃない別の場所に引っ越す」 〈実際の反応〉 (T)なぜその選択をする？ ・「そのまま死ぬよりは他のところに行く」 ・「ソテツ地獄よりは・・・」 p8「パラオでの生活」 (T)パラオでの生活はどのようなものだったでしょう。 当時パラオには1万人以上の日本人が住んでいました。その中の4千人ほどが沖縄の人だったそうです。日本人のこどもたちは「お手玉」や「ビー玉」など、日本にいる時と変わらない遊びをしていたそうですよ。学校にも通っていて、日本の教科書が使われていました。 p11「おじいと戦争」 (T)亀おじいさんが11歳の頃、日本がアメリカと戦争を始めました。当時日本の領土だったパラオにも、たくさんの日本兵がやってきました。これは、パラオ島を攻撃するアメリカ軍の様子をうつした写真です。 p12「戦争のころ」 (T)戦争がはじまり、食料が足りなくなったパラオで、人々は空から爆弾が降ってくる空襲におびえながらもカタツムリやマングローブの木の実を食べたりして食いつないでいたそうです。亀おじいさんにはパラオで生まれた弟がいました。戦争のころ、弟はたった3歳。栄養失調でおなか膨れてとってもかわいそうだったそうです。 (発問4)Q弟が苦しい思いをしているのを目の当たりにして、亀おじいさんはどんな気持ちだったのだろう？ ・「不安だった」 ・「怒っていた」 〈実際の反応〉 ・「悲しかった」 ・「助けたい」 p14「終戦へ」 戦争も終わりが近づいた頃、亀おじいさんのお父さんの亀吉さんもパラオで日本軍の兵隊となりま	かを問う。 ・答えが出てこない生徒へワークシートの選択肢を参考にするように促す 【選択肢】 ①一緒に行く ②怖いから残る ③海外じゃない別の場所に引っ越す p8「パラオでの生活」  p11「おじいと戦争」  p12「戦争のころ」  ・答えが出てこない生徒へワークシートの選択肢を参考にするように促す 【選択肢】 ①不安だった ②悲しかった ③怒っていた p14「終戦へ」	p8「パラオでの生活」 p11「おじいと戦争」 p12「戦争のころ」 p14「終戦へ」
--	---	---

した。1945年8月 日本はポツダム宣言を受け入れ、無条件降伏をしました。
日本は負けてしまいました。

p15「引き揚げが始まる」

(T)戦争が終わりました。日本は負けて、パラオは日本の領土ではなくなりました。
亀おじいや他の沖縄の人たちは自分の生まれ育った場所に帰ることになりました。
でも、中には「パラオでの生活がいい!」と、ジャングルに身を潜め、帰らないものもいました。

(発問5) Q「あなたがパラオにいた沖縄人だったら、沖縄に帰る?それともパラオに残る?」

- ・「故郷に帰る」 <実際の反応>5名
- ・「住み馴れた場所だから、パラオに残る」 <実際の反応>
- ・「アメリカの領土になると、何されるか分からない」

p16「沖縄へ到着」

(T)パラオなど南洋群島から帰ってきた人は約3万人いたそうです。亀おじいは米軍のトラックで故郷の国頭村に向かうことになりました。

(発問6)「Q 帰って沖縄をみたとき、亀おじいはどんな気持ちになったでしょうか?」

- ・「悲しい」
- ・「戦争が終わってほっとした気持ち」
- ・「不安かもしれない」
- <実際の反応>
- ・「よく帰ってこられたなあ」
- ・「沖縄戦がまだ続いているのかな?」

(T)悲しいと思ったのはなぜ?

- ・「沖縄も戦争だったから、やけどげになっていたんじゃないかな」

(T)「せっかく戻ってきたふるさととは戦争で焼き焦げになってしまっていたかもね。

戦争はパラオにいても沖縄にいてもどちらも人々が苦しい思いをしたことは変わらない。」

p18「亀おじいと戦後」

(T)亀おじいは15歳で沖縄に帰ってから、のちに警察官となり、戦後沖縄社会の安定に貢献しました。戦争が終わってからの沖縄。アメリカ軍が占領していた混乱の時代、日本復帰の時代。

様々な出来事がありました。

パラオで少年時代を送ったおじいは、パラオでの体験を胸に秘めながらどんな気持ちで戦後の沖縄を過ごしていったのでしょうか。

生まれた場所から出ていって、言葉も文化も違



14

・答えが出てこない
生徒へワークシート
の選択肢を参考に
するように促す

p15「引き揚げが始まる」



15

【選択肢】

- ①故郷に帰る
- ②パラオに残る
- ③その他

・答えが出てこない
生徒へワークシート
の選択肢を参考に
するように促す

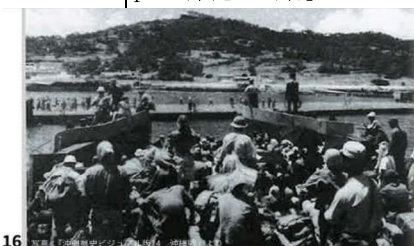
【選択肢】

- ①悲しい
- ②うれしい
- ③怒り

・発問3で、沖縄に残る選択をした人たちはどうなったのかを生徒に想像させる。

沖縄に残っても
パラオへ行っても
戦争はどちらにとっても苦しい状況であったことを伝える。

p16「沖縄へ到着」



16

	う場所で住んだ亀おじい。多くのうちなーんちゅ(沖縄人)たちが同じような経験をしました。みなさんの家族や親せきにも、そのような経験をされた方はいませんか？ 調べてみると、面白い発見があるかもしれませんよ。		
まとめ (10分)	○紙芝居が終了 (T)一人の人物が少年時代にパラオに行って沖縄に帰るまでの話でした。 (T)皆には亀おじいの気持ちを想像して「選択」してもらった。特別な誰かの人生ではなく、普通のおじいの話でした。どんなところが印象的でしたか？ ・「亀おじいがパラオに行くことになったところ」 ・「戦争でカタツムリを食べてたところ」 ・「沖縄に帰ってきたところ」 〈実際の反応〉 ・「ソテツ地獄(※沖縄の戦前)のところ」 ・「沖縄に戻ってきたとき、遠くに行って帰ってこれたのがすごい」 (発問7)このグラフの水色は石垣市の人口を表しているが、青色の数は何を示しているか。 ・「子どもの数？」 ・「老人の数」 (T)正解は、左が石垣市に住んでいる人の数。右が石垣市に住む外国人の数。折れ線グラフをみると、年々どうなっていることがわかる？ ・「増えている」 (発問8)身近で外国人を見かけたことはある？彼らについて、あなたはと思う？ ・「こわい」 ・「どうしていいかわからない」 〈実際の反応〉 ・「バスの中で青い服を着た集団(技能実習生？)に会ったことがある。他の時にも会って、その時は歩道に横並びで歩いていて、自転車の邪魔になった。」 ・「こっちのルールを覚えてこいよ、って思う」 ・「アルバイト先のホテルでフィリピンの人と一緒に働いた」 ・「(就業体験先の)空港で、外国人の忘れ物を届けた」 ・「私はブラジル人、中国人と会ったことがある。」 ・「民宿に泊まっていた外国人をレンタル自転車のお店に連れて行ったけど、お店の人に断	・対話の中で答えを引き出す。 ・対話の中で答えを引き出す。 ・ネガティブな意見は出てくるはずだが、否定せずに自分の気持ちを表現することができるように促す。	ワークシート パワーポイント ・グラフの一部(在留外国人数の変遷、在留外国人数の割合)を隠したグラフをみせる。 ・パワーポイント:下記グラフ



	られたことがある。」 (T)なるほど、みんな色々な場所で外国人と出会っているんだね。外国人とどうやって付き合っていた方がいいのか、次回の授業でじっくり考えていきましょう。 ○ふりかえりシートの記入		
--	---	--	--

9. 評価規準に基づく本時の評価(評価方法)

【思・判・表】①教師の発問に対し、自分の考えで「選択」することができる。(記述内容、発言聴取、行動観察)

②生まれた場所とは違う所で生活することになった人の気持ちを想像し、自分の考えを表現することができる。(記述内容、発言聴取、行動観察)

10. 学習方法および外部との連携

4 時間構成うち、2 時間目の紙芝居作成に関して「沖縄パラオ友の会」からの資料提供をいただいた。

4 時間目の石垣島在住外国人からのインタビューに関して、石垣市役所平和協働推進課の協力を得る予定。

11. 学校内外で国際理解・授業実践を広める取り組み

・JICA 出前講座による取組。

・本校は沖縄県「令和 7 年度 SDGs達成のための教育」の研究指定校となっているので、本授業を SDGs10「人や国の不平等をなくそう」達成のための学習と位置づけて、校内の公開研究授業として行う。

【自己評価】

12. 苦労した点 ※学習活動が展開する中での苦労や、そこで見えてきた問題点を記入して下さい。

・戦前～戦後にかけてのパラオにおける日本人移住者の物語を「国際理解教育」としてどう落とし込むかが難しかった。

・紙芝居「亀おじいのパラオ」の作成にあたり、自分の祖父に関することだが、ほとんど分からないことが多く、不明な部分を様々な資料を用いて物語として埋めることに苦労した。

13. 改善点

・本時だけで①紙芝居、②市内の外国人についてだと、内容が盛りだくさんになってしまった。今後は 1 時間を紙芝居「亀おじいのパラオ」に注目した学習とし、一度すべてを読んだ上で再度紙芝居に戻り、「自分だったらどうする？」と追質問を行いたい。

・ワークシートの「ふりかえり」がすべて①できた②できなかった③わからないの 3 択であったが、これではどの程度できたのか、出来なかったのかを細かく見取ることができなかった。

・概念的理解が複雑な「移民」や「外国人」について、単純化しすぎてしまった。生徒の実態に応じて個別の問いを工夫しながら正しい理解を促すにはどうすればよいかを考える必要がある。

・次回以降、「外国人との共生」について、表面的な理解にとどめることなく、その地域における具体的な姿(国籍、文化的背景、構成)を探究的に掘り下げて深く理解できるように工夫する必要がある。

14. 成果が出た点

・おじいの物語を、「紙芝居」を通して生徒たちに効果的に伝えることができた。

・「紙芝居」の途中で、「なぜ、おじい、パラオのことを私に話してくれなかったのだろうか」「あなただったら海外に行く？故郷に残る？」「亀おじいはどうのような気持ちだったのだろうか」「あなただったら沖縄に帰る？パラオに残る？」といった発問を設定することで、本時のねらいを達成することができた。

・生徒が紙芝居の物語に没頭し、追体験することができた。特に弟が栄養失調になった場面では、問いに対する発言も多く共感し自分事としてとらえることができたように思う。

・紙芝居の中で問いを設定することで、「移民の気持ちを想像する」「自分だったらどのような選択をするか」について生徒自身が考えることができた。

・残りの時間にフリーディスカッションの時間を設けることができた。日常において外国人と関わった経験について、7 名中 5 名が話しをすることができた。

15. 学びの軌跡(児童生徒の反応・感想文・作文・ノートなど)

【ふりかえりシート】 7名出席(1名欠席)

1. 自分だったらどうするか?を考えることができた?

① できた(5名) ②できなかった(0名) ③わからない(2名)

2. 生まれた場所とは違うところで生活することになった人の気持ちを想像することができた?

① できた(6名) ②できなかった(1名) ③わからない(0名)

※「できなかった」理由:自分だったらどうするかを考えるのはできるが、相手の気持ちを考えるのは難しい。



【1週間後の授業でのふりかえり】

○前回の授業で印象に残った場面をおしえてください。(複数回答)

- ・パラオに亀おじいさんがいたこと(1名)
- ・パラオへ行く前の沖縄～ソテツ地獄(3名)
- ・パラオでの戦争で、弟が苦しい思いをしていたこと(3名)
- ・沖縄に帰ってきた時(4名)
- ・沖縄の戦後(1名)

16. 授業者による自由記述

2年前に教師海外研修でパラオ共和国へ赴いた際に、はじめて自分の祖父が戦前から戦後にかけてそこにいた、ということを知った。いつか教材として生徒たちにその物語を共有したいと考えていたので、今回このような形で教材化でき、公開授業を行うことができて良かった。特別ではない、普通の「おじい」である祖父でさえも、大きな歴史の中で翻弄されていた様子を捉えることから、身近な出来事とダイナミックな人の移動の繋がりについて考えることが出来ればと思い、教材作成に至った。

本時の学習はそのあとに続く「多文化共生」の授業に繋げるために「生まれたところとは違う場所で生活することになった人へ共感すること」を重要視したが、生徒のふりかえりを見るとその目的は達成されたと感じている。

【参考資料】

- ・『沖縄県史 資料編 17(近代 5) (旧南洋群島関係資料)』(2003 沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編)
- ・拓殖大学 旧外地関係資料アーカイブ
https://opac.lib.takushoku-u.ac.jp/kyugaichi/htmls/pages/nyo_00475675.html (2025/08/20)
- ・RBC【琉球放送】News Links! 「肌で感じたことが大きな経験」パラオに派遣された教師たち 現地で得た教科書にはない学び」<https://www.youtube.com/watch?v=mzoEIBbUgOE> (2025/08/01)
- ・琉球歴史アーカイブス http://rca.open.ed.jp/history/story/epoch4/sotetu_1.html (2025/08/20)
- ・沖縄県公文書館資料(国頭村奥間の写真、パラオ攻撃の写真(<https://www.archives.pref.okinawa.jp/>)) (2025/08/20)
- ・在パラオ日本国大使館 HP (https://www.palau.emb-japan.go.jp/itpr_ja/11_000001_00592.html) (2025/08/20)
- ・国立公文書館アジア歴史資料センター HP (<https://www.jacar.go.jp/shusen80/chapter9/>) (2025/08/20)
- ・『国頭村海外移民史 資料編』(1992 国頭村役場発行) 国頭村出身外地引揚者名簿
- ・『沖縄県史ビジュアル版 14 沖縄戦』(2025/08/20)
- ・在留外国人の便利マップ <https://map.japan-workers.com/?aid=47207> (2025/08/31)

ワークシート

紙芝居



付録

教育現場で活用できるJICAのツール

国際理解教育/開発教育プログラム

教材

世界の現状や課題、国際協力などについて理解を深め、自分たちにできることを考え行動するために、映像教材、冊子教材、マンガ教材などを作成し無料で提供しています。授業に合わせてご活用ください！

申込・問い合わせ

人気冊子は「つながる世界と日本」です！



教員向け研修

国際理解教育/開発教育に関心のある先生方を対象に、途上国を訪問する「教師海外研修」、指導案の作成・授業実践のレベルアップに取り組む「指導者研修」等があります。各国内拠点でも独自の研修を実施しています。

各研修の募集案内

研修の種類によって対象者や目的が異なります！



国際協力出前講座

派遣中・帰国後のJICA海外協力隊やJICAスタッフの講義を、対面やオンラインで聞くことができます。体験談、異文化理解、国際協力キャリア、国際協力とSDGsなど、要望に沿った内容を組み立てます。

申込・問い合わせ



対面型は国内拠点HPへ！
オンライン型はこちらから→



イベント・セミナー

地球ひろばでは毎月さまざまなイベントを実施しています。オンラインセミナーでは国際理解教育/開発教育の視点から「教室と世界をつなぐヒント」を皆さんと共に探っていきます。是非お気軽にご参加ください。

スケジュール

各国内拠点の地球ひろばも拡充中です。ご来訪をお待ちしています。

イベント
セミナー情報はここから→



教室と世界をつなぐ！オンライン出前講座の流れ

01
申込み



JICA HP「オンライン出前講座」の申込フォームから実施40日前までにお申込みください。

02
受付連絡



出前講座事務局担当者より、希望内容の聞き取りやオンライン環境実施の確認をします。

03
講師選定



希望の講座内容に合わせて、出前講座事務局が講師を選び打診します。

04
打合せ



講座内容について、講師と直接連絡を取ります。

05
講座実施！



出前講座事務局が音声確認などのテクニカルサポートとして当日立ち合います。

06
アンケート



講座実施後、アンケートのご協力をよろしくお願いいたします。

外国につながる児童・生徒に関連する情報

11か国を対象として、各国の教育制度・学校文化に関する調査を実施し、ガイド集としてとりまとめました！日本の学校の仕組みや文化を知っているだけでなく、子ども・保護者の出自国の制度や文化を知っており対比的に説明できることが、子どもたちの就学にあたって保護者への理解の大きな手助けになります。



教室と世界をつなぐ！

オンライン出前講座

開発途上国で国際協力に携わるJICA海外協力隊や
JICAスタッフ（職員・専門員・研修員など）を講師として紹介します。

対象

- 小・中・高校
特別支援学校
大学等の教育機関
- 一般、市民団体
など

内容例

- 国際協力体験談
- 途上国の生活や文化
- JICA事業紹介
- 国際協力という仕事
- SDGsと国際協力

費用

- 無料
- ※講師が派遣中の
JICA海外協力隊員や
JICAスタッフで、オンラ
イン開催の場合

教科での学習（総合的な学習の時間、社会、英語、道徳）、キャリア学習、テーマ学習等でご活用いただいています。

お申込み～実施までの流れ

1. JICA HP「オンライン出前講座」の申込フォーム（下記）からお申込みください。
2. (一社)多文化教育サポート国際協力出前講座担当より連絡、希望内容の聞き取り、オンライン実施環境の確認
3. 講師の選定
4. 講師と依頼元で内容や時間など詳細を調整
5. **オンライン出前講座実施**
6. 実施後、アンケートへのご協力をお願いいたします。

＼ 申込は40日前まで /

▼ オンライン出前講座！お申し込みはこちら ▼

<https://www.jica.go.jp/cooperation/see/delivery/online/index.html>





ご利用案内 (東京都新宿区市ヶ谷)

JICA地球ひろば

JICA地球ひろばは、市民による国際協力を推進するための拠点です。
全国の学校からの訪問や国際協力に関するイベントへの参加など、
2006年の設立以来累計で約**260万人**の市民のみなさまにご利用いただいています。



「途上国の現状や日本とのつながり、JICAの取り組みを紹介する【基本展示】と、
世界を取り巻くさまざまなテーマを取り上げる【企画展示】を交互に開催しています。」

教育関係者のみなさまへ (プログラムのご案内)

開発途上国の現状や、地球が抱える課題、国際協力の実情などを、見て・聞いて・さわって体験できる展示と、案内人による途上国での活動体験談や開発教育教材を使った参加型学習(ワークショップ)など、ご要望に応じて組み合わせたプログラムを実施しています。修学旅行や社会科見学、総合学習等でぜひご利用ください。

対象 小学校高学年～社会人 **費用** 無料

人数 上限80名程度(応相談)

※こちらの見学プログラムは**事前予約**が必要です。



オンラインで展示見学

(JICA地球ひろばオンラインツアー)

体験ゾーンの体験型展示を見て回るオンラインツアー。オンラインで、どこからでも参加可能。授業や研修などの一環としてご利用ください。



3Dマップ



Point 1 見て・聞いて・触って学べる！

地球ひろばの展示品の多くは文字や写真を見るだけでなく、世界各地の挨拶を聞いたり、世界各地の民族衣装を着たり、民芸品に実際触れたり、香辛料の匂いを嗅いだりして、五感を通じて学ぶことができます。



(実際の展示品)

Point 2 地球案内人から世界の体験談を聞ける！

開発途上国で協力隊活動をした経験を持つ地球案内人が、現地での経験をお話します！



ぜひお越しください！

Point 3 食を通じて世界を感じる！J's Cafe

各国の大使館からレシピを提供いただき、『現地の味』とお墨付きを頂いたメニューをはじめ各国のエスニック料理を堪能できます！

(※平日のみ営業)



フェアトレード商品も販売しています！

【J's Cafe】(※平日のみ営業)
営業時間：11:30-14:00

【体験ゾーン】
開館時間：10:00-18:00
休館日：毎月第1・3日曜日
※最新情報はWEBにて⇒

〒162-8433 東京都新宿区市ヶ谷本村町10-5
(JICA市ヶ谷ビル内)

☎03-3269-2911



アクセス





発行

独立行政法人 国際協力機構 (JICA)
広報部 地球ひろば推進課
TEL: 03-3269-9022
〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5
JICA市ヶ谷ビル

編集

JICA地球ひろば・教員向け研修運営事務局
一般社団法人 グローバル教育推進プロジェクト (GiFT)
TEL: 03-4577-6767
Email: jica-edu@j-gift.org
〒108-0014 東京都港区芝5丁目26-24
田町スクエア 2F